
リコレクションズ

戸理 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リコレクションズ

【Nコード】

N29640

【作者名】

戸理 葵

【あらすじ】

15年前の殺人事件。私はその、何を知っているのか？就職も恋愛も上手くいかずにどん詰まりの私は、過去の事件に再び巻き込まれてしまう。人懐っこくて女つたらしの元カレと、ハンサムすぎて反感を持ってしまう甘い王子様、昔あった事のある大人のイケメン男性、そんな彼らに振り回されながら突き進んでいく女の子のお話です。

同窓会

大殺界っていうやつは3年続くらしいけど、

それなら、あたしはそのど真ん中にいるんだと思う。

大学3年の時に決まった就職先は、先日、流行に乗るかのごとく『倒産』をしてしまった。

他の就職を捜すにも、出遅れた感がアリアリだし。

やりたい事があるわけでもないし。

派遣か、契約か、正社員か、就職浪人か、それとも院か。

それとも、ほら、公務員でも目指すべく、今から勉強しちゃう？

それとも資格でもとっちゃう？って、何を？

なんて思ってる間に、3年付き合った彼氏に別れを告げられた。

「なんかさー。俺達、もう、終わってない？」

ムツカー。何、そのかつたるそんな態度、っていうか、「共同責任です」みたいな言い方はっ。

「あんたが、後輩に次から次へと手を出してるから、終わってるんじゃないっ！」

と、就職できなくても苛つかなかったのに、拓也に言われてかなりムカつき、テーブルをバンッと叩いて立ちあがってしまった。

「うわっ。いきなり怒んなよ、こっえーなー。」

「人に喧嘩売っつといて、何言ってるの！」

「え？喧嘩したいの？俺と？」

人懐っこそうなくなりつとした瞳をすこし丸くして、拓也があたしを見る。

その顔をみていると、あたしは急に、怒る気が失せてきた。

高校のクラスメイトだった拓也と同じ大学に入学して、お互い上京。人懐っこそうであったるそうで、馴れ馴れしいのにクールな拓也は高校時代も結構モテていた。

そんな彼と上京後、友達づきあいが馴れあつて、いつの間にやら部屋に上がり込まれ、

いつの間にやらそういう事になって、いつの間にやら住みつかれ。

いつのまにやらコイツのペース。

そして先程の「俺達終わった？」宣言。

あたしに聞くなっつーの！

諦めの様な感情が一気に出来てきて、あたしはガツクリ溜息をついた。

「もういい。わかった。あなたとは話が出来ない。出てって。」

「……………」

テーブルに頬杖をついてあたしを見ていた拓也は、そのビックリ眼まなこをそのまんま持続させていた。

いつ始まったかも分からないのに、終わった瞬間だけはハッキリしている。

「って、へー。それでも同窓会来るんだから、偉いよね。普通さ、気まぐずくってパスしない？」

イタリアンレストランをほぼ貸し切ったの高校の同窓会。割と連絡を取り合っている親友の奈緒なほの隣の席で、私は鼻息を荒くした。

「あんな奴のせいで、人生振り回されるのはコリゴリ。なんでこっちが遠慮しなくちゃいけないの？」

「・・・と、人生熱く語っている割には、就職、やる気なさそうですわが？」

「・・・なんかねー、果てない夢を追いかけていけないなら、もう、なんでもいっかなーって。

保険入れて、年金払って、お金貯められる仕事なら、なんでも！

「投げやりな割には、堅実だねー。」

8月に入り、帰省をしてくるであろう人達に会わせた同窓会だった。店内は久しぶりに見る顔で賑わっている。卒業して4年。長いような、短いような。

ただ高校生の時は見て通り過ぎるだけだったような、この憧れのお店に、

今は大人のような顔をして利用している私達をみると、すこし人生をステップアップしているような気がする。

あたしは、肩までの髪を軽く巻いてから両脇を少しすくって斜めにまとめてシュシュをつける、という、お気に入り髪型と、最近買った、リーズナブルだけど可愛い、グリーンのお花のサマードレスを着てきた。

「それにしても、もったいないなー。あんなカッコいい男と別れるなんて。」

奈緒が拓也の方を見つめながら、ウィンググラス片手にわざとらしく溜息をついた。

奈緒は背中までのロングストレートの後ろ髪に、前髪はパツツン、日本人形みたいな髪型が似合う割と美少女系なのだけれど、

性格が、全体的に、ちょっとイッチャってる所がある。

視線の先には、男女別なく多くの元クラスメイトに囲まれた拓也が、持ち前の人懐っこそうな愛嬌のある瞳をのぞかせて、ニコニコ笑いながら座っていた。

「そお？みんな雰囲気に乗られているだけよ。背だつてたいして高くないし、どつちかかっていうと

女の子目線の人だし。」

「雰囲気って大事でしょー。顔よし、頭よし、運動神経よし、センスよし、テキトー感漂う草食系よし。」

「なんだ、それ。」

テキトー感漂う草食系ってなに？かつたるいつて事でしょ？

「よしかわ吉川君、就職先、どこ？」

「親のスネかじって公認会計士の勉強するって。」

「うっわあー。頭いいー。でもなんかイメージ違うなー。デザイナーナとかしてそう。」

「経済学部が、なんでデザイナーよ。」

「じゃ、モデルとか。」

「背、低いつて。資格取った方が人生楽で、贅沢出来て、バリバリ働かなくて済みそうだからっ、て。」

「うっわー。やっぱイメージ通りー。で、あんたの『果てない夢』って、ほんとは何をやりたかったの？」

「ミステリーハンター。」

「そりゃ、別れるわ。」

奈緒が間髪入れずにバツサリと言った。

「会計士が、ジャングル女と付き合うかって。会計士でなくとも、ミステリハンターとは付き合えん。」
ムツカ。人のロマンに口出すなつ。アイドルオタクのくせにっ。世界の不思議を発見したいのっ！

私の話より、奈緒の方はどうよ？

なんて二人で話していたら、私達の後ろ肩ををポンと、幹事の佐藤さんが叩いてきた。

「何、二人で親密そうな話をしてるのー？」

「綾香あやかの元カレの話。」

「ああ、吉川君？もったいないよねー、かつこいいのにー。」

勘弁してくれ。知らん人間はいないのか。

「かつこいいといえね、ほら、あっちの席に、チョーイケてる人、いるよ。」

佐藤さんが少し声をひそめて屈みこみ、座っているあたし達に顔を近づけてきた。

「え？どこ、どこ？」

思わず私達も声をひそめてしまっ。

久しぶりに会ったクラスの男子は、みんなそれなりにカツコよく大人になってはいたし、実際、席のあちこちで男女かなりの盛り上が

りを見せてはいたんだけど、

(これで今日の終わりには、一体何組のカップルが出来上がるんだらう?)

チヨイケている人、となると話は違う。

お目当ての人は、私達の貸し切りエリアからは離れた、一般の人達が食事をする、少し段の高い所のテーブルに座って食事をしていた。

黒い細身のスーツに薄いピンクのシャツを合わせた服装は、その長身の彼によく似合っていて、他の人が来ていたら店内で浮くだろうに、とても周りに溶け込んでいた。

私達より若干年上?少し切れ長の男らしい眼をしていて髪は短髪、細身の割にはがっしりとした肩幅をしていた。

あれ?でも、あの人……。

「おお、上物。」

ちょっとアイドルおたくの入った奈緒が

(アイドルのコンサートの為に飛行機とか乗っちゃう奈緒は、正直私から見るとオタクに見えるのよね。中学、高校と勉強をし過ぎた

青春時代を、今取り戻しているのよ、と彼女は言っただけど)

嬉しそうに呟いた。

「偶然だよねえ、このお店で見れるなんて。あの人ってね、有名人なんだよ。カッコいいから。」

地元居残り組の佐藤さんが教えてくれた。

「ちょっとホストっぽいよね、あの雰囲気。」

「ああ、そうかも。クールなホストってカンジ？皆と騒ぐより、じっくりしつとり飲みましよう、みたいなの？」

・・・あなた達、いくつ？ホストクラブの経験者？

「でもあの人、あたし知ってるかも。」

私が呟くと、奈緒と佐藤さんがガバっとこっちを見た。

「うそ、マジで？」

「うん。どっかで会った事がある・・・あれ？どこだったっけ？」

「おっと、日下部さん。それはナンパの一番常套手段じょうそうしゅん。よし、行って来い！！」

奈緒があたしの背中をバンツと叩いて押し出した。

「ちよつ。違うって。そんなんじゃないくて、ほんとに知ってるの。」
あたしは少し焦って奈緒を睨んだ。

「第一、ナンパなんかした事無いしつ。あんたとちがって、ハンタ
ーじゃないからっ。」

「あたしは別に仕留めたりしない。追っかけて、鑑賞するだけ。ほ
ーれ、行ってこーい。」

奈緒があたしをグイグイ押し出す。まてこらっ、この面食いつ！

「行かないって言うてんじゃん！！ほら・・・どこだっけか・・・
ほら・・・」

「でも、なんで一人で食事してんの？」

「うわあっ！！！！」

突然耳元で拓也の声がして、私と奈緒と佐藤さんは飛び上がった。
いつの間にか、拓也が私達の真後ろに立っていた。

私が思わず後ずさって、

「び、びっくりした、拓也、なんで急にここにいるの？」

「あの人、男一人で、なんでイタ飯屋で食事してんの？」

拓也は私にお構いなしで、佐藤さんの方に話しかける。・・・オイ？

「男が一人で、イタ飯ランチなんてするんだあ。しかもこんな田舎
で。目立つよねえ？」

両親指をパンツのポケットにひっかけ、拓也は少し肩をすくめながら佐藤さんに話しかけた。

佐藤さんは少し嬉しそうに笑いながら、拓也に（私達に教えてくれるんじゃないかったの、佐藤！こつちだ、コラー！）答えた。

「あの人、地元出身の代議士の人の息子。秘書かなんかやってるらしいの。カッコいいから、けっこう地元では有名だよ。」

「代議士の秘書、ねー……。カタギじゃないんだ、やつぱり。」

どの口が、『カタギ』を語るっ。あんたも充分、ヤクザな女ったらしじゃないっ。

ギロつと拓也を睨むが、彼は全くの涼しい顔。

「藤田祐介ゆすけっていう名前。東京に住んでて、ちよくちよくこつちに顔だすよ。」

女子高生の間では、生写真も出回っているって言う噂。」

へえー、そうなんだ。そう言えば、モデルっぽい顔してるし、万人が認める「いい男」かも。

すると拓也はニヤツと笑って佐藤さんに顔を近づけた。

「詳しいねーえ？そーゆー佐藤さんも、持ってんじゃないのー？生写真？」

「えー、だつてかつこいいんだもん。目の保養じゃん。ねえ？」

真っ赤になった佐藤さんが、慌てて私達に話を振るけど、

目は私達見てないし。間近に迫った拓也に釘付けだし。おーい。

「吉川君の生写真だつて、きっと売れるよー？出回るよー？あたし、取ってあげようか？」

「ええ？じゃあ、よろしく。佐藤さん限定で。」

アイドルよろしいニッコリ笑顔。更に舞い上がったちゃう佐藤さん。

その二人を眺めて、奈緒が隣でぼそつと言った。

「あんたつて・・・苦労した？」

「・・・まあ、それなりに。」

「腕に磨きがかかったねー、吉川君。」

自分がモテる事を自覚している男の技、だね。
むっかつく。

「綾香は今晚、どうするの？」

二次会の後、一緒にいた女友達に聞かれた。帰るのか、それとも3次会まで出るのか、という意味。まだ7時過ぎだけど、東京に帰るなら今から空港に行かないと、飛行機がないからだ。

「うん。実はウィークリーマンションを借りている。」

「ええー？なにそれ!？」

他の女の子達も声を上げた。

「だってうち、親もこっちにいないし、でも久しぶりの帰郷だから、夏休みだしゆつくりしようかなって。」

お墓参りとか、母校めぐりとか、色々ね。」

「・・・思い出に浸るんだー。」

奈緒が呆れたように言った。

「ほんとに枯れてるねー。おばあちゃん入ってるね。老けるよ。」

「オイコラ。」

枯れてる、と言われて確かに最近生命力が無い、というか疲れている、というか投げやり、というか。

心当たりがあつて、内心グサつとくる。

就職もうまくいかない。こんなご時世だしねえ。

やりたい事も見つからない。みんなこんなものだよな。

彼氏とも別れた。こんなものでしょ。

しょうがない、っていう諦めがあるんだけど、

諦めている自分に焦っている。

あたしって、こんなだったっけ？前は、こんな感じじゃなかった気がする。

時代と、東京に飲まれて、私は自分が変わってしまった気がする。

幼い頃から住んでいたこの街に、成長期を過ごしたこの街に戻ってくれば、昔の自分を思い出せる気がする。

ここでは本当に色々な事があつた。嬉しい事も、大変な事も、大事件もあつたし、死にそうな目に会つた事もある。

それでも、いつも前向きだった気がした。今思えば、いつも割と頑張っていた。

それを思い出したい。

文字通り、思い出の場所をゆっくり回って、もう一度自分を見つめなおそう。

同窓会は、絶好のチャンスだったのだ。

だって昔の友達と喋って、随分力を貰ったもの、既に。

みんな、時代にもがいて、頑張っている。

「吉川君も部屋にくるんじゃないのー？」

「来たら、刺す。」

「……フツーに怖いから。マジで。」

あたしが真顔で言ったら、みんなも真顔で凍りついた。

「嘘だよ。来るわけないじゃん。半年近く前の話だし。こっちも向

こうも、その気ナシ。」

「……来ても来なくても、その気があっても無くても、刺すな？」

みんなかなりどん引きだった時、

男の人が一人近づいてきた。

「すみません。ごめんなさい。ちょっと、いいですか？」

皆で振り返ると、そこには、私達と同年代くらいの、身長がかなり高い、スラッとしたかなりのハンサムが立っていた。

短髪だけど前髪だけ長めのストレートで、その下から凄く綺麗な瞳

が覗いている。

「場所を教えてもらいたくって。すみません。『前浜東中学校』ってご存知ですか？」

どエライハンサム。
今日は何の日だ？

女子集団が殺気立った。怖いよー。

「前浜東中って、この近くですよ。」
すかさず一人の女子が飛び出してきた。さすが、女子力は瞬発力が命です。

「でも10年くらい前から、廃校ですよー。」
彼女が明るく親しげに話しかけると、彼も明るく親しげに返事をした。

「うん。知ってます。それで地図に載ってないから。」

なんとというか、モデル系？少女マンガのお兄さん？王子様？
甘すぎず、濃すぎず、薄すぎず、うわー、目立つなあ、この人。普通の服装してるのに。

（センスはいい。そこだけは、拓也と付き合って見る目が出てしまった。）

「タクる前に、誰かに聞きたいなーと思って。」
「あ、そうですね。」

次から次へと女子が参戦してくる。私ははじき出されてしまった。

「近くですよお。でも、歩いて行くにはちょっと遠いかなあ？え、今から行くんですかあ？」

「うーん、そうだな、まだ決めてないなあ。」

「夜はやめた方がいいですよお。あそこ、昔、生徒が殺されたって話だし。」

「うん。だから、肝試しにきたんだ。」

「やだあー!!」

もう、タメ口くち？

すごい盛り上がる女子集団。

それを遠巻きに見る、怖い雰囲気の我が男子集団。

・・・この人、天性のアイドルだわ。

こんな田舎でメディア系のいい男を二人もみるなんて、日本のレベルも上がったなあ。

ちょっとタレ目（？）に私には見えた）で彼がニッコリ笑うと、確かにヤバい程、甘い。

「じゃあね。ありがとう。」
手を軽く上げて彼は去って行ったんだけど、

夜の街の道の上で、2次会を後にしたお店の前で、女子集団はキャーキャー騒ぎ、
周りの男子集団は夜の空より暗いオーラ（弱冠攻撃的）を出している、

つまり、かなり浮いていた。

「いやー、今日はいいもの沢山見たなー。ホスト系お兄ちゃんと、
白馬の王子様ね。」

日本人形が黄色のシフォンスカートをはいたような格好の奈緒が、
その服装とはおおよそ似つかわしくない、
両手を腰に当て仁王立ち、の恰好で彼の去った方を向きながら、満足げに言った。

「実にみのり多い同窓会だわ。たまには帰って来るものねー、田舎に。同窓会、万歳。」
「……あなたのその実り、同窓会から得たものじゃあ、ないけどね……。」

あたしがつつこんでも、奈緒は全く聞いていなかった。

出会い

朝起きたら、喉が痛かった。
頭もなんだか重い。

「あが・・・あー・・・」

手元の腕時計を見ると、10時をまわっていた。

喉が痛いのは、ゆうべカラオケで歌いすぎたせいかな。
頭が重いのは、昨夜飲みすぎたせいかな。

それとも二つとも、一晩中つけっぱなしだったクーラーのせいかな。

「・・・・・・・・。。。」

横には諸悪の根源が、すやすやと気持ちよさそうに眠っている。
あたしはちよつとムカついて、布団をはがすと、その諸悪の根源を
蹴っ飛ばした。

「ええいつ、起きろっ!!ってい!!」

「・・・・・・・・んんー。。。」

起きる気配が無いっ。凶々しい奴だっ。

「起きろーっ。起きろっ。もう朝だいつ。」

「・・・・・・・・痛いー。。。。。」

しぶしぶ起き上がってきたのは、髪の毛の長い、元、美少女。すっぴんだからね。

あたし達は昨夜、一つの布団で寝た。別にそんな趣味は、ない。ベットが一つしかないからだ。

「ベットが一つしかないーい!ー!」

昨夜3時過ぎに部屋に来た奈緒なほが、ドアを開けるなり言った。

「当り前でしょっ。一人しか泊る予定が無かったんだからっ。」

「あー、でもベットがセミダブルだー。なんでー?さては吉川君とー……」

「ち・が・うって、何度言ったら分かるのよっ。シングルはセミダブルのベットしかなかったのっ。」

あとはツインになっちゃうのっ。」

「ふーん……?」

酔って若干目の座った彼女があたしをじろつと上目遣いで見ると、そのままスタスタと部屋に入った。

そして当り前のようにベッドにドスンと腰かけた。

「なーんかあやしーけど、まーいっかー。さー、ねよっかー。」

「え……何?一緒に寝るの……?」

「当り前でしょー。だって、一つしかないじゃーん。あ、それとも綾香あやか、床に寝るの?」

「なんでそうなる??何故、あたし?」

「だってあたしはお客だもん。ねー、綾香の部屋着貸してー。着替えたーい。」

……ダメだ、諦めよう。相手は酔っ払い。

あたしが投げてよこしたTシャツとスウェットに奈緒はサッサと着替えると、当り前のように布団にもぐりこみ、

「おおーい、早くおいでよー、綾香。うわー、あたし、吉川氏になった気分だわ。」

「……あんだ、ほんとに、帰れば?？」

「やだよー。綾香が殺人者になるのを止めるんだもん。彼が来ないように見張るんだもん。」

「だから、来ないって!!!!」

「あ、二人一緒の布団なんて暑いから、クーラーは消さないで。」

と言って、寝てしまった。

……いいかげんに、しなさいよ?

しょうがないから私はクーラーをつけたまま(本当はクーラーで寝るのが大っ嫌い。)彼女の隣にもぐりこみ、

明け方に何回か、寝返りを打った彼女に殴られ、落とされ、

……今に、至る。

「……おはよー。今何時ー？」

「……10時。」

「あ、ほんと？よく寝た。」

彼女はケロツと起き上がると、スタスタと洗面所の方に歩いて行った。

「朝ご飯、どうするー？」

顔を洗う音がする。

あたしは着替えながら、声を張り上げた。

「一泊の恩を返して。奈緒がコンビニで何か買ってきてよ。」

「はあ？私はパシリかい？」

「あたし、シャワー浴びたいもん。宿代、ちよーだい。」

「へい、へーい。」

スツキリさっぱり、すっぴんのためご肌で奈緒が来た。

「あたし、おにぎりね。シャケ。お茶と、あとなんかヨーグルト。」

「はいはい、お嬢様。」

あたしの化粧水を勝手にパシャッと付けると、乳液をポンポンと付けて、彼女は立ちあがった。

「じゃ、行ってきます。」

「え？その格好でいくの？」

「ああ、ブラっけんの忘れてた。」

「顔は？すっぴん？」

「地元で気張って化粧してどうする？朝ごはんのコンビニの為に？」

そう言うと、奈緒はブラだけ付けて、あたしの部屋着（Ｔシャツにスウェット）で、行ってしまった。

ま、いいんならいいんだけどね。

さて、シャワーでも浴びるか、と私が立ちあがったら、さっき閉ま
ったばかりのドアが、ガタガタ揺れた。
誰かがドアを開けようとしている。

誰だろう、と思って覗いてみると、奈緒だった。

「・・・どうしたの？財布もってるでしょ？」

「王子！！王子！！！！」

彼女はすっかり興奮して、部屋に戻ってきた。

「・・・八王子？」

「バカっ！ボケるなっ。王子がいたのよっ。廊下につ。部屋に入っ
てった！！」

「・・・王子って、誰??？」

「昨日の！！ほら！！道を聞いてきた、白馬のアイドル！！！！」

ああ!!思い出した!!あの正統派アイドルの彼、ね。

「すっごい偶然!超、ラッキー。朝からかつこよかったよ!。爽やかだわ!。」

「へー、彼がいるんだあ、このウィークリーに。一人で?」

「知らないよ、そこまで。でも一人で入ってたよ。」

「ふーん、長期滞在するんだねえ。一人で、この田舎に。・・・何者だろうね?」

「・・・人の事、言えないでしょ、あんた。」

ああ、そう言えば、そうね。

「で、おにぎりは?」

「えー、スツピンで王子に会ったら、困るう。」

奈緒がわざとらしく、ぶりっ子をして見せた。

ちなみに彼女の性格は、ぶりっ子とは真逆。正反対。

「・・・何それ。気味悪いから。奈緒はメイクしてなくても充分可愛いじゃん。お肌もつるつるだし。」

すると奈緒はうーん、と考え込んだ。

「・・・確かに、追っかけにメイクは不要よね?」

「そう言う問題なんだ?」

「機動力が一番。よし、行ってくる。」

追っかけに?

彼を追っかけることなく無事に（？）帰ってきた奈緒は、朝ご飯のサンドイッチを食べた後、メイクをしながらあたしに言った。

「507号室だから。覚えといて。」

「え？507？何が？」

「だーかーらー。王子よ。507号室。ウィークリーに泊ってるなら、向こうもしばらくいるんでしょ？」

お近づきになりなさいよ。」

「えー、なんでよ??」

「何言っているの。心機一転するんでしょつ。思い出ばつかに浸って枯れているヒマがあるんだつたら、前を向けつ。チャンスを掴み取れつ。」

な、思い出に浸ってばつかりなんて、失礼なつ。まだそれほど浸ってないわよつ。

自分を見つめなおす為に必要な儀式よつ。

「そんなに興味があるなら、奈緒が行けばいいじゃん。」

あたしが少し膨れて言うと、彼女は当り前のように言った。

「あたしは今の追っかけ仕事だけで忙しいし、いい男は観賞用だし。一緒にいたら疲れるだろうし。」

・・・なんだか、ねえ・・・。

「綾香、チャンスの女神は前髪しかないって言うんだよ？せっかく

の偶然、モノにしなくちゃー。」

「・・・はあ・・・？」

「パンクした自転車は乗り捨てて、走り出すのよ!」

「・・・なんの例え？」

「青春っぽいでしょ？」

美少女完成。鏡の前の小悪魔日本人形が、にこっと（ニヤツと？）こちらを振り返る。

その時、あたしは、ある事を思い出した。

「あ、思い出した。あの人。」

「何？」

「昨日、一次会のレストランで見かけた男の人。ほら、一人でランチ食べてた。」

「ああ、あのホストっぽい秘書ね。吉川君がやたらと引っかかってた？」

「うん？（そうだったっけ？）あの人、昔に会った事があるのよ。」

あたしはその時の光景を思い出した。

「あたしが、小学校5、6年生ぐらいだった時・・・多分、6年生かな？助けてくれたんだ!。」

「え？助けて？どういう事？」

「あのね、自転車に乗って、随分遠くの市民プールに行ったの。夏休みに。で、あたしだけ塾か何かに行かなくちゃならなくて、

一足先に帰っていたの。そうしたら、タイヤがパンクしちゃって。

「ふーん。それで？」

「それで、バイクに乗ったお兄さんが通りがかって。どうしようもないからって、自転車屋さん呼んでくれて、

家にも電話入れてくれて、タクシーで送ってくれて、あとから自転車屋さんが自転車を届けてくれた。」

「・・・すつご。何それ。メチャクチャいい人じゃん。」
奈緒が感心したように言った。

「でしょう？それが、あの人だと思う。あんな感じの顔をしていた。そう言えば、名前も藤田さんだった気がするし。」

「ちゃんと覚えておきなよ！。そういう、人から受けた恩は。」

奈緒が、至極まともな事を言う。

あたしはちよつと恥ずかしくなった。

「だって、十年も前の事だもん。子供だったし。親に聞けば、名前くらいは分かると思うなあ。」

「ふーん・・・。カッコいい上に、いい人で、バイクかあ・・・。

10年前からバイクに乗ってるんなら、今はもう結構いい年してるよね？いくつなんだろうね？」

「さあ・・・？でも、10年前は、学校の制服着ていたよ？白いシヤツに、黒いパンツの、

いかにも学校の夏服ってカンジ。」

あたし達は頭の中で計算をした。スクーターでなかったので、18で免許を取れるバイクと仮定して・・・

「10年後だから、今28か。6つ年上ね。いいね、中々。」

何がいいんだか。奈緒は顔が良ければ何歳でも、いいんでしょ？
あたしは苦笑した。

親が心配しているだろうから一回実家に顔を出して、それからまた遊ぼう、と奈緒と約束して二人で部屋を出た時、

同じく廊下の向こうの方で、ガチャ、とドアを開ける音がした。

「あ……。」

と奈緒が小さく呟き、クスツと（ニヤツと？）笑う。

どうやら、それは507号室ならしい。

出てきた男性は、あたし達に気付くと軽く会釈をしてきた。

こっちも少し会釈を返すと、彼はニコツと笑って言った。

「あれ？ひよっとして、昨日、僕が道を聞いたコ達……かな？」

この、完璧な、爽やかで甘い笑顔は何だろうか？（少しタレ目だけど。

）
これって、この人の商業用スマイルかしら？

すごく、背が高い人だ。180センチ近くあるのかも知れない。

完璧な、モデル体型だ。黒いタンクトップの上からカーキ色のシャツをひっかけ、

下も同系色のパンツ、首からシルバーのシンプルなペンダントをか

けている。

シンプルスタイルが、かえって彼のかっこよさを際立たせていた。

あたしが思わず彼を観察していると、返事をしろ、とばかりに、奈緒が後ろからあたしをつつく。
あたしは後ろを少し睨んだ後、言った。

「あ、はい、そうです。・・・『前浜東中』を捜されていた方で、すよね？あの後、行かれたんですか？」

「ううん、まだ。これから行くことと思って。」

「あ、そうですか。」
にっこり。

・・・会話が終わってしまった。じゃあ、出発しますか。

もっと話せ、とばかりに奈緒がさらに突つつく。痛いなあ、もう。

「あ、えっと・・・（何を話せばいいの？）・・・私達の顔、覚えていたんですか？」

「うん？だって、昨日会ったばかりじゃん。」

「あ、でも・・・大勢いたし・・・。」

「・・・ああ。別に大した事じゃないよ。俺、会社で営業やってるから、人の顔を覚えるのが得意なんだ。」

ポケットに手を突っ込み、彼はニコツと笑った。笑顔がかわいい。

「君達は、地元の子達でしょ？昨日は同窓会かなんか？」

「あ、はい、そうです。高校の同窓会でした。」

「いいねー、同窓会。楽しいよね。俺も昔、少しだけけど、ここに住んでいた事があるんだ。」

長めの前髪の下で、彼は綺麗なその瞳を少し細めた。

「・・・じゃあ、前浜東は、母校で・・・？」

あたしの後ろから、奈緒が聞いてきた。すると彼はクスツと笑い、

「まさかあ。自分の母校を迷ったりしないよ。母校なら、地図に載って無くっても行けるって。」

と、言った。

前浜東中は、10年くらい前に廃校になった後、一部は老人ケアセンター、一部は公園になった。

あたしは、そこに行った事は、ない。

随分昔に、足を踏み入れたつきり。

「確か、綾香の実家があった所の近くじゃなかった？」
奈緒があたしに言った。

あたしはなんとなく、返事を渋らせてしまった。

「うん。・・・まあ・・・。」

あんまり、いい感じがしない。

「え？そうなんだ？君、あの辺りに住んでいたんだ？」

彼が少し驚いたように言った。

「あ、はい・・・。」

「僕も、ちょっとはずれのほうなんだけど、同じ学区内に住んでいたよ。・・・そっか。」

僕が引つ越さなければ、同じ学校出身だったかもしれないね。」

人懐っこそうにニッコリと笑う。

爽やかだなあ。カッコいいなあ。

これで、拓也とおんなじ女ったらしなのかなあ。そうなんだろうな

あ。これだけかっこよければなあ。

あれ？あたし、なんかムカついてる？

「ねえ、こんな事聞くのは図々しいとは思っただけだし、君達、これから何をするの？」

彼は言葉とは裏腹にちっとも恥じらいもなく、申し訳なさそうでも無く、

明るい笑顔を向けてきた。

「僕、これからその中学校とかに行きたいんだけど、随分小さい頃に越したから、この土地に不慣れなんだ。」

地元にも明るい人が途中までも案内してくれると、すごく助かるなあ、と今、思ってしまった。

2、3時間しか、手間はかけないから。どう、ですか？……
つて、これ、完全にナンパだな。」

少し困ったように、クスツと笑う彼。甘い、それでいてキラキラした雰囲気。

……この人、完璧、これで人生乗り切ってきたはず。断られた事はないはず。

ああ……なんか、容姿は全く違うのに、自分がモテる事を自覚している男の雰囲気、拓也を彷彿とさせて
なんか、……ムカつく……。

今更あいつには未練がないけど、同じ手合いの男を見ると、成敗し
たくなってしまう……。

あたしは彼に、右手の手のひらをバツ差し出した。

「……………」

彼と、そして多分、あたしの後ろにいる奈緒の目が点、となる。

「…………えつと……………」

困ったようにビックリする彼に、あたしは毅然と言った。

「名刺！名刺下さい！！人を誘うんだったら、その前に名前を名乗ったり、自分の身分を明かすのは礼儀でしょう！？」

普通の会社員なら、名刺下さい！」

女が皆、あなたのその甘いルックスにやられてホイホイついて来る
と思うなよ？

凍りついた空気が、何よ！

名刺貰って、じっくり眺めて、溜息ついて、断ってやるっ！！！！
どうだ、思い知れっ！！！！

なんだか関係の無い、相手にしてみればとぼっちりの様な復讐心（
いや、だから拓也に未練はないんだけど）にあたしは燃え、彼をギ
ツと睨んだ。

後ろでは奈緒が、口をポカン・・・と開けているだろう。

彼は一瞬呆気にとられ、あたしの勢いに押されていたけど、ああ、
と気を取り直したように言った。

「そっか、そうだね。失礼しました。えーと、ちょっと待ってね。

名刺……つと、あった。

はい。塚本と申します。先程は失礼致しました。申し訳ございません。」

少し大袈裟にお辞儀をして彼が渡してくれた名刺には、

豊崎物産 エネルギー開発部 塚本碧

と書いてあった。

あたしと奈緒は、その名刺をマジマジと見てしまった。

豊崎物産、と言えばトップ商社。うわ、エリートサラリーマンだ。顔がいい上に、エリートサラリーマンだ。

女の子を食ってる事、間違いなしだ。決定だわ。

頭の中で赤信号。チツカチツカ。

彼は右手の握りこぶしを軽く口元に当て、笑いを少し堪えている風に言った。

「すごいね。君ってしっかり者だね。そうだよ、言うとおりだよ。

ごめんね、軽く誘っちゃって。」

「……。」

褒められているハズなのに、からかわれている気分がするのは、何故だろう？

ムツとして、自分の顔が赤くなるのが分かって、さらにムツとして

しまつ。

・・・名刺を出せ、なんて、電車で痴漢にあつた女子高生みたいだつたかしら・・・？

あたしは、反撃をしなくなつてきた。

「・・・なんか、弱冠バカにされている気が・・・。」
「わー、綾香！！ちよつと！！！」

奈緒があたしを見て、ギョツとしたような声を出した。
止めないでよつ。あなたは面食いだから顔がいいってだけで大抵の事は許せるんでしょうけど、あたしは・・・。

「あなた、ちよつと、鼻！！鼻！！！」

「・・・はな？」

あたしが答えるのと、それが垂れるのはほぼ同時。

なんと、あたしは久しぶりに鼻血を出してしまった！！！！

ギャー！！垂れる垂れる！！あたしのお気に入りのＴシャツに垂れる！！

若い男性の前で！！

「・・・興奮してんの？」

彼がポカン・・・と聞いてきた。

「つちが……!!!!」

「『血が』?」

「違いますっ!!!」

上を向いたまま鞆からアタフタとハンカチを出すあたしたち。
やっと一枚取りだして拭いてはみたものの、止まる気配がない。

と思つたら、ぐいっと鼻を掴まれた。

みると彼が、その長身を利用して、あたしの鼻を上高くつまんでいる。手には男物のハンカチ。

「鼻血つて、こつやつて強く摘んで、ジツとしているしかないんだつて。知つてた?」

「……じつではす（知ってます）。」

ああ、情けない。初対面のハンサムの目の前で、鼻血を出して、その鼻をつままれる女。

穴があつたら、更に3メートルくらい掘り下げてから、入りたい。
鼻血が止まった後で。

あたしの目の前の彼のハンカチが、血で汚れている。

奈緒が、さも困つたように言った。

「この子、昔つから鼻血体質なんですよ。興奮すると、すぐ……。」

「ぢがう!! あんだがぐーらーづげでだから（あんだがクーラーつけて寝たから）……!」

「ほら、興奮しない。」

鼻をつまんだ彼が、あたしの鼻を更に持ち上げながらあたしをなだ

める。もう、いやっ。

彼はすごく楽しそうにニコニコ笑いながら、いえ、ニヤニヤ笑いながらあたし達に言った。

「で、案内してもらえるのかな？ちょっと調べたい事があってここに来ただけど、地元のコの話も聞けると
余計にありがたいから。」

「……………」

よもやここで断れないよね？って雰囲気。
彼はなんの疑いも抱かずに、ニコニコニコ。

……あーあ、ハンカチも汚しちゃったし。

「話って……………」

奈緒が聞くと、彼は一瞬戸惑いを見せてから、少し言いづらそうに答えた。

「……………15年前の、殺人の件……………」

それを聞いて、あたしと奈緒は言葉を失った。

「……………でも、その前に鼻血止めようか？」

彼に持ちあげられた鼻。シリアスなシーンに、鼻血女は似合わない。

彼

なんでこんな展開になっているんだろう・・・？

あたしは電車の中で考えた。

隣の塚本さんとは、ビミョーな距離を空けて座っている。

奈緒は実家の親から怒りの電話をくらってしまい、一度家に戻らなくてはならなくなった。

あの様子だと、今晚出歩くのはむりよね、きつと。

ちっ。鼻血さえ、鼻血さえ出さなければっ・・・！

心の中で舌打ちしてしまった。

奈緒が悪いんだっ。あたしの鼻の粘膜は乾燥に悪くって、冬はマスクをしていなきゃ簡単に鼻血が出てしまうっていうの、あの子は知っていたハズよっ！

なのに昨夜は、クーラーつけて寝る、なんて言われて。

酔っ払いに、仏心を出したのが間違이었다！！！！

横目でチラッと、塚本さんを見る。

電車内は時間帯のせいか、人がまばらに乗っている程度だった。

彼はまったくリラックスしていて、長い脚を大きく組みながら横の

ポールに肘をつき、時折鼻歌っぽいものを歌いながら、外の景色を堪能しているように見えた。

あの時、なんのためらいも無く、自分のハンカチであたしの鼻をつまみ上げてくれて。

あたしの目の前で、ダンヒルの青いストライプのハンカチが、赤く汚れていった。

（赤く染まっていった、と言えないぐらいの汚い汚しかただったもんで。）

結局5分近く、彼の長身に鼻を摘みあげられる結果となり、今も首が、結構イタイ。

「いいよ、気にしないで。」と言った彼のハンカチを、勢いよく取り上げ部屋に駆け戻り、洗面所で思いつきり洗ったけど。

・・・あれは、お買い上げよねえ。

仮に鼻血が綺麗に落ちたとして、そんなハンカチ使いたくないわよねえ、普通。

同じダンヒルのハンカチをテキストに買って、弁償しなくちゃ。

あたしって、センスがないのよね。

拓也はあたしがセレクトした小物とか洋服とか、絶対に身に付けようとしなかった。

というか、買う前に拒否された。「やだ。自分で選ぶ。じゃなきゃ、お金ちょうだい。」という具合で、クリスマスとか誕生日とかは結局一緒に買いに行くこととなり、あたしは一人で男の人の物を買った事がない。

まあ、今回はダンヒルって事で、何とかなるか。

・・・一応、塚本さん、いい人っぽいし・・・。

「綾香ちゃんってさあ。」

彼が急にこっちを向いて、にっこり笑った。

ヤツバ。メツチャハンサム。綺麗な瞳で、カッコいい。

・・・けど、やっぱり馴れ馴れしいわ・・・イラつくんだけど。

「今、いくつなの？」

「・・・22、です。」

「へえー。学生さん？」

「はい・・・。大学4年です。」

「おお。もう、就職だあ。」

グツサ。

「決まった？就職。」

「・・・いえ、まだ・・・。」

「えー、そうか、大変だね。もう夏休み入っちゃってるもんね。色々厳しいよね、今は。」

彼は腕を組んで、電車の天井を見上げていった。

あたしはその、当り前、というか呑気そうな雰囲気、さらにムカムカしてきた。

そりゃ、あなたはいーでしょーよ？トップ商社に入った、エリートサラリーマンですからね？あたし達の事なんか、高みの見物でしょ

うよ？

そもそも、さつき出会ったばかりの人にあたしの状況を読め、とか親身になって話せ、とか言う方が間違っている事は百も承知なのだけれど、

この人の明るい笑顔とか、人見知りゼロの馴れ馴れしい態度とか、ヘラヘラしている所とか見ていると、どうにも、腹が立ってくる。

「どんな仕事に就きたい、とかつてあるの？」

「・・・ミステリーハンター。」

「・・・は??？」

「ミステリーハンター。」

あたしは背筋を伸ばして、ジロツと横目で塚本さんを睨んだ。
イラついたから、会話を打ち切りたかったのよね。

ところが彼は「は？」の口のままあたしを見つめて、それから、我にかえったように言った。

「ああ！世界の不思議を発見したいんだ？」

え？

「・・・あ、はい・・・。」

「いいねー、それ。すっげえ、夢があるじゃん。俺もやりたい。」

嬉しそうな、輝くような笑顔。

ちよつと待て、そう来るの!???

「世界中の歴史とかさ、遺跡に埋もれた真実っていうのも楽しいけ

どき。今を生きる世界各地の人たちの文化とか習慣を知るって言うのも、楽しいよね？未知の世界だもんな。」

長い前髪の下から見える綺麗な瞳が、本当に楽しそうに笑っている。それを見ていたあたしは、思わず引き込まれてしまい、話を続けてしまった。

「そうなんです。歴史でも、遺跡でも、現代の生活でも、それぞれにルーツがあって特徴があって、文化ってその地域の人達の価値観が表れているから、何を大切に思っているか、とか、色々違うんだけど、やっぱり人間は皆同じだなあ、とか、単純に昔の謎を解くっていうのもワクワクしますし……。」

そこでハッと我にかえった。

塚本さんがこつちを見て、ニコニコしている。しまった、喋りすぎた。

「綾香ちゃんは、人間が好きなんだね。」

え？

「歴史も、文化も、人間でしょ？時代も場所もひっくりくるめて色々知りたいて事は、君は人間が好きって事なんだよ、きつと。」

彼は体ごと向きを変えると今度は左の肘を窓際に向け、左足を胡坐をかくように座席に乗せて、あたしの方を向いた。

「人間は基本的に皆いい人。って思っている所があるんじゃない？」

あたしはビックリした。
人間が好き、と自覚した事は特にないけど、性善説は確かに信じてる。

「いいね。それって。」

甘い笑顔でほほ笑む彼を見て、ドキドキしてしまうと同時に、すごく感心してしまった。
すごい、この人。観察力がある。鋭い。

「そっかー。君、最初っから怒ったような顔してるから、引っ込み思案であり人と関わりたくないタイプの女の子なのかな、って思ってたよ。」

その笑顔にヤラレかけながら、心の中でつつこむ。
あ、そう。自分が嫌われているかも、とは考えないんだ？やっぱモテ人生のど真ん中を歩いてきた人なのね。嫌味だわ。

「その割には度胸がありそうだけど。」

彼は口の端をすこしあげると、ニヤツと笑った。

「俺に名刺をくれって言った時も、鼻血を噴き出している時も、動じた雰囲気になかったもんな。堂々としていて、面白いね!。」

「鼻血噴き出していませんっ。垂れただけですっ!」
「突っ込むとこ、そこ???」

彼は口を押さえてプツと噴き出す。あたしは無然とした。

「鼻血は、体質なんです。いちいち動じていたら身が持ちません。小学生の時にそのあたりのプライドは捨てました。」

「悟るのが早かったんだね。」

「だって鼻血は出すし、ド近眼だし、冬はマスクにメガネで、それだけで苛めの対象ですよ。腹をくくらなくちゃやってられませんから。」

「苛められたんだ？」

彼が少し真面目な顔で聞き返した。

初対面のイケメンに自分の苦勞話を聞かせるなんて、なんだか狙っているみたいでちょっと恥ずかしくなったから、あたしはもう一回背筋をピンと伸ばすと、ふざけて言った。

「ええ。幸い勉強もスポーツも良く出来ましたので、そこまで酷くはありませんでしたか？」

実際男子にはかなりからかわれたけど、ほとんどの女子とは仲良く出来ていた。

中には、あからさまにバカにする女の子達もいたけどね。それはまあ、どこにでもある話で。

へー、頭いいんだー、すごいねー、という返しが来るか（大抵、コレ）、

気が強くて自慢する女だな、と内心思われるだろう、ぐらいに考えていたら、

彼はこれまた、意外な返事をしてきた。

「そっか。頑張ったんだね。」

あたしはまた、意表を突かれた。

小さい頃からそれなりに勉強は出来ていたんだけど、「頭いいんだね。」と感心される事はあっても、「頑張ってるんだね。」と言われた事はなかった。

という事を、この人に言われて今、気付いた。

すこし、胸が温かくなる。

そう。昔のあたしは頑張った。

みっともない外見をカバーする為に「良い成績」と「社交的な性格」を目標とし、そこに自分の居場所を見出して、とても頑張った。本当に、努力していたんだな、あの頃は。

47

「よし、次で降りよう。この駅。」

「え？この駅じゃないですよ？」

突然の彼の提案に、あたしはびっくりした。

次の駅は、街の中心部で繁華街。

お目当ての駅までは後、数個ある。

彼が立ち上がると陽の光が彼の顔に薄い影を落とす、髪が透けて輝いているように見えた。

あたしを見下ろしてほほ笑む。

「いいから。まずは街を歩こう？なんか奢るから。俺、初対面の女の子を楽しませるのは、結構得意よ？」

彼はそう言ってわざとらしくウィンクをして見せた。綺麗に決まる、それ。

・・・ウィンクが似合う男って、いるんだ、この世の中に。

街 1

かつての馴染みの街で電車を降りた。

私の母校は隣の駅だ。

駅を降りて、バスで高校まで通っていた。

ちなみに男子はほとんどが、駅から自転車に乗り換えて高校まで来ていた。

途中の急な上り坂を、青春真ただ中の彼らは、その体力に任せて毎日登っていた。

そんな彼らは学校帰りに、よくこの隣駅の繁華街に押し寄せていたんだと思う。

私はバスだったせいもあって、利便性も悪く、なんとなく遠のいていた場所だけだ。

それでもやっぱ、懐かしいな。

あの頃は、友達とデパ地下でスイーツを食べる事すら、刺激的だった。

「思い出す？」

私の少し前を歩く塚本さんが振り返り、綺麗な瞳を細めてクスツと笑った。

「・・・え？」

「なんかすっごい楽しそうな顔してるから。」

私の隣に立ち、ポケットに両手をつっこみその長身を屈めるように横から私の顔を覗き込み、

塚本さんの方がなんだか嬉しそうに笑っている。

そのかつこよさに、またまたドキンとしてしまう。
ヤダなー、ツボを心得ている人って。自分の見せ方熟知しているよ、
この人。

「・・・暑い、です。」

文句を言う事で軽い抵抗を見せたい気分になって、私はそつぽを向
いて答えた。

だってさ、この強引な展開。

これ、どう考えてもデートでしょ。

見ず知らずのイケメンと地元デート。なんか、おかしいでしょ、全
体的に。

なんでこんな事になるの？

この後あたし達、どこに行って何をする訳？

本来の目的はどこにいった？

そりゃあ、文句の一つも言ってやりたくありませんよ。

私、流されっぱなしは、色んな意味で卒業したいんです。

「そうだよなー。確かに暑いわ。どっか入るか。まずは昼飯でも
奢るから。」

「当然です。でも、お腹空いていません。」

「え？そうなの？だって、お昼過ぎてるよ？」

「・・・朝、遅かったんで。」

「ああ、夕べ、遊びすぎたって訳ね。」

じゃあ、軽く食える所ー、なんて言って彼はあたりをキョロキョロ
見渡した。

「あ、これ、ここいいんじゃない？」

彼が指さした先は、ビルの3階にあるお蕎麦屋さん。

……ってか、お蕎麦屋さん？！

「……お蕎麦、ですか……？」

「うん。だって腹減ってないなら、蕎麦なら軽くいけるっしょ？」

心なしか砕けた口調になっている塚本さんはさておき、お蕎麦って……どうよ？

うら若き22歳の乙女（でもないか。それなりにやっちゃったし。）をつかまえて、

初めてのデートで連れてく先がお蕎麦屋さんって……。

そこまで考えて、ああ、と気付く。

そうか、これって別にデートじゃないんだ。少なくとも彼にとって
は。

いや、私にとってもどうでもいいけどね。

……でも、でも、でもやっぱり！

いくらデートでなくっても、社会人が学生の女の子にお昼奢る時に、
見るからに色気も無ければ値段も安いお蕎麦屋さんに誘って、や
っぱりどうよ？！

あなたっ！やっぱり自分の顔の良さにあぐらをかいた人生送ってきて
るわねっ。

何ていうか、全体的に、努力が足りないっ！

「あ、なんか一人で怒ってる。」

塚本さんが、キョトンとした表情で私を見下ろした。

「・・・なんか俺、悪い事言った？」

「・・・別につ。いいですけど。」

ここで思った事を言うと、彼氏に駄々をこねている女の子の様だわ。恥ずかしいし、みつともない。狙ってる感アリアリだし。

この人は、私に関係ない人、関係ない人。今日限りの人。中学校まで案内したら、それっきりの人。

無視、無視、無視・・・。

「だって、マックとかはあんまりでしょ？イタリアンとかって昨日食べたんだし、和食屋って言う程がっつり白飯食いたい訳じゃないんでしょ？ラーメンってのもなんだし、そしたら、近場で目に付いたのって・・・。」

顎に手をやって、親指で頬を撫でながら少し困ったように塚本さんは言う。

「・・・わがまま過ぎたかも・・・。」

「どうか、行きたいところ、ある？どこでもいいよ、マジで。」

「いえ、別にそういう訳じゃないんです。すみません・・・って、あれ？」

私は何かが引つかかった。

あれ？あれ？

確かに、私の事を考えてくれているのは嬉しいわよ。
でも、……あ。

「え？」

「塚本さん、何であたしが昨日イタリアンにいた事、知っているんですか？」

だって彼と出会ったのは、確か二次会が終わった後。居酒屋を出た所だった。

それに私は、一次会がイタリアンだった事を、彼には言っていない。

「……え？あれ？違った？」

珍しく彼が、少し焦ったように私を見た。

「違ってませんよ？だから聞いているんです。」

「……うわー。綾香^{あやか}ちゃんってやっぱり直球勝負だなー。」

ほら、同窓会って言ったたら、イタリアンが必ずどつかで入るでしょ？」

ちよっぴりタレ目の、モデル顔負けのハンサムな顔でニッコリ笑われたんだけど、なーんかひっかかるのよねえ、その笑顔。

「……ウソっぽい。」

「そんな事ないって。」

「だって、タダでさえ一般人に見えないその綺麗な顔が、余計に胡散臭そうに見えます。」

「……うっわ、きっつー！。それ、褒められてるの？」「
「けなしています。」

塚本さんの笑顔が更に引きつった時、

私達の目の前のビル（つまりお蕎麦屋さんのあるビル）から人が出てきた。
そのビルは一階が本屋になっていて、私達はその入り口で話していたのだ。

なんとなくその人の方を見て、
その人も入り口前に立っている私達が嫌でも目に入り、
お互い啞然とした。

「あ……。」

絶句。なんてこった。

拓也は一瞬目が点、になったようにポカン……と口を開けて私を見て、その後塚本さんを見た。
そして私に視線を戻して言った。

「……おま……何やってるの？」

街2

「・・・え、いや、ちょっと・・・ブラブラと歩いていて・・・。」

何を言ってるんだ、あたしは。

何を動揺しているんだ、あたしは。

釈明しなくてはいけない事なんて何も無いハズなのに、この後ろめたさは、何?!

大体、別れて半年も経っていて、昨日の同窓会でだってロクに口もきいてないのにつ。

「ブラブラって・・・デート?」

拓也はその丸い目で塚本さんをもう一度見た後、

その人懐っこそうな顔とは裏腹な冷めた表情でボソツと言った。

「には、見えねーな。」

「なっ・・・なんで?!」

思わずムキなる。

あたしが、こんなイケメンと歩いているのが悔しいってか!?

「色気がないもん。」

「・・・は?」

喧嘩売ってるの?パート2。

「こんにちは。塚本さん、ですよ。東都大でバスケットだった。」
拓也は私を無視して、塚本さんにいつもの爽やかスマイルで挨拶をした。

そう、この子は他人にはすぐく、人当たりがいい。男でも、女でも、中々壁の向こう側には入れてくれなくて、目がね、笑ってないの。時々。

「え？ああ。俺の事、知ってる？」

一方の塚本さんは、私達二人を観察してたのにいきなり話を振られて、ビックリしたようだった。

「はい。僕もバスケット部なんです。藤崎大です。って言っても、マネージャーですけど。」

「・・・ああ、あの時の。」
更に驚いたように、彼の目が見開かれた。

ええーっ！??? ちょっと待って? この二人、知り合い! ???

「あの時は、ありがとう。世話になりました。助かりました。・・・って、もう3年くらい前の話か？」

「はい。俺が1年の時だったんで、それくらいです。」

「そっかー。・・・えっと、確か、古川くん？」

「吉川です。」

拓也がかぶせ気味に答えた。楽しそうにあはは、と笑う。

「ビミョーに惜しいですっ。でも覚えてくれていて嬉しいです。」

「いや、だってマジで助かったし、あの時。」
「・・・何の話？っていうか、何の知り合いの？バスケ繋がり！？
??？」

私は思わず話に割って入ってしまった。

だって、だって、あり得くない??

元カレと、今日知り合ったイケメンが知り合いだったなんて、世間狭すぎない？

・・・狭すぎて、息が詰まるわ。

「・・・俺が1年の時、バスケのインカレ試合で知り合った人。」
拓也があたしの方を横目で見て、ボソツと答えた。

「そうなんだ。俺、ちよつとハマやつちゃって、まあ話せば長いっていうかややこしいんだけど。その時、古川君が「吉川です」、そう、吉川君が応急処置してくれたんだよ。」

塚本さんが屈託の無い笑顔で、キラキラといった。

「・・・なんで大学違うのに、拓也が応急処置・・・？」
「だから、話せば長いっていったでしょ。」

拓也は少し口を尖らせるような表情で俯きながら、肩をすくめて言う。
う。

・・・つまり、説明するのが面倒くさいから聞くな、と、そう言う事ね。ムツカ。

じゃあ、目の前で話さないでよっ。

「塚本さん、昨日こっちに来ていましたよね。俺、同窓会だったんです。見ましたよ、塚本さんが俺らのクラスの女子に話しかけている所。」

オイ、あたしの事は無視かい。

「え？あ、じゃあ古川「吉川です」吉川君は、綾香あやかちゃんと同級生なんだ？」

「・・・はい。高3のクラスが一緒だったんで。・・・っていうか塚本さん、どうしてこいつの事、知っているんですか？」

少し不服そうに拓也が、私にはなく塚本さんに聞く。
ここにきて、やっと私も話にはいれるのですか。ふふん。
あんたの思い通りにいくもんですか。

「話せば長いんです。」

私も少し口を尖らせて、拓也からそっぽを向いて答えてやった。
隣で拓也が少しムツとしているのが伝わる。

塚本さんは、左手で右腕を抱き、その右腕で少し口元を押さえるようなお決まりのスタイルを作って、
私達をしばらく観察すると、おもむろに言った。

「君達・・・付き合ってるの？」

え？飛んでもない、もう、終わってますっ。

っていうか、終わった、つまり以前何かあった、という事ですら、塚本さんに言うのが躊躇われるのは何故かしらね？

「えっ、それはっ・・・。」
「んなわけ、ねーな。」

私が慌てて弁解をしようとした時、目の前の塚本さんがニヤツと怪しく笑って、長身を少し屈めるように私達を眺めた。

そして今までの屈託のない表情が一転、なにかを企んでいるような悪戯っぽい、

それでいてやけに艶っぽい瞳を、長い前髪の下から覗かせるようにして言った。

「色気が、ない。」

・・・は？

一瞬頭が真っ白になり、それから一気に恥ずかしさが込み上げてきた。

か、か、からかったわねえ、あたしをつ。

しかも、拓也の台詞の真似をしてっ。

半端ないイケメンが下手に色っぽい表情をするんじゃないわよっ！

えー、えー、私は、貴方様よりもうーんと色気がありませんよっ。

年不相応かもしれませんよっ。

それに、男が二人、寄ってたかって何よっ。

色気ない、色気ないって、年頃の娘をつかまえてあんまりじゃない？

あたしはねっ、今、人生色々迷ってんの！悩んでいるよっ。

そんな年から年中発情している女とは違うのよっ。

と、頭の中で息まいて、さあ、どうやって反論してやるつかとふと隣に目をやり、私はポカンとした。

なんと驚いた事に拓也が、少し悔しそうな表情で、少し顔を赤らめて、

気のせいか、塚本さんを睨んでいるのだ。

何？どうしたの？どういふ展開？

当の塚本さんは、というと、

飄々とした感じであさっての方向を見上げて、なんだかニヤニヤ綺麗に笑っている。

いやー、かわいいねえ、とかなんとか言いながら。

何の事だろ？

なんだか少し勢いが削がれた気がして、私が二人を眺めていると、今度は拓也が私の方をチラッと見て、それからギョツとしたように言った。

「わっ！おまつ！！何やってんだよっ！！」

あ、初めて私の方をまともに見た。

と思った瞬間に、喉の奥に、感じ馴れたあの感覚。
・・・ゲツ。これって・・・。

私が気付くより早く、拓也がティンバーランドの黒いカバンのポケットの中を、慌てて引っかきまわし始めた。

そしてポケットティッシュ（もちろんどっかの広告入り）を素早く取りだして、私の鼻を摘む。

「・・・痛いー・・・。」

「ったく、なんだよ。道端で簡単にのぼせんよ。」

「・・・いやー、綾香ちゃんって、本当に血の気が多いんだねー・・・。」

塚本さんが苦笑いしながら私の背中を押して（私は拓也に鼻をつままれた状態で）本屋手前のビルの入り口まで連れて行ってくれた。

「ごめんね。暑いって言うていたのにね。炎天下の中ずっと立たせちゃって。大丈夫？」

うっとり、とろける様な笑顔。・・・大した心配していなさそうね。

「・・・何、お前、この人の前でもう前科一犯なわけ？」

拓也が呆れた様に聞いてきた。何よその、前科一犯ってっ！

「奈緒が夕べ、クーラーつけっぱなしで寝たから・・・。」

鼻を摘まれっぱなしで喋りづらく、私は自分の鼻から拓也の手を放した。

「あいつと寝たの？」

「うん？（なんだ、その言い方？）ありがと、ティッシュも。大丈夫だから。」

「知ってるよ、そんなこと。丸ごとやるから持つとけ。」

はあ。すみません。

今日は自分でもよく鼻血が出る日だわ……。

「だめだよ、途中でやめたら。ほら、また垂れてる。」

ああ、今度は塚本さんに摘まれた。もう、嫌つ。

「ここのうのはね、大人しく最低3分。諦めてギュッと摘むの。止血だよ。」

「わかってますうう……。」

「ごめんね。俺、からかいすぎた？」

「……手、放して下さい……。」

「やだよ。だって綾ちゃん、すぐやめちゃうじゃんか。」

ああ、面白そうに笑われている。おもちゃだ、私。綾ちゃんだ、既に。

ホンッと馴れ馴れしいなあ、もう疲れてきた。

塚本さんに鼻を摘まれた私を、拓也は少し離れた所から見ていた。チラッと横目で伺うと、彼はなんとなく黙っている。

そこへ何とも明るい、ともすると能天気そうな塚本さんの声が降ってきた。

「綾ちゃんってさー。蕎麦、嫌いなのかなあ、古川く「吉川です」

拓也の声がかぶる。

「・・・弱冠、悪意を感じるのは俺、性格悪いからですか？」

わ、珍しい。拓也が噛みついていて。

あのかつたるい拓也が誰かに噛みつくなんて、滅多にない事だわ珍しい。

「悪意だなんてとんでもない。恩人に向かって。」

拓也に噛みつかれても声色一つ変えずに楽しそうに喋り続ける塚本さんも・・・

・・・うわー、やっぱこの人、食べないわ。

・・・腹黒系？。

「むしろ好きだけど？」

私の鼻を摘みながら拓也に向かってチヨッピリ挑戦的な笑顔。

正直、かなり色っぽいです、先輩。

拓也もさすがに少し顔が赤くなり、視線を反らしつつ、それでも反抗的に言った。

「何すか、蕎麦つて？」

「ああ、綾ちゃんかね、そこの蕎麦屋に入ろうって誘ったら、なんだか急に怒りだしたから。」

彼はそう言いながら、このビルの3階の蕎麦屋の看板を空いた腕で、後ろ手で指す。

拓也はそれを見上げて、ビックリした顔になり、それから私を見て、本当に呆れた顔をした。

なによつ。

「・・・こいつ、蕎麦屋って安いところしか知らないんです。」

「そっか。」

今度は何の話？

「お前、また、なんかこう、一人で色々盛り上がったんじゃないの？こんな違う、とか。」

うん？それはお蕎麦のお話ですか？

そう言われれば、そんな気がします。社会人はもっと、奮発したところで奢ってくれるべきですよ？

だって、年下の女の子を連れてるエリート商社マンなんですから。いえ、私が贅沢をしたいってワケではなくて、相手の誠意を見たい訳なんですよ。

分相応の誠意ってもんがあるでしょう？

拓也があきれ果てた、冷たい視線を私によこして言った。

「あそこ、高級蕎麦屋の分店よ？一人軽く、昼飯でも5千円は超えるよ?。」

・・・げ？なんですって??

「でも、酒が入らなければそんなにいかないだろっ？」
「いきますよ、きつと。小さな盛りで2千円弱、海苔乗つけたザルで2千円超えますから。三口で食い終わります。」
「知ってるよ。少ないよな。」

そんな高級蕎麦屋がこの世にあるの？しかもこんな田舎に？
呆然としちゃって、拓也を見上げる。

「・・・なんで拓也が、そんな高級知ってんのよ・・・。」
「高校の時、親父に連れて行かれた事がある。っーか、そこ、常識。」

・・・つまり、私は常識無しです、と・・・。

高級蕎麦屋知ってる事が、常識ですか？？
私に無いのは、常識じゃなくて、経験よっ。

って口に出すのはやめておっ・・・。

街3

私一人で勝手に舞い上がっていたようですね？

一日限りの人、安かろうが高かろうが、たががお昼、奢ってくれるんだからいいじゃない？

塚本あなたさんが大人でお気遣い出来るって言うのは、もう、よくわかりました。

ごめんなさい。失礼致しました。

でも。

さすがにそんな高いとこ、入るわけにはいきません。

と（勝手に。ええ、勝手ですが？）思っちゃったので、

そんなの、塚本さんに悪いです、とか私がいいだし、

じゃあ、結局綾あやちゃんは何が食べたいの？俺は腹が減ったんだけど、と塚本さんが（あたしの鼻を摘んだまま）困ったように言い、

（イラつかれたかも。イラつくよね、普通）

いや、何が食べたいって訳じゃないんだけど、なんでもいいんだけど、お腹は空いて無くて、

っても高すぎは嫌だけど、ああ、もうメンドクサイと疲れてきたら、

（だって炎天下に鼻血よ？）

じゃあ、ファミレスに入るときやいいじゃない、一本向こうにあるでしょ、

と拓也に呆れたように言われ、

ああ、ファミレスね。それいいですね。

え？綾ちゃん、ファミレスでいいの？じゃあ、そこ行い。
となり。

「よかった、ヨッシーの鶴の一声でそこに決まったよ。さすが、同級生。助かった。」

と塚本さんがアイドルの様な笑顔を拓也に向けた。
それを見た拓也は対照的にピキっ・・・と凍りつき

「・・・何？『ヨッシー』って・・・？」

思いつきり嫌な顔。

拓也、最初の爽やか好青年後輩、の仮面を出会って10分で脱いだわ、わはは、ザマー見ろ。

私はなんだか嬉しくなつて、内心でふんぞり返ってしまった。

拓也の表と裏との二重人格ぶりが、どーも前から気に入らなかったのよねえ。

それがこの短時間で崩れるなんて、彼の敗北以外ありえないでしょ、ぬははは。

・・・でも、考えてみれば、それが出来る塚本さんって、すごいな。拓也の猫つかぶりってかなりの年季が入っていると思っていたんだ

けど。

「『吉川』ならヨツシーだろ？『古川』って呼ばれるのとどっちがいい？」

塚本さんがニヤツと笑った。

……うそっ！この人、最初っから、絶対わざとだ……！

私が思わず絶句した隣で、拓也も同じ事を思ったらしい。

「……なんか、殺意すら湧いてきた……。」

拓也の黒い声を聞いても、ますます嬉しそうにわははと笑う塚本さん。

うわー、爽やかに腹黒だな……。

その時、私の携帯が鳴った。

それをきっかけに塚本さんから鼻を放してもらって出ると、奈緒なほからの電話。

彼女はなんだかニヤニヤと、そっちはどーよ？と言いながらも、なんとなく様子が落ち着かない雰囲気だった。

でも私は、まずあんたのせいで2度目の鼻血を出してしまった、と激しく抗議を開始。

「ちょっと、綾ちゃん、落ち着いて。また出るよ……?」
と塚本さんが後ろから声をかけてくれるのと、

「……バカらしい。俺、もう行く。」
と拓也が歩きだすのが同時だった。

「あ、拓也? バイバイ。」

と手を挙げると、電話の向こうで奈緒が

「え? 吉川氏がいるの? そこに?」

「うん。偶然。もう、どっか行くらしいけど。」

「ちょ、代わって、吉川氏に。」

「は?」

「いいから!」

訳分からずに私は拓也に、無言で電話を差し出した。

彼は、そのどつちかって言うとかかなり童顔の可愛い顔を少し訝しげにゆがめて、私を見る。

「……何?」

「奈緒から。」

「田中さん? ……が、何?」

「……あなたに代わってほしいって。」

「……はあ?」

彼はますます不審そうになると、パンツのポケットにつっこんでいた

片手を出して、携帯を受け取った。

「もしもし。．．．．．はあ？なんで？．．．．．何それ。．．．．．なんで、そんな事したの？．．．．．何だ、それ。．．．．．んなの、ちげーよ。．．．．．わかったよ。．．．．．わかったよ。．．．．．わかったよ。．．．．．うん。．．．．．うん。後で、絶対来いよ！」

あ、切った。人の携帯を。

「奈緒、なんだって？」

「．．．．．お前について行け、だって。」

「ええ？？？何でっ？！」

思わずの大声。何故に、何故に拓也が？？

何故、拓也を遣わすっ！！？？奈緒っ！！？？？

ついて来させるって、あたしを拓也と一緒にいさせるって、どうい
う了見？？！

「なんか、田中さんが後から合流するらしいから、それまでのつな
ぎ、って。」

「ああ、彼女、来るんだー。」

ニッコリと綺麗に笑う塚本さん。

「．．．．．その、見るからに『がっかりしました』みたいな表情、や

めてくれない？」

拓也が、少し嫌そうに私に言った。

「えっ！？何っ！！失礼な事言わないでよっ！！。別にがっかりも何もしてないわよっ！！！」

私は滅茶苦茶恥ずかしくなって、大声で言った。

がっかりなんて、塚本さんに下心あり、みたいに聞こえるじゃないのっ！！！」

・・・まあ、がっかり、かな。

一方で私は、割と冷静に自分に突っ込む。

だって、「奈緒が来る」って彼が聞かされた時も、顔色変えずに、むしろ嬉しそうに

「あ、来るんだー」って言うなんて、

彼は私との外出を、特に何とも思っていなかったってことでしょ？

それって、相手が塚本さん（イケメン）じゃなくて誰であっても、男性から言われたら、女の子は内心、結構凹むと思うけどなあ。

「・・・デートじゃなかったんだ・・・？」

拓也はなんとも複雑そうな表情で、先程とは違ってかわって遠慮が

ちに聞いてきた。

・・・まあ、ね。元カノのデート現場に遭遇した、と思えば、居づらいわよね。私でも想像できるわ。

「何よう。『デートな訳ない、色気がない』ってあたしに言ったの、拓也じゃない。」

「でも、まさか本当に違ったとは。わあ、びっくり。」

何、その棒読みの嫌味な言い方。たった今の殊勝な様子は何処へ消えた？

「塚本さん、この街を案内してほしいそうですね？田中から聞きました。で、不意ながら、俺も一緒にいいですか？彼女が合流するまでの間。そう頼まれたんで。」

「いいぜえー。3コも年下の連中に囲まれて、コーコーサー引率するセンサーみたいだけど。」

塚本さんもすっかり砕けた感じで拓也に答える。本当に楽しそう。

すると拓也は急にニヤツと笑って、彼に言った。

「じゃ、よろしくね、みどりちゃん。」

・・・何？

「・・・はい？」

塚本さんが、珍しく眉間にしわを寄せて拓也を見る。
拓也はさも愉快そうに、ニヤニヤ笑いながら言った。

「だって、碧みどりでしょ？俺がヨッシーなら、これからみどりちゃんで行きますんで、よろしくお願いします。」

つてあんた、その態度、お願いしてないし。

つていうかこの人、名前、みどりちゃんなんだ。へー。
・・・かわいい。

「・・・おつまえ、3年前の印象と全然違うなー。可愛い顔して、無礼な奴だな。」

塚本さんが、言葉とは裏腹にちつとも怒ってない様子で、キョトンと言う。

一方の拓也はしれっとしたもので、

「それが俺の売りなんで。」
なんて言ってる。

私は、拓也のその相変わらずの馴れ馴れしさぶりに呆れてしまった。

そうか、この子の馴れ馴れしい態度つて、女性相手に限られた事じやなくつて、男女問わず、だったのね。

そうやって、自分の壁を隠しているんだ。成程ねえ。

一方の塚本さんには、そういった「壁」、内と外の違い、をあまり感じない。

いや付き合ったことないし、つていうか今朝会ったばかりだから思いつきり推測だけだ。

でもこの二人、案外気が合うかも知れないな、と行ってしまった。
だって何だか、男同士で楽しそう。

事情

「で、この街の探索ってなんすか？前浜東の生徒死亡事件って？なんでそんな事みどりちゃんが調べているの？」

ファミレスの席に着くなり、拓也が塚本さんを見上げて言った。
(こいつは真っ先に自分が、勝手に奥の席に座ってしまった。)

私はなんとなく拓也の隣の席に座るのが躊躇われ、向かいの席に腰かける。

結果、塚本さんは私達の顔を交互に見比べ、拓也の隣に座った。

(まあ、当然よね。)

「あ、田中さんから聞いたんだー。ヨッシー、詮索好き？」

塚本さんは、正直こっちがイラッと来るくらい、飄々と言う。

「全然。めんどくさいの、やだ。でも、面倒な事に巻き込まれるのはもっと、やだ。」

だから防波堤を作ってるの。事情が分かんないと、一緒しづらいでしょ？」

拓也はテーブルにグダーッと突っ伏すように体を預け、右ひじをついて体ごと塚本さんを見て言った。

何というか、本当にだらしの無い姿勢するな！。

「お前、ほんと態度一変したな！。無礼な奴。」

相変わらず塚本さんは、台詞の割には怒った様子も無く、たいして呆れた様子も無く言う。

「世渡り上手って言って。みどりちゃんほど、顔と笑顔だけで世の中渡って行けないもんで。」

「ばかやる。俺は頭も性格もいい。」

ニヤツと笑って返す塚本さん。

それを、はいはい、と言って興味なさそうに返す拓也。・・・素かも。

店員さんがやってきて、それぞれ適当に注文をした。

私よりもそばを頼んでしまい、拓也に「ここに来ての蕎麦だよ」と呆れられてしまった。

「・・・で、話を戻すけど。なんでそんなん、調べてるんすか？だって今日、平日よ？俺達学生は夏休みだけど、バリバリの社会人が貴重な休み使ってまで、何を知りたいの？」

拓也の突っ込みに、私は今まで気づかなかった事を気付いてしまった。

そうよ、この人、社会人よ。仕事休んでるじゃない。

塚本さんはやっぱり飄々と

「そうね。知れる事を、知りたい。」

なんて、背もたれに体を預けながら言う。

「何、それ。何で？・・・っか、何で俺ばっか聞いてんだよ？お前、何も疑問に思わなかったの？」

いきなり私に話を振らないでよっ。

っていうか、私は状況について行くのに必死で、（極上のハンサム相手に軽く結構ムカついて）そこまで頭をまわしていなかったのっ。これから問い詰める所だったのっ。

「・・・相変わらず、ポイントずれたところで自己主張するくせに、肝心なところで気が回らねえな。」

グサっ。

人を、さも「昔の女です」みたいな、あんたに所有権があるかのような、分かったような口のきき方をしないでくれるっ！？

・・・って、ここがポイント、ずれてるのかしら？

「うるさいっおしゃべり小僧。あんたは黙って、その背後にいるでっかい猫に餌をやり続けてればいいのよっ！」

私がドスをきかせて言うと、拓也が人懐っこい目をまん丸に見開いて、ぽかん……とした。

「……え？何、それ。全然わかんない。」

「お前がはげしい猫つかぶりだって言ってるんじゃない？」

塚本さんはフツの顔して、目の前のお水を飲む。

「……うっわ。わかりづれー。」

拓也が呆れた様に私を見たけど、私も、すましてお水を飲みながら言ってしまった。

「自分の頭が回ってないだけ。」

珍しく、グツと詰まる拓也。やったね！
それを見た塚本さんは、ニヤリと一言。

「綾ちゃんに一本。次、頑張れ。」

すると拓也はついに机に突っ伏して、仰々しく頭を抱えた。

「もっつ。俺、何でここにいるのっ。」

あんたが自分の判断でついてきたんでしょ？

そして彼は顔をあげ、塚本さんを見て言った。

「で、みどりちゃんはどうしてその事件の事を知りたいの？」

すると彼はやっぱり、何でもない事のように言った。

「んー、実はね、関係者と知り合いなんだわ。知り合いとしてはさ、知りたい事もでてくるじゃない、色々と。」

え？関係者と知り合い？

途端に、私はかなり強張ってしまった。

その言葉に、今自分が関わっている事が、急に、現実味を帯びてきたから。

そうよ。15年前の事件を知りたがっている人。

その時点で、もっと警戒心を持つべきだった。

なるべくすぐに、離れるべきだった。

私にとってはあまりに昔の事過ぎて、随分時が経ってしまって、塚本さんが、抜群のイケメンだけど態度があまりに自然だったので、

彼の話が、すごく、他人事のように響いてしまっていたのだ。

私は自分で自分が情けなくなる。

私ったら、流されやすいにも程があるっ。どうして途中で気付かなかったのよっ。

拓也の言うとおりだ。肝心な所で、又ケている。

同時に、内心驚く。

私、そんなに、ほぼ完璧に、忘れる事が出来ていたんだ……。

「関係者」と聞いて、拓也はそれ以上突っ込むのをやめたらしい。プライバシーの匂いを感じたのだと思う。

彼は、こういう所はすごくバランス感覚がいいから。

「ふーん。でもさ、それだったら俺たちじゃなくって、もっと年上の人とか、元同級生とかに直接訊いた方がいいんじゃないっすか？ だって俺達、15年前つつたら、6、7歳だよ？ 小学1年生だもん。何も直接的な事は知らないっすよ？」

そう、小学1年生だった。

ふと視線を上げると、何故かこっちを見ている塚本さんと目が合っ
て、

ドキツとするより、ビクツとなってしまうた。

その切れ長の、ちょっぴりタレ目の綺麗な瞳が、まるで何かを知っ
ているような色で私の事を見つめている……

気がしたからだ。

塚本さんにつられたのだろう。拓也もなんとなく、私の方を見る格
好になっていた。

一瞬、テーブルに沈黙。

その時、まさしくのタイミングで奈緒が飛び出てきた。

「はい、遅れましたー！田中です。」

奈緒は、外の綺麗な空気とやってきたように、日本人形のような顔と
明るいピンクのシフォンスカートを身にまといテーブルに近づいて
きた。

「ごめんねー、綾香、一人にしちゃって。もう、親が大変で……
って、何かあったの？」

「え？何にもないよ？よく、こんな早くに家を脱出できたねー。正
味何時間？」

私は奈緒に助けられた。

事情 2

「ねえねえ先刻さ、そのヤマナカ通りで河島健を見ちゃった。」

奈緒が嬉しそうに言って、席にも座らず私の腕を取った。

「ね、見に行こう！ちょっとだけ！ドラマのロケっばい。」

「え、ちよと・・・。」

「え、田中さん、俺達どうすんの？」

拓也がびっくりしたように言う。

「すぐ戻って来るから！いいでしょ、見たい！」

奈緒は強引に私を連れ出した。

ヤマナカ通りってというのは、ヤマナカっていう大きなデパートの前の通りの事で。

「わあ、ほんとだ、交通規制してる。」

大勢の人だかりの向こう側で、歩道の上で何かのドラマを撮っているようだった。

美人女優さんと、その隣に河島健。切れ長の瞳ときりつとした眉のクールな二枚目なのにその中にどこかほわつとした雰囲気醸し出

した、そこが売りの、元祖草食系俳優。多分30歳前後の、結構いい年よね、もう。

有名人、見たわ。

「で、どうだった？」

奈緒が、興味津津、って感じで聞いてきた。

「うん。テレビで見たまんまだね。でも本物は・・・」

「じゃなくて、王子よ、王子。」

「王子？」

初めて、奈緒の方を振り返る。

「どんな感じ？いい感じ？」

「いい感じ？どんな感じ？」

「タダの繰り返しは突っ込みではない！」

何よ、突っ込んでないわよ。意味が分かんないのよ。いい感じって何よ？

「なんか彼つてき、綾香に興味アリって感じだったからさあ。」

私達は、通りの向こうの有名人を無視して話し始めた。

そうか、これが話したくって私を呼びだしたのね？

「・・・ハンサムに興味を持たれる覚えは、ない。」

「いやー、持ってたね、あれは。あたし、人間観察に自信はあるの。」

鋭いから。」

自分で言うか。

「・・・まさか、それで私を置いて、一人家に帰っていたとか・・・？」

「まあ、ほんとに一度家に顔を出さなきゃなんなかったから、まるつきしの嘘じゃないけど？」

「だってあの時、滅茶苦茶焦っていたじゃない?! どんだけムダに演技が上手いのよっ。」

付き合いが長いけど、ヤラレたっ!

「だってここ半年の綾香って、『人生どん底』みたいなオーラを醸し出していたんだもの。なんかこう、活性剤みたいなものを打ってあげたくっさ。」

彼女はにこっと(ニヤツと?)笑うと、私を覗き込んだ。

「で? 活性剤になった? 刺激受けた?」

「・・・。」

「惚れた? 腫れた? ヤラレた?」

最後の言葉は品がありません。

「・・・。」

「黙秘権行使か。まあ、楽しかったんならよかったわ。」
何も言っていないけど?

「でも綾香の状態と性格じゃあ数時間が限度だろうと思って、後から助け出すつもりだったんだよ？ほら、こっやって来たしね？私やさしいでしょ、どこまでも。」

「……なんで拓也を巻き込んだの？」

すると奈緒はふふ、と笑って言った。

「面白いから？」

「……あんだ、刺す。」

「じゃなくって、男性の意見も聞きたくってね。王子がどんなタイプかって。吉川君てかなり、本質つく人でしょ。」

彼女は腰に手を当てて（得意のポーズ）続けた。

「あたしとどっかタイプが似てるのよね。だから信用できるし、警戒してるの。」

「警戒？」

「だって、腹の中で何考えてるかわかんなさうだから。」

「……つまり、あんたもそうだと。」

何を今更、と言って彼女はにっこりと笑う。

「王子、綾香の事を気にしてる、て感じだったわ。気に入ってる、と言うより、気にしてる。」

「？」

「でもさ、前浜東の殺人調べてる、ウィークリーマンションに泊ってる、エリート商社マン無駄に顔がいい、って、すっごく胡散臭くない？」

「・・・その胡散臭いのと、私を置き去りにした、と。」
「いいじゃーん、助けに来たしー。刺激的だったでしょー。」

彼女は私の首に腕をまわし、べたべたと絡んできた。

「で、あの人、なんで前浜東の事調べているの？」

「・・・えーっと、・・・さあ。まだ知らない。これから聞くと。」

すると彼女は絡んでいた腕をはずして、マジマジと私を見た。

「聞いてないの？3時間以上一緒にいて？綾香、妙なところで自己主張するくせに、肝心な所でぬけているわね？信じらんない。」

ああ、もう嫌だ、その時間差ユニゾン。あんなたち血が繋がってるんじゃないの？

怪しい人

確かに怪しい、塚本碧^{みどり}。

一般人が、ウィークリーマンションに泊って、アレを調べてるなんて怪しい、って奈緒の言うとおりだし。

なんで事件の直接関係者じゃない、当時小学1年生の私達に案内頼むのかって、拓也の言うとおりだし。

……直接関係者じゃ、ない。

……あの人、私の事、何か知っているんじゃない……。

急に寒気がしてきた。炎天下なのに。

でも、だって、だって、……どうして？

でもその時頭に浮かんだ塚本さんの笑顔は、

……やっぱりなんだかどうしても、明るいものだったのが、不思議。

なんか、その、なんというか、……悪意がある人に見えない感じ？

怪しくないか？って聞かれたら確かに怪しいし、

胡散臭くないか？って聞かれたら確かに胡散臭いし、

危険じゃないか？って聞かれたら確かに危険な気がするし（別の意味で……ね。）

でも、どうしてだか、悪い人には見えない。

……モデル張りの完璧ルックスで、それを武器にしたような屈託の無い、ときには色っぽい笑顔で、かなりムカついていたんだけど、

……嫌いでは、ないし。今の所。

でもああいうのは、二人きりの時に電車で見せたあの笑顔は、表面上の優男、ってだけかもしれないし、気を付けよう、うん。

ファミレスに戻ると、席に座っているのは拓也だけだった。目の前にはすでに注文した料理が並べられていて、拓也は自分の冷やし中華を、たいして興味もなさそうにかき込んでいる。私が頼んだもり蕎麦は・・・あーあ、なんか表面が乾いちゃってるわ。

「あれ？王子塚本さんは？」

奈緒が聞くと、拓也は店内の隅の方を顔も向けずに指さして答えた。「電話中ー。」

見ると、お客さんが座っていない席の方で、彼が携帯で話をしている。

「田中さーん。尋問不成功ー。」

拓也は口の中のものを咀嚼し終わると、私の隣に座った奈緒に顔を向けて言った。

「ダメ、あいつ。なーんにも答えない。」

「え？ダンマリ？」

「違う。へらへら笑ってかわしてんの。」

拓也は肘をついて、箸をお皿の上に置いた。

「この俺を持ってしても、ムリ。関わんの、やめたら？」

「え？何、尋問って？」

話の見えない私は、二人の会話に割って入った。

「さっき吉川君と電話した時、事情を話して、お願いしたの。怪し
そうなの、王子塚本を暴いてよ、って。吉川君なら、さりげなく
うまいくやれるかなあ、と思ったのに。」

「な・・・なんでそんな事、拓也に・・・」

「だって綾香、『そんな事』出来そうにないじゃん。よしんば出来
ても直球すぎて成功しなそう。」

グッ・・・。

反論しようとして、言葉につまったわ。全くその通りよっ弁解の余
地なし。

「あーあ、もつたいない。せつかくのいい男なのに。」
奈緒がつまんなさそうに口を尖らせた。

「・・・よく、そんな事引き受けたわね、あんた・・・。」

私は目の前の拓也を思わずしげしげと眺めてしまっ
だって自分に関係ない事や面倒くさそうな事には絶対首を突っ込ま
ない、キングオブかつたるい拓也なのに。

拓也は気のせいかな、少し決まりが悪そうに私から視線をそらした。
その様子には私は思わず、

「なんかの、バーターでも提示されたの？奈緒に？」

「あつははー。そーんな飴は出しませーん。」

奈緒は嬉しそうに、っていうか勝ち誇ったように高らかに笑うと、拓也を見てにこつと（ニヤツと？）笑った。

「あ、今、『その手があつたか』とかって思ったでしょ？うふふ。必要無いのよ、今の君には。」

何の事？

すると拓也はハア、と少し大袈裟に溜息をついて肩を落とし、食べかけの冷やし中華を放り出す形で立ちあがった。

「じゃあ、用済みって事で俺、帰るから。」

「あれ、帰っちゃうの？興味ないの？最後まで。」

「ねーよ、そんなもん。それに田中さんが来たなら、俺いらないでしょ？」

そう言つて彼はさっさと出て行つてしまった。

「あーあ、行っちゃった。拗ねちゃった。」

奈緒は店員さんにアップルフロートなるデザートを頼み、あつげらかんと言つた。

「なんで拗ねるの？拓也が。」

「フクザツな男心つてヤツじゃない？」

その時、向こうの方で塚本さんの大声が聞こえてきた。

「はあっ？嘘だろ？マジ勘弁しろよ！・・・えー、何だよ、それー・
・・・。」

まだ電話で何か話しているらしい。

「かつこいーよねー。観賞用だわ・・・。」

奈緒が肘をつきながら彼の方をみて呟く。

私はすっかり乾ききった（？）もり蕎麦をモソモソと食べた。美味しくない。

しばらくして電話を終えた塚本さんが席に戻ってきた。

「ごめんねー。ってヨッシーは？」

「帰っちゃいました。」
と奈緒。

「ありや。俺、からかい過ぎたかな？」

「えー。塚本さん、そんなにあの子の事をからかったんですか？」

奈緒が結構素で、少し驚いたように言う。

「うん、だって可愛いんだもん。思った事がすぐに顔にでてさ。」

その台詞に、私達二人は目を丸くした。

だって拓也は筋金入りのポーカーフェイスの筈。

あ、でも今日の拓也は、塚本さんの前では確かに猫を脱ぎかかって
いたわね。

「さっきの電話、トラブルですか？」

奈緒が聞くと、彼は苦笑した。

「そう。信じられない事に会社の同期が、俺に明日の接待を入れち

まったつて。俺、明日のお昼には飛行機乗って東京帰らなきゃ。」

一人急な体調不良でさ、家族サービス中の先輩には穴埋め頼めないから代わりに俺が、って独身は振り回されるよな、とかなんとか。

そして彼は私のもり蕎麦を見ると、ちよっぴり目を丸くした。

「うわ。綾ちゃん、それとっても不味そう。固まってる。」

「・・・はい。実際、不味いです。」

すると彼はケラケラと面白そうに笑って、私に自分のお皿（とんかつ定食のとんかつ）を差し出した。

「じゃあ、これあげるよ。嫌いじゃなければ食っちゃって。」

「えええ??そんな、結構ですつ。」

「いいって、いいって。」

彼は勝手に私のお蕎麦の上にとんかつを3切れ、ひよひよひよいって。

「腹減るよー。なんなら味噌汁もいる?」

「入りませんつて、そんな。塚本さんこそお腹減りますよつ。」

「とんかつ3切れ減ったくらいで、腹減らないつて、大丈夫。」

「いや、そうじゃなくつて・・・」

「じゃあ、俺こっちもらう。」

彼はそう言つと、とんかつの乗った私のお蕎麦をひよいって取つて、かわりに自分の定食セットをこっちに滑らせてきた。

「どうぞ遠慮なく。余ったら、俺が貰うから。」

そう言つて、あれ？田中さんはもう頼んだ？ええ、私はもうお昼を済ませてきましたからドリンクを（にここに）、そっか、今日は君も慌ただしいね、奈緒って呼んで下さい、

と二人で会話している。

「・・・いいんですか？」

半ば強引なその行為（好意？）に、抵抗するのを半分諦めて、私は形だけの再確認をした。

「・・・だつてねー・・・」

すると彼はニコツと笑つて言った。

「だつて綾ちゃんつて真面目そうだから、頼んだものは必ず残したくないタイプでしょ？そしたら俺のとんかつとその乾いたお蕎麦、選択肢ないじゃん。」

「なっ・・・！」

「・・・確かに。そっかも。」

私の貧乏性までバレてる。

「俺としては今から場所を変える事もちつともやぶさかではないんだけども？」

いいんです、いいんです、これを頂きます。

ほんととはんかつ苦手なんです、残すのもつと苦手なんです。

あなたこれ全部食べて。私は違う所に行きたいわ。

なんて、相手を振り回す度胸も愛嬌も無いんです。

隣で奈緒が、ホンツトに面白そうに笑ってああムカつく。

それでもやつぱり、こんな人が、怪しくて危険で悪い人なのかな？
って思ってしまう。

それとも色男っていうモノは、悪人だろうと善人だろうと
これぐらいの能力と気配りを持ち合わせているものなのかしら？

現場

ファミレスを出た私達は、もう一度電車に乗って数駅先の目的地に向かった。

結局、街中で私を楽しませてくれるって塚本さんは言ったのに、降りた街ではただ拓也に会い、ただ鼻血を出し、ただファミレスに行っただけ。

拓也と、奈緒、という・・・友達が来て。

え？「邪魔者」じゃないってば。・・・え？え？
なんか、がっかりしている私がいる？

あんなにムカつく程突っかかっていたのは、結局、ハンサムにオトされるのが嫌だったから？

え？私、オチてるの？

ジッと塚本さんを見る。

結局、私もその他大勢の女の子達と一緒にだったみたい。イケメンのタラシくんにはヤラレ気味なんだわ。

でも彼は、顔が抜群に良いのみならず、性格が穏やかそうで、少し大人っぽくて、飄々としているけど芯が優しそうで、でもチョッピリ腹黒そうで、

ああ、だからモテルのね、きっと。

だから、女の子の扱いに馴れているのね、きっと。

私はそれ以上先を考えないようにした。

それは、拓也と奈緒が「怪しい塚本」と言っている以上に私には重い、

彼が「事件の関係者の知り合い」と言う、告白の事。

聞いた瞬間は正直背筋が凍る思いがしたけど、そこから先は、あえて考えない事にした。

考えない、考えない。

仮に彼が何かを知っていたとしても、考えない。

今考えてもしょうがない。私は何にもしていない。何一つ、関わっていない。

だから、考える必要は、ない。

思い煩う必要は、ない。

そうやって、今までコレを頭から押しやって、生きてきた。

それに目の前にいる彼は、やっぱりどうしても悪人には見えなくて、

仮に彼がこれから私に関わってくる人だとしても、私を追い詰める人には思えなかった。

訪れた現場は、遠い記憶とはすっかりかけ離れたものだった。

実際、色々な建物などが取り壊されて、塗り替えられて、レイアウトしなおされて、だから、卒業生でもこの景色から自分たちの学校生活を懐かしむ、なんて無理なんじゃないかしら、と思った。

そして、彼はこの変わり果てた現場を見て、一体何を知りたいのだろう、と思った。

だって、ここから得られる情報は何もない。少なくとも私にはそう見える。

それでも、ここで15年前に人が殺されたかと思うと、嫌な吐き気と雨の匂いがしてきた。

去年大往生をした、飼い犬のダンの声が聞こえた。

結局その場にいたのは5分ほど。
私達3人は誰も口を利かなかつた。
学校跡地をウロウロしたのだって、30分もあれば終わってしまった。

だって私達は卒業生でもなければ、同級生でもない。思い出話に花すら咲かせられない、こんな所では。

「よし。終了。終わりにしよ。ありがとね、付き合ってくれて。」

前方の塚本さんがこちらを振り返り、綺麗な瞳でニッコリと笑った。
その長身を私達が見上げるカッコとなる。

「それじゃこれからがどっちかって言うと本命。周辺、案内してもらいたいな。」

「どっか面白いところ、ない?」

俺、明日帰んなきゃいけないから遊べるの今日が最後なんだよねー、
いいところないー?

そう言ってパンツに両手を突っ込み前方を見上げて屈託なく笑う彼は、ハンサムな全身に縁取りがされているようでありぱり嫌味だわ。

「じゃあ、海なんてどうですか?すぐ近くに、いいところあるんですよ?」

奈緒がニッコリ笑い、私はビックリする。

「ええ？私、水着なんて持つてきてないよ？」

「いらぬよー。流石に今からは入らないでしょー。お散歩よ。面白くない、あの辺り。せつかくまだ明るいんだから、ね。」

「お、海。いいねー。行ってみようぜ。」

肩をすくめて、くくつと笑う彼。あ、楽しそう。

「でもさ、そこって日陰ないよね？ちょっと先に休憩しないと。綾ちゃんが鼻血だすよ。」

はっと気がついたように塚本さんが言う。

私は乙女な気持ちもふつとんで、鼻血ネタに関しちゃその対応に年季が入っているので、

もはや恥ずかしさよりも疲れが先に出してしまうの。

「・・・それ、本気？」

「本気だよ。女の子なら、出血なんてなるべく控えないと。大変でしょ、色々。」

「・・・それ、下ネタ？」

「え？違うよ。貧血の事だよ。多いじゃん、女の子に鉄分不足。」

キョトンとして私を見下ろす。

「何だと思ったの？君。」

・・・あ、ああ、恥ずかしい・・・また的外れな攻撃を仕掛けてしまった・・・顔が上げられない。

私は思わず縮こまりたくなってしまうた。

それでもそれはプライドが許さず、そう・・・と上目遣いで彼を見

上げると、

・・・あ、え？目が笑ってるうつ？？

や、や、やったわねえ！

また、あたしをからかったわねえ！！

そそそついうの、やめてほしいんだけど。

「ほら、どうしたの、落ち着いて。とりあえず駅目指して日陰を捜そう？2度ある事は3度あるって言っし。」

塚本さんは面白そうにニヤニヤと笑いながら、私の背中を軽く押して歩くのを促す。

「え？綾香、また出し・・・」

「奈緒のせい！！」

「ええー！？あたしのせい？？」

私は振り返って奈緒を大きく指さし、奈緒は思いつきりのけぞった。

あつたりまえでしょっ！！あなたのせいで、塚本さんの中には「鼻血女」として私の記憶が残るのよっ！！

たった一日の出会い、数年後にはへのへのもへじに赤い鼻血を垂れた女の顔、ぐらいの記憶になるのよっ！！

消えた方がマシなのようっ！！

そして私達は海に向かった。

その電車の中で、ちよつとウキウキした雰囲気の中で、奈緒が急に、真面目な口調で彼に聞いた。

「塚本さん。どうして今頃知りたくなつたのですか？15年前の事件の事。」

それは今まで私の頭の中にもあつただけけれど、あえて無視をしていた事だつた。

核心に触れたくない気持ちがあつたから。

「んー、それはさ、まあ色々とあつて。」

それをのらり、とかわす彼。

「あたし達ここまで付き合つたのに、それでも教えてくれないんですか？」

問い詰める奈緒。

「怒ってる？ごめんね、奢るから。」

優しく笑う彼。

「じゃあ、なんで一人で行かなかつたんですか？」

奈緒は怒っている様子を出さず、純粹に質問をしているように言った。

「だって私達、何の役にもたっていないですよ？」

彼は明るい笑顔で、本当、この笑顔こそ陽の光の下にある正しい笑顔の見本、というような笑顔で、実に模範的に屈託なく笑った。

「だって、一人でウロウロするより、女の子と一緒にの方が楽しいじゃない。」

それは彼の「モテ男」の雰囲気とぴったり合った王道の答えだったのだけれど、

その一瞬、答える一瞬前に、彼が深い瞳の色で私をかすめるように見た、その視線と私の視線が、

確実に絡み合った。

直後、視線を外して屈託なく笑う彼。顔色を変えずに、その台詞に苦笑して見せる私。

でも、絡み合った視線はそのまま心の中で解かれる事はなく、それは多分彼もそう。

お互いに確認してしまった。

彼は私を知っている。

私は彼が、私を知っている事を気付いている。

想像していたよりも開き直った自分がいて、心の中で考える。
どうやら彼の記憶の中で、私がへのへのもへじの鼻血女として残る
事はなさそうだ。

海

15年経って死亡事件を知りたくなるなんて、素人考えでは一つしか思い浮かばない。
殺人の時効と関係があるんだ。

目の前のイケメンと、殺人事件は結び付かない。
彼は「生」^{せい}の象徴であるような明るさをどこか持ち合わせている。
「影」や「死」というものがあまりにも不似合いなもの。

私の事はどこで知ったのだろうか？やはり誰かが気付いていたのかしら？
でも仮に誰かが何かを知っていたとして、どうして今まで、私は何事も無く来たのだろうか？

就職が上手くいかない。
拓也^{かれし}と別れた。
やる気が起きない。

それに加えて、今度は15年前の過去。

私は今、多分人生でいくつかあるうちの大きな「ターニングポイント」に差し掛かっているのかもしれない。
塚本さんとの出会いは、私にそんな気を起させた。

先程の彼の瞳を思い出した。
ヤバい事態になるかもしれない危険を感じるのに、同時に甘い感覚が体の中を一瞬貫いた気がした。

潮の香漂う駅に着いたら、奈緒が「トイレ・・・」と言いだした。

「じゃあ、外で待つてるよ。」

「・・・じゃなくて、行つてて・・・。」

「・・・え？まさか・・・？」

「・・・うん。」

一瞬、奈緒をマジマジと眺める。

「・・・鼻血の天罰だから。少し個室の中で反省してなさい。」

「ごめんなさい・・・。」

奈緒は情けない表情で駅の反対側へと消えていった。

私はそのまま改札へと向かう。

「あれ？奈緒ちゃんは？」

「お手洗いだそうです。」

そのままスタスタと改札を抜けて、私は歩いて行く。

「え？待たないの？」

「待たれると、落ち着かないんだそうです。」

タイミング良く青になった交差点を渡る。目の前は海。

「トイレを出るのに、軽く20分はかかりますからね。あの子はお腹が弱いんです。」

ジューズを一気飲みするからよ、おバカさん。

高校時代、トイレに籠もった彼女に付き合う事、数知れずなの。

逃した電車の本数も数知れず、よ。

「え？大丈夫なの？わー、海だー。」

「ええ。出しきらないとダメなんです。んー、久しぶりだなーここに来るの。」

「君は止めなきゃならなくて、彼女は出しきらないといけないんだ。面白いなー。綺麗な海だなー。」

「……その『面白いなー』は、前にかかる言葉？後ろにかかる言葉？」

海沿いの道路に立って、隣の彼を横目で睨むと、彼は目だけこちらに向けてニヤツと笑った。

「海が面白くなるのは、遊んだ時だろ、普通。」

鼻血女と下痢女のコンビ。ええ、さぞかし面白いでしょっしょ。

これで仲間が出来た。奈緒と一緒にいつか仕返ししてやる。

そして、私達は沈黙してしまった。
そのまま、ゆっくりと海沿いの道を歩く。

この海は砂浜が殆んど無くて、ごつごつとした岩が中心の「磯」と言う感じの海。小さな砂浜を岩々が取り囲んでおり、それを木々の生い茂った陸が取り囲む。

その後ろの道を歩いて行くと、また次の小さな砂浜と岩々が見えてくる。

つまり、小さな砂浜一つ一つが、独立した感じの海辺なのだ。

あの時の絡みあつた視線でお互い認識をってしまったから、私達はかえって話せずにした。

私は彼が口を開くのを待っていたけど、彼は何も言わずに私の後ろをついてくるだけ。

私も何も言わない。でも彼は、それに対して何も言つてこない。

私達は海水浴客の声を聞きながら、黙つて歩いた。

それこそ、「僕は君が気付いている事を知っているよ」と無言で語りかけている事と同じよね。

少し陽が傾き出し、優しい風がふきはじめた。

3つ目くらいの砂浜の後ろに来た時、口を開いたのは私だった。別に沈黙に負けたとかじゃなくて、自然に言葉が出てきたから。

「私、小さい時に、ここで溺れた事があるんです。」

私が立ち止まると彼も立ち止まる。二人して、その砂浜にいる3家族を眺めた。

小さな子供達が走り回っている。

すこし大きな男の子が、熱心に穴を掘っている。

「家族で来ていて、私は浮き輪で遊んでいたんですけど、うっかり流されちゃって、親の死角に入っちゃったんですね。」

そう言つて、左前方の突き出た陸を指さした。あそこの海から、私はこちらに流されてしまった。

「足もつかないし焦っていたらバランスを崩して、浮き輪をしているのに顔が海の中に入っちゃったんです。」

まだまだ頭の大きい子供。うっかり重心が崩れてしまった。

そうしたら今度は起き上がることが出来ない。浮き輪が腰の方にずれてしまい、頭より足の方が浮いてしまうのだ。

浮き輪がかえって、危険なモノにと変化してしてしまった。

あの恐怖。

「パニックになっていたら、この砂浜にいた男の人に助けてもらいました。」

そう言つて、私は初めて塚本さんの方を振り返った。

そして私を見ている彼にハッキリと言った。

「私の人生で一番怖かった事は、それです。」

自分が死ぬかもしれない、という恐怖。

それに勝るものは、ない。

「今でも時々夢に出てくるのは、その事だけです。」

他は、ありません。

そう目で訴えるつもりで、彼の事を見つめた。

ポケットに両手を突っ込んでいる彼も、まっすぐに私を見つめていた。

その顔は無表情のようであり、少し優しげのようであり、少し驚いているようでもあり、少し切なげのようでもあり、それらが相まって、結局無表情に見えた。

しばらくして彼はゆっくりと視線を海の方に移した。

私は黙って、彼と同じ海を眺める。

「……俺が小さい時はね。隣に頼りになる兄貴分が住んでいた。」

彼の喋り方はとても柔らかかだ。

「4つ年上だけど、何故かよく可愛がってもらったんだよな。」

穏やかな声からして、表情もきつと穏やかな。私は隣にいる彼の横顔を想像した。

「だけど、突然死んじまった。」

私は、彼の横顔を見上げた。

彼は、海を見つめたままだった。

「それが、納得いなくなつてさ。子供心に何とも言えない理不尽さを感じてさ。それが今でも続いているってワケ。」

彼はチラッと私を横目で見てほんの少し微笑むと、また前方に視線を戻した。

「年月がたつて、色々あつて、それにケリをつけに来たんだ。多分それは、俺にとって必要な事ではないだろうけど、求めてきた事だろうから。」

そして顔を傾けて私を見て言った。

「だから、知れる事を知りたい。・・・知る事が出来ないなら、それでもいい。」

彼は手を伸ばすと、私のサイドの髪をそつと撫でた。

ふわっと彼の匂いがした。

でもそれは一瞬の事で、彼はすぐに手を下げると下を向いてクスツと笑い、それから顔を上げると極上の笑顔を私に見せた。

「要は未来あきに繋がりにいいもんな、過去なんて。」

それでも私と貴方の間に未来はないわね、そんな過去が絡んでちゃ。だから貴方の手にドキツとした私の心を返してほしいんだけど、そんなもの貴方も貰っちゃいけないわよね。

もはや何を考えているのか分からない頭の中は確実に、極上スマイルゼロ円それじゃ後が怖いわ、じゃなくて落ち着いて。

マツクのスマイルにだって商品代がついて来る。アイドルの笑顔にだってお金を払った事がないのに。

この人の笑顔の後には、一体何が待っているんだろう。

危険を感じて距離を置きたいのときめいてしまっている自分に、こんな私だと分かっているのにその笑顔をバーゲンしている彼が悪いんだと、

もう、自分にムカついているのか彼にムカついているのかわからないわ。

「……奈緒に電話してみます……。」

「・・・君って不機嫌になるポイントがわからない。」

彼はキョトンとして言った。

女友達

奈緒は、今から出るから、と言ってきた。

情けない声で謝られると、しょうがないな、と思いつつもどっか嬉しくなっちゃう。

あの子はいつもどっかブツチぎってて、勢いがあって、いつつも私をやり込めちゃうんだけど、こういう頼りない所も恥ずかしがらずに見せてくれちゃうから、好き。

私は、色々な所でプライドが邪魔するタイプだもの。

そんな私を、奈緒も「綾香のいい所なんだから、好き」って言うてくれるんだけど、ね。

「ごめんね、綾香。私の分まで王子と楽しめた？海辺の青春して、元気になった？」

「・・・駅のトイレで、何言ってるの？」

「もう、ここ汚くて。頭内逃避しないとやってられない。」

「・・・妄想だから、それ。早く全身逃避して来なさい。」

奈緒とはお正月休み以来の再会だった。メールや携帯ではやり取りをしていたんだけど、お互いの大学の付き合いが忙しくって、会うのは年に2、3回。

初めは、「こうやって、離れていつっちゃうのかな？」と不安になったし、事実、久しぶりに他の友人を交えて遊んでいても、話題は自分たちの大学話ばかりで、共通点が見いだせず盛り上がらない事もしばしばあった。

でも、それが今は、いつのまにか昔の様な会話を楽しんでいる。

年明けくらいからの私のどん底を、奈緒が察し始めてから。例えば、

拓也の事も。

今では、多分彼女とはこうやって一生友達なんだろうなあ、きっとやっぱり、って思うの。

たとえ2年、3年、5年連絡を取る機会がなくなっても、ずっと親友をやっていける。

常に繋がっては無くとも、確かな味方が私には、この世の中に存在する。

それはまるで、肉親にも匹敵するもの。

ああ、私って、本当は凄く運がいい。

「奈緒ちゃんは？」

「あとちよつと……。」

「ふーん。」

彼はおもむろに砂浜に降りはじめた。小さな砂浜なのですぐ海に触れる。

私達は普通の恰好なので、濡れる訳にはいかない。どっかのドラマや少女マンガの様にカップルが海の水を掛け合うなんて絶対ごめんよ恥ずかしすぎる。

しばらく海を眺めていた彼は、脇にある岩によつと登り始めた。

・・・どうしよう。私、マジでする事ないんだけど。
っていうか、この人と二人きりの空気、最早色んな意味で耐えるの
キツくなつてきてるわ、奈緒早く来て。

近くに、お土産屋さんが何軒か軒を連ねていた。今の私にはシエル
ターに見える。そこに入つてよう。

レゲエを大音量でガンガンかけている、ちょっと派手めのお店やさ
んに入ろうと歩きはじめたら、丁度そこから何人かの人達が出てき
た。

その集団の中にいる背の高い、バランスのとれた男性がいて、自然
と目がいつてしまう。だってあの人目立つんだもん。
その顔を見て、あ、と思った。

河島、^{たける}健だ。

なんとまあ、本日2度目だわ。なんでここにいるんだろう？ここで
もロケをやるのかな？

それにしてもリラックスした感じ。皆で休憩時間なのかな？

その集団をボーッと眺める。田舎にはそぐわない華やかな雰囲気。

「いえーい、お待たせっ。」

道の向こう側から、奈緒がやっとやってきた。

そして視線は私を通り越して、向こうの集団へと注がれた。

「うおつ。河島健だつ。また会ったっ！」

正確には、また「見た」ね。会っちゃいないわよ、向こうは認識していないんだから。

「何のロケなんだろうね？ やっぱいいなあ、河島健。大人の魅力っていうか色気が、テレビよりもバンバン出てるね。」

「うーん・・・そうかな？」

テレビでの彼は、どっちかと言うとほんわかした雰囲気だったような気がするものね、確かに。

「ねー、サイン貰いに行こうよー。写真一緒に取ろうよー。」
奈緒が少し興奮したように私に言った。

私は思わず眉をひそめる。

「えー、やだよー。」

「えー、何でー。いいじゃんー。撮影中じゃないよ、今ー。」

「だって、そんな、仕事やプライベート邪魔する程ファンじゃないもん。なのに、偶然会ったからとりあえずサインでも、って、なんか失礼じゃん。相手に、申し訳ないわ。」

すると奈緒は、口をあんぐりと開けた。

「・・・何？」

「・・・どこまで真面目なの、綾香は。」

「べ、べっつに普通よ、私は。」

「じゃあ、行こうよー。ね？」

「いやだつて言ってるでしょつ。一人で行つてきなよ。」

しつこい奈緒に、これまたしつこく抵抗する私。いやだつてば。

彼女はムツとすると、私を引っ張るべく掴んでいたその手を、私の手を握つたまま胸まで上げて、

「・・・あ、あたしトイレ出た時、手を洗うの忘れた。」

と私の眼を見つめて言った。

「・・・な、なんですつてえ??」

「きゃーっ!!バカな事言わないでよっ信じらんないっ!!!!!!」

思わず握られてない方の手まで振り回しちゃって、私は大声で叫んでしまった。

イヤつきつたないっふざけないでよっ冗談でしょっ!!

すると彼女は嬉しそーに、これはどっから見てもニヤーって笑顔で
(いつもの笑顔は美少女スマイルだからね)

「ふふん。う・そ。」

「・・・な・・・。」

「ほんつとボツシーなんだから。言いだすと聞かない奴め。」

「ボツシー?」

ホツシー?つてか、ありえないでしょ、さっきの冗談っ。

「そこが可愛いくて好きな所ではあるんだけどね。」
なにその男目線の台詞っ。女めんなに言われても嬉しくないわよっ危ない
でしょっ。

「下痢女が気取って何言ってるのっ。色んな意味で気味悪からっ。」

「ほーお？そんな事言っんなら、ほーらこの手で触ってるっ。」
「やっ、ちよっとっ。手、洗ったんでしょ?! そうなんでしょ?!
ねえ???」

それを確認しない事には近づけないじゃないっ常識を持ってよー。

「君達、地元のコ?」

急に、声をかけられた。男の人の声。

二人して動きが止まり、後ろを振り返った。

そして・・・啞然!!

そこには、先程までの話題の人物、河島健が立っていた!

私達は、あまりの出来事に呆然となる。

か、河島健が、ゲーノージンが、あっちから声をかけてきた!!

え、えええええ???

芸能人

流石の奈緒も、目と口がポカン・・・と開いている。

え、ありえないでしょ？ありえないでしょ？ありえないでしょ？ありえないでしょ？

・ありえるの？

・・・そっか、そう言えば大学の女友達も、やたらと可愛い子は何人か、有名人と知り合いだとか本人が読モだとかなんとか。

・・・いやでもあたし、フツーだし！！

ああ、目当ては奈緒か！！???

「楽しそうだね。よく海には来るの？」

彼は切れ長の瞳ですこし陽に焼けた長身の短髪で、にこつと笑ったその笑顔はおよそ30歳前後の男性とは思えない若々しきさで、でも馴れていそうなその笑顔と、テレビ通りの優しそうな雰囲気なのに眼はなんだか無表情みたいなので、

ああ、芸能人っていうのはこういうものかなあ、と思ってしまった。

「え・・・あ、いえ、・・・同窓会があつて・・・。」

奈緒はあんなにサインサインって騒いでいたくせに、まるで毒気が抜かれた様にボーっと答えている。

「そうなんだ、楽しそうだね。ここも景色が綺麗で、いいとこだよね。」

にこにこにこ。

なんと、まあ。ゲーノージンと会話しちゃってる？私達。

「・・・ここには、なんかのロケで？」

その会話を続けるのは、奈緒。

「うん。近くでロケやっているんだけど、海に来たのはプライベート。ちょっと時間が空いちやって。」

ね、と言って後ろのスタッフさん（？）達を振り返る。

立ち話をしていた彼らも、そうなの、夕方までの時間潰しなんだよ、とかなんとかか。

「君達は？学生さん？」

彼がごく自然な笑顔で聞いてきた時、

ジャリ、と音がして、振り返るといつの間にもやら塚本さんが私の隣に立っていた。

極上スマイルを河島健たけるに向けて言う。

「僕の連れなんですよ。」

河島健はビックリしたような表情で塚本さんを見ると、

「うわ、かっこいいね、君。モデルかなんか？」

「いえ。全くの一般人です。」

塚本さんはニッコリと答える。

「え、そうなんだ。バイトとかもしないの？凄く人気だと思うよ？ハンサムだねえ。」

「カタイ職場に勤めているもんで。」

そうなんだー。もったいないねえ。と彼を眺めている芸能人。

その後ろで、スタッフさん達も塚本さんを見つめて少しざわついている。

その内の一人が、40歳前くらいの、よくわかんないけど「ギョー

カイの人」って感じの人が、塚本さんに声をかけてきた。

「ねえ、バイトしない？色々あるんだ、エキストラじゃなくっても・
・・」

「すいません。バイトって会社の許可を取らないとダメなんですよ。基本的にムリだと思います。」

「そうなんだー。何系の会社に勤めているの？」

「いえ、お話出来る様な所じゃないです。」

「ふーん。ぶっちゃけ給料、幾らくらい？」

「全然、安いです。」

「じゃあ、こつちも経験してみたら？検討の価値、あるかもよー？」

この人たちって、割と無遠慮に気軽に聞いてくるんだなあ。

ああでもこうやって、日々の感性を研ぎ澄ませながら、材料やネタ
やきつかけになるものを見落とさずに過ごす事が、彼らの仕事の一
部なのかもしれない。

そうやって、常に視聴者の興味を引き付けるものを作り続ける仕事
って、物凄く大変なんだろうなあ。

って呑気に考えを巡らせていた。

「いいね、ハンサム君。可愛い女の子を二人も連れていて。」

眼を細める河島健。

「でしょ？」

にっこり笑う塚本さん。

その時塚本さんのケータイが鳴り、彼が「あ、すみません。」と彼らに頭を下げると少し離れて場所に移動しながら電話を取った。

相変わらず忙しそうだなあ、商社って忙しいのかな？と思いなから、私は彼が、電話が鳴った瞬間、ごくごく小さい声で

「・・・つしゃ。」

と呟いた声を思い出した。そう、ヨッシャ、って男の子が喜ぶ時のあの掛け声に似ている。

まるで、電話が来るのを待っていたみたい。

塚本さんがいなくなると、奈緒が鞆からいつの間にもやら取りだした手帳の白紙ページを、河島健に突き出した。

「サイン、お願いできますか？」

あ、我に返ったのね、奈緒。

「はい。いいよ。」

彼は奈緒から出されたボールペンを使い、サラサラサラっと。何ちゃん？奈緒です。どんな字？

「どうぞ。」

二人して覗きこんだそれは。

・・・うーん、どうして有名人のサインって、読みづらいのかな？

顔を上げると、河島健と目が合った。

無表情の、目。

・・・これは、「君はサインをいらないの？」って目なんだろうか・・・？

私は少したじろいでした。

この場合、申し込まないのは大変失礼にあたるのかしら？えっと、でもあたし特に……。

あ、負けそう……。

その時、

「二人ともっ。この後、飲み会OK？」

塚本さんが後ろから、私達の肩を抱く感じで乗っかってきた。

手には携帯電話が握りしめられている。え？仕事の話じゃなかったの？

「奢ってくれるなら、もちろんオツケーです。」

奈緒が即座に答えて、ちよつとちよつとちよつと！！

「じゃ、失礼します。」

彼はニコニコと、彼らに頭を下げた。

スタッフさん達も、じゃーねー、と、河島健も眼を細めて答える。

「じゃあね。奈緒ちゃんと、色白のカワイコちゃん。」

……えつとそれは、私のことですか？

芸能人、それも人気の若い俳優さんに「カワイコちゃん」と言われてしまったわ。この思い出、人生の記念に胸に忘れず取っておきましよう。

「せつかく名前を教えてもらえと思ったのに。」

河島健はわざとらしく口を尖らせ、茶目っ気たっぷりと言った。

それはつまり、やっぱり私もサインをねだるべきだった？
と思った時と、

私の肩を抱く塚本さんの手に一瞬グツと力がこもった、
その瞬間が、

一緒だった。

何？と思ってビックリして固まった私の頭上で、

「すいませーん。」

とニッコリ塚本さんが笑って、そしてバイバイと再度皆が手を振
った。

何だったのかな？今は。

「サイツコーのキレーどころか来るぞー。どこで飲みたいー？」

塚本さんはウキウキしたように喋っているんだけど、どっかウソく
さい？気がする。

再会

「・・・君が俺を海（うみ）に誘ってくれた理由って、もしかして、これ？」

海辺の近くにある、比較的大きな和風レストラン。

お座敷に座った私達に差し出されたメニューは、どのページも「これでもかっ」ってくらいの牡蠣づくし。

お値段は、生牡蠣一個で最低300円から。

そう、ここは東京という所の「オイスターバー」和風本格田舎版？

「ここ、すっごく美味しいって評判なんですよあ。全国からお客さんが食べにやってくるですって。」

「・・・でも夏に牡蠣って・・・しかも生・・・？」

「養殖の特別技術なんです。そこが売りなんです。お中元にも出来るんです。是非とも塚本さんにも味わって頂きたくて（はあと）」

奈緒ブリっこ。

多分、彼女の本性を知らない初対面の男性なら、ヤラレる率は高いと思うけど。

「・・・それは、どうも・・・。」

塚本さんの笑顔はどっか張り付いた感じがするのは、きっと気のせいではないわね。

だってこのお店、高級すぎて、私一度も入った事がない！！

それにここは、相手の奢り！？

「奈緒・・・流石にちよっと悪いよう・・・。」

私は奈緒に耳打ちした。

だって実際目にしたメニューは、一般庶民や学生から見れば、ヤバ

い程高いんだってば。

これ、お酒も入ったら、一人一万いっちゃんじゃないの??

奈緒は私の首に腕をまわすとグイッと抱き寄せ、私の耳に息がかかるどころか唇が触れるんじゃないかってくらいの超至近距離で囁いた。

「相手は社会人エリート商社の独身男つ。美女が二人も一日付き合っただけだから安いくらいよっ。」

ああ、拓也と付き合っている時もあの人、奈緒がやっってるみたいに私をグツと引き寄せて、耳元で内緒話をするのが好きだったな。時々、唇が耳に触れるんだ。そこが弱いのを知っているから、半分私の反応を楽しんでいたんだ、あれは。

と、割と未練はないはずなのに思い出す。

別れてまだ、日が浅いからなのかな？未練と思い出は別のモノなのかもしれない。

「塚本さん、綺麗どころって誰ですかー？女の人？彼女とか？」

奈緒は私を解放すると、彼を少しからかうように聞いてきた。
彼女。

そういえば、そうよね。こんなハンサム、彼女の一人や二人や三人

くらいはいそいだもの。その内の誰かを連れて来ていてもおかしくなさそうだわ。

「んー。残念ながら彼女ではないけど、綺麗な人だよー。って言うたら怒られるだろうけどさ。」

塚本さんも面白そうにくすくす笑って答える。

「私も実はもう一人呼んでいるんです。いいですか？」

奈緒も面白そうにニツコリと微笑む。

途端に塚本さんの笑顔が、再び張り付いた。

「え・・・あ・・・もう一人？」

「はい、もう一人。一人だけですー。」

「奈緒、誰呼んだの？」

「お楽しみー。」

うっわ、この子悪魔。

「あ、うん。分かった。あと一人くらいならなんとかなりそう・・・奈緒ちゃんの友達なら、もちろん歓迎だし・・・うん・・・早く来ねーかな、綺麗どころ・・・。」

最後の方は、ほぼ呟き。

ああ、やっぱり彼が気の毒になってきた・・・私、幾らか払った方がいいわよね？

その時、

「碧」

と声がした。

お座敷の入り口に立っている人を見て、私達は本日何度目かのビッ

クリをした。

私達の向かいで、塚本さんは少しホツとしたような明るい声を出した。

「せんばーい！」

そこにいたのは、昨日、同窓会の一次会で私達が目撃した人物、「藤田ゆうすけ」というあの人だった。

短髪の長身、切れ長の瞳で大人っぽい美形、私達が（主に奈緒と佐藤さんと拓也が）「ホストっぽい」と称したあの人、今日もスーツを着て登場していた。

本日のスーツはグレーに青のネクタイ。

「よかったー。俺、この子達に有り金全部食われちゃうかと思った。先輩が福の神に見える。」

「？」

藤田さんは少し怪訝そうな顔を見ると、塚本さんに言った。

「座敷（ま）でいいのか？奥に個室があるぞ？」

「え？それってやっぱ別料金？豪華なの？」

「値段は関係ないだろ。ここよりゆっくりできるぞ。」

「やっぱ神だ。言う事が違う。」

「移るのか移らないのか、どっちだよ？」

「いいよー。庶民はここで充分。」

すると藤田さんは、後ろに控えていた店員さん（私達を案内してくれた人とはレベルが明らかに違う、まるで旅館の女将の様な人。きつと責任者）に軽く会釈をしてから、お座敷に上がってきた。

店員さんはその入り口で深々とお辞儀をする。丁寧過ぎる。

藤田さんがこの常連さんだ、ってことが一目で分かる。

「・・・あの・・・綺麗どころって・・・。」

奈緒が間の抜けた声で聞いた。

塚本さんは爽やかに笑う。

「うん。この人。俺の大学の先輩。3つ上なんで、今年28だよね？」

「来年。」

まさか。こんな所で繋がるなんて、世間はなんて狭いんでしょう？
私はビツクリしてしまった。

じゃあ、この人も東都大学？うわー、頭いいなー。エリートだなー。
そう言えば、議員秘書してるって佐藤さんが言ってなかったっけ？
お父さんが地元の代議士で。

ああ、だから高級店の常連なんだ。成程なあ。

エライお家なんだなあ。

・・・議員秘書って、何やってる人？

「美人でしょ？」

塚本さんが何故か得意そうに笑い、隣で藤田さんが嫌そうに片眉を吊り上げた。

「お前、何言ってるんだよ。」

「だって美人じゃん。」

「お前に言われたかねーよ。俺より女顔のくせに。」

「そ？これがなかなか、足を引く張る場面と役立つ瞬間が半々でさ？」

「何言ってるかわかんねーよ。」

この二人、よっぽど仲がいいらしい。同じバスケット部だったのかしら？
いずれにしても、大学卒業後もずっとお付き合いが続いているって
事よね？

「こんにちは、藤田祐介ゆうすけと言います。こいつがご迷惑をおかけしてませんでしたか？これ、名刺です。」
藤田さんは、ニッコリ笑うと私達に名刺を差し出した。

すごい。なんて大人の雰囲気漂う人なのかしら。洗練されているわ。塚本さんは「美人」だと称したけど、確かに綺麗だけど男らしい顔に見えた。

それに、どう見ても今年28歳には見えない（あ、来年？）。若いよ。

日常において接触したことのない人種と同席する事となり、私はとにかく感心しきりで呆けてしまった。

「あの・・・昨日、市内のイタリアンにいましたよね？私達、同窓会でお見かけしました。」

奈緒が名刺を受取りながら言った。

「・・・ああ、そうだったの？」

藤田さんは、ちょっと驚いたように私達を見た。

そりゃそうよね、普通、お店の中で見かけただけの人の顔を覚えていたりはしないもの。

でも貴方はハンサムで有名な人らしいので、実は私達、隠れて眺めていたんですよ。

とは、言えない。流石の奈緒も。

「ここに帰って来ると、たまにあそこで昼飯食べるんです。美味しいですよね。」

大人で男前の笑顔を見せる藤田さん。

その時、奈緒が私の脇腹を肘で突っついた。

何？と見ると、言え、言え、アレを言え、と、目と口パクで訴えてくる。・・・ああ、アレ、ね。

そうよね、私もなんとなく気に掛けていたし、これはいいタイミングだわ。

・・・でもねえ・・・。

私は彼の登場以来、初めて口を開いた。

「えっと、・・・何と言えばいいか、お久しぶりです。私・・・その・・・10年くらい前に、藤田さんに、道端で、・・・途方に暮れている時に、・・・自転車のパンクを助けてもらった者なのですが、・・・。」

すると彼は切れ長の瞳を見開いて、マジマジと私を見た。

あ？ヤバい？忘れられてる？私、恥ずかしいかも・・・。

「あの・・・その時藤田さん、バイク乗ってて・・・。」

やめて。もうやめてええ。

「・・・ああ？あの時の？・・・そう言えばそうだ。覚えていたんですか。」

ふう。良かったあ。「覚えていたんですか」って、私の台詞ですよ、覚えて下さっていてありがとございます、ってホントに覚えています？

「あの時も可愛い女の子だったけど、綺麗になりましたね。」

ニツコリ大人の余裕ですけど、それ、覚えてなくても言えますよね？
じゃあ、あの時の私の自転車の色が何色が言えますか？

・・・って、私も言えないじゃん。

一人突っ込み。十年前の出会いや記憶なんてこんなものよね。

ましてや自転車パンクのお子様なんてどーでもいいじゃん？

まあ、でもこれで義理を果たしたって事で、うんすこしすつきりしたわ。

「じゃ、再会を祝して乾杯する？」

塚本さんの明るい声で、まずは最初の乾杯です。

再会を祝して、出会いを祝して、

こんな不思議な一日もあるものなのね。まさかこんなメンツで乾杯
をするとは思わなかったよ・・・。

私はしみじみと感心してしまった。

・・・本当に祝せるものなのかは、後になってみないと分からない
けど。

切ない封印

塚本さんって言う人は実はえらく陽気な人らしく、飲むとますます陽気になるらしく、

藤田さんは飲んでもさっぱり顔色も態度も変わらず、口数少なく表情も少なく、まあでも楽しんでるようで、

奈緒は飲んでそろそろ本性出てくるの、あんたの性格ぶっ飛びすぎだから気をつけて、って思って、

私はとにかく生ガキが美味しくて、涙が出るほど美味しくて、オイスターカクテルなるものもいくつか空けちゃって、ああ、ごめんなさい一番高かった女かもしれません。

で、何時間経ったか分からない頃。

つまり、みんなそれなりに出来上がったちゃっていた頃。

「・・・ねえ、俺ってなんでここに呼ばれたワケ？」

いつの間にか、お座敷の入り口に拓也が立っていた。

でっかいＴシャツに、チエックのシャツを腰に巻いてキャップを被って、中学生か、って感じ。

「きゃー、やっときたわ吉川くん。」

私の隣に座っている奈緒が、お酒に酔って真っ赤な顔で、真っ黄色な声を出して歓迎する。

そっか、奈緒が呼んだもう一人って、拓也だったんだ・・・。

・・・って、拓也?!なんでまた登場!?

なんで今頃！？あんだ、ヒマなの！！！！？？？

「お、ヨツシーじゃーん。お前なんでさっさといなくなっちゃった訳？寂しかったぞー。」

陽気に酔っている割には顔色がやっぱり変わらない塚本さんが、すごく嬉しそうに拓也を見上げる。

拓也も割と満更ではない様子で、チヨツピリ口を歪ませて無遠慮にも言った。

「・・・うわ。ウザ。出来上がってるんですか？」

「まだ早えーよ。ほら、座れよ、クリクリ小僧。」

「クリクリって意味分かんねえし。ちよっ、倒れる倒れるっわあっ。」

「

塚本さんが、入口側に座っている藤田さんの後ろから身を乗り出し、拓也の腕を掴んでグイッと引っ張ったもんだから、拓也は軽く倒れ込む形でお座敷に上がってきた。

塚本さんはさらに嬉しそうにアハハと笑うと、嫌がる拓也の頭をグリグリ撫でている、というか回している・・・。

・・・えらく気に入られてるなあ・・・。

やっこの思いで解放されて(?)頭がボサボサでピンピンの拓也が私の前の席に座った。

そして、彼と私は図らずとも同時に口を開いてしまった。

「ねえ、田中さん、これってどうなってるの？」

「ねえ、奈緒が呼んだもう一人って、拓也？」

奈緒は真っ赤な顔でアハハと、これまた豪快に笑って答える。

「ハモンない、ハモンない、お二人さん。楽しければいいでしょ？」

「……ウソだろ？信じらんねえ。俺、明日は午前バイト入れるから、今晚帰る予定だったのに。」
「いいじゃん、明日朝一で帰れば。」

拓也は呆然と奈緒を見詰めた後、はあ……と溜息をつき（今日はこんな拓也を何度も見るなあ）、私達を置いて塚本さん達と楽しく盛り上がり始めた奈緒をギリツと睨んでいる。
結構、根に持つよ、これは。

でも奈緒は、何て言っただけで拓也を呼びだしたんだろう？
そう思ったけど私は、聞かない方がいい気がしたのでやめておいた。

「……で、何でここにホストの彼もいんの？」
拓也は胸の前で組んだ腕をそのままテーブルに乗つけて、身を乗り出すようにして少し小声で私に聞いてきた。
顔は藤田さんに向けたまま。

「塚本さんの大学の先輩だって。ホストじゃないし。」
「知ってるよ。秘書さんだろ。」

そう言っただけで拓也は、やっぱり私の顔を見ずにボソツと言う。
「あそこの大学、頭だけじゃなくて顔でも取ってるのかな？」

……ホント、失礼なヤツ。
と思った瞬間に、拓也は再び塚本さんにグルグル回され始めた。

それからどれくらい経ったのか。うっかりたつぷりアルコールを入れてしまった私は（だって牡蠣が、本当に美味しい）、何度目かのお手洗いに立った。

意識も頭もハッキリしているのに、やっぱり目が回っている。でもとてもスッキリした気分。

ここんところ、こんな風に気持ち良く騒いだ事がなかったから、何かを吐きだせたように気分が良かった。

用を足して、席に戻ろうと扉を開けたら、そこに拓也が立っていた。そこは、店内の演出であろう、日本庭園を模した飛び石と砂利と、脇にはちよつとした竹もどきのオブジェなどもあって、席とは離れた、静かで余裕のある空間。

「綾。」

拓也が久しぶりに私の名前を呼んだ。この呼び方は、拓也だけしかない・・・しなかった。

ヤバい、と思った。

おまけに私は、結構お酒を飲んでしまっている。浮かれた気分が、急激に冷めていった。

「・・・お前、いつ帰るの？」

壁に腰だけでもたれて両手をポケットに入れたまま、顔だけこちらに向けて彼が聞く。

これは、待ち伏せされたな・・・。

「んー・・・まだ、決めて、ない。でも、居てもあと数日だよ、多分・・・。」

なるべく、普段通り、なんでもないような雰囲気を保とうとしながら私は答える。

・・・でも、拓也との『普段通り』って、どんなだったっけ・・・。

「・・・あいつと、・・・塚本さんは・・・？」

なんで、言い直したのだろう？そこには、彼なりのプライドがあるのかもしれない。

酔った頭で一生懸命、冷静な事を考えようとする。けど、難しい。やっぱり、フラフラする。

「うん？ああ、あの人は明日帰るって。仕事が入ったらしいよ。一緒に帰れば？」

「冗談だろ。」

そう言うと、彼はゆっくり私に近づいて来て・・・あ、やっぱり来るんだ・・・。

私はこんな所で、冷静に思ってしまう。それ自体が、酔っている証拠。

多分、近づいてくる拓也もそれなりに酔っている。

拓也は人一人分のスペースも無いくらいの距離で止まり、目の前の

私をじつ……と見つめ始めた。

ついさっきまでは彼だつて私をまともに見ようとしなかったのに、今は真逆の事をして私を捕らえようとする。

私は顔を反らし、目を合わさないようにした。

これは勇気を出して、この場からサツサと出ていかなくはないけな
い。

そう思っていた時、彼はふつと私に顔を近づけ、耳元に唇を寄せ、
何かを言おうとした。

それは、私達が付き合っている頃に、彼がよくしていた事。

何を言うんだろう？と私はつい、待つてしまった。

でも、彼の口から言葉は発せられず、しばらく間があった後、

私はそつと抱きしめられてしまった。

「……俺、15年前の事件の事、調べたぜ。」

彼の掠れた声が、耳元でやっと聞こえる。

「……うん……。」

「……田中が、海で解散予定だから、綾を拾え、って……」

「……うん……。」

ああ、私の頭が回っている。ギョツと眼をつむって、再び開いてみても、収まらない。

この後の展開が読めている。なのに判断力が鈍っている。

お酒は、私の性格を、ますます流されやすいものにと変えている。

拓也は私を抱きしめていた腕を緩めた。

ヒールつきのサンダルを履いている私と拓也の身長差は、10？より明らかに短い。

拓也の鼻先が私のそれに触れるくらいの至近距離で、私は拓也の瞳を見てしまった。私達は見つめ合ってしまった。

多分、あの日以来、半年ぶりに。

ひよっとしたら、それより以前から、見つめ合う、なんて事は無くなっていたのかもしれない。

目が、反らせない。

彼の唇が、私の唇を軽くかすめた。

あ、拓也の匂いがする、と思った。

「……綾の匂いだ……。」

彼がかすれた声でそうつぶやいた直後、今度は深く口づけをさせってしまった。

きつく、きつく抱きしめられて、舌まで入れられて、掻き回されて、私の頭も掻き回される。

ああ、ヤバイ。

これは、マズイ。

「……綾、どこに泊ってるの？」

やっと唇を放した彼は、熱っぽい瞳で私を見つめてきた。

その声は、あの頃のように、すこし甘えたものになっていた。

いつも、そうだった。

この時折甘えたような瞳と仕草に押されて、いつのまにか付き合っ
て、いつのまにか流されて、いつのまにか全てが、拓也のペースと
なっていたのだ。

それが、耐えられなかったんだ。

「……拓也は、ダメだよ。」

声を出してそう言えた時、私は少しほっとした。

ああ、やっと自分を取り戻せた。

別れた直後も、そう思った事を思い出した。

「……なんで俺はダメなの？」

悲しそうに、拗ねたように、甘えた様に尋ねる貴方は確信犯。

そんな貴方に逆らえる女の子は、滅多にいない。

私だって、そこが好きだったもの。

だから、キツかったのよ。

「ダメだったじゃない、私達。」

眼をそらさないように答えるのが、私の精一杯。

考えてみると、こうやって面と向かって、別れ話をした事はなかったのかもしれない。

「・・・俺は、高校の時から、お前じゃないとダメだ。」

そう言った拓也の瞳は、思いのほか強い色をしていた。

なんで私じゃないとダメなの？とは、この際問題ではない。

自分から去って行こうとする女の子を引き留めたい、男の本能から来るものだとしても、それは問題ではない。

「私は・・・拓也じゃっ・・・」

ダメなのよ。

そう言いたかったのに、最後の最後で勇気が出ず、ついに私は溜まらず下を向いてしまった。

自分を好きだと言ってくれる人を傷つけるのって、なんて辛いんだろう。

ましてやそれが、今でもある意味、好きかもしれない人が相手なんて、なんて心が痛いんだろう。

胸が痛くて痛くて、何故だか小指が痛くなる。

「・・・なんでっ・・・俺じゃダメなんだよっ・・・。」

拓也は一瞬下を向き、溜まったものを吐き出すように小さく叫んだ。
そして私を再び強く抱きしめた。

私はついに、涙がこぼれてしまったけど、それはお酒のせいだって
事にしておこう。

だってこれじゃあ、あまりにも自分勝手な女だわ。

親友

拓也の腕から逃れると、私はもう一度お手洗いに戻った。

だって、こんな目じゃ席には戻れない。お酒のせいで赤くなりまして、と言いつくすにも限度がある。

でも、トイレの鏡を見る気にはなれず、だって見たら、さっきの拓也との事を生々しく思い出しそうで嫌で、

ああ、私は何処までも目を反らし続けたいんだな、とか思ってしまふ。

でも、こんなに辛いのは今だけよね？

私は、前に進みたいの。

5分もいたのかいないのか、しばらくたって扉を開けると、拓也はそこにはいなかった。

ホツとして歩きだしたら、今度は向こうから塚本さんがやってきた。私を見ると、心配そうに聞いてくる。

「綾ちゃん。大丈夫？」

私、目は赤くなってないよね？おかしな顔をしていないよね？あ、ここ、さっき拓也とキスした場所だ。

色々な意味で、ドキドキしてくる。

「遅いから心配したんだけど？具合悪くない？」

俯き加減の私の顔を覗き込むようにして、彼は言った。

私は努めて、普段以上に冷静な喋り方を心がけた。

「大丈夫です。すみません、ご心配かけて。ちょっと酔い覚ましに休んでいました。」

「本当？無理すんなよ。もうそろそろ、お開きにしような。」

目の前にいる彼は、私の背中をポン、ポン、と軽く叩いた。

まるで、必要以上に大きな空間の中、触れる事なく片手で彼に抱かれているような感覚。

「大丈夫です、ほんと。塚本さんは、お酒飲んでも、顔色変わりませんねえ。」

「ほんと？でも俺、今から吐きに来たんだ。」

「……え？」

間抜けな顔をしてしまった。

だって、理解するのに時間を要してしまったもの。

え？この人、今笑っているけど？のんびり私と話しているけど？でも今確かに、「これから吐く」って言ったわよね？？

「あ、俺、自由自在に吐けるから。吐いたら、いくらでも飲めるんだ。」

ものすごおく、屈託なく笑う彼。

軽快に男性トイレへと向かう彼を見届けながら、私は開いた口が塞がらなかった。

……人には色々な特技があるらしい……。

席に戻ると、3人はまったりと話をしていた。拓也は、あんな事なんてなかったかのように、とても寛いでいるようにすら見える。

一方の藤田さんは、ここに着いた時からなんだか姿勢すら変わっていないように見える。

そして奈緒は、ニコニコとかわいらしく座っていて、まだまだ猫を被れているように見える。

「藤田さんと塚本さんはバスケ繋がりなんすか？」

「いや。あまり言いたくないけど、英語演劇サークルで一緒だった。」

「えー??演劇ですか？」

「俺もアイツも、無理やり入れられたクチで。」

「ああ。二人ともカツコいいものね。」

「でも先輩、制作だったじゃん。」

なんとここで塚本さん登場。早っ。もう吐いてきたの??

・・・本当に自由自在なんだ。

「部長をやらされそうだったからだ。」

「ふーん。みどりちゃんはともかく、藤田さんはイメージじゃないなあ。ってかみどりちゃん、大概忙しい大学生活を送っていたんだね。」

「あとテニスサークルもやってた。新歓の時と夏合宿とクリパだけ。」

「なんだそれ!??3つも掛け持ちしてたの??ウゼー!俺だったら耐えらんねー!」

「ヨッシーかつたるそつだもんな。」

話を聞きながら何となく座っていたら、奈緒にくるつと後ろを向かされた。

彼女も後ろを向いて、つまり私達は男性陣から背を向けている体勢。彼女は前かがみになって、私もつられて前かがみになって、お互い顔を近づけた所で、奈緒は私にギリギリ聞こえる程度の声で囁いてきた。

「吉川君に襲われた？」

「なっ……!!！」

思わず赤くなつてガバツと体を起こしてしまう。

奈緒は少しだけ、笑って言った。

「ビンゴ。バレバレ。二人とも。とくに綾香。」

え？それって、みんなにバレバレだって事？違うよね？奈緒にだけだよ？

なんて恐ろしくって恥ずかしすぎて聞けないし、確認できないよお……。

「で、彼に勝ち目はあるの？」

彼女は隣の席の人達を見るともなしに見ながら、私に言う。

「……誰に対する勝ち目よ？」

「王子塚本、と答えたいけど、この場合、あんたね。」

「……」

「敗者復活、ならずか。」

「……なんで奈緒は、私と拓也をくつつけたい訳？」

私はズバリと聞く事にした。

だって、昼間は偶然会った拓也を引き留めたし、夜は一度帰った拓

也を呼びもどすし、そして今度は「彼に勝ち目はあるの?」「って聞いてくるし。

それってどう考えても、私と拓也のヨリを戻させようとしているとしか思えないでしょ。

・・・私から別れるって決めた事、知ってるくせに。彼の女癖の悪さも、多分知っているくせに。

「・・・言っただじゃん、吉川君、私と似てるって。」

「・・・それがどうして、私とくつつける理由に?」

確かに人前ではブリっこ、裏では我儘、毒舌、って、言われてみれば似ているけど。

「だって、自分そっくりの性格の人間が片思いしているの、見るの辛いじゃん。」

そう言った奈緒は、何故かどっか、不満そうな言い方だった。

私はその様子に意外さを感じた。

「高校ん時からモロバレでさ、綾香は気付いているんだかなんだか軽くあしらっちゃって、同じ大学に行ったら彼が見事、寄り切り押し出しちゃって。私、感心したんだよ、よくやった、吉川って。」

拓也とは高校の時から軽口を叩く仲ではあったし、冗談のように「付き合おうぜ」は何回か言われていた。それを奈緒はもちろん知っている。

拓也が本気かどうかなんて深く考えた事はなかったし(その間も彼は色んな女の子達から引く手あまたで、その内の何人かとはオツキアイをしていたし)、それを奈緒が、こんなに真面目に考えているとは知らなかった。

だって奈緒も一緒に、笑っていたじゃない。

「まあ、続いた方だよ、3年って。彼の中でもこの記録が破られる事はないでしょうね。」

何かを悟っているかのように、弱冠遠い目をして呟く彼女。

・・・ひよっとして、奈緒は拓也の事が好きだったのかな？

初めての考えが頭をよぎった。

えー？でもそれはないでしょう、と本能的に全否定をする。

だって、そんな素振りも雰囲気も全然なかったよ？

もしそうだとしたら、全く気付かないなんて親友としてあり得くない？

ないないないない。

あ、でも、私と奈緒の距離がまた縮まったのって、確か拓也との別れ話を伝えた後・・・。

ないないないない！

追求

奈緒に対する疑惑を振り払っているうちに、随分な時間となつてしまつた。

気付くと時計は、11時を回っている。

全く妙なメンバーでの飲み会ではあつたけど、割と上手に盛り上がったし、牡蠣もものすごく美味しかった（ここ重要）。

名残惜しい気分の中お開きとなり、私達はタクシーを拾う事にした。さすがつ社会人つて素敵つ。

・・・つてああ、やっぱ私も就職しなくちゃ。

私はいきなり、こんな所でこんな瞬間に思つてしまった。

このタイミングでそれ思う？

でも人間、働かないと食べれないし遊べないわ、つて体全体で自覚しちやつた・・・。

思わず気分が暗くなる。

実家に戻る奈緒と拓也。藤田さんは奈緒を送つていく事となり、拓也はここから一駅だからと、電車で帰る事になった。

「え？お前とみどりちゃん、方向一緒なの？」

塚本さんと私が同じタクシーを拾おうとするのを見て、拓也が驚愕の表情をする。

私は再び、ものすごい後ろめたい気分になつてきた。でも、私のせいじゃないし！私、何にも悪くないし！

「え？あ、たまたま・・・」

「・・・まさか、同じホテルだったりするんじゃないか・・・。」

あ、何？弱冠怒ってる？？そんなビククリした目で見ないでって、やった、タクシーつかまった彼が呼んでるっ。

「そんな訳がある訳っおやすみっ。」

「あ、おい！」

タクシーばたんでピュー。ヨッシーおやすみーって彼の妙に明るい声。

「いやー、いい酒だった。」

タクシーの中で塚本さんが満足げに言った。

「楽しかったなー。ヨッシーが膨れた様に札出す姿も可愛かったなー。でも藤田大明神が来てくれなければ、俺の懐かなりヤバかったなー。」

「・・・すみません、あんな高い所・・・。」

「それは違う。綾ちゃん達のおかげで今日一日本当に楽しかった。ありがとう。」

まっすぐな瞳で綺麗に笑う彼。あ、今の素直な笑顔、いいな。

なんて思った事、恥ずかしいからバレない様に。

「でもさ、奈緒ちゃんお腹弱いのに大丈夫かな？牡蠣・・・。」
「大人ですから。」

ホテルの前には噴水と人口小川のあるだっ広い公園があり、周囲を一方通行で囲んでいるため、ホテルに行くにはタクシーでぐるりと遠回りをしなくてはならない。

メーターの節約をしたい私達は（主に私）、ホテル側とは正反対の公園入り口でタクシーを降り、そこから園内を突っ切って帰る事にした。

きつとのんびり歩いたって10分もかからない距離の筈。

ホテルに帰りながら、私は思う。

これは、チャンスなのかもしれない。

私は一度も、彼のことをハッキリとは尋ねなかった。

なんとなく目をそらし続け、奈緒と拓也にそれを任せてしまっていた。

でも本当は、私がキチンと聞くべきだった、と言うことはわかっている。

もうお互いに誤魔化せない程に認識し合っているけど、一応今日限りの人。

場合によっては、本当に次は無いかもれない。

「塚本さん、なんでウィークリーマンションなんか泊っているんですか？」

「碧^{みどり}って呼んでよ。」

やっぱり、すぐには答えてくれない。

今日一日そうだった。

「碧さん。で、なんで？」

「……お金がないから？」

総合商社
「豊崎物産で？」

「・・・ホント君って直球。」

彼はこっちを見ると、少し肩をすくめて苦笑した。

「わかってるんだろ、理由なんて。」

・・・つまり、私が泊っているから？

つまり、私の事を以前から知っていたから？

・・・そしてそれはつまり、私があ的事件に関わりがある事を、知っているから・・・？

色々な疑問が、今日一日（厳密に言えば午後半日）目を背け続けてきた事実と疑問が、私の頭の中をかけ巡る。
なんで、なんで、なんで、一体どうして？

「15年待ったんだからさ、もう後何年待っても同じだな・・・
ってそう思えたのは、今日一日君と一緒にいたからだと思う。」

私の心を知ってか知らずか（多分知ってて）、彼は自分だけが納得したかの様な事を言いだした。

「君が話したくなった時、それが例え10年後でもいい。その時に話してくれよ。君が知っている事を、さ。」

それは、私が話すまで自分からは何も話さない、と言う事ですか？
・・・それってちょっと、ズルくないですか？

そんな言葉が喉まで出かかっているのに、口に出せない。

私が事件の事を考え出したのは今から、と言ってもいいけど、彼はこの15年間ずっと考えてきたと言っていた。

だから、そんなに長い思いを持った彼の考えの方が重みがあり、優先させるべきではないか、と咄嗟に、なんとなく思ってしまったのだ。

代わりに別の形で質問を試してみた。

「・・・つか・・・碧さんは、私が何を知っていると知っているのですか？」

「君は何を知っているの？」

ほら、やっぱり。

「・・・碧さんは、いつから私の事を知っているの？」

「・・・君を見たのは、昨日が初めて。」
嘘じゃないよ。と彼が呟く。

「さっきから、何も答えてくれてない。」

分かっているも、文句の一つも言いたくなる。やっぱり、ずるいよ。

俺、ストーカーとかではないから。と彼は笑った。

「だから、君が話したくなかった時、ね。それが一番正しいタイミングだと思うんだ。」

「・・・正しいタイミング？」

「大事なのは未来。君みたいにひたすら前を向いているコ、俺は今まで見た事がないもの。」

「ミステリーハンター？ なっちゃんよ。」

ズルイ彼の笑顔は、これまたきつとズルイくらいに綺麗でどうしようもないんだろうな。

と考えて俯いてしまう。

「・・・10年後とか、連絡のつけようがないし・・・。」

「じゃあ、ケータイ貸して。」

彼に携帯を渡すと、何かをサクサクと打ちこんだ。

「はい。これ、俺のメルアド。」

目を凝らして見ると、それは彼のPCのアドレス。

「安心して。君が一生活さなくても大丈夫。それだけ、毎日頑張って生きているって証拠だろ。」

そう言って歩きだした彼は急に振り返って、何故だか言いづらそうに、こう言った。

「・・・でも、何か困った事とか・・・おかしい事とか・・・気になる事があったら、何でも連絡してな。」

言われた私もビックリしてしまう。

「おかしい事・・・起こるんですか？私に。」

「だから、連絡が来ないに越したことがないって事。
彼は私の肩を優しく叩いた。」

手当

話すって、何をどう話せばいいんだろう？

聞かれてもない事を、どう話せばいいんだろう？

そもそも、私はあの事件の事を殆んど何にも知らないし。

それに、おかしな事って何だろう？

ダメだ私、知らない事が多すぎる。

碧さんあいてばかり私の事を知って（いるらしく）て、私は彼の事はもとより事態を全く把握していない。

そんな中で迂闊に行動は起こせないわ。

何も知らないで周囲に踊らされるのは嫌よ。

とか、物凄く真剣に考えて歩いていたら。

私はいつの間にか、水中に沈んでいた。

「え???ちよつと、大丈夫か??」

「いつつつつ」

いったあいー!!!

頭が状況を理解するのに軽く10秒。痛みを感じるのに更に5秒。

あ、あり得ないでしょつ私、噴水池に落ちたっ!!

穴があつたら入りたいつてここは水だからじゃあもう一回潜るっ?!

「え?どうしてこうなるの?綾ちゃん、実は相当酔ってる?」

流石の碧さんも相当焦ったようで、（そりゃそうでしょ。普通落ちないでしょ。大人が落ちないでしょ。）
慌てて私を引つ張り上げてくれた。

「・・・そんな酔っては・・・実は、先ほどコンタクトを外したんです。お店を出る時に。」

「何で??？」

碧さん大驚愕。

ああ、これで彼の頭の中の私の思い出は、全身ずぶ濡れ鼻血ド近眼女、ね。

ホラーだわ、もはや。

「・・・サイコーに眼が乾いてしまったもので・・・。」

「・・・足。うわ。血が出てるよ。」

プラス足から流血女。貞子のお笑い版か、っつーの。

ここは一つ、開き直ってトボケよう。

「え？ホントですか？全く見えませんが。」

「・・・鳥目ド近眼酒で痛みなし。最強だね。凶器だね。」

「・・・。」

だめだわ。烙印を押された。もうダメだ、回復見込みなし。HP1
00000くらいトータルでくらったわ。
戦闘不能だわ。

クスツと笑った彼は

「ほら、おいで。」

と言つと、私の手を握つてゆつくりと歩き出した。

え？何で私の手を勝手に握っているんですか？なんちゃって貞子のどこがいいんですか？

とか思つて、ああ、ド近眼だから再び池に落ちるのを防いでくれて
いるんだわ、と気付く。

もう、やだなあ。ハンサム相手は疲れるよ。

顔に似合わず大きくてゴツゴツした手で、まるで子供の手を引くように彼は歩く。

私はその後ろを、まるで小さな子供のように、引かれて歩く。
でも私が子供で無い証拠に、胸はうるさく、顔は熱く、手は汗をかいてきそう。

「ちょっと待ってるんだよ。」

彼はそう言つと、私の手を放してコンビニへ向かつて駆けだした。
そして5分もせずに戻つて来た。

「はい、消毒と包帯買って来た。どこか座る所、捜そう。歩ける？」
「・・・それは、どこかに座つて、足の手当てをしてくれる、と言つ
事なのかしら？」

「・・・歩けはするんですが、全身びしょ濡れで・・・先に着替え
たいです。」

「・・・そっか。そうだよ・・・。」

なぜか碧さんは、困つたように立ち止まってしまった。

そこで私は、この状況が果てしなく彼の迷惑以外の何物でもない事

に気づいてしまった。

「すみません、私、一人で出来ますから、これくらい。ありがとうございます。」「
ございます。」

慌てて頭を下げると、彼は少し眉根を寄せて言った。

「それじゃ、俺があんまりにも酷い男だろ。流血した女の子をそのまま帰すなんてさ。」

・・・流血。

せめて、「怪我をした」ぐらいの表現に留めておいてくれませんかね？一応、女子なので。

・・・時々この人の表現って、容赦ないわよねえ・・・。

とりあえず、こうしよう。

「部屋戻って、着替えたら出ておいで。廊下で待っているから。」
よし、決まり。

彼は私にそう告げると、極上の笑顔でニッコリと笑った（って私、見えないんだった。目で見なくとも見えちゃうなんて重症だ）。

「歩ける？おぶろうか？」

「え？そんないいですっ。」

だってそっちの方が恥ずかしいっ。あれって、後ろからのビジュアルがとんでもなく間抜けだし（特に上にいる女の子の方が）、お約束の胸が背中にあたるとか、って当たらないようにすればいいのか、難しそう。

じゃなくて、碧さんが濡れちゃいます。

と後者の方を口にする。

「じゃあ、こっちはいい。」

彼はそう言っつて、もう一回手を差し出してくれた。

一瞬ためられたけど（これが昼間の私なら、『断られるっつていう発想無しに躊躇無しに女の子に手を出すなんて、ハンサムだからと図に乗っているわねっ、とか何とか）

今度は私からその手を握り、

私達はそのまま、ゆっくりと歩いてホテルまで戻った。

明るい所に入っても彼の手は離されず、そのまま私の部屋の前まで連れて行ってくれた。

その間、ずっと無言だった。

「これは明日腫れるなあ。」

碧さんは眉根を寄せて、ため息をついた。

自業自得です。でもこれ、全然得じゃない。

着替えた後部屋を出ると、碧さんはすぐ前の廊下で待っていてくれた。

本当はスウェット姿なんて見せたくなかったんだけどね、他のお洋服は着れなかったの。

・・・だって血だらけになるんだもの。

「ん。完了。多分シャワーも大丈夫。・・・跡が残らないといいな。」

防水まで考えてくれて、綺麗に手当てをしてくれた。

本当に申し訳なくなる。

「……色々、すみません……。」

「こちらこそ、色々ありがとう。」

彼が柔らかくふつと笑うのを感じた。

私はメガネをかけていない。慌てて部屋に忘れてきたから、やっぱり彼の表情はよく見えない。

「……ダメだよ。そんな眼して、こんな状況で、女の子が男を見ちゃダメ。部屋に戻りなさい。」

「……。」

どんな眼をしていたって言うのかしら？

碧さんは少し困ったような声を出した。

私は裸眼ですべてがぼやけている為、遠慮なく彼の顔を見つめ続けた。

「……おやすみ。」

彼はそう言って私の後頭部を優しく抱き寄せた。

そして、私のおでこに唇を押しあててくる。

その唇がそつと離れると、ちよつと沈黙があり、その後再び苦笑しながら私の頭をクシャクシャと撫でた。

「だからそんな顔で見ないのって。さては見えてないな？」

うん、まあ、確かに見えてはいないのだけど、ね。

すんなりと離れがたいのも、まあ、事実で……。

でも数時間前に拓也とあんな事があつたばかりだし、私と碧さんの関係は過去も絡んでスッキリしないし、だからあまりグズグズするべきではない事は、分かっているんです。

「ほら、部屋まで連れて行ってあげるから。俺はもう一回吐いじつと。」

彼は、男女の駆け引き、と言うモノに長けているように感じた。

そして、過去を知る

部屋に戻るとシャワー浴びた。手当てされた傷口は、ちゃんと濡れなかった。

そして頭を乾かしていると、携帯が鳴った。見ると拓也からだった。駅前で別れてから、一時間ほど経っている。ちよつと気分が下がってしまった。

「……もしもし。」

「……もしもし。俺。」

少し遠慮気味の声が聞こえてきた。レストランでの彼の匂いを思い出す。

彼のキスを思い出し、続けて碧さんの唇も思い出す。キスじゃないけれど。

自分が凄く、身持ちの悪い、貞操観念の薄い女に思えてきて、正直気持ちが悪くなってきた。

もう、お酒を飲むのはしばらく控えよう。

「うん。」

「今……いい？」

「うん。」

「……一人？」

「……用件は？」

質問には答えず、私は切り返す。

多分、私が碧さんと一緒にいるかどうかの確認をしたかったのだろ

う。
でもね、それはもう、貴方には関係の無い事なのよ。お願い、わかって。

「・・・15年前の事件。昼間、調べたんだ。」

それでも雰囲気を読むのが上手い彼は、私が一人だつて事を見抜いたのだと思う。

彼が話した内容は、結構重くて、時間のかかるものだった。

拓也は、ネットと地元図書館の過去の新聞などを駆使して調べたらしい。

ファミレスを一人出た後、すぐに行動に出たようだった。

自分が聞いても返事をはぐらかす、いかにも怪しい碧さんに、私が彼の側にいる為に余計、憤りや不安などを感じたからだと思う。

碧さんが関わっている「15年前の前浜東中での生徒殺人事件」は、地元で知らない人はいなかったけど、その内容となると、当時小学低学年だった私達にはさっぱりだった。

ただ、「あそこには幽霊が出る」だの「だから学校が取り壊しになったのだ」など、そんな怪談話が中心で、だから私達は皆、事件があつた事は知っていた。

それは15年前。

当時中学3年生の男子生徒が、学校の裏庭で刺殺された。犯人は同じ中学に通う3年生。

少年Aは不起訴となった。

もみ合つた末での正当防衛。目撃証言もあつたらしい。

刺殺された相手は、学校ではかなりの問題児で、度々警察沙汰を起すような不良少年だった。

凶器となったナイフは被害者のものであり、彼はそれを常に持ち歩いていて喧嘩相手を脅していた。

加害者少年Aは、比較のおとなしくて問題もない良い子。

胸にナイフが刺さった事が、致命傷。

拓也が話し終えても、私は言葉が出なかった。

知らなかった。今まで誰も、こんな話をしてくる人はいなかった。私も自分から、調べようと詳しく知りたい、なんて思わなかった。そう言う事は全て、大人の世界で正しく処理されるものだと思っていたから。

アレ、は、
その事件の、
どのワンシーンだったのだろうか？

拓也は、碧さんと一緒に何を調べたのかを聞いて来て、私は、何も調べていない、中学跡地に行って海に行ったら拓也と会っただけ、と答えた。

「ふーん。じゃ、ホントにただのナンパだったのか。事件と何の関

わりがあるんだろ、あの人。」

私は、答える気になれなかった。

「じゃ、またな。俺の事、無視するなよ。」

電話の向こうで拓也が軽口を叩く。私はそれに乗っかる事にした。そうすれば、私が今どんな状態なのか、鋭い彼にバレずに済む。

「拓也が今まで無視してたんじゃない。」

「傷心を癒すのに必要な時間だったんだよ。」

「よく言っよ。可愛い後輩ちゃん達にいっぱい慰めてもらえるじゃん。」

「……それ以上言っと、ホントに怒るから。」

低い声で、拓也が言った。

「……はい。」

私は素直に返事をした。でも、謝らなかった。

15年前の記憶。

当時私は小学一年生。

自分が何を見たのかも、よく理解出来なかった。

だって私はあの時、まだメガネをかけていなかったのだから。

見えないなりに、分からないなりに
何か異様なものを感じた私は、そのまま家路を急いだ。
そしてなんとなくその日を終えてしまった私は次の日、あの近所の
前浜東中で人が殺された事を知った。

どうしよう。どうしよう。

わたしはなにをみたんだろう。だって、よく見えなかったもん。

でも、もし、あれが、みんなのはなしている「ひとごころし」なら、
どうしよう。

おかあさんが、ものすごくくしんぱいする。おかあさんがないちゃう
かも。

おかあさん、ごめんなさい。

自分が何を見たかよりも、あの頃夜中に布団の中で泣いていた事の方
がハッキリと思いだせる。

母に打ち明けようかどうかどうしようか、不安で不安で堪らなかった。

ところがいつまでたっても、誰も何も訊きに来なかった。

そして、「ひとごころし」は捕まったらしい。事件の解決を、私はそ
う、解釈した。

そして、いつしか忘れていった。

そもそも、記憶に残るのも怪しい程の、ぼやけた視界のビジョン。

携帯の音がうるさい。時計を見れば9時前だった。
結局、夢うつつの状態で朝の数時間をつとつと過ごした程度。
気は、限りなく重い。

電話の相手が奈緒である事を確認してから、ようやく、通話ボタンを押せた。

「遅ーい、電話出るの遅いってば！」

「……はい。」

「あ、綾香今起きたんでしょ？」

「……そう、かも……。」

「もー、寝ぼけてるなあつ。隣には誰がいるの？吉川君？王子？」

「……なっ！！誰もいないよっ！！！」

「あ、起きた。はい、おはよう。」

「……（怒）」

現実はこちらも明るい。

これが私の今。

親友は、私を陽の光の下へと引っ張り出してくれた。

「さあ、今日も遊ぶわよ！何処に行く？」

「……お墓参り。」

「……おやすみ。」

だって、過去巡りで地元（こゝ）に戻ってきた、が当初の名目だったのだから。

と、笑って奈緒を引き留めた。

おじいちゃんおばあちゃんのお墓参りをして、高校にも顔を出してみたいし……。

私は可笑しくなってしまった。

つい3日くらい前までは、人生どん底で、何も上手くいかず、やる気だって起きなかったのに。

そんな状態に焦って、自分をリセットしたくて、同窓会がてら帰郷したようなものだったのに。

今は、そんな事を言っている気分ではない。

過去は、変わらない。

変えたくっても変えたくなくなっても、目を背けても懐かしんでも、変える事は出来ない。

碧さんが言ってくれた「前を向いている」私は、これから何をすべきなんだろう？

『要は未来みらいに繋つなげるものだもんな、過去かこなんて』と言った彼の言葉
が蘇よみがえる。
意味が少し、分かった気がした。

そして、過去を知る（後書き）

第一章、終了です。

予定外に、長くて読みづらい小説となりつつあります（涙）。読んで下さっている方々、本当にありがとうございます。

次章で解決予定です。

お付き合いいただけますと、大変嬉しいです。

この小説が皆様の気晴らしのお役に立てたら、幸いです。

*ご注意

この第19話で少年の殺人事件が出てきますが、これは全くの作り話です。

作者が適当につづったものであり、何かの事件が元になったり調べをしたり、と言った事はありません。起訴不起訴など、全くの素人です。

（そもそも、不起訴になればよし、というモノでもありません。）
未成年の犯罪、殺人は作者が忌み嫌うものです。

娯楽作品のスパイスに使う程度の内容であることをご理解下さい。

美少女が行く！1

快晴の空の下、冬の到来を色濃くする様なからっ風が吹き抜けた。秋が来るのが遅かったと思ったら、一足飛びに冬が来たような木枯らしで、思わず「だーれかさんが、だーれかさんが・・・。」と口ずさみたくなっちゃう。

私は首にグルグル巻いたマフラーを口元まで上げて、少し日が傾きかけた東京の街を足早に歩いた。

今日は休日。久しぶりに奈緒と会う。

盆暮れ正月、以外の日に奈緒と会う事なんて、高校を卒業して以来無かった。

夏のあの日より後、私は碧さんと会う事はなかった。

こちらから連絡もせず、向こうからも、もちろん連絡は来ない。

拓也から聞いた事件の詳細は、私に色々な感情を湧き起こさせた。

それらが絵の具の様に混じって真っ黒な気持ちになる事もあれば、光の様に重なって真っ白になる事もあった。

後悔、疑問、諦め、安堵、恐怖、そういったモノが他人事のようにボヤける時もある。

かと思えば、まるで現実の刃やいばの様に私の胸に突き刺さる時もある。遠い遠い過去の、記憶も不確かな、しかし現実の光景。

そして次に必ず思い浮かぶのが、碧さんの飄々とした笑顔。

あの日から3カ月。不思議と思いつくのは、彼の顔がハンサムだった事よりも、その表情が屈託なく明るくてかつどこかストボケていた事だった。

私は、彼に会いたいかどうかわからない。

だって次に彼に会った時は、私達の関係の、終わりの始まり、という気がするから。

今、彼と連絡を取らないこの状態が、彼との繋がりを保つ唯一の手段、という気がしてならない。

私の額に唇を押しあてた後、苦笑したあの笑顔。クシャッと私の頭を撫でた、あの手。

でも、彼と向き合うには、私はあまりにも知らない事が多すぎる。

彼の事も、彼と事件との関係も、そもそも事件の詳細も拓也がくれた情報程度では不十分で、

つまり、私は結局事件の何を見て何を知っているのか、まるっきり分からない。

そして多分彼は、こんな私とは正反対に、事件の事も、多分私の事も（私が彼の事を知っている以上に）知っていて、ひよっとしたら私が何を見たのかも、私以上に知っているかもしれない。

これは、あの夏の日以来この事をずっと考えていた私に、ある危機感を抱かせるようになった。

自分の身は、自分で守れ。

他人に支配されるな。

このままでは、彼と同じ土俵には立てない。

次に彼と会う時は、彼と対峙する時。

じゃあ自分でしっかり、分からない過去を調べればいいのだろうけど。

今は、そこまで過去に浸る気分になれなくなっていた。

そんな気持ちは、あの夏の日に、懐かしい故郷に置いてきたのだと思う。

それに、次に碧さんと会った時に、

その時の私が、過去に飲まれた私だったら・・・と想像すると、なんだか惨めに思えてくる。

彼と会う時の私は「過去」を持った私なのだけど、未来を持って進んでいなくちゃダメなんだ。

だって碧さん、褒めてくれたもの。「ひたすら前を向いている女の子」って。

だって、好きな人の前では、少しでも輝いている自分でいたいじゃない。

ここまで考えて、私は道路の段差も無い所でつまづいて転びそうになる。

あー、もう、やだやだやだ！頭痛がして来たっ。

たった一日しか会っていない人を好きだなんて思う、人生未曾有の

事態に対する頭痛もあるけど、
こんな事をグダグダ考えている事事態が、人生未曾有なの！！
私、自分研究にあんまり興味ないの！！

奈緒ご指定の青山のお店は、季節が良ければテラスでお茶、なんて
感じのフランス風？ミラネーゼだかシロガネーゼだかとにかく小洒
落たヨーロッパ風カフェだったんだけど、
さっむいでしょ、ホントに。

それでも外でお茶しているお姉さまやカップル達の気が知れないわ。
私、お店の中でも寒いのに。木の椅子じゃあお尻が冷えるの、座布
団ちようだい。オチは言えませんが。
でもさ、外でお茶している人達っていつも割と美人とハンサムが多
いのは何でかな??

「・・・何を呟いてるの？」

「いえ、別に。お待たせ致しました。お元気？」

「お元気ですわ。」

やってきた店員さんにホットチョコレートを注文。お店のウリらし
い。高級チョコそうなのが嬉しいわ。

奈緒の目の前に座る。
可愛いグレーのノースリーブタートルネックを着た奈緒が、につこ
りと笑う。

「どつ？最近？」

「んー、ぼちぼちですね。」

「へー。どん底、抜け出したんだ？」

「んー、底を打った、とは公言出来かねますし、明らかな回復期に入っているかも分かりません。日本経済と同じですね。」

「・・・なにそれ。就職試験か何か？論述？」

奈緒が呆れたように言った。

ちなみに彼女は、今年の春早々に、とある人材派遣会社の営業職に内定が決まっている。

人材派遣市場の開拓やマッチング？アレンジ？の仕事らしい。

「うん、まあね。今更ながらやってるよ、就活。再開するのが遅すぎたけど。」

「ふーん、何系？」

「それは言えないわ。願掛け中だから、受かったら報告するね。」

「ふーん、落ちたらどうするの？就職決まらなかつたら？」

「・・・それも言えないわ。戦争中だから。親負かしたら報告するね。」

段々と声のトーンが下がっていく私を見ながら、彼女は面白そうにニヤツと笑い（もはや、ニコっではない。）言った。

「そう。頑張れ。愚痴とカラオケなら付き合っから。」

「・・・ども。」

私は思わず、冷めた目で彼女を見ちゃう。

奈緒って昔っから、サバサバというか男っぽいというか、まあ、わりと冷たい所があるのよねー！

いえ、まあ、就職って自分との闘いですけど。

「で？何？なんかビックな話があるんでしょ？」

私が奈緒に話を振った。

「会って話したい事って、何？」

「ああ、それ。」

奈緒はカフェモカを半分ほど空けると、ニツコリと笑った。

「私ね、CMに出る事にしたの。」

「……えーと……？」

「……はい？」

「CM。コマーシャル。」

「……CM……？……何の？」

「ティッシュペーパー。」

「（……微妙だ……）……何で？」

「頼まれたの。」

「……誰に？」

「河島、健^{たけ}。」

ここで、私、やっと頭の回路が繋がりました。思考回路、です。シ
ナプスです。

「……えー!!????CMに出るのー!!????」

「言ってるでしょ、さっきから。」

「だって、だって、だって、え、何で???!!!!」

「頼まれたからだ、って言ってるでしょ。」

「ななな、何で???!!!!」

「知らないわよ、そんなの。」

奈緒は済まして残りのカフェモカを飲み始めた。

そんな私の目の前に、ホットチョコレートが置かれる。でも店員さん、私、既にあっつまりました!!

CMって、あのCM? テレビとか雑誌とかの、あれ!!!???

「河島健って、あの人? この間会った、あの俳優??」

「そうそう、あの人本人、の事務所の人。」

「はあ? え、どうして? ちゃんと説明してよ。」

「するから、ちょっと落ち着きなさいよ。」

奈緒が呆れたように私を見た。

「ほら早くハンカチを出して。鼻血が出ても、あたしのハンカチは貸さないわよ。」

「だから興奮では出ないって言うてるの!!!」

この下痢女っ!!!

「彼の事務所から私の実家に連絡があっただって。あの日、私達と会ってからしばらく後、そのCMの相手役の女の子が都合つかなくなっちゃって、代役を捜す事になって、それが、私のイメージにぴったりだったから、とかなんとか。」

自分でも、間抜けな顔をしているんだろうな、とかつて思う。

「綾香、すっごい間抜けな顔。ほら。」

「……だつて、どうやって奈緒の名前とか、電話番号とか……」

すると彼女は眉根を寄せて頬杖をついた。

「そこがあたしも、ちょっと引つかかる所なのよねー。ほら、あの日あたし彼からサインを貰ったじゃない？その時名前を書いてもらったでしょ？そこから紐解いていって、なんと同窓会があった事まで辿りついて、佐藤さんに連絡を取ったらしいよ？それで佐藤さんから私の連絡先を聞いたつて。」

……開いた口が塞がらない……。

そんな私の表情を読んで、奈緒が相槌を打つように言った。

「ね？フツー、そこまでする？ってカンジでしょ？」

ああ、でも確かにあの時、「同窓会に来た」とか言ってた気がするわ……。

……でもそこから佐藤さんのTEL番を調べるまで至るには、つまり会場となったレストランでも捜し当てて、予約を取った幹事の電話番号を手に入れた、って事かしら？

……すっごい執念。いえ、この場合、情報網、と言うべきなの？

これがギョーカイの力？^{ちから}

でも、そこに個人の電話番号を教えちゃうなんて、個人情報管理はどこに行ったの？あ、これもギョーカイの力？

でも、それぐらいの事をさせちゃうくらい、奈緒がイメージに会っていた、という事なのね。

私は内心、納得をしてしまった。

確かに。この子は美少女だもの。それも独特の雰囲気を持った美少女。

パツンの前髪とストレートの長い黒髪が似合う、日本人形的美少女。黙っていれば毒舌もバレず。

大きな黒目が、神秘的で謎めいている、と言えない事も無い。黙っていれば、だけれど。

成程ねー。確かに人の印象に残るかも。

CMねー。ははあ。

私はこだわりのホットチョコレートを飲む事も忘れて、目の前の奈緒をマジマジと眺めてしまった。

美少女が行く！2

目の前の美少女は、ケーキなんてものを注文し始めた。

カフェモカでも充分甘いのにケーキとは。本腰入れて食べる気ね。

これはまだまだ話が續くって事だわ。

私もやっとホットチョコに口をつける。いい感じに冷めていた。

私、これ一杯で粘れるかしら。

「・・・そして田中さんは、その熱烈ラブコールに応えるべく、CM出演を決心した、と。」

「うん。迷ったけどね。何だか面白そうだし。経験かな、とって。」

そう言って笑う奈緒は、全然迷ったようには見えない。

「・・・奈緒、ゲーノージンになっちゃうんだ。」

「うん？そんなバカな。全然面白くなさそうだし、絶対やりません。」

確かに。

奈緒は美少女ではあるけど、芸能人が務まるタイプには見えない。

それをするにはあまりにも、冷めている、というか、物事を斜めに
見ている、という所がある。

それに、彼女お得意のブリっこの継続時間はウルトラマンの地球滞在時間並みに短い。

（実際には、タロウが戦って、それをセブンが引き継いで、そしてゾフィー兄さんがトドメを刺すぐらいの時間は続けられるかもしれ

ないけど。)

そして奈緒はいかにもわざとらしく、口に手を覆って私を見た。

「はっ！まさか日下部さん、あなた、私に嫉妬しているんじゃないか……」

「……え？それはノるべき？つつこむべき？」

「ダメね、そんな事ではあなた、私のライバルにはなれない……」

「……え？続くの？その台詞、俯きながら言うものなの？」

「悔しかったら、ここまで這い上がってくるのよっ！」

奈緒が斜め45度の空中を見上げながら、切なげな表情にバラの花を散らすような雰囲気で、握りこぶしを胸の前に作る。

「……ウザい……」

「……と言う訳で、綾香も撮影に呼ばれているから。」

奈緒が椅子に座りなおしながら真顔で言った。

「……って、はあ????!!」

「……えー!!?何で???」

「知らないわよー。何か、河島健たけるが綾香の事をお気に入りみたいよー?」
「一緒にいた色白のカワイコちゃんもよければ是非、見学に」
「……」

「……何でー?どういう流れ???」

何をどう思い返しても、彼との出会いの中で私が気に入られる要素が、何一つ見つからない。

それはどっから聞いても、ただの社交辞令でしょう？奈緒の機嫌を取ってCMに引き入れたいが為に、オトモダチにまでお世辞をいつているだけじゃないの。

「さあ？興味でも持たれたんだじゃない？」

奈緒はさほど気にも留めない様子で答える。

「・・・ハンサムに、興味を持たれる覚えは無い。」

「・・・いつかも同じような台詞を聞いたわよね。しかもそれ、標語みたい。」

「行かないよ、私。忙しいもん。」

「関心もないし、でしょ。解ってるわよ。断つといた。」

何、断ってくれてたの？じゃあ、わざわざ脅かさないでよ。

彼女は椅子の背もたれに寄りかかると、私を眺めるように見つめた。

「綾香ってこういう事、興味ないもんね。どっちかっていうと苦手そうだし。」

奈緒は興味ありそうだね、と考える。だってアイドルの追っかけしてるものね？

「でもさ、天下の人気俳優、河島健に覚えてもらって声をかけられるなんて、綾香もなかなかのモノじゃない？やったね。」

「・・・スカウトされた女が、よく言うよ。」

私は少し呆れて言った。

だって相手の心を射止めて、強引な手を使われてまで声をかけられ

たのは奈緒の方じゃない？
私はその、ついで、よ？

「私はいいの。割と強烈なタイプだから。CMとか、そういうモノ
に向いている外見なんでしょ、きっと。」

でも、と奈緒は私の眼をまっすぐに見て言った。

「綾香は、人の心に残るタイプだから。そういう印象を与えるから。」

じつっと私の眼を見る。

私は、カップを持つ手が止まってしまった。

・・・何、この雰囲気？

「・・・言ってる意味が、わかんない。というか、同じに聞こえる。」

私がカップを持って固まったまま答えると、彼女は少し笑った。

「・・・まあね。」

奈緒とは。

時々こうやって、私相手にも謎めく時がある。

「そんな訳だから、時々状況報告をするわね。それがまず話の第一点。」

「それでは、次の話題。」

「は？まだあるの？ビツクな話が？」

私は呆れ半分、身構えてしまった。

何なの、この爆弾娘。

「今度また飲み会をしましょう、と祐介ゆうすけさんから誘われております。来週の金曜日あたり、ヒマ？」

「・・・ユウスケさん？誰、それ？」

まさか既に芸能人と知り合いになって誘われた、とかじゃないわよね？

ユウスケさんって誰よ？そんな名前の芸能人、ユースケ・なんとかっていう日本だけイタリアだか分かりにくい名前の俳優さんしか知らないわ。え？彼って芸人？

「藤田祐介、よ。あのホスト系の。」

私は再び、思考が繋がるのに時間を要してしまった。今日のシナプスは通りが悪いらしい。

「・・・ええええ？？！！奈緒、連絡取ってるの？？あの人と！
！！」

「うん。飲み会から帰る時、タクシーの中でメルアド交換したものの。綾香もしたでしょ？王子と。」

何と何と何と。そういう事でしたか。

私は碧さんと帰ったあの夜の事を思い出した。（池に落ちた事も芋づる式に思い出した。クツソ！）

確かにあの時、彼は私にメルアドをくれたけど、あれは交換って言うのかな？

だって、あれから連絡は取ってないし……。というか、取れないし。

あ、ちょっと胸が痛む。

「奈緒は、あれから藤田さんと連絡を取っているの？」

「うん。たまにメールでやり取りをしているよ。あたしのCM話も知っているよ。だからそのお祝いをしてくれるんだって。」

「……じゃあ、二人でしなよ。」

「……付き合ってるの？」

私が少し上目遣いで彼女を見ると、彼女はビックリしたようにこっちを見つめ返した。

「……まつさかあ！そんな訳ないじゃん。だってあたし、あんなのタイプじゃないもん。」

「……あんなの??？」

天下の美形色男を『あんなの』と称しますか。さすがは田中様。

「ハンサムは見て楽しむものよ。おまけに彼みたいな性格はあたし

と絶対合わない。

おまけに彼みたいなお家と関わるのは絶対ゴメン。

おまけに彼はあたしみたいなのはタイプではない。

でも話が面白いし、付き合いがあれば何か得な事があるかもしれないと思って連絡を取り合っているだけ。」

ああ、マシンガンの様に繰り広げらる奈緒ワールド。

私は久しぶりに頭がくらくらとして来た。解ったから、もう少し手加減してよ……。

「何？綾香、王子じゃなくて、あっちの方がタイプだった??」

「……なーんーでー、そーなるー……。」

疲れる。ほんつと、疲れる。

「やめときなよ、彼は。あの性格、ある意味王子よりタチが悪いよ?」

自分の事は棚に上げて、よく言うよ……。
って言うのもメンドくさいから黙っておこう。

そっか。でも奈緒は、藤田さんの事、そういう意味では好きではないんだ。

あんなにカッコよくて大人の人なのに、それでもダメなんだ。

そう言えばこの子は、高校の時も誰とも付き合い合わず、大学に行つてからも彼氏の話って聞いた事がない。

(大学が違うせいかもしれないけど。)

……やっぱり、奈緒の好きな人って、……拓也だったりする

のかな？

私は少し、ドキドキしてきた。

そうだとしたら、私はどうするんだろう？

奈緒に対して、今までそれに気付かなかった申し訳無さがどっと押し寄せる。

そして、私達が付き合っている間の彼女の心の辛さを思うと、自分の胸が痛くなる。

なのに、もし二人が付き合う事にでもなったら、きつと、心からは祝福出来ない自分が、いる。

自分が情けなくなってきた。

ああ、嫌だ。心が狭くて醜い私。

逃した魚を諦めきれしていないのは、彼だけではなくて、私も同じらしい。

だから、あんなところでキスなんてされちゃうんだ。

「だから来週金曜日ね。東京のいいトコ、連れて行ってもらおう。

お金持ちだからきつと色々知っているよ。王子も一緒だよ。」

「……拓也は？」

おずおずと聞くと、彼女は少し溜息をついた。

「吉川氏は、誘っても来ないんじゃない？どうせあんた達、大学でも気まずくって口きいて無いんでしょ？」

あんな事があつた後じゃね、とまるで見ていたかのように呟く奈緒。そしてふつと顔をあげ、じと……と私を見つめ出した。

「……な、何……？」

「王子が来る事よりも、吉川氏が来ない事の方が気になる？」

私はたじろいでした。

えっと、この場合はどう答えるのが正解なんだろう？

拓也の事が気になるのは、それは奈緒の事が気になるからであり、もちろん拓也の事自身もかなり気にはなるんだけど、

拓也と碧さんとどちらが気になるかと言えば正直碧さんの方だった
りして、

でも私にはそんな不確かなちっちゃい恋愛感情より、実際、目の前
にある友情の方が大事でだから奈緒が大事なんだけど、

ああ、でも、そうだ。

私、自分の事も解決しないと、碧さんと会えないんだった。

思い出した。あっちもこっちもハチャメチャだ。

奈緒には、まだ何も話していなかった。

でも、彼女が藤田さんと通じている以上、藤田さんと碧さんが通じている以上、

私が、奈緒に一連の事情を話さずにいるのは不自然に違いない。

奈緒は私と碧さんの出会いから関わってもいる。

その上彼女は、ありがたい事に、私の一生の大親友。

私は決心をした。

その決心は、思ったよりも簡単に出来るものだった。

「あのね、奈緒。実はね……。」

この流れと勢いに、乗ってみよう。

今まで胸に持ち続けていたものを、彼女に渡してみよう。

思わぬタイミングではあったけど、初めて人に打ち明ける。

家族にも言えなかった、15年前の話を。

美少女が行く！2（後書き）

すみません。本日中にもう一話、upします。

明日、拓也くんが登場しますからね。

美少女が行く！3

15年前に私が見た不確かな事。

拓也が教えてくれた、事件の大まかな内容。碧さんが少し語った、事件と彼との関係。

奈緒はそれを、黙って聞いていた。

私が話している間、相槌は打つものの一言も喋らなかった。

話終わった後、しばらく私達は沈黙をした。

「……ありがとう。」

奈緒がテーブルを見つめながら呟いた。

私は、自分が彼女の台詞を聞き間違えたのか、彼女が自分の台詞を言い間違えたのか、と思った。

「……何が？」

「……話してくれて。15年前に見た事。」

彼女はまた、テーブルを見ている。

テーブルの上に置いた手を、組んだりさすったり、綺麗にネイルされた爪をいじったりしている。

「……随分、怖かっただろうね、7歳の綾香は。忘れられないくらい怖かったから、」

忘れてしまっただね。・・・かわいそうに。」

やっと、少しためらいがちに私の顔を見た。

「大変、だったね。」

そんな彼女の慣れない表情に、私は心底驚いてしまい、なんだかドキマギしてきた。

彼女の大きな瞳が、私を切なそうに見る。何だ、何だ、何だ？

「えっと、そんなハッキリしたモノを見れた訳ではないし、第一、何を見ているのか自分でも分からなかったし、目が悪かったし、あ、それは今でも悪いんだど、そんなトラウマになる程の記憶でも無くて・・・」

ああ、何？何を言い訳しているの、私？

親友相手に、何をそんなに焦っているの？と言うか、ドキドキしている？

「・・・分かっているわよ、綾香にシリアスなトラウマなんて無い事くらい。」

途端に、いつもの奈緒に戻った。

半眼で椅子の背もたれに座りなおす彼女。

「15年前の一人の幼い女の子が、物凄く可哀そうだって、話。今のおんたじゃ、無い。」

「・・・それ、私と同一人物なんだけど・・・。」

「ほんとー？昔の自分と今の自分、同じ人間だって言えるー??？」

・・・いきなり、哲学の話ですか？
って、私の打ち明け話の続きをしたいんですけど。

「とにかく、自分が見た事もハッキリしないうちには、私はみど・塚本さんとは会いづらいつて事なの。」

「ホントは会いたくて堪らないのに、ねえ。碧さんって呼んでいいじゃん、何を言い直しているの。」

・・・ああ、話しづらいつ。

「でもさ、それっておかしな話じゃない？綾香の見た光景、吉川氏の言ってた事件の、どの場面に相当する訳??」

・・・そこなのだ。

そこが、まるで巨大な赤いアラームボタンの様に、チカチカと点滅しながら私の頭上に押し掛かってきている。
まるで、警告するように、近づくなと訴えるように、
それでいて早く手を伸ばせ、時間が無いぞ、と焦らせて誘うように。

「王子の隣のお兄さんが事件の被害者だとして、それだけで何で今更解決した事件を調べようとするの？しかも15年も経った後で、時効でしょ？」

彼女は腕を組んで、眉根を寄せて話し続ける。

今、奈緒の頭の中は色々な理論理屈でフル活動しているに違いない。

「しかも最初から綾香を知っていたって事でしょ？何で？どうやって？大体、綾香が事件を目撃したって事、今初めてあたしに話したんでしょ？」

「・・・多分。そのハズ・・・。」

「なのに、なんで綾香が事件を知っているような素振り、彼が見せるの？」

「・・・さあ。」

「誰かに綾香自身が見られていたって事？それが15年前の王子？」

「・・・さあ・・・？」

私は頭を掻いた。

自分がこの3か月間考え続けていた事と同じ事を奈緒が言うものだから、なんだか嬉しくなってきた。

「すごいね。2時間ドラマのサスペンス劇場みたいだね。」

「当事者が、何を言うか。」

ペシツと軽く頭を小突かれてしまう。

「そっかー。それで日下部さんは浮かない顔つきって訳ねー。それは確かに会いたくても会いづらいわねー。あの人、何か訊いてもタダじゃ絶対に教えてくれなそうだし。」

奈緒はうーんと唸った。

そして私の方を、嫌そうに眺めた。

「あんたの方がよっぽどビツクな話じゃない。負けたわ、ちえっ。」

彼女が、こうして私のシリアス話を茶化す事で、私を気遣ってくれている事がよく分かる。

私は微笑んだ。

色々と他人には誤解されやすい性格の奈緒だけど、やっぱり私の親友。

居心地の良い、私の空間。

そんな私をしばらく眺めた奈緒は、おもむろにこう言った。

「よし、調べましょう。」

「・・・何を？」

「事件や王子を。出来る範囲で、今以上に。」

「・・・でも私、就活や卒論・・・。」

「24時間それに費やしている訳じゃないでしょ。だってこのままでは、何かと不安じゃない？」

そう。不安。

それに、なんだか悔しい。

それに、やっぱり碧さんに会いたい。正々堂々と会いたい。まっすぐに、向き合いたい。

「まあ・・・ね。でも、どうやって？」

「それは、綾香が考えなさいよ。吉川君と一緒に、ね。」

「・・・はあ??？」

私は目を見開いて大きな声を出してしまった。

「何で、拓也と???!」

「だって、綾香と塚本さんの関係を見て知っているのって、あたしと、祐介さんと、後は吉川君しかいないじゃない。」

そうだけど、そうだけど、そうではあるけれど、だからって何で拓

也と?????!!

「こういうのはね、味方が多い方がいいとは思わない?」

彼女はすごく真面目な顔つきで、むしろ険しい表情で目の前の空間を見つめた。

「相手がどう出るのか分からない。そもそも、綾香の相手が塚本さんだけなのかどうかも分からない。過去の殺人事件を警察でもない第三者が引つかきまわすなんて、どんなトラブルを招くかも分からないよ?」

私はクスツと笑ってしまった。

だから、味方は多い方がいい、と。

そうか、ありがとうね、奈緒。心配してくれているんだ。

「吉川君なら、何があっても確実に綾香を守ると思う。彼は、絶対に頼りにしていいと思うよ。」

緩く私を見る奈緒の瞳は、柔らかくて少し揺れている。

そしてそれは、奈緒が拓也の事を好きなのは、と再び私を不安にさせる。

「彼は綾香と同じ大学だから、あたしとなんかよりずっと一緒に動きやすいし、それにあの入、頭いいでしょ? 鋭いもの。きつととも役に立つよ。」

話し続ける奈緒の目に、徐々にいつもの強い光が生まれてくる。

そして最後にニヤツと笑う。

「いわばあたしの身代わりとしての、派遣ね。いい働きするわよ。」

奈緒の身代わり派遣、か。

それをもし聞いた時の、拓也の悔しそうな嫌そうな顔が目には浮かんで笑ってしまう。

でもね。確かに奈緒の言う通りなんだけど、的確な人材の配置何だろうけど・・・

「奈緒は、それでいいの？」

私が恐る恐る聞いたのに、当の奈緒はケロッとしてあっさりと答えた。

「何が？当然でしょ。最善策だと思うけど。」

そうになると、更に彼女の気持ちを突っ込んで聞く事は流石に憚れてしまう。

・・・うーん、奈緒がそう言うなら・・・でも・・・。

「私は藤田さんに当たって、塚本さんの事をそれとなく訊いてみるから。あ、でもあの二人がつるんでいる可能性は大いにあり、ね。塚本さんがあそこにいる理由を祐介さんが知らないとは思えないもの。」

奈緒は一人でブツブツと言いだした。

となると、どこまで聞けるか、これは望み薄ね。そもそも付き合いやめる方が無難かも、いやしかし、と言う具合に。

私は私で、本筋とは違う問題に頭を悩ませる。
拓也と一緒に行動かあ。出来る事なら避けたかったわ……。
あの日以来、結局まともに顔を合わせる事はなく、
見るのはキャンパスの中で、いつもの人懐っこそうな笑顔で仲間と
話す彼の姿か、

どこかの女の子と肩を組んで歩く姿。

彼のあのくりつと丸い瞳と笑顔が、彼女の前で崩れて代わりに、拗
ねた瞳と甘えた口調が出てくる頃には、

多分、あの腕は彼女の肩には乗せられず、彼女の腰にまわされてい
るのだろう。

「……吉川君との行動、居心地悪いんだろうけど我慢しなさいよ。」

私の表情を読んだ奈緒が溜息をつきながら、こつちを睨んで言った。
「この際、焼けぼっくりに火がつこうが目をつぶって、事態を乗り
切ってから大人の対処を目指しなさい。」

「焼け……何？」

「……一般教養。落ちるわよ、就職試験。」

何よう。後で辞書で調べるわよう。

どうせ本読みが足りませんよー、だ。

「よっし。そうと決まれば行動開始。早速吉川君に連絡を取ってあげる。綾香のスケジュール、教えて。」

奈緒が手帳と携帯を取りだした。

あれ？私って、自分の人生は自分で切り開く、とかって思ってなかったっけ？

他人に支配されるのはゴメンよ、って。

私、今、思いっきり奈緒に支配されてるんだけど。

美少女が行く！3（後書き）

はい。次回から拓也くん登場です。

綾香ちゃんと一緒に、事件をガンガン攻めていく予定です。

乞う、ご期待？（自分の首を絞めました。頑張ります。）

忙しい合間を塗つての時間の都合。

拓也と会う事になったのは、週明けの月曜日、1限の後。

最悪な時間帯に4年生なのに未だに語学の授業がある私と、既に専門学校に通い始めているという拓也が時間を合わせて、大学の学食内で会う事になった。

ウチの大学の学食は見た目も味も、ちょっとしたレストラン並みで学生には人気があるけど、

冬も近づいた朝10時台に、ここにいる学生数はそれほど多くはなかった。

大変、居心地が悪い。どんな顔をして会えばいいのか分からない。学生のざわめきも、最新のヒットチャートを流し続ける有線も、さっぱり耳に入ってこない。

キラキラした午前中の光が降り注ぐ大きな吹き抜けの窓が、白々しくくらいに明るく見える。

「.....」

気付くと、無言の拓也が目の前に立っていた。

カジュアルなジャケットを羽織ってそれを腕まくりしている。首にはストールを巻いて中には薄くても温かそうなカットソーを重ね着いつ見ても、センスがいい。

片手をパンツのポケットに突っ込み、片手に鞆を持って肩から逆手にひっかけている。

で、無言で私を見下ろしている。

「・・・お世話に、なり、ます・・・。」

私は何とか口を開いたものの、最後の方はもはや呟きにもならない尻すばみな台詞。

視線を上に向けるものの頭を上げる勇気がないもんだから、結局彼の顔を見る事は出来ない。

ああああ・・・。やっぱりこんな事、頼むんじゃないかった。奈緒に断つとくんだった・・・。

今更元カノの面倒を見る、だなんて、私的にも恥ずかしい悔しいし、みつともないし、情けないし・・・気まずいし。

と、時既に遅しの後悔が怒涛のように押し寄せてくる。

拓也はそんな私をしばらく眺めた後、私の右隣の椅子に（4人がけの丸テーブルに座っていたので）どっかと座り込み、その隣の椅子の上に鞆を投げ出すように置いた。

チラ・・・と横目で様子を伺うと、彼は腕と足を組み、無表情でこちらを見ている。

あうう。帰りたいよお。

ますます縮こまる私。

やがて彼の軽い溜息が聞こえた。

「・・・お世話を、します。」

顔を上げると、拓也は斜め前方を見上げながら、どこか呆れたような表情で頭をガシガシと激しく掻いていた。それから再び私に向き直り、やっぱり無表情な顔で聞いてくる。

「田中さんから大体の事は聞いたんだけど。お前の事だからお前自身の中から聞きたいし。」

何がどうなっている訳？」

就活で馴れた答弁もここではすつかりナリをひそめて、小さくなつた私はボソボソと事情を説明した。ああ、全くもつてみつももない私。こんな形で元カレに協力を求めなくてはならないなんて。

というより、全面的に頼らなくてはならないなんて。

いえ、私、一人で何とか出来ますから。

その際、この問題は解決できる日が来るまで後回しにしますから。いいんです、いいんです。

何も今、こんなに忙しくてややこしい時に事を進めなくても、いいんです。

という言葉が喉まで出かかっている。

私の話を、腕を組んだ状態で微動だにせずジツと聞いていた拓也は、話が終わった後も口を開かず無言だった。

でもその視線は、空中を彷徨っていて何かを考えている様子。眉根

に弱冠、しわが寄っている。

こういう真面目で男らしい拓也を見る事はかなり久しぶりだったので、ああ、いい男だなあ、と単純に見とれて観察をしてしまった。

「・・・お前はさ、どこまで正確に知りたいの？事件の事。」

やがて口を開いた拓也は、私の方を斜めに見ながら聞いてきた。

その視線は鋭くて、今この瞬間だけでも、彼が全身で私の話を受け止めているのがわかる。

「とことん100%、ハッキリと調べ上げたいの？そしたらそれって、とんでもない結果を招くかもしれないぜ？」

彼の視線が私から外れない。今まで避けていた時間を取り戻すかのように、鋭く、深く私を射抜く。

私もその視線を外さない。

だってその後に続く言葉が分かっているから。

私の覚悟を彼に伝える為に、彼の視線に絡み続ける。彼がそれに応えている。

「お前の見た光景と、事件の概要、全然違うじゃん。」

物ごころついた時から視力の弱かった私は、割と全てがぼやけているのが普通だった。

小学校に上がるに際しメガネをかけるようになったのだけれど、あの日はそれを掛ける事を忘れていた。よくある事だった。

低い段差のあるコンクリートの上に頭を乗せるように、地面に仰向けに横たわっている人。

その上から、ゆっくりと、ゆっくりと、体重を掛けていく人。

二人の間に何かがある。でもそこまでは、視力の弱い私には見ええない。

横たわっている人の腕が上がる。震えているように見える。

やがてその腕は地面に戻り、全てが動かなくなる。

上に覆いかぶさっていた人が、体を起こす。

頭も学ランも黒い為、私には黒い一つの塊が二つに分かれた様に見える。

その塊の一つが、立ったまま動かなくなる。

雨が激しくなってきた、私はすっかり濡れてしまう。

腕の中の、当時はまだ子犬だったダンが、私の胸を温めてくれている。

私は急に、帰らなくてはならない強迫観念のようなものに駆られて、ちよつとした出来心からおきた冒険心を後悔しながら、

大人の集まりである中学校を裏門から後にした。走って帰った。

そして翌日、雨にぬれた私は熱を出して学校を休んだ。

拓也と奈緒が、同じ事を言う。

事件の内容と、私が見た内容が違う、と。

それは私も、あの夏の日から気付いていた。

目撃者ありの正当防衛、とは、このワンシーンのどこで成立するの
だろう？

「・・・でも、15年前の、7歳児の記憶なんて・・・実際はまだ
6歳だったんだけど・・・あまりにも不確かな物だし、おまけにド
近眼とくれば、信憑性なんてあったもんじゃないし・・・。」

私の台詞は言い訳のように聞こえるけど、

実際は拓也の瞳を見続けながら、問いかけるように、半分すぎる様
な気持で言った。

言い訳ではなく、これはあらゆる可能性を考える為の、議論。

「それに俺達は、事件の詳しい内容を何一つ知らない。それなのに、
お前が見た光景を、その事件のどこかに当てはめるなんて到底無理
だ。」

私の台詞に、彼は応える。

そして彼は体を真正面に向けると、まっすぐに私を見つめながら言
った。

「でもお前の記憶が全て正しかったとして、それが事件のストーリーを変えざる事になったとしたら。」

彼のつばらで丸い瞳が、グッと深く、強くなる。

「お前、受け止める覚悟はあるの？」

その黒い瞳を見つめる。

いつもはかつたるそうにしている彼が、滅多にしか見せない、攻めの姿勢。

元々可愛い系の顔が（碧さんや藤田さんみたいに、まつ毛が長いお目目パツチリ系、ではないんだけど）グッと、男の顔になる。

でも私はついに、彼から視線を外してしまった。

「……受け止める覚悟なんて、わからないけど……。」

正直、今でも分からない。

どうなるか見当もつかないのに、その時の心構えなんて想像もつかない。

「……これを無視してやり過ぎず、覚悟の方が、今はない……。」

そう。もう、知らないフリが出来ないの。

遅かれ早かれ、やるしかないのよ。
例え、誰かが私を助けてくれなくとも。

すると拓也の瞳が、少し揺れた。

「……それって、塚本さんのせい？」

私は再び拓也を見つめる。

事件の被害者と知り合いだった、という碧さん。
納得できない気持ちを15年間抱えていた、と言っていた。

どこかに、同じような気持ちの人達がいるに違いない。
人が殺される、という事は、とてつもなく恐ろしい事。
生きている人達の心の傷は、多分一生癒える事はないのだろう。

だから、私の情報が何の役にも立たないとしても、知らないフリは、
もう出来ない。

それが、どんな結果を招くのかは想像もつかないのだけれども。

碧さんに対する恋心を柵に上げたとしても、やっぱり私は動くのだ
ろう。

「……そうね。そうとも言える。きっかけでは、ある。」

思わず苦笑してしまった。

そんな私を少し不思議そうに眺めた拓也は、あー、とも、はー、ともつかない声を出して、椅子に深くもたれ込み、その背もたれに頭を乗せて吹き抜けの天井を見上げた。

「・・・お前さー。こんな事する時間、あんの？就活、続けてるんでしょ？俺も専門学校の方が結構忙しくなつて来ててさ。」

「ご、ごめんね。邪魔する気はないから。時々、相談に乗ってくれば、というかアドバイスなんぞを頂ければそれで十分で・・・。」

「あー、そんな事を言いたいんじゃないだよ。」

再び頭をガシガシガシつと多めに激しく掻く。

そして椅子に沈みこむようにしながら、私を横目でジロツと睨みつけた。

「あのね。隙を見せないでよ、俺に。」

「・・・はい？」

「俺、責任持てないからね。俺を巻き込んだのは、あなただからね。」

「いいえ、奈緒です。」

「チャンスがあれば、遠慮なくいつちやうよ？」

「・・・これは、ひよっとして。」

「ひよっとしなくても、・・・攻められているんだろうか？」

危険を感じてたじろいで、椅子に座っているにも関わらず後ずさり

をしようとした私の前に、
拓也は体を起こした勢いでズイっと前のめりに、鼻先あと5センチ
くらいまでに近づき、

凄く挑戦的な瞳をして、私に囁いた。

「高校ん時ほど、都合のいい男じゃないぜ。」

そうして、あっと思う間もなく素早い動作で腰を浮かすと、

私の首筋を、拓也の舌先が下から上にツツーっと滑り上がった！

ぎゃあー！！！！何すんのよおおおおー！！！！

「ひゃあつ！！！！」

素っ頓狂な声をあげて、全身鳥肌粟立たせて、私が椅子から転げ落
ちるように飛び下がると、

拓也はすまして立ち上がり、鞆を肩から逆手に持ち私を振り返って
いった。

「ほら、まずは行くよ。国会図書館。この後もう、授業ないんでし
よ？俺、午後は今日しか空いてないから。」

「あ、あ、あんた、今、何を……。」

首筋を片手で押えながら私が聞くと、彼はシレっと答える。

「ん？首舐めた。」

「はあ？？？」

「タダ働きさせるつもりかよ。嫌なら自分の身は自分で守れば？」

そ、それは、あんたから、という事ですか・・・？

サツサと学食を立ち去る拓也を呆然と見やっってから、私は慌ててその後を追ったのだけだ。

ああ、やっぱり奈緒、これはマズイよ・・・。

先が怖いよ・・・。

Here we go 2

拓也と二人で地下鉄に乗っている間は、お互いに全くの無言だった。拓也は電車に乗るなりiPodを耳にあて、私を完璧に無視して戸口にもたれかかっている。

二人だけで行動するなんて、多分一年ぶり、いや、それ以上かもしれないけど、

こんな気まずい雰囲気を外を出歩いた事なんて多分なかったのだから、別れる直前は、家の中でお互いが別々の事をしていただけだったもの。

懐かしいとか、そういった感情が不思議と湧きおこらなかった。

それよりも、今後も彼と行動を共にするにあたっての、先程の様な危機をどうやって乗り切るか。

(つまり、いかに襲われないようにするかって事。)

そっちで頭がいっぱいいっぱいなのよ……。

国立国会図書館っていうのは、国会議事堂のお隣さんにあつた。

とにかくそこは建物も道路もやたらと大きくてやたらと威圧感を醸し出す場所。

うひゃー……。

「何、キョドってるの。小学生みたいだからやめてよね。」

拓也が横目で私を呆れた様に見る。

するとそんな私達のまさに目の前を、小学生の集団が先生に引率されて通り過ぎていった。

「……………」

その集団は国会議事堂の門を通り抜けていく。
社会科学見学の？面白いの、国会議事堂って？

思わず見送っちゃうと、背中から拓也の冷めーた声が降りかかった。

「……ついてくの？」

「……つんなワケないでしょっ。」

「ふーん。」

拓也が私を見る目が白い。白いのよっバカにしてるわねっ。だって
ここ、テレビでしか見た事ないんだもん。

スタスタと先を歩く拓也についていくと、図書館は、これまた割と
普通の建物だった。

あ、よかった、ここって普通の場所なのね。

そうよね、図書館って万人が利用するものだもんね、威圧的じゃあ、
皆さん利用しづらいもんね。

そんな私の表情を読んだのか、拓也が言った。

「ここね、裏は最高裁判所。」

んげ。

思わず素でカエルみたいな声を出しちゃって、拓也の目がさらに真
っ白になった。

でもだって、目の前の建物が急に威圧感を持って私に覆いかぶさっ
て来る。

ななななによ、国会と最高裁判所に挟まれる図書館なんて、弁護士
とか議員とか裁判官とか裁判チヨーとかギチヨーとか新聞記者とか
そーゆー人達の専門館で私達みたいな大学生は摘みだされたり、お
つと。

「戸口で立ち止まんなよ。メーワクだろ。」

拓也にグイッと腕を掴まれる。
ズンズン中に連れて行かれる。

慌てて腕を振り払ったら、拓也がビククリしたようにこっちを見た。

だ、だって……。

すると彼は片眉をあげて、バカにしたように私をみたのよこのやるう。

「いちいち反応すんなよ。こんなところで襲つか、ばか。」

バ、バカにして、しかもばかって言ったわねっ。

あんたが前科者だから、こんなに警戒してるんでしょっばかって言
った方がばかっ。

さっさと私を置いて先に行くなよ、偉そうな猫つかぶりの甘えった
れめっ。

と口では言えないものだからその背中に念力（呪い）を送るんだけど、多分絶対、届いてる。

あらゆる刊行物が納本されている国会図書館に足を運んだ理由は、
言わずもがな、例の事件関係の記事を調べる為。

電子端末機前にそれぞれ陣取り、二人で手分けして検索を始めた。
新聞記事、週刊誌、出来る範囲で調べるのだけど、これが中々大変
だった。

途中で読むのが嫌になってプリントアウトしようとしたら、拓也に
止められる。館外持ち出し禁止らしい。

自分はちゃっかりノートとペンを持ち込んで（鞆は入り口で

没収された)、ちまちまとメモを取っている。ほんっと、ぬかりのない子。

閉館時間まで粘った為、外に出たら辺りはすっかり夜景色だった。都内なのに思いの外、星が見える。

「……あー、宇宙だー……。」

立ち止まって夜空を見上げて呟く私の隣で、ストールをグルグル巻きにした拓也が「さみっ」と言つて、肩をすくめて口元を埋めた。二人の吐く白い息が、星空に少し、彩りを加えているように感じた。

「腹減った。晩飯どこかで食おうぜ。」

「あ、うん……。」

「色々整理しないと、だろ？俺、しばらく時間作れないから。」

彼はそう言つと、やっぱり一人でスタスタと、地下鉄の駅を降りて行った。

「目撃者は二人。同級生。話を聞くとしたらこの人達だろうな。」

「……そか。」

定食屋と居酒屋の中間みたいなお店で、二人で向かい合わせに座つて、ご飯を食べながらの作戦会議。

「当事者少年Aに会つて訊くのは、一番避けたい最終手段だもんな

あ。会えるかどうかもわかんねーし、話してくれるかどうかも分かんないもんな。」

「・・・どうやって、調べるの？」

「そこはあなた、吉川クンの人脈でしょ。っていうか、あなたの地元でしょ。」

「？」

「高2ん時同じクラスだった山下、あいつってお前と同じ学区じゃなかった？」

「・・・あ、うん。」

「確か、年の離れた姉ちゃんがいた。」

「・・・そうだった？」

「そうなの。結構美人だったから。」

そう言いながら、拓也はズボンのポケットから携帯を取り出した。体を傾けて話をします。

「もしもし？おう、久しぶり。・・・うん、マジたるいよ。うん。

やってるよー。そっちは？・・・あはは。」

・・・え？これってもしかして、その山下君に電話をかけているの？

「あのね、頼み事があんだけど。俺ね、ガッコの授業で課題があつてさ。選択で教育心理学取ってんのよ。・・・え？そう。教員免許を取るつもりだね。」

なんですと？

そんな話は初めて聞いたわ、あなた、教師になるつもりなの？

やめた方がいい。ぜーったいっにつ、やめた方がいいから。

生徒が可哀そうだから。

「でさ、前浜東中の例の殺人事件、課題でさらつと出そうかと思ってるの。他にネタがなくなつて。」

「・・・はいっ？」

「課題でさらつと殺人事件？」

「どーゆー授業よ、それ??」

「俺の知り合いの中じゃ、山下が一番詳しいかなと思ってさ。姉ちゃん確か、当時前浜東中だったんだろ?お前、何か知ってる?目撃者とか、少年Aとかつて、今どうなつてんの?」

「・・・うつわー!!きたよ、これですよ!!」

「こーやって、へーきでウソをつくのね??いえ、この場合、調査をするのね?」

「何、この、自然な流れるような口から出まかせは。」

「おう、そつかー。え?マジで?スゲー助かる。うん。・・・うん。サンキュー。わかった。美人な姉ちゃんに宜しくな!。」

満面の笑みで、してやったりと電話を切る拓也。

その見事なハツタリぶりに、無駄とは思いつつも、私はつい確認をしてしまった。

「拓也・・・教員免許取るの?」

「は?そんな訳ないでしょ?バカですか?」

「・・・五枚舌?」

「・・・このクソ忙しい中貴重な時間を割いて協力をしている大切な「バカですごめんなさい。」」

だめだ、この状況。圧倒的に私が不利。何を言っても口では負ける。大変不本意だけど黙っておこう。

ああ、この子の勝ち誇ったような笑顔が癪に障る……。

「と言う訳で、この件は山下クンから連絡貰うまでペンディングね。そうじゃ次。塚本碧の素性を発表ー。」

「えっ?? そんな事までもう調べてるの??」

「あなたね、俺を誰だと思ってるの? 吉川クンの情報収集能力をナメないでよね。」

得意そうにニヤリと笑う拓也に、私は心底感心してしまった。

だって、奈緒が拓也に連絡したのは数日前でしょ?

自分だって勉強で相当忙しいハズなのに、その短期間にそこまで調べてくれたの?

すると、私があんまりにもビックリした顔をしていたからなのだろう、

拓也が一転、呆れたような表情で言った。

「……俺がバスケット部だって事、忘れた?」

なんだ、バスケット部がかりか。

感心して損した。

私の態度があからさまに変わったので、拓也がムツとしたように話します。

「塚本碧。一浪して東都大学工学部入学。経営システム工学科卒業。」

「

「工学部で経営・・・？何、それ。」

「知らねーよ、そんなの。頭がいいって事なんだろ。突っ込む所じゃないから、そこ。」

バスケット部所属。壊滅的に弱小なそのバスケットチームの中でのエース。チームを何度か、奇跡的な勝利に導きそうになった。」

「・・・つまり、上手いの？下手なの？」

「チームは下手だけど、みどりちゃんはかなり上手かった。おまけにあの容姿と性格なモンだから、試合じゃいつも注目の的だったよ。スターだったね。」

へー、なんか想像つく。

「なんで拓也と知り合いだったの？」

「あの人、試合前の練習中、転んで足首痛めちゃったの。そこにたまたま俺が居合わせて、あっちのマネがたまたま席外していたから、俺が応急処置をした、ってだけの話。」

・・・何それ。全然『話せば長』くないじゃん。

私は、あの夏の日の事を思い出して軽くムカついた。

「・・・ふーん。お互い、よく覚えていたね。」

「向こうは有名人だからね。俺はともかく、あの方は記憶力あるよね。」

拓也も私と同じようにあの日を思い出したのか、これまた違った理由で、悔しそうに言いだした。

「しかもこの前会った時、俺をわざと『古川、古川』って呼びやがって。無駄に芸が細けーんだよ。最初気付かなかったもんな。ちえつ。」

「なんか、微妙に絡まれていたよね。」

「・・・癩に触ったんだろ。目え、つけられたんだよ。」

「・・・何で？」

癩に障る、とはどういう事ですか？

「お前があの人と歩いているの見た時、俺、『色気ねーから、デー
トじゃないな』つつつたる？あれ、お前だけじゃなくって、あの人
の事も遠まわしに言ったつもりだったんだけど。」

「・・・遠まわしすぎて、未だに辿りけてないんだけど・・・。」

「お前はね。でもあの子は気付いたんだろうな。でなきゃ説明つか
ないもん。『古川』攻撃に続いて、『色気ない』までまんま返され
て、トドメが『ヨッシー』だもんな。」

「・・・ははあ。」

お互い、分かりづらい攻撃を繰り返していたんだなあ・・・。

「性格は明るく、大変ノリが良く、面倒見が良い。男女共に人気あ
り。後、こっからは裏情報。実家は資産家だけど、両親は既に他界。
過去にかなり荒れていたのでは、という噂あり。」

「・・・あなた、公認会計士やめて、探偵にでもなれば・・・？」

「ふふ。ありがと。じゃ、兼業会計士にでもなるのかな。」

拓也は可愛い顔で可愛く笑うと、すぐに真顔になって、私を見つめ
た。

「俺がこんな事言うのは我ながら心外なんだけど、多分あの人、悪
い人じゃないよね。」

うん、それはまあ、ね。

「仮に最悪のシナリオで、彼が実は真の殺人者で、お前が見た事を知っているとして。」

「え？何それ?!何で?。」

「仮だよ、仮。落ちつけよ。」

困ったように眉を下げ、少しあやすように私をなだめるんだけど、落ち着いていられないよー。

碧さんが殺人者なんてもちろん信じられないけど、

それって、殺人者が私の身近にいるかもしれないって事?!怖すぎるよー!

殺人者は、少年Aでしょー!捕まって、不起訴でしょー!

「だから、そんなドラマみたいな展開が仮にあつたとしてもよ?あの人はそんな悪人には見えないから、お前を傷つけたりはしなさそうだな、って話。」

「・・・だって、ドラマって、一番意外な人が真犯人・・・。」

私は俯いて呟いた。

すると拓也は苦笑して、ポン、と一回、軽く私の頭を小突くと言った。

「じゃあ、あの人犯人じゃないじゃん。だってすっげー胡散臭いもん。」

・・・そっか。

私も顔をあげて、拓也と一緒に笑ってしまった。

胡散臭いけど悪人じゃない。
ふふ。変な人。

Here we go 3

調べた資料をつき合わせて、今後の予定を話し合い、お店屋さんを出たらもう10時をまわっていた。

二人で駅まで向かう。

月曜の夜だからか、こんな遅くまで飲み歩いているおじさん達もあまりいない。駅の構内は比較的空いていた。

拓也は明日も朝一から専門学校の講義があるらしい。

・・・ごめんね。勉強が大変な時に。

という、素直な一言が言えない。

なのに、忙しい彼を無理やりつき合わせている自分に、ひどいイラつきを感じてしまった。

それに加えて、私は、彼の要求に応える事が出来ないし・・・。

そんな私の罪悪感を、彼はしっかり感じ取っている。

「あー、働いた。この労働対価は、何で返してもらおうかなー。」

「・・・拓也、私ね・・・山下から連絡来たら知らせるから。」

私の台詞が終わらないうちに、かぶせるように拓也が言う。

そんな相手の気持ちがあつて、私はつい、顔をしかめて拓也を横目で睨んでしまった。

拓也は、まるでそんな事には気付かないかの様に、電車のホームに突っ立っている。

でも、電車が来るであろう方向を向いている拓也の横顔は、私と同じようにやつぱり、

少し居心地の悪そうな、バツの悪そうな顔をしていた。

電車がやってきた。

拓也はもう、私と同じ所には帰らない。

「じゃ、おやすみ。」

そう言って私を振り返る彼の黒い瞳が、
優しげに、切なげに、少し暗い影を落としていて、私は胸がグツと詰まってしまった。

軽いキスくらいなら、いいかな？

とか思ってしまうのだけれど、寸での所で思いとどまる。

だってそれは、愛情じゃなくて同情。

拓也はポケットに両手を入れて、少し口を尖らせて、背中を丸めて下を俯いている。

その姿は、見慣れた彼の甘えた仕草で、

それに流されて3年も過ごした事が、こういう結果を招いたのだから、と自制をする。

母性本能だけじゃ、足りない。

本当は、

瞼まぶたに落としてくれるそのキスも、

耳元で囁かれるその声も、

筋肉質なその体も、

私の肌の上を何度も滑るその骨ばった手も、

抱きしめられた時に香るその匂いも、

私の上で見せる紅潮して濡れた男らしい顔も、

みんな好きだったんだけどね。

電車の中で、拓也の言った事を思い出した。

「お前が一体、事件のどの場面を見たのか、って事を調べるのも重要だけだし、

お前が見た事を何故みどりちゃんが知ってるのか、って事を調べるのも大切だよな。

どっちかってえと、後者の方が難しそー。」

あのトボケたタレ目に直接訊けねーかな、それが一番手っとり早いのに、とぶつぶつ言っていた。

私達が図書館で調べた内容は、夏に拓也が調べた内容と大差なかった。

新情報と言えば、目撃者が生徒二人であった事。

それと、被害者の少年は不良であったばかりでなく、加害者であった少年Aを日頃からかなり激しく苛めていた事。

「豚はクセーから豚小屋に帰れ」とか、そういった類の台詞を仲間と一緒に、大勢の前で彼に浴びせていたらしい。

恐喝なども、行っていたのだろう、と。

人気のない校内で彼が一人泣き声を押し殺している姿を、それまでに何人かの生徒が目撃している。

従って事件当初は、少年Aが恨みを持って被害者を殺害したのではないかと疑われた。

しかし事件を目撃していた生徒二人が、それを否定したらしい。

控えめな新聞記事と違って、週刊誌はセンサーショナルに事件の背景を書き立てていた。

苛められていた少年A。

私は、小学校の時に軽い苛めにあった。苛めともいえないほどの、軽いつまはじき。

それでもあの時は、世界が窒息しそうに悲しくて、孤立していた時は、胸がドキドキして顔が痺れて、神経全てが麻痺するようだった。

まるで音も感覚も出口も無い、暗闇に閉じ込められたかのような、悲しみと絶望感があった。

彼は、どんなに、辛かったんだろう。

碧さんは、自分が慕っていた隣のお兄さんが、実はひどい苛めをしていた事を知っているのだろうか？

「さっすが吉川君。使えるねー。」

その夜、家に帰って奈緒に電話で報告すると、奈緒は非常に満足げに言った。

きっと自分の人選にご満悦なのね。

確かにね、適材だけどね、ストレス滅茶苦茶溜まるのよね、お互いに。

「・・・まあね。」

「彼も必死だねー。最後のチャンスだものねー。うひゃひゃ、隣で見て、からかいたーい。」

「・・・奈緒、いつかやられるよ？あの子、相当根に持つタイプだから。」

「いやーん。暗い男だねえ。」

「・・・やっぱ奈緒、拓也に恋愛感情、あんまりないかも・・・。だって、すっごい、楽しそう・・・。」

自分の立場を棚に上げて、あの子に同情したくなるわ……。

「金曜日の飲みね、塚本さん、……彼女連れてくるんだって。」
唐突に奈緒が切り出した。

私はその内容よりも、急な話題転換についていけなくて、一瞬間を置いてしまった。

「……そつ……か。まあ、あの人なら、何人かいてもおかしくなさそう。」

「綾香、シヨック？」

「……別に。それほどでもない。」

もとから、彼との間に何かを期待できるような間柄ではないから。それくらいの事は分かっている。

「そつかあ。まあ、でも部外者が混じったから、例の事件のコト、話さなくても済みそうじゃない？よかったね。まだ準備段階だものね。」

奈緒がさらっと、普通に言った。きつとかなり気を使ってくれている。

そうよね。彼女連れならきつと、その彼女から離れて私とややこしい話をする……なんてコト、出来ない筈だもの。

そう考えて、……あれ？と思ってしまった。

・・・ひよつとして碧さん、私と例の事を話すのを避ける為に、彼女を連れてくるのかな・・・？

・・・まつさかあ。どれだけ自意識過剰なのよ、私は。

額に残った碧さんの唇の感触と、頭を撫でられた彼の手の感触と、苦笑した彼の綺麗な笑顔が、頭の中でチラチラチラチラ、追いついてもしつこく戻る蠅みたいに飛びまわってる。蠅はあんまりかしら。

蠅じゃあ、胸はこんなに切なくならないものね。

こうなったら吉川氏も呼ぶ？と奈緒に聞かれて、まあ、聞いてみるよ、と曖昧に答える。

明日は私も企業の就職セミナーがあるもの。もう寝よう。

何ですか?!それは

金曜日。夜8時。

面接を終えて、時間潰しに大学に戻って就職課に籠もってて、待ち合わせ数分前に指定されたホテルのロビーに来たら、そのラウンジに、その場の雰囲気とピッタリ合う男性が一人、ソファーに座っていた。チャコールグレーのコートを着ている藤田さんだ。

「こんばんは、藤田さん。」

振り向いた彼を見て、一瞬呆けてしまった。

わお。今日の藤田さんはメガネだ。メガネ男子だ。激似合っている。萌えー。

「やあ、こんばんは、日下部さん。お久しぶりだね。」

「はい、お久しぶりです。まだ、他は誰も?」

「うん。僕が気合入れて一番乗りみたいだね。時間が空いたので、少し早めに来たんだ。」

自然と彼の隣に腰かけると、フワっ・・・と艶やかな香りが漂ってきた。

「あれ?藤田さん、香水付けていますか?・・・いい香りですね。」

「え?」

彼はビックリしたように私を見て、自分の腕を上げると、肘のあたりをクンクンと嗅ぎだした。

そしてチョッピリ苦笑して言った。

「ああ、これ。ごめんね。さっきまで女性と一緒にだったから。その時移ったんだな。」

・・・うわ。想像ついちゃう。

「・・・なんか、藤田さんが言っと、大人・・・。それって、彼女さんですか？」

「まあね。」

おっと、さらりと肯定。イチイチ洗練されているなあ。

落ち着きがあつて、穏やかで、こんな人の彼女はやっぱり大人の女性なのでしょうね、と勝手に想像。

「いいですねー。美人ですか？」

「うん。みんな美人だよ。」

「・・・みんな・・・？」

「うん。女性は皆、綺麗だよな。」

・・・えつと、あれ？

・・・なんだか、軸がズレてきた気が・・・。

「・・・藤田さんって、何人が彼女がいるんですか・・・？」

「そんな、何人もいないよ。数人だよ。」

絶句。

・・・奈緒が、「あんなの」と言っていた理由が、分かる気がした・・・。

「このあたりで碧が接待をやっているらしいんだ。だから・・・おや。」

私が固まっているのを普通にスルーした藤田さんは、首をあげて辺りを見回してから、少し驚いたように一点を見つめた。つられてそちらを見た私も、自然に言葉が出た。

「あ、碧さん。」

見ると彼は、中年と壮年の間くらいの男性、中肉中背だけど黒光りしてなんだかオヤジの匂いがこつちまで漂ってきそうな男性と、一緒に歩いている。

見るだけで匂いが想像できるなんて、多分、清潔か不潔かの問題ではなくって、あの品のない笑いが原因なんだろうな、って思うんだけど、

どうしてあの人は碧さんの背中や腰をさつきからバンバン叩いているんでしょう？

ああ、碧さんの背が高いから、肩まで手が届かないのか、って、いくらなんでもスキンシップ多すぎない？腰はないでしょ、オヤジ様。

しかも、遠目から見ても、碧さんが、その・・・引いている。

私も藤田さんもそれから目が反らせず、ポカンと開かれた私の口から出た言葉は、なんとも間抜けな疑問形だった。

「・・・何、やってるんですかね？あれ・・・。」

「接待、だろっうなあ。」

接待？あれが接待？ああ終わったのね、接待。大変そうね、接待・・・。

「ほう。」

藤田さんは少し目を丸くしてその様子を眺めると、感心したように続けた。

「ほう。」

右手を顎にやり、得心したように呟く。

「なるほど。」

・・・議員さんなんて接待ばかりやっている、っていう凝り固まったイメージしか持っていないんだけど、そんな所の秘書をやってる藤田さんでも、そんなに感心する所があるのかしら、あの接待？

「先日、休日返上で行った接待で、相手にやたら気に入られて困っている、と話していたが、成程こういう事だったのか。」

休日返上の接待って・・・あの夏の日の事？電話で話してた？

「一人・・・でやるものなんですか？接待って。」

「いや、多分あれは、生贄だろうな。」

「いけにえ？」

「こういう時に純ちゃんがいれば良かったのだろうけど・・・。」
「いけにえ？純ちゃん？どういうこと？」

「日下部さんじゃあ、あまりにも可哀そうだし・・・。」

「・・・さつきから、何の話ですか？」

すると藤田さんは、メガネの奥の切れ長の瞳をキラッと光らせて、少し笑った。

「王子様を救出する話。」

そして彼はスラツと立ち上がると、こちらを振り返って、私のソファの背もたれに片手を乗せる形で体を傾け、私に顔を近付けると、とても素敵な笑顔でニッコリと微笑んだ。

「いいかい？ 日下部さん。今から面白い物を見せてあげるけど、あまり誤解しないようにね。僕も不本意ながら行おこなっている、と言う事をお忘れなく。」

「？」

私が無言で眉間にしわを寄せると彼はクスツと笑い、ロングコートひるがえを翻して優雅に碧さん達の方に近づいて行った。

「……んと、ちょっと近くまで移動しよう。
なんか、すごい見モノが始まる気がする。うん。」

「碧。」

藤田さんが声をかけると碧さんが振り返った。

ビックリしたような、焦ったような表情をしていて、あ、接待つてやっぱそんなに大変だったんだ、と納得。

「あ、先輩。」

「一時間も待たせるなよ。俺をジラすのがそんなに楽しいか？」

「はい？」

「こんばんは。不躰に申し訳ございませんが、そろそろこの男を僕に返して頂いても構いませんか？」

ニッコリほほ笑んで、藤田さんがおじさんに向き直る。

突然の藤田さんの登場に、取引先のおじさんも少し呆気にとられて

いるみたい。

「誰だね、君は。」

「彼の、パートナーです。」

碧さんの目が点になって、隣のおじさんの目が点になった。つていうか、私の眼なんて無くなったよ！！

「・・・これはまた。なんだ塚本君、君はやっぱり「はいいい??」?」

大驚愕の碧さんは、すこしタレ目の綺麗な瞳と形の良い唇の両方を呆けた様に入れて、藤田さんとおじさんとを交互に見ている。大変、動揺が伝わってきますね、はい。

「随分仲がいいのかい?君達は。」

おじさんの・・・つていうか、もはやオヤジの顔が、なんだかますます品が無くなってきて、少しバカにしたようにニヤニヤ笑っている。何を想像しているのよ、おじさんは。

なのに藤田さんはすごく涼しい顔して、オヤジとは対照的にとっても品のある笑顔を見せた。

「はい、とつても。ご覧になります?」

「はい??」

事態についていけない碧さんが啞然とした表情で藤田さんを見た、

その瞬間、なんと、

藤田さんは碧さんの腰を片手でグツと引き寄せ、ビツクリする間もない碧さんの顎を傾けると、

ぎゃあああー！！チューしたっ！！チューしたああ・・・！！
長い長い長いっ！！あれはベロチューだった・・・！！
え？マジで？ホントに？ってやってるし！！

私はもう、ここ10年最大の驚きで、口から内臓が飛び出たぞうつて言ってる場合じゃないけど、なんだかチョツピリいいものを見ている気がするのは何故？

「・・・なんつつつだ、あれ・・・。」

気付くと拓也が私の斜め後ろに立っていて、つぶらな瞳を最大限に見開いて、私に負けず劣らず驚愕している。

「・・・あの人達って、そーだったの・・・？」

ホテルのラウンジ。

割と結構な人達が、長身イケメン二人のキスシーンに硬直していた。

「と言う事で、今晚はこれにてご勘弁を。失礼致します。時間が押しているものですから。」

唇を離した藤田さんが、おじさんに向かってニッコリ笑った。
おじさんも我に返ったように言っている。

「・・・お、おう。それでは塚本君、また後日。」

「今後とも、こいつを宜しくお願ひします。こいつは色々な事に巻き込まれるものですから、僕の腕っ節は強くなっていく一方なんです。」

最後の台詞を言う時、メガネの奥の藤田さんの瞳がチョッピリ暗く光って、

それを見たおじさんは気押された様にビビっていた。

あ、碧さん、固まってる。白くなってる、燃え尽きてる。灰になってる。

「あ、吉川君、来ていたんだ。お久しぶり。」

微笑んでこちらにやって来る藤田さんと、その後から意識無く燃えカスとなつてついてくる碧さん。

・・・煙が見えるようよ・・・。

「・・・あ、はい。ご無沙汰してます・・・。」

引きつった笑顔の拓也が弱冠後ずさっている様に見えるのは、絶対気のせいじゃないわよね。

すると藤田さんの向こうで、燃えカスが声をあげた。

「……俺……男とのファーストキス……。」

「貞操の危機から救ってやったんだ。感謝しろ。」

「……舌まで入れられた……。」

「あれくらいやらなきゃバレるだろ、ソッチ系の人間には。しつこい取引先相手には、いい口実だ。」

「……。」

「まさかエロ親爺とは思わんかったが。でもまあ、しばらくは大丈夫だろ。だから感謝しろ。」

「……。」

ぷすぷすぷす。カスまで燃え尽きましたよ、この人。

「そろそろ残りの二人も来る頃じゃないのかな？」

藤田さんが平然として腕時計を見る。

あの、お兄さん、先程からロビー皆の視線を集めているんですが、痛くないんですか？痛くないの？ねえ、刺さってないの？

エントランスの方を、さっきのおじさんがこつちを見ながらスゴスゴと、ビクビクと、

……ちよつと羨ましそうにしながら帰って行くのが、やたらと気になるし。

私、今この集団の中で紅一点の逆ハ―状態だけど、ビジュアル的には邪魔者扱いよね、きつと。

拓也、あんたが華を添えているのよ。この場合は、皆の妄想にあんたは入れられているのよ、間違いないわ。

そんな私の脳内を知らない拓也が、碧さんを指さして言った。

「……この人、再起動きかないんじゃないですか？」

「じゃあ、電源落として、しばらく放置しよう。」
ぞくり。

藤田さんは相変わらずニッコリ笑って答えたのだけど、もうダメ。この人の笑顔って怖すぎる。背中が凍るの、寒いよっ。

絶対、敵に回したくないよお……。

何ですか！？それは 2 (前書き)

今回、会話はっかり・・・。

何ですか！？それは 2

ふ、藤田さんってさ、目的の為には手段を選ばないタイプっぽいよね。

そうだよね、きっとそうだよね。

でなくても私達ってさっきから注目を集めているし、ほら、私って普通の女の子だし……。

「藤田さん、あの人あんなに離れてってますよ？」

ひえっ拓也がチクったっ。

「ひどいなあ、日下部さん。誤解しないで、って言ったのに。」

きゃあああ、その笑顔が怖いんですってばっ。

誤解なんてしていませんっあれはあの場限りのオイシイ演技だって事はわかっていきますっ。

ただ、私ちよつと……。

「あの人の性格が怖い……。」

「うん、それはね、しょうがないの。これが先輩だから諦めて。」

あう、碧さんみどりに襟首掴まれるように輪に戻されちゃったよ。

引きつったような苦笑してるけどね、碧さん克服するの早いですね？

そうなるよ、感想なんかを聞きたくなっちゃんいますよ？

麻布にあるお洒落なダイニングバー。

碧さんの彼女だと言う「純ちゃん」は、茶色の髪を巻き毛にした、小柄でお目目パツチリの色白で、

とてもかわいらしい、ふわふわとした感じのお嬢様で、碧さんの横に並ぶと完璧なくらいのお似合いだった。

高校からの付き合いで大学も同じってあたり、私と拓也を連想させ

て、なんとも複雑な気持ちになる。

「こんばんは。よろしくお願ひします。3人ともまだ大学生？いいなあ、純も戻りたいなあ。」

すっごく可愛らしい笑顔でにっこり笑われると、誰だって好きにならずにいられない、そんな感じの人。

「あ、このコが碧くんの話していた奈緒ちゃん？すごおい、モデルさんなの？CMに出るんでしょ？」

うんうん、そんな感じがするねっ、すっごく可愛いねって奈緒のまわりを嬉しそうにキラキラとまわって、
奈緒が柄にもなく赤くなっている。

「あ、碧くんのお気に入りのおヨッシーくんね。可愛い。よろしくね。」

「吉川です。そのあだ名、浸透してないんで是非、本名でお願いします。」

拓也もニッコリ、いつもの営業スマイルで滅茶苦茶カンジがいい。
絶対、満更じゃないわよね、あなた。

「そして貴方が綾香ちゃんね。こんにちはー。碧くんがお世話になりましたー。」

「あ、いえ、とんでもない、こちらこそ……。」

「世界の不思議を発見したいんですって？」

……私は、そこですかい？

思わず彼女の後ろに立つ碧さんと目があうと、碧さんは慌ててわざ

とらしく私から眼を反らした。

・・・まあ、しょうがないわね。

鼻血とか、池ポチャとか、足から流血とか、言われるよりマシだから・・・。

潤んだ瞳が特徴的の、可愛い小柄な純さんが、背の高いちよつぴりタレ目のアイドル系碧さんを見上げる姿は、どこから見ても絵になるカップルだった。

胸にくるチクチクと切ない感覚は、見ないフリをする。

で、そのダイニングバーで、宴もタケナワの折、例のキス事件をなんと藤田さんが口にして（碧さんの彼女の前でよ?!）

それを訊いた純さんが、衝撃を受けた。

「・・・碧くんが、藤田さんとキス・・・?」

見る見る間に顔色が青くなっていく。

「・・・うそ・・・。」

可憐な瞳が揺らいでいる。肩が震え出して、両手で口を押さえ出した。

「・・・そんな・・・なんで・・・やだ・・・。」

あ、これ、この人の許容範囲を超えちゃっているんだ（そりゃそうでしょう。彼氏が男とベロチューしたなんて聞かされちゃ）。

こんなか弱ひつそうな女性を泣かすなんて、碧さんも藤田さんもホントにひどいよ。

見る間に涙が溜まってくる。

どうしよう、あ、泣いちゃう、泣いちゃう……泣いちゃうよ……。

「……純も、見たかった……!!」

……え？

「見たかった！見たかったわ、藤田さんっ。なんで純を待っててくれなかったの？」

え？え？

純さんは、その大きな瞳をますます潤ませて、

「碧ちゃんと藤田さんのキスシーンなんて、美味しすぎるじゃない。そんなキレイなビジュアル、ドラマや映画でも滅多に見られないわよ、ずるいずるい。」

碧さんのシャツの胸を掴み、もたれかかるように彼の顔を覗き込むんだけど、言ってる事がおそろしい。それって涙を溜めてまで言う事ですか？

拓也が私の隣で、本気で怯えている。

「ねえ綾香ちゃん、どうだった？やっぱり素敵だったでしょ？濃厚キスシーンだったんでしょ？」

「もう、いいから純。勘弁してよ。」

「はあ。ええ、確かに見応えたつぷりガツンとありましたが・・・。」

「綾ちゃんも、いいから。付き合わないですよ。」

「ずるいよー。見たかったよー。もっかいやってよー。」

「やるかつ!」

あ、怒鳴った。

この人、弱冠マジで、泣きが入っているかも。

それにしても、「純ちゃん」、何者？

可憐なお嬢様じゃないの？

「よかつたな、碧。これで俺達、公認だ。」

藤田さんが、隣の碧さんの肩に腕を乗せ、必要以上に顔を近づけて笑った（明らかな嫌がらせ）。

碧さんは両手で彼の肩をグイッと押しやりながら、顔を赤らめて嫌そうに言った。

「追い打ちかけるのやめろ、先輩。なんだよヨッシー、そのゲテモノを見るような目つきは。」

「だってそうじゃん。」

「じゃ、そういう目で先輩を見るよ。」

「やだよ。怖いもん。」

・・・だよ。怖いよね。あの人一番、危ないよね。

「お前、そうやって人の不幸を笑ってるとな、明日は我が身だぞ。お前の方がずっと、そーゆー人種に狙われやすそうなんだからな。」

「だけど碧くんは、電車の中で男の人の痴漢にあった事があるわよね。」

純さんがにっこりと口を出す。

「……………」

「よかった、俺、まだその経験、ない。ふふ。」

「でも吉川くんは、高校の時何度も、女の人の痴漢にあっていたよね?」

奈緒がニッコリと口をはさむ。

「……………」

二人の上が、とても暗いよ。重いよ、冷たいよ。

「お互い苦労してるな。」

「うん。でも俺、みどりちゃんみたいには、絶対ならない。」

「…………おまえ……………」

「男は、人生最後の楽しみにとつとくよ。」

「だから違うつつつつてんだろが?」

спан。あ、拓也がどつかれた。

「綾香は鼻血出なかった?」

「出すかっつて突っ込みたいところだけど、正直出そうだった。刺激的で夢に出そう。」

「ほらー！純も刺激的見たいー!!」

「純っ！綾ちゃんもっっ！お願いだからっ!」

「お前も、結構容赦ないな。」

焼酎片手に、拓也が呆れて私を見る。

滅多にない機会なので。前回散々イジられましたので。にっこぞといっつチャンスなんですよ。

お酒のせいで赤みがさした顔をして、拓也が空になった私のグラスにビールを注ぐ。

この子はお酒にあまり強くないものだから、少し眼が潤み始めている。

・・・まずいなあ。酔った勢いで押し倒されたりなんかしたら最悪だわ。

多分、少しは自覚して、私に対してセーブしてくれると思うのだけれど、こればかりは。わからない。

私、誰かと一緒に帰った方がいいかもなあ。

なんて思っていたら私の手元が狂って、というか拓也の手元が滑って、私のビールが倒れてしまい
向かいに座っていた純さんのテーブルをビール浸しにさせてしまった。

「うわっごめんっ。」

「わっ。あっ純さんっごめんなさいっ大丈夫ですかっ。」

慌てて私達二人が立ちあがっておしぼりとかで拭こうとしたんだけど、

当の純さんは呆けた様に座っていて、濡れてしまったワンピースを眺めている。

私はオロオロしてしまった。

「ああー濡れちゃったっどうしよう・・・。」

「大丈夫よー、これくらい平気よー。」

純さんはニッコリ笑ってくれるんだけど、でもだっってそれって素敵

な白系のニットワンピースだし、
ビールでシミになっちゃうよおお。
どうしよう、クリーニングじゃ落ちないかも。

「純さんっトイレにいきましょうっ!!」

私はガバツと立ちあがり、残りの5人が眼を丸くした。

「え?」

「今すぐ落とせば、シミにならないかもしれないっ。さあ、早くっ。」

「

「え、お前いいよ。俺が弁償するから。無理でしょ、もう。」

「それとこれとは別っ。」

私は人差し指で拓也を指さし、ビシツ言った。

「女の子はね、気に入ったお洋服とは簡単には出会えないのっ。大切な友達みたいなものなのよっ。弁償だけでは済まされないのっ。さ、純さん行きますよっ。ワンピースを救ってみますっ。」

「え、あ、はい……。」

私はテーブルを周りこんで純さんの腕を掴むと、無理やり立たせてトイレへと急いだ。

その後ろで奈緒の咳きが聞こえてきたけど、それは無視よ、無視。

「出た、綾香ワールドとパワー。ああなると止められない。」

「普段は割と控えめなのにね。」

と碧さん。

「突然来るんだね。かわいいなあ。」

と藤田さん。

「あいつの中ではストーリーが出来上がっちゃってるんですよ、いっつも。」

と拓也。

「ちよつと！本人のいない所で悪口禁止！！」

私は振り返って4人を睨むと、ズンズン先を急いだ。
わずかに聞こえてきたのは、拓也の屁理屈。

「目の前ならいいんだ……。」

この減らず口っ。いい訳ないわよっ殴るに決まってるでしょっ。
でも今はまず、純さんのワンピースをレスキューしなくちゃっ。

何ですか?!それは 3

トイレに籠もる事10分近く。

「あ、いけるかも・・・あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・あとちょっと・・・」

「・・・ねえ、綾香ちゃん。さっきここを出ていった人、変な目で私達を見ていたわよ。」

「え?ホントですか?何でだろう?」

「・・・何で、でしょうねえ。」

うふふ、と純さんが笑う。

純さんのスカートの中ほどについたビールのシミを落とすべく、立っている純さんの真ん前を陣取り、ほぼ座り込み、

水と石鹼とハンカチとティッシュペーパーを駆使して奮闘している私には、

正直、あまり周りの目は気にならないのです、ここ女子トイレだし。すみません、私、今、純さんのスカートの中に下から手を突っ込んでいます。

うーん、あとちょっとつ、えいつえいつ!

私の気が済むようになされるがままの純さんは、つまりかなりの大人の余裕と思いやりを持った人みたいで、私の肩をポンポンと優しく叩いて言った。

「ありがとう。もうすっかり落ちたわ。本当に大丈夫よ。」

「いえ、あと少しです。させて下さい、もうちょっとだけ……。」
「綾香ちゃんって、本当に真面目なガンバリ屋さんねえ。」

柔らかに笑うその姿は、本当に優しいお姉さんそのもの。私はすっかり心が温かくなった。

これは碧さんが好きになるはずだわ。こんな女性に勝てる女の子は中々いないもの。

やっぱり、美男の隣には最高の美女がいるものなのね。世の中のセオリーなんだ。

完璧な仕事まであとちょっと、と没頭していたら、純さんが口を開いた。

「綾香ちゃん達、帰省先で碧くんと出会ったんですって？」

唐突に例の件の話を振られて、私は少しドキツとしてしまった。

えっと、あの、どう言えばいいんだろう……？

一人で焦ってくる。

なんとなくやましい所があつて、大した事じゃないんだけど手とか繋いじやつたし、つてあれは碧さんの気遣いだっただろうけど、おでことかキスされちゃつたし、つてあれは言い訳出来なさそうで私も弱冠誘っていたような気がするし、つてあれはお酒のせいだからってそれは言えないあうあう……。

「あ、はい……まあ、なんというか……。」

「碧くんは街案内してあげたんでしょ？ナンパ、上手にやれてた？」
面白そうにクスクス笑ってる。

そこには本来「彼女」が持つであろう不安、とか嫉妬、とか疑念、とか、そう言ったモノが微塵も感じられなくて、私は少し驚いてしまった。

流石、長いお付き合いの余裕、ってヤツですか？

突如、ひらめいた。

そうだ、純さんなら答えてくれるかな？

碧さんに質問してもはぐらかされそうな事、長年のお付き合いがある純さんなら何か知っていて、ひょっとしたら答えてくれるかもしれない。

うわ。名案。

そうだ、そうしよう。

私は思い切って、出来るだけ何でも無いようなふりをして、さり気なく聞いてみた。

「あの・・・純さんは、み・・・塚本さんが、帰省した理由を知っていますか？」

「知ってるわよ。昔慕っていたお兄さんが殺された件でしょ？」

あまりの呆気なさに、面喰ってしまった。

あっけらかんと答える純さんに、肩すかしを食った様な気分になる。純さんは楽しそうに微笑みながら言った。

「高校の時から碧くんって、あの通り、明るくって親しみやすくって、皆の輪の中心人物だったのよね。それなのに中学の時はグレて喧嘩三昧だったって噂がたちやうんだから、面白いでしょ？」

グレて……いたですか！？あの人か！！？？

えーっ……ってああ、噂ですね。噂……。

確かに。あの顔で反り込み入ったヤンキー座りって、笑えるかも。
・
・
・
眉毛なしで？

「あの人ね、小学校の時にお母さんを交通事故で亡くしているの。多分、隣のお兄さんの事件のすぐ後に。」

話の流れもトーンも変えずに純さんが続けるものだから、頭の中でヤンキー妄想をしていた私は、一瞬ついていけずにフリーズしてしまった。

え？お母さんが交通事故？

でもすぐに話に追いつく。そう言えば拓也が、碧さんは両親共に他界、って言ってたわ。
でもそんなに小さい時に。

「お隣さんは父子家庭だったらしくって、碧くんは母子家庭で、そんな事もお互い親近感をもっていたみたい。」

母子家庭？！

次々とシヨッキングな新情報もたらされるものだから、私は間抜けな姿勢のまま動けない。

「私の勝手な推測だけどね、お兄さんの事件が頭から離れなかったのは、お母さんの思い出や死と、お兄さんのそれとを、ダブらせていた所があるんじゃないのかな？大事な人を二人続けて亡くしたでしょ。まだ小学生だったし、すごくシヨックだったでしょうね。」

明るく笑って話す純さんの笑顔に、少し悲しげな切ない色が浮かんで見えた。

それが、碧さんのそれと、重なる。

「でもあの通り、碧くんは昔っから明るくて、影なんて殆んど見当たらないけどね。」

そう言ってニツコリと笑う純さんは可愛くて、輝いていて、やっぱりそれは碧さんを彷彿とさせて、

ああ、この二人はどこか似ているのかも。こうやって二人で時を乗り越えてきたのだろうなあ、と
ただただ、眺める事しか出来なかった。

私の知らない、二人の歴史が、私に迫る。

胸が、詰まった。

「・・・母子家庭、だったんですか。」

「そう。・・・こつから先は、碧くんに直接訊いてね。あの人、あ
あ見えてかなりの照れ屋さんだから、中々自分の事を口割らないと
思うけど。頑張つて。」

そう言つて純さんは私を立たせると、目の前で可愛らしくクスッと
笑つた。

・・・頑張つて、つてそんな、こんな状態で、碧さんと話をしろな
んで、そんなの無理だし・・・。

私側の準備が整つていないつて言うのももちろんあるけれど・・・。

私は少し俯いてしまった。碧さんとダブる純さんの笑顔が見れない。

・・・こんな気持ちで、碧さんと話なんて出来ないよ・・・。
・・・私が入り込む隙、つていうか、入り込もうなんて思っていない
けど、

・・・目の前に立つ事すら出来ないよ・・・あの瞳を見る事なんて
・・・

辛すぎて、苦しくて、出来ないよ。

こんなに、胸が切なくなる、予定は無かった。

「あ・・・はい・・・でも、私、そんなに碧さんと、あ、塚本さんとお話する予定は・・・。」

「あれ？そうかな？でも碧くんは、きっと綾香ちゃんと話したいと思うわよ。」

・・・え？

「・・・でも・・・。」

「うふふ。私ね、今日呼ばれた時、『ああ、安全パイに使われたな』って思ったの。それで面白そうだから来てみたのよ。どんな子が碧くんを悩ませているのかなあつて。」

・・・えつと、・・・あれ・・・？

「会う前から話で、なんとなくどっちか想像ついていたけど、今日見たらもう、絶対そうだって思っちゃった。綾香ちゃんって、たま

んないっ。可愛いもんっ。」

「……え……っ……?」

私が顔を上げると、純さんは悪戯っぽく片目をつぶって見せた。

(ここにもウインクの似合う人がいた。全く、このカップルは。)

「私達、とっくの昔に別れているわよ。大学卒業後、一年も持たなかったもの。」

そのセリフと笑顔に、私はビックリ仰天、ポカン……と口を開ける。

彼女はそんな私にお構いなく、とても可愛く、キラキラと言った。

「それに私、今だーりんがいるし?ラブラブなのよねっ。」

いつまでも口を開けて突っ立っている私は、今、最高に間抜けな顔をしているに違いない。

何ですか！？それは 4 (前書き)

やっぱり、会話ばかり・・・。

何ですか！？それは 4

「じゃあ、車出すから。12時半でいいかな？」
「すいませ」じゃじゃーんっ

奈緒達が話している所に、純さんが飛び込んだ。

私はその後ろから、未だ脳内整理できず、って感じでついて行く。

「見て見てー、綺麗に落ちたでしょー。」

純さん両手をあげてバンザイ、で、みんなに正面ご披露。

「うわ。ホントだ、跡がない。」
碧さんみどりが目を丸くする。

「うふふ。綾香ちゃんが一生懸命、神業を披露してくれましたーっ」
「神業って、一生懸命披露するもんなの？」
屁理屈男が小声で呟く。

「すげー、どうやったんだ？」
お酒が入った碧さんは、すっかり姿勢も口調も態度も砕けている。
とても、色々背負っている人には見えない。

「こっやってね、お水と石鹸使って、表と裏から、トントントント
ン、とね。」
「表と、裏。」

藤田さんが、真顔で繰り返す。
「そう。表と裏から、ひたすらトントントントン、トントントント
ン……」

「どうやって、裏やんの？」
碧さんが、真顔で聞く。

って碧さん、それ、聞きますか。

「どござって、って、ござってよ。」

純さんが自分の目の前に、手のひらを指を揃えた状態で縦にする。

「これで、スカートの下から手を入れて、トントントント「へえ」
？」

碧さんが、まるで勝ち誇ったかのようにニヤツと笑った。

「女の子が、二人で、トイレの中で、スカートの手を入れて、ねえ？へえー。みーたかったなあ。」

「・・・塚本さんのイメージ、予震無しで直下型に崩れた。」

奈緒が嫌そうな顔をしたんだけど、碧さんは意外にもそれを、皮肉っぽい瞳でさらっとかわした。

「先程たっぷり沢山嫌いやって言う程のリクエストを頂いたんで、お返しです。」

するとこれまた純さんが、あんなに可愛らしい人なのに、

ニヤ〜と碧さん以上に（やっぱり似ている、この人達）皮肉っぽい顔して答えた。

「そのお返し、貰った。純のリクエスト聞いてくれるんなら、見せてあげるよあ。見たいなあ、藤田さんとのチュウ。」

「……………」

「っちよっ、純さんっ、当事者の確認無しに何、貰ってるんですかっつ」

「あ、でもあたしも見たいな。綾香、やって。」

「俺はもう見たくないけど、女の子が屈んでスカートに手を突っ込んでいる所は見たいな。」

あんだ達には訊いてないっ。

純さんが、藤田さんを見てにっこり笑った。

「多数決？」

「却下。」

藤田さんが、につこりと言いつつ放った。

よ、よかった、魔王と利害関係が一致してて。この人なら一人でも拒否権も発動権も持っていそうだもん。

「なーんだ、つまんない。面白いのに。」

そういつて唇を尖らせた純さんは、なんと、拓也と奈緒の間……つまり私の席に座ってしまった。

「お席こうかーん。可愛い子達に囲まれまーす。うふふ。奈緒ちゃん、ヨッシーくん、よろしくね。」

「吉川です。」

え、ちよつと、そしたら私は、ひよつとして……。

「どうぞ。」

何をどう思ったのかは知らないけど、碧さんが端に横移動して、私はなんと、元ヤンと（違うか）魔王に挟まれて座る羽目になってしまった。

「……ども……。」

イケメン二人に挟まれて座っているのに、ああ、随分と息苦しい。

一般人には空気薄いよこのポジション。

特に碧さんが、私の周りの酸素を殆んどさらっているに違いない。

息苦しさを8割方はこの人のせい。

おまけに私の体内にアドレナリンを大放出させているのも、この人のせい。

それを、逆隣の魔王に見透かされそうで、怖い。

と置いていたら、私を見つめる拓也と目があった。

「で、なんのお話してたのー？」

純さんが奈緒を見て訊くと、拓也が私から視線を外して純さんを見て言った。

「藤田さんが、田中さんのマネージャーをするんですって。」

「ふえ？」

純さんがビックリして、拓也を見た後奈緒を見て、そして藤田さんを見た。

藤田さんは少し笑って言った。

「別に、単なるお世話係だよ。むしろこちらの我儘でね。ね、田中さん。」

「そんな事ないです。お世話になります。」
頭を下げる奈緒。

「どう言う事？」

私が奈緒に聞くと、奈緒がチヨッピリ苦笑した。

「うーん、マネージャーみたい、っていうか、なんというか。

私、今回は引き受けたけど、普通の会社員したいし、あんまりこういうの興味ないから、事務所みたいの入るのは、いいかな、と思ったの。面倒臭そうだし。」

この仕事は、続けないって事？

前もそう言ってたけど、本当にそれでいいのかな？ やってもいないうちから決めつけちゃって。

「そうしたら藤田さんが、自分も、こういう業界に人脈を広げたいから？ いい機会なので？ 経験してみたいんだって、マネージメント。こっちとしても、たった今回限りとはいえ、プロの集団に言い様にされるよりは、大人の、しかも社会経験が豊富で頭が切れる人に間に立ってもらった方が、安心かなあ、って思ったのよ。」

「それは光栄。頑張るよ、頭が切れる様に。」
藤田さんは上品に、優雅に、完璧に微笑んだ。だからそれが怖いんです。

「あ、しかもなによりね、うちの親が大喜び。地元の名士の藤田家の坊ちゃんに世話になるなんて、繋がりができちゃうなんて、って感じで、まるで娘がその家に嫁ぐかのような舞い上がりよ。」

すると純さんがにこっと笑って藤田さんを見た。

「すっごあい。だって、先輩。どうする?」

「嬉しいな、喜んで。でも僕には勿体無さ過ぎて、ご両親に申し訳立たないよ。」

「だって。奈緒ちゃん、どうする?」

「お世話になります。でもお嫁には行きません、ごめんなさい。」

「そうだよ、奈緒ちゃん。先輩んとこ嫁に行くのは、普通じゃ全然無理だぜえ。」

碧さんが私の隣で、テーブルに片肘をつきながら藤田さんを見てニヤニヤ笑った。

「お腹ん中、真っ黒だしな。」

「常に何か、企んでいそうですね。」

え? ちょっとまって? 今誰が言った?

・・・私?! 私?! わ、私だーっ!!

しまったーっ。この口がっこの口がっ。ツルっと、ステンっと!

慌てて両手で口を押さえるけど、時既に遅し。皆が私を見て、そしてまあ、藤田さんを見た。

藤田さん、極上の笑顔。素敵です。後ろ、吹雪いています。

「企むなんて、ひどいな日下部さん。そんなことしないよ?」
「ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ許して下さいっ。」

「・・・おつまえ、怖いもの知らずだな・・・。」
拓也が心底呆れた様に私を眺めた。

随分と盛り上がって2次会の話も出始めた時、隣の碧さんがスツと立ち上がってどこかに行った。

吐きに行ったのかな?とか思っている間に、テーブルはますます賑やかになる。

見ると、拓也と純さんと奈緒でとても意気投合していた。

次はなんとかバーだー、おー、とかも言っている。

拓也がすごく陽気になっちゃって、だいぶアルコールがまわっているらしい。

「ちょっと、拓也、明日も朝、早いんじゃないの?」

ほっとけばいいんだろうけど世話にもなっちゃってるし、つい心配して口を出してしまった。

「んー。だいじょーぶーよー。」

「・・・大丈夫じゃないじゃん。明日テストあるとか言ってなかった?」

確か、専門学校のテストが午前中に、とかって。

「へーきだよー。なに、送ってくれんの？」
目の周りが赤くなって、潤んだ瞳でいきなり、見つめられた。
ニヤニヤ笑ってるのに、目が、笑ってない。

「……それはっ……。」

普通、男は女に送られないだろっとか、そんな下心満載の台詞を人前で言うなっとか、この場に碧さんがいなくてよかった、とか、色々掛け巡って、結局言葉に詰まってしまった。

すると拓也はプイッと視線を反らして、皆の方を見ながら声を張り上げた。

「冗談です。あなたにはカンケーありません。だいじょーぶです。」

「ヨッシーくん、明日テストあるのお？大変だねえ。」

「受験生に土日はないですよ。」

「純と一緒にだあ。純も明日仕事あ。平社員に土日はなあい。リストラのばかやろう。」

再び盛り上がり始めた。

「……純さん、何の仕事してるんですか？」

小声で隣の藤田さんに囁くと、彼はクスツと笑って言った。

「総合商社の総合職。碧と会社は違うけど。」

「えっ……女性の総合職が商社にもいるんですか?!」

「純ちゃんはお見えて、バリバリのキャリアアウーマンだよ。」

「……見えない。そうは見えない。」

むしろ、可愛い、柔らかかなお嬢様に見える。

私は、拓也達と楽しそうに騒いでいる純さんを、まじまじと見つめてしまった。

・・・エリート東都大を出て、碧さんと同じ商社。何から何まで、同じ道をたどっている二人。
行きつく先まで、同じなんじゃないかしら？

同じ笑顔を持って、同じ雰囲気振りまいている二人が、私には、運命のパートナーのように見えた。
例え今は、少し間が離れていようとも。
その道は、近い将来で、もう今から重なっている。矛盾してるけど、それが見える。

やっぱり。私なんて。無理だわ。

私は胸の中で、一人呟く。
何が無理？何をしようとしていたの？
何もしてないわ。だって最初っから分かっていたじゃない。

私と、碧さんの間には、未来さきに繋がるモノはないって。

「・・・私、お手洗いに行ってきますね。」

実は自分でも情けないくらい、予測不可能な場所で涙腺が緩んでしまう私は、

お酒のせいなのか急に、喉に熱いものが込み上げて来て、さり気な

く、でも慌てて席を立った。

藤田さんの視線を後ろに感じながら、死角に入る。

トイレで誰かに見られるのも嫌だから、少し外の風に当たってこよう。

のぼせた頭も感情も、冬の寒さで一気に冷めるはず。

深呼吸とも、ため息ともつかないものを繰り返しながら、私はお店のエントランスを出た。

しばらく迷ったけど、人気のないビルの通路にそのまま立っているのもなんだか目立つ気がして、

目の前のある、ビルの非常口から外に出た。

ヒヤとした空気が肺に入る。心地いい。

と、思ったら、視界に人影が入った。

まさか人がいるとは思わなかったので、ビクツとして見ると、それはなんと、

碧さんだった。

タバコを手に、彼も目を見開いて私を見つめて、立っていた。

誘って、惑わす

二人で、呆然と、言葉も無く見つめ合ってしまった。
お互い、固まって動けない。

「・・・あ、えと・・・。」

「あれ、綾ちゃん。」

碧さんが、ビックリした表情から我に返ったように、口を開いた。
それから、手にしたタバコを携帯灰皿に押しつける。

「別に消してくれなくてもいいのに。」

「マナーだからね。」

一瞬の、沈黙、再び。

私は、俯いてタバコを消している碧さんに、あまりの偶然に出くわした気まずさも手伝って、口を開いた。
だって、何だか、私、追いかけてきたみたいだし。

「碧さんは、何でここに・・・?」

彼はまだ俯いてタバコを消しながら、少し微笑んでいる。
タバコって、消すのにそんなに、時間がかかるものなの?

「俺? さっき支払いを済ませて、そしてここで、ちよっと一服。」

そう言って、やっと顔をあげてこっちを見た。

その笑顔は、やっぱりいつもと同じで、綺麗で屈託がない。

「綾ちゃんは？どうしたの？」

何て、答えよう？

貴方の事を思つて、涙が出そうになつたから、ここに逃げてきました。

なんて言つたら、どうなるんだろう？

「……ちよつと、……酔い覚ましに……。」

実際、酔い覚ましに、一人抜けて外に出る人なんているんだろうか？
下手な言い訳に、一人で突っ込む。

そんな私に、或いは私の台詞に、大した注意を払わなかつたのか、
碧さんは当り前のように微笑みながら言葉を続けた。

「どう？元気？」

「うん。」

「就職活動、うまくいつてる？」

「……わかりません。結果待ちなんです、色々。」

「そうか。本命はどんな所？」

「願掛け中なので、碧さんにも、言えません。」

「そっか。上手くいきますように。」

パンパン。

「何やってるんですか？」

「お月さんに、願掛け。」

「お月さまっってお願い事を叶えてくれるんですか？」

「星に願いを、って言うじゃん。」

そう言っつて、いたずらっぽいやつで、ニヤツと笑う。

「綾ちゃんが、ミステリーハンターになれますように。」

「・・・まだそれをひっぱる・・・。」

「ツボにハマったもんで。」

からかう様な笑みを含んだその表情に、いつものペースを取り戻して少しホツとした私は、

碧さんの隣に少し近づき、彼と同じように非常階段の壁にもたれて、彼を見上げて話を続けた。

「碧さんは、仕事面白いですか？」

「おう。面白いぜ。まだペーパーだけどな。」

彼が楽しそうに、喉の奥でクツと笑う。

「先輩のパシリみたいにコキ使われる事もしょっちゅうで、メンドくせー書類とか回されるし、たまに出張が入るとね、空港ん中、走らされるんだ。」

明るく話す彼の様子は、生き生きと仕事をこなす青年、を体現している。

長身でスレンダーな体つきと綺麗な横顔から、男性の自信と、少しの色気が感じ取れた。

「学生の際は、国際空港内を走っている商社マンを見てかつこいな、って単純に思ったんだけど、実際なってみると、カッコいい所でない。マジ、忙しい。」

初めて目にする、仕事の事を語る彼。

そんな彼に、私は迂闊にも見とれてしまった。

いつも前を向いているのは、この人の方かもしれないな、なんて思っているから。

すると、彼が私に視線を落とした。

私は慌てて、目を反らした。

「さっき、純さんから色々聞きました。」

「色々って、何を？」

「・・・碧さんの事。色々。」

「・・・何だ、それ。例えば、どんな？」

「・・・例えば、・・・。」

例えば、何て言えばいいんだろう。

自分で切り出しておいて、答えに詰まる。

私は、何を言いたかったんだろう。それとも、何を聞きたかったんだろう。

自問自答をしたいのにな、自答が得られない。沈黙に焦ってくる。

聞きたい事は、相変わらず山ほどある。

言いたい事も、本当は山ほどある。

続いてしまふ、無言。私は黙って彼を見上げた。彼は黙って前を見ていた。

綺麗な瞳の上に、長い睫毛が影を作っている。

何を考えているのか分からない、無表情な、眼。

あの瞳は触れられるのだろうか。ふいに、そう思ってしまった。

小さい頃に集めたビー玉のように、私の手に入れられたら。大切な宝物にするのに。

碧さんが、不意に私を見つめた。

ドキンとする。なのに、視線が外せない。

「そういう眼をしてさ、こっちを見ないでよ。そう言っただろ。」

そう言った碧さんの表情は、前とは違って笑ってなかった。

仕事中は整髪剤で上げていた彼の長めの前髪が、何筋か落ちて額にかかっている。

初めて会った時はプライベートで、まるで学生の様なカジュアルで可愛い感じもしたけれど、

今はそれが、大人の男性の雰囲気を漂わせている。

落ちた前髪が、妙に色っぽく感じた。

その前髪の奥で見え隠れする瞳は、今まで見た事の無い、暗い色をたたえていた。

少し怖い、と初めて思う。

暗くて、強い光。

この人は、実は心の奥に、情熱を隠し持っている人なのかもしれない。

少し悲しみを伴う尖った情熱を、意志の強さで飼い馴らしている、そんな気がした。

「・・・触れずに、守って、・・・何も言わなければよかった。」

碧さんの眉間に、少し皺がよった。

「・・・そんな気に、させる。」

そう言って、ゆっくりと、私の頬に手を伸ばす。

私は彼の、初めて見せる刺すような眼差しから、目が離せなかった。闇を含んだその表情が、いつもの彼を余計に、綺麗に見せた。

彼の親指が、私の唇をそつと押す。

私の鼓動は、一気に速くなった。

「なのに、触れずにいられなくなる。」

彼の視線と私の視線が、絡み合って離れない。体が麻痺した様に、

視線が外せない。
どうしよう。

私が口をこうとしたら、彼の親指が少し、舌に触れた。

「……守ってくれるんですか？」

私はそう言って、彼の手をそっと押しやった。

彼はその押しやられた片手を、空中に止めたままでいる。だけど、瞳は私を見つめたまま。

やがてその親指を自分の口元に持って行って、その少し薄い唇をわずかに開き、

私と同じように舌先で少し、舐めた。

「むしろ、逆かも。」

彼の口の端がわずかに上がって、突然、挑戦的な表情をする。私は鼓動が止まるかと思った。

彼は手を伸ばして、柔らかく、髪を愛しむかの様に、私の頭を撫でる。

そして彼の瞳が怪しく揺れた、と思った瞬間、私は引き寄せられるようにグッと抱きしめられた。

私の頬に、彼の胸が当たる。

タバコの匂いと一緒に、彼の香り、そして心臓の音が伝わってきた。

動く事が、出来ない。
彼も、身動き一つしない。

時が止まった様な、とはこういう事を言うのかもしれない、と痺れた頭で考えた。

やがて上から、彼のくぐもった声が聞こえてきた。

「・・・あんまり姫を引き留めると、ナイトが痺れを切らして乗り込んで来るな。」

囁くような、掠れたような、誘うような、声。

私は彼の胸の中で、飛び出しそうになる心臓を抑える事で必死だった。

ようやく呼吸を整え、振り絞って声を出す。

「・・・そうしたら、どうするんですか？」

しまった、試すような事を言ってしまった。

一瞬、間がある。

その間にも彼の呼吸と彼の香りは、私の中で更に熱を持ってまとわりつく。

私の自由を、奪っていく。

「・・・姫は、貰った、と言ってみる。」

そう言った彼はやっと力を緩め、腕の中にいる私を覗き込んだ。

その綺麗な瞳には、潤んだ黒さの奥に切なさがあり、闇があった。私を捕らえて離さない。

もう自分がここから抜け出せない事を、体で感じた。

まるで獣に睨まれた小動物のよう。この獣は、美しすぎて、甘すぎる。

「・・・俺は、悪者？」

鼻先がほぼ触れるくらいの近距離で、彼が私を見つめて囁く。

彼の吐息が、私の唇にかかる。

私は自分の心臓の音がうるさ過ぎて、彼の声以外が聞こえない。息をする事もままならない。

「・・・それは・・・まだ、わかりません。」

「それなら、」

彼の視線と私の視線が外れた。

それは、彼が更に顔を近づけてきたから。もう、唇がほぼ、私のそれに触れかかっている。

その状態で、彼はさらに甘く、甘く囁いた。

「・・・これは、どう？」

「・・・悪者、なの？」

「・・・試す？」

彼の片手が私の肩に、もう片手が私の後頭部にまわされた。

最初は私の口をついばむようにそつと、そして次に舐めるように、そしてすぐに、私の口内のすべてが絡み取られてしまった。ゆっくりと角度を変え、何度も、何度も、何度も、胸の中に隠し持っていた情熱を、まるで私の体内に流し込むかのよう。

私の体の奥に、火をつけるかのように。

彼のキスは、優しく、激しくて、甘くて、頭の芯が、溶けていく。

頬に触れる彼の呼吸は、私の中の痺れを更に増幅させる。

彼の両手が私の耳たぶから首筋を、ゆっくりと這いまわる。指先でツツ、と撫で上げる。

それは私の体をぞわり、と粟立たせて、彼の舌があまりにも熱くて、

私は、自分の足で立っていられなくなりそう。

やがてゆっくりと唇を離すと、お互いに眼を合わせた。

彼は眼を細めて私を愛おしそうに見つめ、それから照れたように苦笑し、再び私を軽く抱きしめた。

「あーあ。やっちゃまった。我慢するつもりだったのに。」

そう言って、一瞬その腕にグツと力を込めると、次の瞬間パツと離

された。

見ると両手を軽く上げて、お手上げ、のポーズ。

「ダメダメ。これ以上いると、俺、本当に危険人物。離れます。」

そしてニコツと、いつものあの笑顔で綺麗に笑う。

「先に戻りなよ。風邪引くぜ。俺は後から行くから。・・・バレないように、な。」

君のナイトの気が狂わないように、と冗談っぽく、そら恐ろしい事を言われた。

どんな顔して戻ればいいのか？

歩く事もままならないのに。

恥ずかしい様な、恨みがましい様な、後ろ髪が引かれる様な思いで碧さんを見上げた瞬間、私は突然、本当に突然、本日の飲み会最大のビッグイベントを思い出して思わず言ってしまった。

「はっ。もしかして今、私は藤田さんと間接キスを・・・。」

「いいから中に入りなさい。そこじゃないから、悩む所。大事なところが違うから。」

引きつり笑いを浮かべながらも瞬間的に突っ込む所は流石なもので、そんな事言ったらさ、俺だって間接じゃん、と碧さんがボソツと呟く。

え？なんだろう？
と一瞬止まってしまい、

「・・・うおおきゅう・・・。」

私は両手で頬を覆い、確実に日本語ではない、多分どこの言語でもない言葉（か音）を発してしまった。

そ、そういう事ね。

でも、私、今日は誰ともしてなかったし。というか、ここ最近はずななくて無沙汰で・・・。

赤くなって再び立ち止まってしまった私を見て、碧さんが呆れた様に呟いた。

「君って、天然？・・・だよ。愚問だ。スマン。」

いちいち面白いから覚悟しとかないと、って自分に言い聞かせるように言ってるんだけど、一体何の覚悟なのかしら？

Hangoverと余韻

翌日。

私は拓也とカフェにいた。

「……………頭いてえ……………」

「……………だから言ったのに……………」

結局あの後2次会まで進んで、お開きになった時は日付変更線をとつくに超えていた。

拓也のペースはいつになく速く、私が碧さんから離れて席に戻ったあの時には既に、かなり出来上がって半分潰れていた。

奈緒はそれを、珍しくからかうでもなく、憐みをもつて眺めていた。私に向けては、なんとも微妙な、少し笑みを含んでいるように見えなくもない視線を投げかけてきた。

私はと言えば、そんな奈緒の心の内を読む余裕も無く、相変わらず飄々と何事も無かったかのように笑顔で振る舞う碧さんに、ドキドキしながらも無視する事で精一杯だった。

純さんの笑顔にわずかな後ろめたさを覚えた。

「……………まだ気持ち悪い……………」

「……………よくそれで受けれたね、テスト。」

テーブルに突っ伏している拓也を、半分感心して眺める。

テストと言っても軽いものだったらしいけど、一時間半もまあ、よく耐えたものだ。

「……水がない……。」

「私の、あげる。」

拓也の目の前に、私の飲みかけのグラスを移動する。今更間接キスなんて言う間柄じゃないし。

……って、ああ。拓也が碧さんと間接キスじゃん。

……ごめん、拓也。一生言えない。

元々、今日は会う予定でいた。例の事について、お互いの中間報告の為。

「この間さ、山下から電話があつたの。」

まだまだ調子の悪そうな拓也が、頭を抱えながらテーブルに突っ伏した状態で、私を上目遣いに見上げて言った。

「目撃者の一人がさ、都内に住んでいるらしいんだわ。」

「え？そんな事、もう分かつたの？どうやって??？」

目撃者の特定どころか、今住んでいる所まで分かつちゃうなんて、凄くない？っていうか、怖くない??

「……あいつのねーちゃんの友達のにーちゃんが……って、どうでもいいじゃない、そんな事。」

拓也は心底かつたるそうに、眉間に皺を寄せて答えた。

「とにかくそれで、あいつが連絡取ってくれてさ、俺、ちょっと会

ってくるから。」

「え、いつ？」

「んー、それはまだ決めてない。」

「ちょっと待って。拓也が行くの？いいよ、そんな事まで頼めない。」

「

いいよ、別に。」

「よくないって。自分の事だもん。拓也に悪いよ。」

「いいってば。」

「だめだつてば。そんなの迷惑かけ過ぎだし、第一拓也、専門学校の授業とか勉強で忙しいじゃない。」

「大丈夫だよ、2、3時間くらいだろ。一コマくらい大した事ねえつて。」

「じゃあ、私も一緒に行く。」

「いいって言うてるでしょ。」

「行くよ。だって私の事でしょう？」

ここで拓也は初めて、盛大な溜息をついた。
やっそこさ体を起こして、呆れた様に私を見る。

「あのねえ。俺と一緒にやってる意味、わかってんの？」

「・・・え？」

「多少なりとも、危険かもしれない事に首、突っ込んでんでしょ？
だったら簡単に、お前を連れて行けないでしょうが。」

「・・・？」

「相手がどんな奴かもわからないし、どんな奴と繋がっているかも
わからないんだぜ？」

「・・・？」

「・・・だーかーらー、お前自らが関係者に顔を売り込んでーす
んだって話っ。面が割れるだろがっ。何かあったらどうするんだよ。」

その為に俺がいるんだろ？」

「……………あ……………」

彼の言わんとする事がやっと飲みこめて、私は言葉を失ってしまった。

拓也は、私をなるべく水面下に隠したいんだ。

私が、何かよくない事や人目に曝さらされるかも、と心配してくれている。

相手の気遣いを理解出来ない馬鹿さ加減と、そこまでしてくれる申し訳なさと、そして本当はやっぱり優しい彼の有り難さが胸に染みて、

私は少し顔が赤くなり、俯うついてしまった。

すると、そんな私を見て、彼が優しく微笑んだ。

「やっとわかった？ん？じゃ、待ってなさい。終わったら報告すっから。」

「えっと、あの……………」

「ん？」

顔を上げた私を、少し得意そうに、含み笑いで見る彼。

……………拓也は、昔からそういう人。

心の奥には、いつでも引き出せる優しさが準備されている。それを人に見せる事は滅多にないのだけれど。

「・・・あの・・・気をつけて・・・。」

「大丈夫。心配しないで。」

「・・・あの・・・ありがとう・・・。」

「・・・。。。」

他に言葉が見つからず、しょうがないからシンプルすぎるお礼を告げた後で、なんだか自分が本当に責任放棄をした甘えた女に思えて、少し不愉快になった。

そんな私を拓也は、ジッと観察するように、人懐っこくて丸い、澄んだ目で見つめてくる。

今度はこつちが上目遣いで彼を見上げると、彼は含み笑いをして尊大な態度で言った。

「・・・何を今更、と、お礼は何？と、何でも言う事聞いてくれる？と、どういたしまして。どれがいい？」

「・・・。。。」

今は何も言い返せません。色んな意味で後ろめたすぎて。

好きな言葉を仰って下さい。誠心誠意対応させて頂きます。

という思いを込めて、目で物を言ってみる。

そんな私を見た拓也は小さくふふ、と笑うと

「じゃね。また後で。」

と言って、立ちあがってカフェを出て行った。

自分は飲んでもいないのに、コーヒー代をテーブルの上に置いて。

Hangoverと余韻（後書き）

PV24000、ユニーク4000となりました。

自身のサイトを持っていない中、これだけの方に読んで頂けて大変感謝しております。

お気に入り登録をさせていただいている方にも、この場を借りてお礼申し上げます。（お気に入りユーザー登録を頂いた方、感謝の言葉もありません）

外から覗いて下さっている方も、感想などございましたらお気軽にお願いしますね。

クリスマスも間近に迫り、街がウキウキと華やかになってきた。私も嬉しい便りを一通手に出来て、久しぶりに、不透明だった未来に光が見えかかった気がした。

拓也とは、それっきり連絡を取っていない。

あれからどうなったのか気にならない訳ではないけど、彼の忙しさや、事を進めているのが彼中心で、情報も何もかもあの子が一人で握ってしまっている事などが原因で、

不本意ながら、私は全くの「待ち」の状態を取らざるを得なくなっていた。

いいのかな、これで？日々、後ろ暗い気持ちになっていくんだけど。。。

一方で碧さんの事も、全く頭から離れない。

っていうか毎日思い出しちゃうし。というかいつも考えてしまってるし。あの、キス。

でも連絡来ないし。当り前だけど。連絡できないし。当然だけど。

そんな悶々としたある日、奈緒から連絡があった。

「どう？進捗状況は？」

「あれ？実は、拓也待ち。」

「何？何がどうなってるの？」

事の次第を説明する。

「……ちよつとカツコよすぎない？吉川君。見なおしたわ。」
奈緒が素直に感嘆した。
うん、まあね。確かに。

碧さんの家庭環境は、例え奈緒が相手でも、何だか自分の口から伝える事に抵抗を感じて、結局誰にも言えなかった。

母子家庭で、小学生の時にお母さんを亡くしちゃっている碧さん。その後、「資産家」な親戚筋にでも引き取られたんだろうか？

有名大学卒業、一流企業勤務、抜群のプロポジションと整った顔、明るい性格。

それらとこの暗い過去が、あまりにもそぐわなくて、むしろ感心してしまう。

純さんと彼が、数年前に既に別れている、と言う事は、奈緒に伝えた。

「おおつ。」
と奈緒は、喜び(?)の声をあげ、素晴らしい、素晴らしい、と連発した。

「しかし何故、祐介さんはあたしに、純さんは彼女だ、と伝えたのかしら？」

「知らなかったとか？」

「そんな訳ないでしょー。あの腹黒さんがー。」

「……世話になる人に、よくそんな事が言えるね？」

「綾香は本人の前で言ったけどね？」

「……。」

あ、あれは本気で怖かったわ……。体が心底冷えたわ。口はガチ

で禍わざわいの元だわ。

「でもよかったね。事が片付いたら、綾香にチャンスが巡ってくるかもよ。」

「・・・そういう関係にはなれないよ、私達は。」

だって、私には分かる気がする。

純さんを「彼女」と偽ってまで連れてきたのは、多分、私と話をするのを避ける為。

だってあのキスの後、自ら離れて距離を取ったのは彼の方だもの。

多分あの夏の日、彼が私に近づいてきた時は、こうなる予定はなかったのではないかしら。

頭で、冷静な分析をする。心で、理由は直感する。

「わからないわよ？人生、先にはどんな事が起こるか分からないんだから。綾香って、基本は前向き人間なのに、恋愛に関してはネガティブよね。吉川君にも、塚本さんにも、さ。もったくない。」

恋愛に対して消極的なのは、私も自覚している所でございます。

そもそも奈緒ほどの容姿も持ち合わせてない上に、ピン底眼鏡にマスク姿で見た目をからかわれてきた過去を持つ女に、何の自身が持てましよう？空気読めないし。

「ところでさ、綾香、最近困った事、ない？」

「・・・最近？常にいつも絶えずしょっちゅう困っておりますが？就職に卒論に事件に恋愛に。」

「そうではなくて。なにか、気付いた事はありませんか？」

「は？」

「例えば、なくしモノとか？」

「うそっ？私、何かなくしたの？」

「うわっ。」

電話の向こうで奈緒が呆れた。

「綾香の学生証、あたしが持っている。」

「うそー！！なんでー！！」

「知らないよー。あたしもついさつき気付いたのよー。それで電話したの。多分、この間の飲み会の時に……。」

ああ、そうだ。女二人の学生証を社会人さん達にお見せしていたんだ。なんのお酒のタネだったのかは忘れたんだけど、写真写りだったかな？ああ、ホントに忘れてる。

その時、奈緒が二つ一緒にしまっっちゃったのかしら？お互いそれなり酔っていたのねえ。

よく今まで気がつかなかったわね、と奈緒が私の代わりに呟いてくれた。

「そっかあ。滅多に使わないけど、卒論提出とか、定期券更新とか、困るもんなあ。」

「明日、暇？」

「ああ、分かった。取りに行く。」

「そうじゃなくって、撮影、見に来ない？」

「ええ？明日なの？」

「うん。綾香、忙しいから行けないって言ってたじゃない。でももし明日暇なら、見に来てみたら？面白いかもよ？あたし、二度とやらないし、こんなチャンスはないかもよ？」

「えー……。いいの？あたしで？」

「だって綾香と一緒にの時に会った話だし、祐介さんも今じゃ絡んでいるし、綾香じゃなくて、誰を誘うのよ？」

・・・奈緒の申し出はありがたいけど、それって限りなく邪魔じゃない？

普通、職場に、まったく関係ない第三者がウロウロするなんて迷惑この上ない話でしょ？

いくら、CMの主演さん、河島健たけるが誘ってくれたとしても、ね。

「・・・やっぱいいよ。明日、奈緒が出発する前に取りに行く。」

私はやっぱりとお断りをした。明日電車で一時間超の旅だわ。

次の日、奈緒が一人暮らしをしているマンションに行くと、一台の車が止まっていた。

紺色の、何だか高級そうな国産車に見えるけど、そっち方面に疎い私にはさっぱり分からない。

彼女の玄関ベルを押すと、慌ただしい足音がして、勢いよく扉が開かれた。

「ゴツメン、綾香、バタバタしていて。」

「ううん、こちらこそ、ごめんね。忙しいのに迷惑かけちゃって。」

「そっちこそ、遠いのにわざわざ。」

シンプルな会話。最近接点が多いので、余計な事を言わずに済ませる。

すると部屋の奥で、誰かが立ちあがった。

藤田さんだった。

ドビっくり。

「迎えに来て貰ったの。車でいくから。」

奈緒が私の表情を読んで説明する。

あ、そうか、そう言う事ね。それじゃ、下のあの車は藤田さんの車ね。納得。

「やあ、日下部さん。元気？」

「こんにちは、藤田さん。今日は奈緒を、宜しくお願いします。」

「はい。」

ニツコリと品のある笑顔。今日は初めて見るカジュアル姿、カラー付シャツにセーター、という装いが、スラッとした長身（多分碧さんほどは無いだろうけど）と、切れ長の瞳によく合う短髪にとても馴染んでいた。

着ているセーターだってすごく上物そう。きっと、庶民の学生にすぎない私知っているブランドを超えちゃっているんだろうな。アルマーニとかさ、バーバリーとかさ、それ以上なのよね、きっと。

なんて、見目麗しいおぼっちゃ魔王を観察していたら、ふとあるものが目に入った。

彼が、腕まくりをしている、その袖口。肘のあたりに。

「・・・あれ？怪我ですか？」

「これ？あ、いや、これは生まれつきの痣だよ。」

「あ、そうなんですか。」

赤い、盛り上がりも何もない模様。まるでそこだけ薄くカラーペイントしたかの様。

犬の横顔見たい、と思った。

何かが、引つかかった。

なんだっけ？

何かを連想させる気がする。何だっけ？何だっけ？

私、何を思い出したいんだっけ？

えーっと、えーっと、えーっと・・・

・・・え？

私は、俯いたまま動けなくなってしまうた。一瞬、何も聞こえなくなる。

やがて、大きな混乱が襲ってきた。

その混乱が大きすぎて、自分が何に混乱しているのかも解らなくなってくる。

一生懸命、頭を整理しようとした。

これは、一体、どう言う事だろう？

何がどうなっているんだろっ？何？何？何？

・・・この状況は、一体、何だろうか？

固まっている私の背後で奈緒が、あたし達もう出なきゃ、と声をかけてくる。

「・・・私、やっぱり一緒に行きたい。」

私は、顔も上げずに、呟くように言った。

事態を把握できていないまま二人から離れる事に、何だかとても抵抗を感じたから。

奈緒は、「ホントに？じゃ、行くつよ、どういふ心境の変化？」と喜んだ。

顔を上げると、藤田さんは、眉間に皺を寄せていた。

Suspicion 2 その声、凶器です

撮影所に向かう車の中で、私はずっと考えていた。

隣に座っている奈緒の話が、申し訳ない事に上の空だ。

奈緒は途中から訝しげな顔をしたけど、そのまま放ってくれて、その後は時々、運転席の藤田さんと何かを話す程度だった。

こういう時の彼女は、余計な事をあまり言わない。その分、すごく観察をする。

私はずっと、窓の外の流れる景色を眺めていた。

何をどう考えても、全然よくわからない。ただ、嫌な感覚だけがモヤモヤする。

撮影所には多くの色々の人達がいて、皆がそれぞれ忙しげに自分の持ち場で肉体労働をしていて、そのマンパワーと雑多な雰囲気は圧倒された。

たった30秒前後の映像をいくつか作る為だけに、こんなに大掛かりな事をするんだ？

しかもこれは、一連の過程のほんの一部分に過ぎないワケで、なんとまあ、大きなプロジェクトなのだろう、広告とは。

これだけの労力に見合ったリターンが望めるのね。広告って、そんなに私達に影響を及ぼすんだ？

「何、考えてるの？」

「ひゃつ。」

突然、背後から物すごい『イイ声』が耳にかかってきて、私は飛び

上がった。

もう、『イイ声』というより、『イク声』って感じなんだけどっなにこれっ。

低くて艶っぽい、甘やかなバリトンの声で、その声のかけ方はなんなのよっ。

と思って振り向いたら、藤田さんだった。

ドびっくり。2度目。

え？この人って、こんな声を出すんだ……。

じゃなくて、やめて下さい、今みたいな事。

「昼間からずっと考え込んでいるようだけど、どうかしたのかい？」

私の心の内を知ってか知らずか（でもこの人腹黒だし。魔王だし。）
藤田さんはニッコリと完璧に微笑んで、私に訪ねてきた。

302

「急に気が変わった理由は、何？」

私がココに来た理由を聞いている。直前まで、ついてくる予定ではなかったから。

「……あの……なんとなく……。」

「ふーん。」

藤田さんの「ふーん。」という繰り返しは、全く軽い。まるで子供をあしらうかのような口調で、なんだか少し馬鹿にされている様な、見透かされている様な気持になった。

「知りたいな、その、『なんとなく』。」

「……どうして、そんな事、聞くんですか？」

先程のバリトンダメージもチョッピリ回復してきて、私は警戒心をもって聞き返した。

まさか、この人を敵にまわしかかる事になろうとは。

私、討ち死にするだけかも。こういうの、犬死？悲惨すぎる……。

始まる前から、自分の倒れた姿が想像できるよ。

「興味があるから、だよ。」

あうっ魔王に興味持たれた。

「僕は、君に、すごく興味がある。」

藤田さんは、微笑んでいる。で、私との距離を詰めてきている。

ここ、みんながいるから、安全だよね……。

私は確固たる根拠も無く、本気で自分の身の安全を心配してしまっ
た。

でもこんな怪しい人、奈緒と一緒にする訳に行かないでしょ？よく
わかんないけど。

「何で……。」

「理由なんて必要かい？」

ああっアツサリかわされた。ダメよ綾香、ここで負けちゃ。ついて
きた意味がないじゃない。

そうよ、私一人じゃないのよ。奈緒の事も守んなきゃっ。

私は体勢を立て直して、藤田さんを一生懸命、まっすぐに見た。

「……藤田さんに限っては、必要だと思えます。」

「……どういう意味？」

「藤田さんは、理由なく行動したり、人に興味を持ったりする人に見えないからです。」

すると彼は一瞬面喰ったような表情を見せたけど（一矢報いた？）、すぐにいつもの微笑を戻した。

「はは。僕だって、誰かに興味を持つ事はあるよ。」

そして、挑戦的な、そう、お腹の中で何か黒い事を考えてそんな瞳で言った。

「たとえば、好きだから。」

そんなワケ、ないでしょ。こんな私でも、白目むいちゃいますよ？あなたの今までの態度も、話の流れも、その笑顔も、何よりその眼が、全力でそれを否定してるじゃありませんか？ここ、笑えばいいんですか？

こんな虚しい告白を受けたのも初めてだったので、ある意味肩の力の抜けた私は（脱力、とも言う）答えの得られなさそうな疑問を考える事をやめて、その疑問を彼に向けてアツサリ手放した。

「それ。」

「え？」

「その、腕の痣^{あざ}。」

「……。」

彼が少し不可思議そうに眉根を寄せて私を見ながら、自分の痣がある辺りの腕に、手をやる。

「私、それ、知っています。」

彼は一瞬考える様な素振りをし、それから少し、眼を見開いた。
あ、繋がった。

「それと、私への興味、関係ありますか？」
私はハッキリと尋ねた。

河島健たけるが入ってきた。おはようございまーす、おねがいしまーす、
と皆が声をかける。

突然、藤田さんがニツコリ笑った。

「ちよつと、二人で抜けようか？」

「え？」

「おいで。」

いきなり手首を握られ、私は彼に力強く引つ張られた。藤田さんは
そんな私にお構いなく、スタスタと進んでいく。

「え、何ですか？」

返事がない。

「藤田さんっ。」

スタジオの外、つまり屋外に出た。既に日が傾いてかなり、寒い。
彼はまだ歩き続ける。一体どこに行くんだらう？何で？

いくつかあるスタジオだか、物置だか、控室だか分からないプレハ
ブを抜けて、やっと彼は立ち止った。

私を振り返ったその顔は、やっぱり微笑んでいる。

だけどそれは、碧さんのあの屈託のない笑顔とは、違う。

まるで、シヨーケースの中から取り出した「笑顔」を顔に張り付け
ているかのよう。先程から一部の狂いもない。

相変わらず、私の手首は掴まれている。

「あそこは人が多くて、落ち着いて話も出来ないね。」

「・・・藤田さん・・・？」

「寒いな、ここ。」

彼は周囲を見渡し、少し肩をすくめた。

「いつそのこと、二人でどこかに消える？」

「はい？さっきから、何を言っているのかさっぱり分かりませんが。」

あなた、奈緒のマナージャーしてるんでしょ？

「だから、ね。」

急に彼が目を細めた。

何だろう、と思ったら、掴まれた手首が勢いよく引つ張られ、体が壁に押し付けられた。

ビックリして顔を上げたら、藤田さんの顔が間近にあって、彼の両手は肘から壁に付けられてつまり私は囲まれたワケで、

彼の切れ長な瞳と男らしい顎が、私の右頬ギリギリまで近づいてきた。

ひえっ、この悪魔、なにすんのよおっ。

と思いつつも、ドキドキが止まらないって、昭和の懐メロかつっの、誰か助けてっ。

「君が、好き、って言ったろう？」

彼が私の耳元で、耳朶に唇が触れんばかりの至近距離で、甘く囁く。低い、低い、バリトンの声。

その感覚ったら、想像を絶するもので、私は言葉すら出なかった。というよりも、全ての息が、体内に逆流したかのようだった。

その衝撃で、立ちくらみの様な目眩さえ、覚える。

全身の肌が、粟立つ。

彼は更に、低く、甘く、私を誘う様な囁きを続けた。

「僕の痣が、何故君を悩ませるの？」

「知ってる？溺れている人にはこうやって……」

ぞわっ！

引き続き繰り出される甘いバリトニック攻撃に、私は頭がもうホワイトアウトだかブラックアウトだかになって、思いつきり彼を突き飛ばして、バツと離れた。

藤田さんはそんな行動を取った私が意外だったらしく（あんたの方が意外だつてのよっ）、突き飛ばされたままの姿勢で私の方をじっと見つめた。

「……僕、まだ話の途中だったのだけど……」

「……けっ……けっ……けっ……けっ……」

「ケ、ケ、ケ？」

「っけっ、いさんっ、していませんねっつ！……」

囁かれた右耳を片手で押えて、左手は悪魔を思いつきり指さし攻撃つ（これ、精一杯）。

「……何の話？」

「そのっ。声っ！滅茶苦茶イイじゃないですかっ！……」

「……」

藤田さんは真顔でそのまま、停止した。

「うん。そうだよ？」

「それっ！それっ！そうやってっ、私にっ何するんですかっ！……」
腰にクるのよっその囁きっ。何考えてるのよっ。

すると彼は、私の問い掛け、っていうか叫びに、悪びれも無くさら

つと言ったのっこの鉄仮面エセジェントルおぼっちゃ魔王っ。

「落とそうと思った。」

「はあ???!」

「大概の女の子はコレでオチるんだが。」

「なっ……!!」

「すごいな、。碧の言った通りだ。この雰囲気で、そんな返しを受けたのは初めてだ。日下部さん、それ、天然なのかい?それとも、ガードを掛けてるのかい?」

なんだそれはっ。

なんかメツチャ色々突っ込み所がありすぎて、もはやどれを突っ込んでいいのか分からないけどっひとつこっちはっ。

「天然でっガードしてますっがっつりとっ!!」

「がっつりと。成程。」

藤田さんは真面目な顔して呟いた。

「やっぱり無理だったか。」

「ちよっとなっ!!」

「それで、僕の痣^{くず}で、どうして君の気が変わるのかい?」

彼は相変わらずニッコリと微笑んで私に問いかける。

ああ、もうダメ。色んな意味で脱力する。っていうか、もう、疲れだ。これって、これも、この人の作戦?

さっきから結局、私ばかり口を割らされてる気がするよ。レベルが違うよ。諦めた。

私は軽い溜息をついて、藤田さんに言った。この人も、もう気付いている事を。

「……藤田さん、私の命の恩人ですよ。」

「……。」

「何で今まで黙ってたんですか？」

「何の事だい？」

「しらばっくれしないで下さい。」

命の恩人に、なんでこんなシチュエーションで、こんな話し方をしなきゃなんないの？

彼の腕の痣を、私は覚えている。

子供の時に海で溺れかかった時、助けてくれた人と同じだ。

あまりのパニック状態で、おまけに視力も弱い為、相手の顔や体型なんて全く覚えていないんだけど、

私を抱き上げて、抱きしめてくれた時の、私の顔の間近にあったその赤い痣だけはハッキリと覚えていた。

その人は私を砂浜に上げると、そっと抱き降ろし、

隣の砂浜、つまり死角にいる私の両親に私を返すでもなく、そのまま去って行ってしまったのだ。

だから私達家族は、彼が誰だか未だに知らずにいた。

でなければ、親が盆暮れには何かしら送っているわよ。だって藤田家のお坊ちゃまなんだから。

私は彼の眼を見ながら、今まで考えてきた事を彼にぶつけた。

「私の命の恩人が名乗りも上げずに消え去り、数年後には自転車のパンクも助けてくれて、そして今、何も言わずに私の目の前に立つ

ている。一方で今度は自ら積極的に、私の友人に関わっている。それに何より、……」

核心を、口にする。

「あの事件に関係のある、碧さんとつるんでいる。どういう事ですか？」

彼は一瞬、私を鋭く見つめた。ドキツとする。

すると次の瞬間、いつものエセ類笑みでニツコリと笑った。

「偶然なんじゃない？」

「そんな訳ないでしょっ。」

もうつ碧さんといい、藤田さんといい、なんなのよっこの暖簾のれんに腕押し糠ぬかに釘コンビはっ。大人なんて嫌いだった。

「全てがなんか、不自然すぎるんです。何だかよく解らないけど、おかしな気がするんです。藤田さん、あなたは……何者なんですか？」

めげずに食らいつく。相手の目を、一生懸命見続ける。頑張れ、頑張れ。

「何者って……僕はどう答えればいいのかな？」

「……あの事件に、15年前の事件に、……碧さんが調べている件に、藤田さんも何か関係があるんですか？」

「何でそんな事聞くの？」

「解りません。」

彼には、何の技も効かない。そもそも、私は何の技も持ち合わせていない。直球勝負が、私の弱点であり、唯一の武器なんだ。

すると彼は、初めて、その張り付いた微笑みの見本を剥がして、少し本当の微笑を見せた、気がした。

声も無くクスツと笑う。

少し、楽しそうに言った。

「君は、本当に、誤魔化しのきかない真っ直ぐな子のようにだね。じやあ聞くが、君はあの事件と、どんな関わり合いがあるんだ？」

柔らかくなつた雰囲気に乗された。

気付くと、台詞の後半では、彼の眼は既に笑っていなかった。

王手、だ。

藤田さんは、何かを知っている。

やっぱり、碧さんと繋がっている。

何かを、しようとしている。

誰に？

この二人は、誰に、何をしようとしているの???

「……得体の知れない人に、話す気にはなれません。」

私は、自分でも顔がこわばれるのを感じながら、後ずさりそうな足を必死に押さえながら、言った。

勝手な事に、一瞬、ここに拓也がいてくれたら、と思ってしまった。情けない。これは私の問題で、あの子は全くの部外者なんだから、簡単に巻き込んでダメよ。

一人でも、踏ん張れ。

「『命の恩人』でも？」

彼が引き続き、優しく微笑む。眼の色まで伺う余裕が、ない。

「……すみません。」

「碧になら、話す気になれるかな？」

え？と思つて私が眼を見開く。

彼は柔らかな笑顔で、優しく、穏やかに、そして冷たく言った。

「帰りは、彼に送ってもらつ様にするよ。君も、その方が嬉しいだろ？」

宣言 1 (前書き)

PV3万、ユニーク5千いただきました。ありがとうございます。
これからも彼らを宜しくお願いします。

藤田さんは踵を返すと歩きだし、途中で立ち止まって私を振り返った。

「おいで。」

その微笑みに、もちろん素直についていける訳もなく、探る様に彼の顔を見つめ続ける。

と言いますか、もはやこれは睨んでいますね、私。

彼は何が面白いのか、口の片端を上げてクスツと笑うと、戻ってきて私の背中にそっと手をまわした。

「ここは寒いから、いつまでもは居られないだろう？おいで。」

私、あなたに連れられて来たんですけど？

「うん、そうだね。僕が連れだしたんだよね。」

口に出してはいないのに、心が読める魔王が返事をした。

・・・怖いよお。もう、戦線離脱したいよお。」

スタジオに行くのか、と思ったら、別棟の控室に連れて行かれた。

「ここで待っていておいで。」

と言ってドアを開けて、私が入るのを促す。

「え？ここに？」

「そう。だって君が現場にいても、邪魔なだけだろう？」

ニツコリ笑ってそう言い放つ姿は、かえって容赦がなくて威圧的だ。

「それとも、僕と一緒に居てあげた方がいいかい？」

「結構です。」

即答、ですね。

彼が戸口から出て行くこうとする時、私はその後ろ姿に声をかけた。

「藤田さん。」

彼が黙って振り返る。私は尋ねた。

「どうして、奈緒の近くにいますか？何で、マネージャーを引き受けたんですか？」

すると彼は、一瞬黙り込んだ。

そして次には、やはりいつもの笑顔で微笑んで答えた。

「知ってるかい？男が女に近づく時は、関心があるか下心があるかだよ。」

全然まったくちっともさっぱり、答えになってないし。

夜がとつぷり暮れても、中々奈緒は戻ってこない。

数時間が経過後、藤田さんが再び私を迎えに来て、私はスタジオの敷地入り口まで連れていかれた。

そこには警備員さんの小部屋があって、その脇に、^{みどり}碧さんが立っていた。

スーツの上に、紺色の温かそうなロングコートを羽織って、手触りのよさそうなマフラーを肩から掛けている。

駅が近くないのに、どうやってきたんだろう？なんて間抜けな事を考えた。

「綾ちゃんっ何かあったっ？」

「じゃ、^{みどり}碧。後はお前の出番。」

「はあ？」

キョトンとした碧さんの所に私を置いて、藤田さんはさっさと戻ってしまった。

「何、あれ？」

そう言つて、私を見下ろした。途端に、心配顔になる。眉間に皺が寄つて、瞳が険しくなった。

「あいつに、何かされた？」

「あいつ……？」

「……あの、俳優……。」

「……河島健^{たける}……？」

私は素つ頓狂な声を出してしまつた。あまりの驚きに、目も口も大きく開いてしまう。

「何でそんな事思つんですか??」

すると彼は、そんな私に驚いた、と言つか少し気まずそうにサツと視線を脇にずらし、自分の顎を掴む様に、片手で自分の口を覆つた。

「……えっ……だつてあいつ……ほら、スケベっぽかったから……。」

「ええええ……？」

……そーゆー事をしそうな俳優さんには見えませんでしたし（今日は結局遠眼でチラツと見ただけだった）、そーゆー事を心配しそうな人には見えませんでした、碧さんが。

「あれ?じゃあ先輩は、何で俺を呼んだのかな……?綾ちゃん、何か変わった事あつた?」

「……変わった事があると、何で碧さんを呼ぶんですか?」

「……。」

まったく会話がちぐはぐな私達。

「むしろ、藤田さんに、変わったことされました。」

「え？何??？」

「好きだつて言われて、抱きしめられて、低い声で囁かれました。」

「・・・何いい??？」

その時の碧さんの驚き様は、藤田さんにキスされた時に匹敵するものだった。

いや、叫んでいる分だけ、こっちの方が衝撃を発散出来ているのかも。

ちよっぴりタレ目が大きくなって大きくのけぞった後、騒ぎ出した。珍しい。

「それはっ。先輩の十八番だっ!!！」

「でしょうね。」

「それをやられると、女の子は腰がくだけるんだっ。」

「でしょうね。」

「まさか・・・綾ちゃん・・・。」

「でしょ・・・何考えてるんですか?」

しみじみと相槌を打っていた私は途中ハッと顔を上げ、碧さんを軽く睨んだ。

すると彼は私のそんな表情を見て、ホツとした様に肩を下げ（余計に目もタレた様に見えた）、気が抜けたように言った。

「あ、無事だったわけね。」

「雰囲気ぶち壊して、天然か？碧に聞いた通りだ、とか言われまして。アレ、どういう意味ですか?」

「あれ?どういう意味だろ?」

「・・・ちよっつと。」

ますます眼力を強くして睨んでいるつもりなんだけど、この人、全然こっちを見てないし。完璧スルーだし。ハンサムな分、余計に腹立つなあ、もう。

「そつか。何はともあれ、元気そうでよかった。会えて嬉しいよ。先輩に感謝だな。」

気に入らない部分もかなりあるけどね、と付け加える。

・・・どうしてそんな、屈託のない爽やかな笑顔で「会えて嬉しい」なんて言うんだろう？

そっちから連絡をして来た事、一回も無いくせに。

まあ、私も人の事言えなけど。

「久しぶりだね。」

「・・・そうですね。」

私は何となく俯いてしまい、無愛想に返事をしてしまった。

そんな私を碧さんは全く気にした様子も無く、スーツの胸ポケットから携帯を取り出しながら明るく言った。

「綾ちゃん、飯食った？俺、腹ペコペコで。よかったら付き合ってくんない？」

そして、私の返事も待たずにタクシーを呼んだ。

ところが、タクシーの中では、打って変わって無言になった。

碧さんは行き先を告げると、私を見て少し微笑み、その後はずっと流れる夜景を見ていた。

煌めく湾岸を通り、高速に乗って、すごくロマンチックな光が広がる。

でも、その間私達は一言も話さず、お互い触れる事も無かった。

そう言えば、手を繋いだ時も、キスをした時も、私達はお酒が入っていたな。

あれは、酔った勢い、気の迷い、だったのかもしれないな。

そもそもこんなハンサムな人には、あれぐらい、遊びにも入らない「挨拶」程度だったのかもしれないな。

私は窓の外を眺め続ける彼の横顔を見つめて、そう思った。

急に頭が冷えて、冷静になる。私一人、舞い上がっていただけかも。最初は、あんなに警戒していたのに。

15分ほどで都内のだ真ん中に付き、連れてこられたのは某有名レストランの分店フレンチ版だった。

「え？ここですか？」

華美ではないがいかにも上品で高級そうに見える入口に、私は思わず尻ごみをする。

「うん。いいだろ？もう君に意見聞くと、色々真剣に悩みだすって事が分かったから、俺が決めたの。はい、入って。」

彼はそんな私の様子にお構いなしで、私の背中を押してお店に入るように促す。

「でも・・・私、そんなにお金は・・・。」

「いいから、入る。」

強引に、入らされた。入口のウェイターさんが、プロの笑顔でニッコリと微笑む。

彼は手慣れた様子で私のコートを脱がせて店員さんに渡し、自分のコートも渡すと、

やはり手慣れた様子でレディファーストを見せた。

案内された席に私の後から座ると、正面から私を見て、悪戯っぽく笑う。

「学生の女の子の財布を開かせるほど、俺、甲斐性無く見えた？」

「……でも私、……全部奢って貰うのって、……嫌なんです。

」

「……へえ。」

彼はなんだか笑いたいのを堪えるかのように口角を上げると、からかう様な表情を見せた。

「なんだかすごく綾ちゃんらしいね。面白そ。で、何で？」

「……馬鹿にしてる……。」

「全然。意地悪してるだけ。」

彼の私を見つめる瞳が、甘い色を見せる。私はドキツとしながら顔が赤くなるのを感じた。

それを、からかわれて拗ねているフリをして、すり替える。

「……対等じゃない、気分になるからです。」

「じゃ、五百円頂戴。」

「……五百円？」

その発想はどこから来るの？ワンコインですか？おじさんのお昼御飯じゃない？それって。

「せめて千円……。」

「それじゃこっちが対等じゃなくなるだろ？そもそも対等ってなに？お金だけじゃないだろ。そういうのはね、総合的に大局的に見るもんなんだよ。……でも。」

そういつて彼は、口の端をわずかに上げ、当り前の様に言った。
「そういう所、好きかも。」

ああ、もう、振り回される。

いい加減、流されたり振り回されたりするのは卒業したいのに。
動機が収まらない。ムツカつくつ。

「撮影は面白かったかい？」

料理と飲み物を注文すると（お酒は頼まなかった。もう、酔った勢
いつて、ヤダし・・・）、碧さんは楽しそうに聞いてきた。

そして私はあの初めての経験を思い出し、急に不機嫌が直ってしま
った。

「はい。想像していたより随分、何だか人間臭かったです。」

「え？何？どういう事？」

「あ、すいません。その、手作り感漂う、というか・・・アナログ
っぽいというか・・・。」

「ふーん。面白いね。」

「でしょ？」

「うん。君が。」

またからかわれた、と思つて軽く睨むのだけれど、彼は意味ありげ
な含み笑いをするだけなので、とりあえずほおっておく。彼の笑顔
が素敵過ぎて、また顔が赤くなってやっぱりムカつく。

「俺は普通の会社員だからよく解らないけどさ、ああいうモノづく
りつて言うのも、すごく面白いんだろつな。」

「碧さんは多分、何でも面白くやれそうですよね。」

「え？そう見える？スゲ。何でわかんのか？」
今度は私がからかつてみせたのに、茶化しておどける彼。思わず笑ってしまふ私。

この人は、きつと女性の扱いに慣れてるんだろっな。うっん、絶対。

多分、私の下手な駆け引きなんて、効かないんだ。

やっぱり私は、ストレートな球を投げるしかないらしい。

「ねえ、碧さん。」

会話も弾み、食事の後半に差し掛かった頃、私は、メインを食べながら穏やかに聞いた。

「うん？」

彼もナイフを動かしながら、寛いだ様子で返事をする。

「何で今更、調べてるんですか？」

一瞬、彼のナイフを持つ手が止まった様に見えた。
私はそれを無視してフォークを進めた。

「色々、事情があるんだよね。」

彼は目の前のラムを食べながら、顔も上げずに普通に言う。
だから私も、自分のお魚を食べながら普通に尋ねる。

「それって、時効の事？」

「・・・うーん・・・。」

下を向いたまま苦笑する彼を盗み見て、私達はそのまま食事を続けた。

そしてその後、会話が弾む事はなくなってしまった。

お店は裏通りに面していた為、近くの幹線道路まで歩いて出て、そこでタクシーを拾って帰る事になった。

そこは車通りは激しいのに、人はまばら。空車のタクシーもなかなか来ない。

夜も更けると、冬の風が体を刺すように冷たい。耳がジンジンした。タクシーを呼びとめる為に車道を眺める、碧さんの後姿を私は見つめる。そして俯く。

なんとなく気まづくなくて、それはあの私の質問のせいなのだろうけど、これは私達にとっては避けて通る事の出来ない話だし、いずれは彼と対峙しなくてはならないのだし、と私が自分に言い訳をしている時。

「おいで。」

急に碧さんに声をかけられた。

顔を上げて彼の方を見ると、彼はロングコートの片側を大きく広げて、私に向けて空間を作っていた。

「え？」

何の事か一瞬分からず、それが、私にその中に入るように誘っているんだと悟った時には、私は彼のコートの中にすっぽりと包まれてしまっていた。

彼の香りと体温が私を包み込む。

私は、飛んじやうぐらいにビックリした。

「ちよつ、碧さんつ。人に見られるつ。」

「黙つて。」

そう言つて彼は、上から覆いかぶさるように、私をキュッと抱きしめた。

私はあまりの事に、心臓が止まる程驚いている。なのに動機が激しい。止まないじゃん、心臓。

彼は、私の頭に顔をうずめてきた。

一体、どれくらいこうしているんだろう？随分と長い間、抱きしめられている気がする。

彼は一向に、腕を緩める気配がない。

「ね、綾ちゃん。」

上から、彼の、甘い、優しい、切ない声が聞こえてきた。

私を抱きしめる腕に、グツと力がこもった。きつくて、ちよつと苦しい。

「俺達もつ、会つのはこれっきりな。」

今度こそ、心臓が止まった、と思った。

宣言 2 そして痛み

今の状況が、飲み込めない。

だって、私は今、碧さんに抱きしめられている。

彼の温かなぬくもりと香りに包まれている。

彼の囁きは、限りなく優しく、こんなにも甘やかなのに。

「……はい？」

「……俺、もう綾ちゃんには近づかないから。今までごめん。」

「……なんですか、それ。」

私は、彼の胸から顔を上げた。

なのに彼は、私の髪にうずめている自分の顔を上げようとせず、頬をそのまま、私の耳に滑らせた。

彼の吐息が、私の髪に絡まる。

「最初に近づいてきたのは、そっちですよ。」

「うん。」

「訳分かんない事言いだして、私を混乱させたのは、あなたじゃないですか。」

「……そだね。」

「それを今度は……何なんですか？」

「……もう、限界なんだわ、俺。」

低く、掠れた様な声。

それは私が初めて聞く、自信に満ちた碧さんの、揺れ動く呟きだった。

弱音。

「本当は、あの夏の日……あの日に会って、それで済ませるつもりだったんだ。でも君は……。」

そこまで言って、彼はやっと顔を上げた。

射るようにつめる私の眼差しを、切なげに柔らかく受け止める。私の髪を、優しくそつと掻き上げた。

「君もわかってんだろ？俺は、君を傷つけると思う。なのに今更、止まる事は出来ない。知りたい気持ちを無視する事は出来ない。」

「……。」

「でも君が近くにいると、……色々、気持ちが揺らぐんだよ。……やめたくなるんだ。やめて……君に触れたくなるんだ。」

「……。」

「真つ直ぐな君を、壊したくない。……ごめん。」

彼が指しているのは、事件の事。

まるで自分の気持ちを持て余しているかの様に、とつとつと言葉を繋いでいく彼。

そしてゆつくりと笑う彼はやっぱりとにかく綺麗で、こんなに素敵な人がいるんだと惹かれずにはいられなかった。

なのに、その自分勝手な言動。

「……言ってる意味が、全然わかんない。碧さんの何が、私を傷つけるっていうの？」

「……。」

「私が事件を何か知っていて、それで傷つくの、私？」

「……綾ちゃん……。」

この人は、最初っからそうだった。最初から自由奔放で自分勝手に、私を振り回していた。

私は、自分の殻が破けていくのを感じた。胸が、焼けつくように痛い。

「……碧さんは、ズルイ。」

私は、私の髪を掻き上げながら撫でている碧さんを、精一杯睨みつけた。

怒りのあまり、唇が震えているのが分かった。

もう、言葉が止まらない。気持ちが止まらない。進みだした事態は、止められない。

「碧さんばかり、言いたい事言って、碧さんばかり、聞きたい事訊いて、碧さんばかり、私を混乱させておいて。都合が悪くなったら、逃げて。」

「……ああ。」

「傷つけたくない、とかさ、壊したくない、とかさ、ただの言い訳じゃない。自分が傷ついたり、壊れたりしたくないからだけでしょ？」

「……ああ。」

「私の何を知っているって言うんですか？私の何を見ているって言うんですか？馬鹿にしないで下さい。私、自分の始末くらい、自分で付けられますっ。」

「……ああ。」

「そもそも、会わない様にするって、まだ3回しか会ってないしっ。そんなの、宣言しなかったって済む事だしっ。黙って消えれてくれればいいじゃないっ。」

ああ、冷静に筋の通った事を言い続けているハズだったのに。

今まで想い溜めていた事を相手にぶつけているハズだったのに。

もう、自分が何を言っているのか分からない。

すごく、取り乱している。喚いている。

これじゃ、別れ話で手のつけられなくなったヒステリー女と同じじゃない。

碧さんの胸を叩こうと両腕を上げた瞬間、彼の両手が私の手首を掴んだ。

気付くと、歩道脇の建物の壁に、体ごと押し付けられていた。

彼の、荒々しいキスが降ってきた。

私は、言葉も息も、彼に絡み取られてしまった。

「わかったよ。そうだよ。俺が悪かったよ。・・・だから、泣くなよ。」

言われて気付いた。自分が泣いている事に。

悔しいっと思っ気持ちも、目の前の出来事に掻き消されてしまっ。

「馬鹿にしないで下さいっ。私っ、大人ですっ。」

私はまだ喚き続けた。

彼は私の唇の端ギリギリの所に、まだ甘さの残る自分の唇を滑らせってくる。

「うん。そうだな。」

「自分の独りよがりで、守っちゃっている様な事、言わないで下さいっ。」

「うん。そうだな。」

「碧さんなんて、最初に会った時から、嫌いですっ。」

「うん。そうだな。」

彼の唇が、再び私の唇を軽く掠めた。

「知ってるよ。でも……。」

彼は少し顔を離して、私を見た。

その瞳は、潤んでいてとても色っぽいものなのに、眉根に皺を寄せ、私を見つめるその表情は、まるで少年っぽさを覗かせている様だった。

そのアンバランスさに、状況もわきまえずにドキンとする。

「俺は、最初に会った時から、……君が頭から消えないよ。どうしようもなく。」

そう言って再び、今度はとても、甘い、甘いキスが降りてきた。

涙が、出てくる。

不甲斐無い相手に、涙が出てくる。

独りよがりの相手に、涙が出てくる。

あまりの甘いキスに、熱い吐息に、痺れる舌先に、涙が出てくる。

恋愛っていうものは独りよがりだ。

誰もが相手に振り回されながらも、自分のルールで動いていて。

それが上手く、タイミングが合わない限り、先には進めないんだわ。きつと、私達は、タイミングが悪すぎた。

彼が自分のルールで、私達の間にも幕を引こうとするのであれば、私が、先手を打ってやる。

私の人生は、私が決めたい。

この時の私のそれは、碧さんに縋りつく事ではなく、彼と離れてでも対等に立つ事だった。

長い、長い、目眩を誘う様なキスを終えた後、私は揺れる瞳で、まだ焦がれる様な唇で、彼に告げた。

「私、15年前に人が刺された所を見ました。」

彼の息が止まったのが分かった。

瞳が大きく見開かれ、驚愕の色が見てとれる。私は言葉を続けた。

「一人の男子生徒が、倒れている生徒の上に覆いかぶさり、ナイフが何かで刺している所でした。」

「……。」

「私は怖くなってその場を逃げました。後の事は知りません。それでいいですか？」

「……倒れている生徒を、刺していたのか？」

彼の口調はもう甘さを残してはおらず、低く、鋭い声色だった。

彼の中で、何かがオンになったのが分かった。

「前後関係はよく分かりません。そもそもよく見えてなかったのだから裸眼だったんです。そう見えました。」

「……………」

「正当防衛には、見えませんでした。いいですか？これで。」
私はまた、自分の視界が濡れ出したのが分かった。情けない。

「これで、もう、貴方とは会わずに済みますか？貴方の事、考えずに済みますか？貴方の事……………」

真剣な表情で私を見つめる彼。

私の、精一杯の告白。最初で最後だから。

「想わないで済みますか？」

彼の瞳がキュツと細くなった。奥歯を噛み締めている様だった。

「ごめん……………」

ごめん。ありがとう。

なんて典型的なフリ文句かしら。校舎裏の高校生じゃないのよ、私達。

そんな突っ込みを心の中で出来る私に、私は安心する。

大丈夫。まだ立てる。

私は自分の足で、まだ立てる。

「俺が言える台詞じゃないが…………もう忘れるんだ。この件も、見た事も、全部。」

彼は私の両肩を両手で掴み、体を曲げて、覗き込むように私の瞳を捕らえた。

「全て、忘れる。君にはもう、関係ない。」

よく言うわね。あなたが思い出させたくせに。

そもそも、私は殆んど忘れていたのよ、あなたと出会うまでは。なのに、どこまで自分勝手な事を言うの？

「その顔、好きだな・・・すぐく。」

彼は切なげにふわっと微笑むと、私をそっと、でもしっかりと抱きしめた。

彼の指が、私の髪の中に埋まって、爪を立てる。

プチン。

私達の唯一の繋がりが、切れた音がした。

知らない事とは

部屋に戻ると、留守電が点滅していた。

ものすごく気分が落ち込んでいても、体はキチンと動いている。再生ボタンを押すと、奈緒からだった。

あ、手を洗わなきゃ。うがいもしなくちゃ。その前にコート脱がなきゃ。着替えなきゃ。

お風呂にも入らなきゃ。

湯船に浸かっていると、再び電話が鳴った。

いつもなら無視する確率6割強、くらいなのだけれど、今は滴しずくを垂らしてでも取りたい。

自分からは誰とも会いたくないのに、相手から差し伸べられた手には縋すがりつきたい。そんな気分。

途中で姿を消した私を、奈緒は随分心配してくれていたのだろう。私は子機を持って再び湯船に浸かる。これって、防水だったかしら。

「綾香。今日、どうして先に帰っちゃったの？」

「・・・うん・・・。」

「祐介さんに聞いても何も教えてくれないし。何かあったの？具合でも悪くなつたとか？」

「・・・あんの、タヌキっ。」

黒い笑顔を思い出して、数時間前の騒動を思い出して、思わず拳を振り上げてしまった。

ニツコリ笑ったイイ声で、奈緒に迫ったら承知しないからねっ！

・・・私、あの時あの場所で、鼻血を出さなくて本当によかったわ。

。。。
そんな事をしたら、よくわからないけど、確実に命を縮める様な気がする。。。

「昼間から、なんか元気なかつたわよね？」

奈緒の声は、気遣う、というよりも、事実を述べている、という感じ。それが私の気を、かえって楽にする。

昼間は、元気がないわけじゃなかったけど、そうね、今は否定しようも無く、元気がないわ。

「。。。なんか、今日は、色々あってさ。。。。。」

「うん。」

「。。。話せば、長い。。。」

「。。。今、話したい？後がいい？」

温かいお湯の中に沈み込んで考える。

うん、そうだね。今は話す気分じゃない。でも、誰かに側にいてほしい。

電話してくれてありがとう、奈緒。素直に嬉しいよ。

「綾香。あたしが男なら、あんたを嫁に貰う。」

唐突な、何の脈絡もない言葉に、私は一瞬思考が止まった。

「。。。はい？」

「あんたを嫁に貰うって言ったのよ。」

「。。。なんですか??それは？」

「プロポーズよ、何度も言わせるな。」

「。。。悪いけど、本当に分からない。今日ばかりはついていけない。」

クスクス電話の向こうで笑っているんだけど、いえいえ男っぽく言っても全然意味分らないし。意図も分らないし。笑われる覚えもないし。

「だから、綾香は一人じゃないよ？綾香は悪くないよ。綾香は頑張っているよ。」

息が、詰まった。

どうしよう、喉が熱くなってくる。

「どうしたの、奈緒ー。」

「綾香はね、頑張ったの。」

「……ありがとう……。」

最悪だ。プロポーズ、女の子に言われてしまった。どうしよう、受けたい。

「というわけで、召集令状をかけましようか。」

「何？」

「緊急会議よ。私達3人で集まるの。吉川君から進捗状況を聞いて、今後の事を話し合うの。」

当り前のように告げる奈緒を前にして、私は返事が出来なくなってしまうた。

だって私、碧さんに全部話しちゃったし……。持ち駒全部使い果たして、彼と会う理由も無くなったから、そう言う意味では、もう、事件アレと関わる必要は無くなった様な気が。・。しないでも、ない。

それに彼も、もう忘れる、って言ってたし。関係ないって。

関係ない、って。

彼と対等になりたくって、振り回されたくなくって、それが過去の記憶と向き合うきっかけであったのに、
思いつきり敗北したわ。大敗よ。惨敗だわ。グルッグルに振り回された。

「途中でやめる？」

私の沈黙を敏感に感じ取った奈緒は、齒に衣着せぬ物言いで私に言うてきた。

「何があつたかは知らないけど、途中でやめるの？綾香、それで後悔しない？」

「.....」

「あたしは分かるよ。断言してあげる。あなたは、後悔する。」

断言された。あなたは、後悔する。

私は、自分の頭の中に入り込む。本来苦手としていた、『自分と向き合う』事をする。深く、深く。

私の記憶は、過去の事件のストーリーを変えるのだろうか？
それを確かめないで、この先何十年も生きていけるのだろうか？

中途半端に投げ出した過去は、きっと私の心を、足を、今後もしも引つ張り続けるのだろう。

で？なんでクリスマス？

「なんかあったの？」

それは昨日までこの子がやたらと忙しかったからで、そんな彼が今日は一限目の後久しぶりにフリーだからであって、

でも昨日は夜まで連絡が繋がらなかったのは、決して勉強のせいだけではないと思うんだけど、

クリスマスって今日が本番だから、そんな彼女（達？）をほっといて私達と会っていいのかな？とも思うし、

ああでもこの後デートかもしれないから早く終わらせてあげないといけないな、

って思っているのに、何、その冷たい目。

「何も……。」

「何も無かった様には見えないけど。そのクマ。」

「くま？」

思わず自分の膝の上とか、脇の椅子とかテーブルとか、お店の壁とか見上げちゃって、

拓也の更なる冷めた声が降りかかった。

「目の下のクマだよ。テディベアじゃねーよ、まさかと思うけど。」

「・・・そこまで天然に見えますか？」

「捜してたじゃん。」

もうね、その容赦無い毒舌も突っ込みも冷めたい目も、7年の付き合いで慣れましたけどね、

時々すごく疲れるんですよね、あまりにも見透かされますと。

色々と自覚している身としてはね。

「で、何があったの？」

拓也はいつかと同じように私の右隣に深く座り込み、足を組むとタバコを取りだした。

この子は、私がタバコを嫌いだ、と言ってもお構いなしに吸ってくる。私も別に、私の為にやめてほしい、とか私の目の前では我慢しろ、とか言う気も無ければ言った事も無いので、黙っている。

そして、何があったのかどう伝えればいいのか分からなくて、黙っている。

「・・・。」

「言いたくないワケね。」

「・・・。」

「じゃ、俺から話すよ？」

「？」

「会って話を聞いてきたのよ、目撃者に。割と色々、面白い事が聞けたから。驚くよ。」

そう言う彼は、言葉とは裏腹にとても無表情で、やっぱり冷めた目つきだった。

深く吸ったタバコを、ゆっくりと吐きだす。

「・・・順を追って、話すな。」

タバコの灰を、灰皿にポン、と落とした。

目撃者のクズハラさんは、クラスメイトのコウノ君と学校裏を歩いていたら（煙草を吸おうと思っていた）、男の怒鳴り声が聞こえてきた。

見ると、中野光治とハマサトシ（少年Aね）が既にもみ合いの喧嘩をしていた。

そして、中野がナイフをポケットから取り出した。いわゆる、飛び出し式のナイフ。

ハママが怯えて後ずさり、中野が彼ににじり寄り、クズハラさん達はヤバイ、と思った。

先生を呼びに行こうか直接止めに入ろうか、一瞬迷っている間に、急に中野が激しく咳き込み、体制を崩した。

咳き込みながらの揉み合いとなり、次の瞬間、中野の胸にナイフが刺さり、そのまま彼は倒れてしまった。悲鳴を上げたのはハママの方だった。

クズハラさんとお友達は、慌てて先生を呼びに走り（二手に分かれた）、現場に戻った時には、既に中野の息は無く、ハママもその場にいなかった。

その後の警察の事情聴取では、ハママの証言と、クズハラさん達の

証言は一致している。

「以上が、目撃者、クズハラツヤさんから聞いた話。あんまり、新聞記事や雑誌とかけ離れた事は言っていないでしょ。」

組んでいた足を解いて、よいしょと身を起こす。

タバコの火を消して、両手を足の間について、肩を竦めるように身を乗り出してこっちを見た。

でも私は、その話の内容に何か引つかかるものを感じてしまって、目がチカチカした。

「え？ちよつと待って？それって、……私が見たアレ、人が既に倒れていたよ？今の話からすると……え？まさか、ハママって子がトドメを刺して、それから逃げたってこと……？」

「その線はね、消えたらしいんだわ。クズハラさん達が、彼がすぐに逃げて行った気配を感じていた事と、とにかくやたらと動揺していたらしくて、そのハママが。トドメを刺す様な状態には見えなかった、っていう事らしいよ。」

状態には見えなかったって……そんな事言ったって……それって理由になるの？

「……でもさ……私、実際に見たし……」

それにさ、例えば、凄く彼に苛められていて、とても怖い人で、そんな相手を下手に刺しちゃったから、怖くなって、報復を恐れて、というか……」

「うん、それはね。俺も考えた。報復で命の危険を咄嗟に感じて、それなら先に殺しちゃお、ってヤツでしょ？ありえるよね。でもさ、そんな、自分がやったってバレバレの状態で、人を殺すかな、普通。

「いや普通ね、殺さないでしょ、人は。どんな状況でも。普通じゃない事話してるでしょ、私達。そんな日常会話の様な口調で進めないですよ。」

「それよりさ、面白い事、聞いちゃったの。現場付近に一人、部外者がいて、当時警察に事情聴取されてたんだ。」

彼はテーブルに肘をつくど、注文したコーヒーをゆつくりと飲んだ。飲み終わっても、コーヒーの表面を眺めている。なんだろう？

「・・・それは、小学男子生徒で・・・」

そういつて拓也は、左隣にいる私の方をくるっと向いた。

「被害者中野光治の知り合いの子、だって。」

彼の丸っこい目が、ジッと私を見つめる。

私はその顔を見ながら、血の気が引いて行くのがわかった。

「・・・まさか・・・。」

「うん。塚本碧^{みどり}さんだよ。」

自分の目が、見開かれていのが分かる。
なのに私には、何も見えていない。

本当に、見えない。

あの人は、あの時、あの現場にいた。私と同じように。

見えない。

なんでそれを、私に隠していたの？

「あのさ、綾、やな事、言っぜ？・・・お前が見たアレ、刺した生徒、本当に中学生だった？」

眉間に皺を寄せて私を覗き込みながら言う拓也に、私は弾かれた様に顔を上げた。

「なっ・・・！」

彼の意図する所がわかって、その可愛い顔に怒りすら湧いてくる。

なのに拓也は、容赦なく話を続けた。

その顔とは裏腹に、射る様な鋭い眼差しを向けながら。

「黒っぽい服を着ていたからって、無意識に、中学生だ、って思いこんじゃってたり、してない？」

「・・・・・・・・。」

「あの日は雨が降ってたんだろ？ひよつとしたら、お前の眼には・・・全部が黒っぽかったり、していなかった？」

「・・・・・・・・。」

何も答えない私に、彼は軽く溜息をつくと視線をずらして、自分自身に問いかける様に、頭の中を整理するように、目を細めて遠くの窓の景色を見ながら言った。

「そう考えたらさ、塚本碧が、お前が事件を目撃していた事を知っていても、なんか辻褄があうよな？お前がどの程度覚えているのか、確認をしたかったのかもしれない、とかさ。なんで15年後なのかは分からないけど。時効が過ぎ去るのを、お前を刺激せずに待っていた、とも考えられない？」

「……。」

「……なんてね。これ、全て俺の推測よ？俺の勝手な推理を、真に受けたりすんなよな？……いちお、もう一人の目撃者、つーのも捜して、話を聞いてみるつもりだけどね。まだ名前しか分かんないんだけど。」

そこまで言って、彼のお喋りが途切れる。

気付くと、拓也がこちらを凝視していた。

いつもの人懐っこい瞳が、少し見開かれている。

悔しい。

涙が一つだけ、私の頬を伝って流れた。

知らなかった事とは

彼は事件当時、現場にいた。

それは、私に隠していた、という粋を超えている。

初めて会ったあの日、彼は私達に「現場を案内してくれ」と言った。この土地に多少、不慣れだから、と。

それが、嘘だった事になる。

いや、むしろこれは「騙された」。

「会うのはこれっきりな。」「君を傷つけたくなかった。」

そんな台詞を言っていた彼の、苦しそうな瞳を思い出した。我慢したのに、出てしまった一粒の涙。

その涙を無視して、私は拓也とは関係の無い方向を凝視していた。

だってそうでもしないと、後から後から、涙が溢れてきそう。

悔しい。本当に悔しい。

だから、涙も拭わない。それをする、まるで自分が泣いている事を認めた様な気分になるから。

一粒ぐらい、無視してよ。

なのに拓也は、それをしない。

私のたった一粒の涙を許してくれず、ボソツと呟いた。

「泣くんだ……。」

泣かない。というか、泣いてない。

もう、あんな人には振り回されない。そう決めたんだから。

「……あいつが、好きだった……？」

ゆっくりと呟く拓也に、二つの苛立ちを覚える。

一つは、何を分かり切った事を今更。

二つ目は、……その言葉が、過去形な事。

もう、この恋心には終止符を打て、と拓也に言われている様な気分になった。

「……俺は、泣かせなかったのに、な。」

「……。」

彼の言葉を無視し続けてあさつての方向を見続けていたら、拓也は軽い溜息と共に言った。

「……泣かせたかったな……。」

「……え？」

やっと、拓也の方を見る。今、何か言った？

隣に座っている拓也は、やっぱり私と同じように、関係の無い遠くの方を見ながら話を続けた。

「……綾は、俺では泣かなかった。泣かせたかったんだ、俺。お前は俺が何をやっても、何も言わなかったろ。我儘も言わない。受け入れるってヤツじゃない。受け流してたんだ。」

初めて聞くかもしれない、彼の心の奥底の、本音。私はビククリしてしまった。

高校時代も、付き合っている間も、そう言えば彼から本音を聞かされた事が殆んど無かった。

いつもはぐらされているか、バカにされているか、甘えられているかだった。

「そんなお前の心に入り込みたくって、いつしかそれが、泣かせる事にならっていた。俺はね、お前に、俺の為に心から怒ったり、笑ったり、泣いたりして欲しかったんだ。俺、懸命だったよ。お前を傷つけたくって、しょうがなかった。それでもお前は、泣かなかった。」

「.....」

拓也は苦笑した。私は目が離せなかった。

そして彼は私を横目で見て、優しげで切なげな瞳を見せた。

「だけど、あいつはやるんだね。たったの一撃で、綾を泣かせられるんだ。」

彼に気づかされる。そんなにも私は碧さんが好きだったんだ。

同時に、拓也の切なさが、今までで一番ダイレクトに伝わってきた。はぐらかす事も誤魔化す事もせず、お酒の勢いなんてふざけた事もしない、素の拓也が私を見ている。

「綾……。」

拓也は私をそっと抱きしめた。

「……俺ん家へ、来いよ。俺が、お前を守るから。」

「……拓也……。」

両腕で包み込むように私を抱きしめ、優しく頭を撫で続ける。

わずかな抵抗を感じながらも、私は自分が嫌ではなくて、むしろ体の力が心地良く抜けていくのがわかった。

拓也の匂いはやっぱり嗅ぎ馴れたもので、ここが本来私の戻る場所だったのかしら、と思えてきそう。

「望むなら、ちゃんとあいつに話をつけてやる。誰もお前の身に、危害を加えない様に守ってやるよ。だから……おいで。……一緒に帰ろう。」

そう言っただけで彼は、涙を流した方の私の目蓋に、そっと唇を押しあてた。

「……今は、お前の心に、俺が入っていなくても構わない。……彼氏でなくてもいいからさ。側にいろよ。」

碧さんの顔が目に見えなくなる。

一度手に入れたあの甘さを手放してしまうと、どうしてこんなにも人恋しくなるんだろう？

あの甘さを知る前だったら、きっと私は、この事態も一人で耐える事が出来た。

拓也の手を、突き返す事も出来た。

なのに今は、碧かれさんが恋しくて、恋しくて、手に入らなくて、だから、代わりのモノで埋めようとしている。

人を好きになると、どうしてこんなに弱くなってしまっただろう？

「・・・ちよつと。」

浸っていると、思いつきり真横至近距離から声をかけられた。見ると・・・奈緒が、閻魔さまの形相で立っていた・・・。

「公衆の面前で、何、そんなにイチャイチャしているのよっ。」

「・・・なっ・・・おっ・・・」

ぎ、ぎえ〜・・・！！恥ずかしいっ見られたっ親友に見られたっ！っっていうか、ここ、お店の中だったっ！！忘れてたっ！

「いくらクリスマスでもねえ、真昼間から、そんな所で、キスマがいの事をしているバカップルは他にいないわよっ。」

「っっ・・・ごめっ・・・！」

「人前で二人の世界を繰り広げるんじゃないっ！そーゆーコトはフランスあたりでやってっ！！」

なぜフランス？アメリカは？イギリスは？イタリアは？
あ、すいませんすいません、そーゆー意味じゃないんですね。わ
かってます、ごめんなさい、ごめんなさい。

「ねえ、田中さん、座んなよ。」

顔が真っ赤になって謝罪の言葉も弁解の余地も無い私の隣で、
拓也は背もたれに深く潜り込み、いつもの調子で図々しくもシレッ
と言った。

「あなたのせいで、余計に目立ってるよ、俺達。」

「あんたが言うなっ。」

「あなたが騒ぐからさ、これってどっから見ても修羅場だよ。俺、
スゲー節操無さそうじゃん。落ち着きなさいよ。」

「・・・吉川くん・・・実際、節操のない男がよく言うわね。相変
わらずぶっあつい面の皮して、あなたには恥じらい、ってもんがな
いの？」

「奈緒、それはね、でっかい猫を飼っているっていうんだよ。」

二人のやり取りについ口を出しちゃったんだけど、あっさりとおし
らわれた。

（これ、高校の時の私達のパターン。）

「そんな可愛げのあるモンじゃないでしょ。」

「俺は田中さんよりは、世渡り上手だからね。悔しいんですよ。」

「吉川・・・誰のおかげでここにいると？解任するよ？」

「あれ？そんな事言っちゃっていいの？この俺手放すと、痛い目見
るよ？」

「あんたはいてもいなくても、こっちが痛い目見そうで、ヤダ。」

「よく言うよ。この俺の力、見混んじやって、当てにしちゃってる

のは田中さんでしょ？巻き込んだのはそっちでしょうが。」

「吉川くんがさぞかしお喜びになるかと思ひましてね。」

「あー、もううるさい、うるさい。」

拓也は散々自分が奈緒に応酬していたくせに、さも被害者の様に、大袈裟かつ面倒臭そうに顔の前でひらひらと手を振ると、足を組んで、それはそれはエラーソーに言った。

「早く話進めちゃおうよ。キリがないし、俺忙しい。」

「・・・綾香、あたしこの人、殴りたい。」

「・・・言っただじゃん。あんまり拓也をいじると、後が面倒だよって。」

なんとなく自分も片棒を担いちゃっている様な気がして、ひそひそと小声で奈緒に言うと、

奈緒は諦めたように上を仰いで軽く溜息をつき、厭味ったらしく私達に言った。

「ふんっ。じゃあまずは、お二人さんのラブシーンの原因でも話して貰いましょうか？」

「あんたが邪魔したヤツね。」

ほら、そうやってすかさず応戦するから悪いんですよ、拓也も奈緒も。

奈緒が悔しそうにギロって横目で睨んでいるのに、涼しい顔でタバコをふかさないのでよ、私、話づらいじゃない。

タダでさえ、色々飛ばして説明しなくちゃいけないのにつ。

険悪なムードの二人を前に、私はボソボソと話した。

藤田さんが過去に私と2度接触している事（イク声で迫られた事は、パス）

碧さんに成り行きで全部話してしまった事（キスにつられた事は、パス）

碧さんが事件当時現場にいた事（これは当然、拓也にバトンを渡しました）

するる奈緒が、なんと、……怒った。^{いか}

「……藤田……塚本……許せない……。」

テーブルの上に拳を作り、肩をいからせ、目がつり上がっている。

「なんて卑怯な連中っ。自分達の正体とか情報は隠しておいて、こちの情報だけ搾り取るとはっ。向こうにどんな事情があるかは知らないけれど、こっちだってそれなりに大変で嫌な思いしてるのよっ。」

……怖いよ、奈緒。

あんたのその、和風日本美少女が本気で怒ると、なんだかホラーの世界の扉が開いたようで、私、ああいう「ホラー」って苦手なのよ。それならまだ、スプラッタージェイソンの方が我慢できるの。

「礼儀知らずで嫌な奴らっ。それなら最初っから事情を話して、綾香にちゃんと聞けばいい話じゃない。」

自分達の欲しいものだけ取っていくなんて、ギブアンドテイクって

言葉を知らないのかしらっ。」

・・・最初っから事情を話すって・・・。

『やあ、日下部さん。僕達15年前に起きた殺人事件の関係者ないしは実は当事者なんだけど、君、あの時、人が刺されるのを見てたよね？どうして逃げちゃったの？なんで警察に話さなかったの？おかげで大迷惑或いは人生救われたんだけどそこは内緒って事で、ところで、誰が刺していたか教えてくれない？』

こんな感じ？あの二人が？ニッコリと笑顔で？

・・・怖っ。・・・一生活さない・・・。

「それは違うよ、田中さん。」

拓也は少し上を向いて煙草の煙を口から出しながら、灰皿に置いて彼女の方を見た。

「ギブアンドテイクなんかじゃない。世の中はね、弱肉強食なの。強いモノが勝つ世界。ギブアンドテイクなんて、平和ボケした国の、しかも女性にありがちな、理想論にも届かない夢見論だね。」

何処の世界にいんのよ、出さなくてもいいモノ、差し出すヤツが。

┌

そう言って、丸っこい目をキュッと強める。

そうかな？ギブアンドテイクの精神が無かったら、やがてその世界
って崩壊すると思うんだけど。

王様だって、国民をキチンと養わないと、革命を起こされちゃうで
しょ？

なんて、私がいつもの自分ワールドにハマって考えていたら、拓也
の視線に気づいた。

「弱けりゃ負けて、当り前。騙されたら、ゲームオーバー。それが
嫌なら、勝つか、逃げるしかないんだよ。」

いつのまにか、拓也は私を見て言っていた。鋭い視線。
私は言葉に詰まった。

「・・・負けたくない。」

「じゃ、勝つしかねえだろ。」

そう言うと、彼は再び椅子に、深く腰掛けた。

逃げたくない。

勝つしかない。

知りたい事とは(前書き)

恋愛小説なのに、

恋愛は？どこに行った？

知りたい事とは

黙ってしまった私と拓也。

奈緒はそんな私達を交互に見比べると、ちよつと眉根に皺を寄せて、言った。

「すると今後の私達の目標は・・・何？」

「塚本碧^{みどり}が俺達と関係を切りたがっている以上、今後はあの人達に会わなくて済むんでしょ？」

そうなると、あれじゃない？・・・お前が見た人物は、一体誰か、つてこと。」

拓也が私に一瞥をくれる。

私が見たのは、誰か？

私は、頭を整理しながら、ゆっくりと言った。

しまったなあ、こんな事なら連続2時間サスペンスドラマとか、推理小説を山ほど読んでおけばよかったわ。ああいうの、苦手なのに。

「あれ・・・話から判断すると・・・やっぱり、誰かが、中野光治にトドメを刺していた、つて・・・推理できない？そうすると・・・」

突如、私は、気付いた。

「可能性のある人達が、何人かいない？つまり、アリの無い人達。少年Aのハママでしょ、あと目撃者の、二人。」

「クズハラとコウノ。」

「そう。だってその人達の事、誰も見てないんでしょ？・・・ほら、先生を呼びに行った、とか。お互いが口裏を合わせているのかもしれないし、・・・誰と誰が口裏を合わせているのかはわからないけど・・・或いは、一人でやったのかもしれないし。」

私は顔を上げて二人を見た。

「だって、先生を呼びに行く時、二手に分かれたんでしょ？それって、みんな一人になっちゃって、誰のアリバイも無いって事じゃない？」

「・・・そつか・・・。」

奈緒が驚いたように、口をポカンと開けた。

「でも、動機は？」

「そんな事までは、まだわからないよ。それを言うなら、誰の動機もわからないじゃん。ハマの動機でさえ、・・・つまりね、動機はないけどアリバイもない子達が3人もいるって事。」

「4人。」

拓也が、訂正した。

「4人だよ。塚本碧がいる。彼も、動機もアリバイもない。」

う・・・無視していた事を指摘された。拓也、すごく意地悪な顔をしている。

でも、確かにその通りだし、現場にいてアリバイの無い人達って括りなら、彼もその一人に入る。

でも、ひよつとしたら他にもあの場にいた人がいるかもしれない。だって学校なんて不特定多数の人が出入りする所だし、誰がいたかなんてわからないじゃない。

・・・って、ちょっと待って？

「私も、そこにいたよ。ゲ、どうしよう、私、動機もアリバイもないよ。」

「お前、容疑者なの？」

「え？私容疑者なの？」

思わず身構えて、警戒するように拓也を見た。あれ？警戒する相手が違う？そうじゃなくて、警戒している人間が違う？あれ？あれ？

「バカかよ、お前。6歳の女の子が、男の胸にナイフを刺すかよ？第一、客観的に考えても力が足んねーだろが。」

「・・・ふーん。そうか。」

「自分で納得しないでよね。」
「ジロツと拓也に睨まれる。」

よかった、私、外された。

・・・でも、碧さんって・・・

「・・・なんで、あそこにいたんだろ？」

「知るかよ。だから事情聴取されたんだろ？」

拓也は素っ気なく吐き捨てるように言うと、残りのコーヒーを一気に飲んだ。

「・・・そっか。・・・んーと、とにかく、今の所、私のみたあのシーンが、・・・この4人の内の誰か一人なのかどうか、を確かめる事ね。」

私は隣で、テーブルに4つ指の跡を付けながら呟いた。

一緒にそれを覗き込んでいた奈緒が、うんうんと頷きながら、私に尋ねる。

「どうやって？」

指が、止まってしまった。奈緒と顔を見合わせる。

私は、拓也の方を振り仰いだ。

「どうやって？」

「・・・で、俺に回ってくるわけね。」

拓也はハアと溜息をついた。煙草の火を消している。私は両手を胸で合わせて、珍しく素直に（って自分で言うか）彼に頼み込んだ。

「お願い。何か考えて。」

「・・・高くつくよ？」

「綾香を半日、好きにしてもいい。」

「奈緒っつ！！！！」

奈緒が横からとんでもない口を挟んできたので、相当恥ずかしくつて（この子はさっきの私と拓也の・・・アレに、相当怒っているに違いない）、お店の中って事も忘れて、大声を出してしまった。なのにそんな私の隣で、拓也は腕を組んでハッキリ言った。

「一日。」

「拓也っ！！！」

「それはダメ。あんたは危険すぎるでしょ。」

奈緒も拓也に応戦すべく、腕を組んで足を組んで、思いつきり高飛車な態度を取っている。

拓也は嫌そうに片眉を上げると彼女を見て、そして再び溜息をついてみせた。

「ちえつ。・・・あーあ、わっかりましたよ。やりゃーいーんでしょ。どうせね、あなた達に関わった時から、いーよーにこき使われんのは分かっていたよ。やりますよ。」

ずりずりずり・・・と椅子の中に沈み込む。

「こうなると、もう一人の目撃者コウノに話を聞いただけじゃなくて、全く気は進まないけど、ハママも探し出して話を聞いてみる事だよ。・・・出来っかな、これ？これが出来たら、俺ってもう口の域だと思っただけど。」

「いいから。自分を褒めるのはいいから。それで？」

奈緒の容赦無い毒舌突っ込みに、拓也はますます嫌そうな顔をして彼女を睨みつける。

そしてそれでもめげずに、話を続けた。エライ。

「・・・それで、あとは、やっぱり第3者から話を聞く事じゃない？客観的な話。つっても、学校の教師とか警察とかはきつと、こんな俺らに話をしてくれるとは思わないからさ・・・近所の噂好きのおばちゃん達に聞くのもいいかもしれないけどさ・・・もっとこう、マトモな奴からがいいな・・・。」

唇を親指でひたすら擦りながら、拓也はもどかしそうに言う。

「誰かいないかな？当時の事を、なんらかの立場である程度知る事が出来て、今はもうリタイヤしたおじいちゃんとかで、口の軽そうな人。そういう人ならさ、もう責任もあんななくて、何か喋ってくれるかもよ。」

いるかい、そんな都合のいい人間。

っていうか、滅茶苦茶細かい指定じゃない、それ。ゾーン狭すぎでしょ。

とか思っていたら、私の中に、ある人物が思い浮かんだ。

「あ．．．私、いる．．．。」

口が軽いかどうかは分からないけれど、

「お父さんのいところ。警官を定年退職している。」

拓也がビツクリした様に言った。

「何それ。なんでそーゆー事を早く言わないんだよ。」

「えー、だって、忘れてたし．．．うち、お母さんがあんまり、仲良くなくて．．．その、父方の親戚と．．．。」

「場合じゃない。決定。」

えー．．．。もう、何年も会っていないんだよね、あの人．．．。お母さん、嫌な顔するだろうなあ．．．。

「あたしもおじさんが高校の教師なの。学区も違うけど、同じ県下だし、何か知ってるかも。聞いてみるわね。」
奈緒が言った。

もうこうなったら、教師だろうが警官だろうが、市役所だろうが県庁だろうが、はたまた消防署だろうが、使える地元コネはみんな使おう、って気になってくる。

「あ、そうだ。あたしね、河島さんと初詣行くんだ。」

二人でココアを飲んでいたら、奈緒が私に耳打ちした。

私は少し嘔き出してしまった。
拓也に、「汚ねえな。」と横目で軽く睨まれる。

「……えっ！ホントに？」

私も小声で言った。奈緒は軽く肩をすくめて、唇を突き出した。

「うん。誘われた。お正月なら、お休みが取れるって。」

「……付き合うの？」

「……まだわかんない。」

拓也は、我関せず、といった感じで携帯をいじりだした。
基本的に拓也は、人との距離を取る事がとても、上手い。
これが高校生からの、私達3人の適正距離でもあった。

「奈緒は、今まで誰かと付き合った事、ある？」

それをいい事に、私はますますコソコソと、耳元でガールズトークを始めた。

「うんー……まあ、ボチボチ、ね。」

「……誰か、好きな人とか……いた？」

「まあ……色々、ね。」

「奈緒って、全然そんな話しないから。」

「綾香だっけじゃないじゃない。バレバレなだけで。」

「……。」

今更、私達の間隠し事なんて、とは言わない。

人それぞれのパーソナルスペース、って心の中にもあると思うし、
必要だろう、とも思う。

それが例え親友であろうと、家族であろうとも、ね。

でも、奈緒が誰かとデートをするなんて話、聞くのも初めてなら奈

緒の口から語られるのも初めてだったので、
これは彼女からの何かのサインなのかもしれない、私に踏み込んで
欲しいのかもしれない、

なんて、思っちゃったのよね。

だから、思い切って聞いてみた。かなり、かなり、思い切った。

「・・・奈緒、さ。・・・拓也の事、どう思う？」

「二重人格で腹黒い甘えったれで一途すぎる、可哀そうな奴。
即答だ。」

しかもバツサリだ。

「それがどうか？」

多少不機嫌そうに聞く奈緒に、何となく身の危険を感じてしまう。
でも今まで気になっていた事だし、もしそうだったら事態がひっく
り返る大変な事なので、
・・・勇気を振り絞って、囁いた。

「・・・好き・・・？」

「・・・誰が・・・？」

「・・・た「ちょっと待った!!」」

ガッタン！！と奈緒が立ちあがる。

私も、彼女の目の前に座っていた拓也も、ビククリして奈緒を見上
げた。

奈緒は、驚愕と困惑が入り混じった顔つきで、私を見下ろしていた。

「ちょっと待って？え？え？何？まさか綾香……」

沈黙。

奈緒を、上目遣いで見る私。

ど、どうなるんだろう、これ……。

「あり得なさすぎる……！」

奈緒が、周りの迷惑を一切省みず、大声で叫んだ。

お店の人が、驚いてこちらを覗き込んだ。

この子に比べたら、私と拓也のイチャつきなんて、正直マシな方だと思っただけど。

「今日ばかりはあんたに殺意を覚えたっ……何をどう考えたらそうなるのよっ……！天然もここまで来ると犯罪だわっ……！」

「……え……ちょ……」

そこまで言うかつ……！

親友を気遣っている私の細やかな乙女心を、犯罪とは何事よっ……！犯罪って、今の今まで私達が話していた様な深刻な状態を言っんでしょっ……！！

え？私の天然って深刻？！

「愛想が尽きたっ。情けなくなっただっ。もーお、我慢が出来ないっ。」

「え、だって奈緒、だって……」

「あーあ、田中さんがついにキレた。じゃねー。俺、帰ろうつと。」

拓也は携帯をポケットに滑りこませると、さっさと席を立った。

ちよ、ちよつと、勝手に行かないでよー！！逃げ足速すぎるでしょ！！！！

知りたい事とは（後書き）

ここまで、第2章です。

おかしいです。この章で決着をつけるはずだったのに、狂ってます。まさか年を越すとは・・・。

でも、必ず次章でカタをつけます。つけてみます。（首を絞めました。）

もう少し、お付き合いください。

いつもありがとうございます。

このお話が、皆さまの暇つぶしに役立っていますように・・・。

物憂げな妄想

お正月っていうのは、ウキウキとその到来を待った割には、すごくつまらない。

除夜の鐘も初日の出も、寒いし眠いし混んでるし、で、ここ数年行つた事が無い。

大晦日に衛星で、某アイドルグループのカウントダウンを見ながら、こたつに入ってボーっと考えた。

奈緒ってすごい。

「いい男は観賞用」とか言ってアイドルの追っかけをやっていたのに、いつの間にやら、

人気俳優にスカウトされて、デートまでしちゃうんだから。すっごいなあ。

そう考えると、彼のお誘いをお断りするはずないわよね。初詣デートっていつ行くんだろう？やっぱ変装とかってするのかな？でもあの子、今、地元に戻っているわよね？じゃあ、元旦じゃあないのか。

なんてまったく、大きなお世話。

たまに実家に帰ってもすることないし、テレビも見飽きたし親も既に寝ているし、私ももう寝よう。

時計の針が深夜一時をまわって、考える。

両親のいない碧さんは、今頃何処で、何をやっているんだろう？

小学生の高学年？で親を失って、毎年お正月はどうしているんだろう

う？そもそも兄弟はいるんだろうか？

いるといいな、と考える。

神様、少しでもあの人の寂しさを、減らしてあげて下さい。

するとこたつの上の携帯がなった。ミツキーさんのボイス着メロ、メールのお知らせ。
みると拓也からだった。

・・・あけおめメール？・・・なんだかなあ・・・。
・・・マメ、というか、諦めが悪い、というか・・・
・・・ああ、一途って言うんだ、こういうの。奈緒が言ってたわ。

ところが、開けてみるとメールには一言。

二日。朝10時半。御茶ノ水駅聖橋口。

なんだ、コレ。

しばらく眺めた後、ポンつとこたつ布団の上に携帯を放り投げる。
ついでに自分もゴロン、と仰向けに寝転がる。

あけおめメール。欲しいかも知れない。ううん、本当はメールでなくて、話したい。

隣の携帯を覗みつける。あの中には、一度も使っていない番号とメールアドレスが入っている。メールアドレスは何故かPCの方だったけど。なんでかな？

待ってるんじゃないかと、使ってみようかな、あの番号。

でも、拒否されたらどうしよう。ていうか既に拒否されているけど、私。

あれ、何だっけ？傷つけたくないから、だっけ？

あれって、私が「傷つきません」って言ってもダメなのかな？

「触れずにいられない」って、「じゃあ触って下さい」って言えば、ああそれはエロか、私が。

一体あの人の何が私を傷つけるんだろう？嘘をついていた事？それなら充分傷ついたけど、更なるネタがあるのかしら？それはそれでゾクゾクするぞ。

実は俺は殺し屋だ、とかさ、スパイだ、とかさ、スパイ繋がりですパイダーマンだったんだ、とかね。

だから君とはいられないんだ、愛していても、ってやつ？わはは。で、大概、女の子は「そんな貴方でも構わない」って言って付いて行くんだけど、私やっぱり、

「蜘蛛は嫌いだな……。」

「……え？何？」

隣でうつ伏せに寝っ転びながら雑誌を見ていた弟秀真しゅうまが口を開いた。

「さつきから携帯睨んで、スゲー不気味なんだけど。」

雑誌を読みながらよく観察していたわね。

殆んど喋っていないかったけど私の性格をイヤと言う程良く知っていて、だから私が思考の途中で（この子はそれを妄想、という）口を開いても、あんまり驚かない。

ジロツと生意気にも片眉を上げて私を見ると、さして興味もなさそうに雑誌の続きを読みだす。男の情報誌？彼女でも連れていくんかい、受験生のくせに。

仰向けで天井の蛍光灯を眺めて、ああ、これって白くてお月さま見たい、そう言えばかぐや姫も「地球人ではありませんので、貴方とはいられません」って言うって月に帰っていったよな、とか。

「・・・宇宙人かもしれない・・・。」

「・・・。」

秀真無言の圧力。当り前に、それを無視。

だってミカドは、それでもいいっていったのに、かぐや姫は勝手に一人で帰っちゃって、

それはつまり、私が「傷ついたっていい」って言っても勝手に

「・・・月に行っちゃうのかな・・・？」

「・・・俺にどうして欲しいの？」

秀真が困ったように眉毛を下げて私を見た。

雑誌を読むのを諦めたらしく、その上に腕を組んでうつ伏せになり、顔を私の方に向ける。

「月に行きそうな宇宙人がいて、姉ちゃんは蜘蛛が嫌いなのに我慢をしなくちゃいけないの？」

「・・・だってこっちは、それでもいい、って思ってたのに、向こうがそれじゃダメだ、って言ってんだよ？」

私もクルツとひっくり返ってうつ伏せになり、秀真と同じ体勢で話をする。

秀真は「はあ？」という顔をした。困っている。当り前か。

「そんで姉ちゃんは何て言ったの？」

「・・・それじゃいいわよ。欲しいモノあげるから、とっとと行きなさいよ、・・・みたいな事を言った。」

あれって、そういうコトだよな。

「出たー。真っ直ぐなプライドー。しかも伸びてる方向が人と微妙に違うー。」

秀真がいかにも呆れました、みたいな顔をして、私をからかう。生意気なコね。エラくなっただじゃない？

私はジロツと秀真を見返したいけど、そんな元気もあんまりなくてうつ伏せの体制そのまま、眼を閉じた。

あーあ、やっぱ秀真の言う通り、あそこで短気を起こさなきゃ良かったかなあ。

あの手この手を使って、碧さんが離れていくのを止めれば良かったかなあ。

でも、あの手この手、って何？

「ホントは姉ちゃん、どうしたいの？」

「……………」

そりゃあ、あなた、もう一度会いたいんですよ。

もう一度とは言わず、もう二度三度、出来ればずっと、会いたいんですよ。

彼が過去に何をしちゃったのかなんて、今の狂った私の頭には、なんのブレイキにもならないんですよ。

自分勝手に独りよがりで、私を騙した人なのに、時間が経つとそんな事より、彼の笑顔しか思い浮かばないんですよ。

「…………珍しいねー。姉ちゃんがそんなに誰かの事で思い悩むなんて。」

秀真の感心したような声が聞こえてくる。

「その人、好きな人？だよな。月に行かれたら困るんだから。」

「…………そだね。困るね。」

でももししたら、今はロケットがあるから追いかけられるよね？って電話もかけれない人間が何を言ってるか。

「いいじゃん、追いかけてあげば。月でも、どこでも。」

秀真には私の妄想が聞こえるらしい。流石だね。弟はいいものだ。

彼女と上手く行く事を祈っているよ、でも二浪はしないでね。

私が目を開けると、秀真はよっこらせ、と起き上がった。

私と似ているけど、明らかに作りが男っぽい顔で、ニコッと笑う。

「そんなに好きなら、相手の迷惑省みず、突っ走れば？売った喧嘩なんて、いつでも撤回出来るんじゃない？しかも何回でも。」

「……少年はいいなあ。素直に単純で。」

「……大人ぶっていると、損するよ。」

恋愛マスターは不満げな表情で立ち上がると、急に思い出したように私に言った。

「そう言えば吉川さん、元気？」

「……このタイミングで、それを聞くか。」

「俺、あの人結構好きだったけどなあ。」

じゃ、おやすみ、と言って部屋を出てってしまった。

私はしばらく携帯を眺めて、眺めて、眺めて、

考えて、考えて、考えて、

結局、未送信BOXが一通、増えただけだった。

とりあえず、あさって、てもう年が明けたから明日か。

御茶ノ水駅聖橋口って何線よ？

何か情報を掴んだのかもしれない。私もこたつから出た。

色々頼みこんでいる身としては、肩身が狭く心苦しいので、とやかく言わずに行きましよう。

理想的初詣（前書き）

私は好きです、ここ。
お世話になりました。立派な所です。

理想的初詣

二日。朝10時半。御茶ノ水駅聖橋口。

「……来ました。」

やたらと寒いもんだから、お気に入りのピンクグレーのダウンコートを着込んで、ピンクベージュのマフラーをグルッグルに巻いていたら、

拓也も紺色のダウンジャケットに迷彩のマフラーを、口元が埋まるほどグルッグルに巻いて立っていた。

「おう。」

「何か進展？」

それで呼び出したんでしょ？

「うん。進展。」

そう言うと彼は、寒そうに肩をすくめて、背中を丸めて歩きだした。私は慌てて、後からついていく。どこに行くんだろう？

人ごみに流されていく。いや、マジで。やたらと人が多い。拓也の姿が人並みに埋もれて、何度もその姿を見失いそうになった。

しばらく歩き続けたら、脇から腕をグイッと引っ張られた。

見ると拓也が横に立っている。私は周りを見回した。

……初めて来る、ここはひよつとして……

「……神田明神……？」

「やっぱ混んでるね。」

「・・・って、何の進展よ?!」

「事態の進展? 関係の進展? なんでもいいじゃん。」

「騙したわねっ。」

「人聞きの悪い。俺、なんも言っただけだったハズだけど?」

それを騙したっていうんじゃないっ。

不敵な顔してニヤツと笑い、再び歩きだす拓也の後姿を見て、軽く溜息をつく。

あーあ、素直に誘っても私が絶対来ない、って知ってるもんだから、ついにはこんな手を使ってきたか。

しかも、自分が甘えれば大抵、私が諦める事を、この子は知っている。

でも悔しい気持ちは拭えなくって、ブツブツと文句を言う事を止められない。

「しかも神田明神なんて、江戸の鬼門封じじゃない。」

「・・・はあ?」

「平将門祀^{まつ}っちゃってるし。首塚の祟^{たた}りだし。これでもう、成田山にお参り行けないし。」

「・・・お前、変なところでマニア入っちゃってんね? 下町江戸っ子の明神様に、何イチャモンつけてるのよ。」

「・・・。」

ホントはあんたにイチャモンつけてるのよっ、て台詞が喉まで出か
かる。

それを飲み込み、代わりに眼力で飛ばす。でもやっぱり、可愛い顔して知らん顔。ああ、バカらしい。

「拓也はお正月、帰らなかったの？」

お賽銭も投げてお参りも終わり、参道を戻りながら私は聞いた。

「専門学校があるしね。お前の事も気になるし。」
「さらっと言わないで。」

「お前がおじさんとこ行く時、俺も付いていってもいい？」

「・・・なんて言って、付いて来るのよ・・・。」

「なんとでも。お好きなように。」

知らないわよ、そんなの。あんたの口から出まかせ嘘八百で、どうにかしてよ。

彼の後をとぼとぼとついて歩く。

途中で絵馬が沢山ぶら下がっているのが目に付き、みんなの願い事をつい、読んでしまう。

フラフラ、と拓也から離れてそれらを眺めていたら、後ろでかわいい女の子の声が聞こえてきた。

「たつくん。」

やたらと近いものだから、嫌でも会話が聞こえてしまう。

「えー、なんでいんのー。忙しいって言ってたじゃん。なな、すっごい寂しかったんだよー。」

可愛い声だなあ。声優さんみたいだなあ。ほら、アニメとかでよく

ある、変身しちゃう女の子達の声。

「ほら、みてみてー。イブイブにくれたピアスー。可愛いでしょー。

」
「・・・ななちゃん、こんなとこまで来るんだ？」

・・・なぬ？

これは拓也の声？なぜあの子が返事をする？

・・・ああ、そうか！『たつくん』とは拓也の事ね！納得！
てもしや、私は今、拓也の彼女に遭遇しているの？驚愕！

それはマズイマズイ。離れなきゃ。そして隠れなきゃ。

私は後ろも振り返らずに、そーっと、そー・・・っと、二人から離れた。

そして絵馬達の後ろに回る。

拓也の彼女は、白いピーコートにピンクのミニスカートと黒タイツを合わせた、茶髪ウェーブのナチュラルアゲハちゃんだった。なあるほど。

「そうなの。初めてなの。最近ブシヨーにハマってさー。ここって、ハイアン時代か戦国時代の武将を祀ってるんだよ。たいらのまさかど。」

ナチュラルアゲハちゃんが可愛く楽しそうにお話をしている。

鎌倉幕府と室町幕府は何処へいったの？

あの子、いくつだろう？この間、大学のキャンパスで見かけたコとは違う気がするけど。

「たつくんは誰と来てるのー？お友達ー？」

「うん。そうだよ。」

「ななもお友達ー。」

そういつて拓也に腕を絡めてくる。甘え上手で可愛い仕草。おお、女子力沢山使ってそう。恋愛偏差値が高いんだろっな、こういっ子って。

「悪いね、ななちゃん。また今度、学校でね。」

先程から拓也は、優しくて甘い笑顔のお兄さん、をしている。高校時代から色々な後輩ちゃん達と付き合ってきた拓也だけど、ふーん、こういう顔して彼女達といたんだ。私には滅多に見せない、いい顔ね。

「えー、ななも一緒したーい。ダメ？誰と来てるの？抜け出そうよお。」

「ごめんね。またの機会で。そのピアス、よく似合ってるよ。」

「えっ？ホント？」

・・・拓也もやっぱり、偏差値高い・・・あの笑顔でそれ言われたら、そりゃオチるよ。

「絶対だよ！学校でねー！」

・・・かわいいじゃない・・・。

バイバイ、と拓也がニッコリ手を振り、しばらくして、絵馬壁の向こうにいる私に、顔だけ向けて言ってきた。

「いつまで隠れてんの？」

「お邪魔かと思いまして。」

「別にいいのに。」

「私が良くない。」

ゆっくり姿を現す。

「それでは、初詣も済ませた事ですし、また会う日まで。」

「おいコラ、ちよつと待て。」

拓也に襟首を掴まれて戻された。ちよつとやめてよ、伸びるでしょ。寒いしも帰りたいのよ。変な修羅場にも巻き込まれたく無いのよ。

「何だよ、それ。いつの事だよ。」

「・・・しあさつて、おじさんとこに、お正月の挨拶の名目で行くんだけど・・・。」

「どこよ、それ。」

「・・・落合。別に拓也忙しいなら「行くよ。」

かぶせ気味に拓也が答える。私はいやーあな、顔をした。

「・・・来るんですか？」

「行きますよ？」

「専門学校は？」

「行きますよ？」

「一人でも大丈夫なんだけど。」

「臨機応変に要領よく聞けないでしょ、あなた。」

「だって、奈緒は一人で聞き込みしてるー。」

「あんな田舎まで飛行機乗って行けるか？」

うっ。私のおじさんも地元にいれば良かったのに。息子家族と一緒に上京なんかしちゃうから。

「・・・来るのお？」

「行くつつつてんでしょ、最初から。何時よ、それ。」

「・・・んーと」たつくんっ」

あ、また登場した。ほら見つかった。だから帰るっていったのにい！
さっきのアゲ八ちゃんが戻ってきた。

パッチリお目目がつり上がって、すっごく怖くて迫力がある。可愛いのに。怖すぎる。

「・・・ねえ、だあれ、その人。」

「・・・。」

キタキタキタキタ。こういう場合は、口をつぐんでいた方がいいのよ。黙っていよう。

「こんにちは。あたし、たつくんの彼女で中島「ななちゃん。」

拓也が遮った。ジャケットのポケットに両手を突っ込み、ニコニコしている。本領発揮だ。

「今日はね、もう帰りなよ。また後にしよ。」

「何よ、それ。ななと帰るの？じゃなきゃ、なな、帰らない。」

「帰った方がいいよ。」

「じゃあ、たつくんはあの人といるのっ？」

「今日はね、色々あんの。ごめんね。あとで連絡するから。」

「そんなの嫌だっ。今一緒にいたいなのっ。たつくん、あんなおばさんのどこがいいのっ？」

拓也が黙った。彼女も黙った。私はもちろん、黙っている。

おばさん、ね。やっぱりちよっとシヨックかも。ちゃんとオシヤレ

して、夜は早く寝よう。

なんて考えていたら、拓也の、低い声が聞こえてきた。

「・・・しつこいね、君も。」

顔を上げると、彼の表情はすごく冷たかった。

私に呆れて冷めた視線を送る時の顔つきと、全然違う冷たさ。ギクツとした。

「それどころじゃないから。見て分かんない？諦めてくれる？」

「たつくん・・・。」

ななちゃんも、少したじろいでいる。

次の瞬間、拓也はさっきまでの可愛い笑顔で、ニコツと微笑んだ。

「じゃ、また学校でね。」

なに、この子。

「・・・私、あんたのそーゆー所、大っ嫌い。」

怒った彼女を見送って、しばらく歩いた所で、私はボソツと呟いた。拓也は軽く肩をすくめるだけ。

「そ。ごめんね、性格悪くて。」

「その、手の平返したような二重人格、どうにかしたら？相手に、あまりにも失礼よ。」

可哀そうじゃない。あの子、泣いているかもしれない。

私にはもう、この二人は終わってしまったんじゃないかと思える。それなのに、人を傷つけておいて平気な拓也が、すごくすごく腹た
だしい。

「・・・綾は、『失礼』が大っ嫌いだもんな。」
クスクス笑わないでよ。私、怒ってるんだから。

「大丈夫。あの子はあーゆー子だから。一緒に来た友達つても、
男でしょ、きつと。」

「・・・随分ただれた恋愛してるのね。・・・恋愛じゃないわね、そ
れ。」

私が思わず同情の眼を彼に向けた時、携帯が鳴った。
奈緒からだった。

あけおめコールかな、と思った。

「もしもし？あけましておめでとー！。・・・うん、大丈夫だよ。
・・・え、もう？・・・うん。・・・え？」

耳を疑う。

「・・・そうなんだ・・・。・・・ううん、まだ・・・
・・・うん、わかった。・・・うん。うん。じゃあね。連絡するね。」

「

電話を切る。

黙ってしまっ。

固まってしまっ。

「……………どうしたの？」

私の様子を見た拓也が、普通に聞いてきた。

私は、沈んでいく自分の気持ちを感じながら、小さく言った。

「……………ハマサトシ……………もう、死んでたっ。」

拓也が少しビックリしたように、眼を見開いた。

決意

「……10年も前に、……病気だつて……急性の……。」

可哀そうに。彼は、死んでしまった。

自分が人を殺したと思ひこんで、それを抱えて死んでしまった。ひよっとしたら、違っているかもしれないのに。

私が、何も言わなかったばかりに。

可哀そうに。可哀そうに。

ごめんなさい。ごめんなさい。

……こういう事が。

こういう事を、私は抱えていかななくてはならないのか。

調べれば調べる程、真実を知れば知る程、自分が隠し持っていた事実の大きさに気づいて、

一生、罪の意識を背負って行かなくてはならないのか……。

胸が、痛くて痛くて、堪らない。

「……来いよ。」

拓也が、手を出した。

「帰ろう。」

私達は、黙って手を繋いで、歩きだした。

碧さんが、「君はもう関係ない。忘れるんだ。」と言っていた理由が、少し分かる気がした。こうやって足を踏み入れる度、私は確かに傷ついて、自分を追い詰めていくのかもしれない。

拓也が、「お前に覚悟はあるの？」と聞いた理由も、分かる気がした。こうやって罪悪の意識に苛さいなまれてしまいかもしれない事は、始める前から分かっていた事だったんだ。

怖い、と初めて思った。

「お前、今日は実家に戻るんだろ？」

拓也が不意に聞いてきた。

「・・・・・・？」

私の実家は今、関東某県にあつて、通勤通学をするには少し遠くて不便な所にある。

今日はもちろん、実家から来た。

「家に帰れ。」

そう言つて拓也は、JRの駅前で私の手を放した。

「そしておじさんとこ、必ず俺を連れて行け。連絡しろ。」
「？」

「部屋に戻ったりしたら、押しかけるからな。そしたら俺、勉強どころじゃなくて非常に迷惑よ？だから、家に戻れ。」

拓也はそう言うのとクルツと背を向けて、さっさとどこかへ行ってしまうた。

・・・ちよつと待って？誰が何して迷惑だって？え？誰が迷惑？

私は啞然とした。

勝手に呼び出された初詣は勝手に駅に置き去りにされ、私の周りってどうしてこうも勝手な人が多いのかしら。

分かってる。勝手じゃない。心配してくれてるんだ。

一人で部屋で悩むんじゃない、って言ってくれてるんだ。

おじさんの所で、何か新たな、キツイネタが出てきた時に、私を支えようとしてくれてるんだ。

碧さんだつて。

私を心配してくれていたんだ。

何も気づいていない私が、危なっかしくてしょうがなかったんだ、きつと。

なんて勝手に、愛しい人達。

過去は変えられない。

見ても見なくても、真実は変わらない。

もう、知らずに生きていく事は出来ない。

だから、後戻りは出来ない。

私は、鞆の中に忍ばせて持ち歩いている、一通の封書を取りだした。

それを眺めて、握りしめて、決意する。

未来を歩きたい私に、あまり時間は無い。

やるしか、ない。

「姉ちゃん、入るよー……って何？この匂い。くっせー。」

勝手に入ってきた秀真（まゆみ）が、勝手に嫌な顔をした。

「……何してんの？」

「気合いれてんの。」

大した事ではありません。ネイルを塗っているんです。足に。

色は？真っ赤です。キラッキラのラメをその上から塗っちゃおう予定
です。

私は足を秀真に差し出した。

「塗りたい？」

「いい。」

えー。いい経験だと思うんだけどなあ。女の足にペティギユア塗ってやった事のある19歳男子、なんて、結構イケてると思うんだけど。

「いいの？そんなの塗って。就職活動中なんじゃないの？」

「だから足なんじゃない。」

足なら見えないでしょ。手は、フレンチにする予定だから。

「気合って、就職成就祈願で塗ってるの？」

「・・・人生登頂祈願、かな？姉ちゃん今、踏ん張り時なの。」

秀真の足元の親指に手を伸ばす。

「・・・何してるの？」

「大学合格祈願。気合の御すそ分け。」

「・・・どうしてくれんだよ・・・。」

突っ立ってる秀真の足の親指を、丁寧に塗ってやった。

秀真は成す術も無くて、肩を下げて眺めている。

「姉ちゃん明日、落合の角井のおじさんと行くんだって？」

秀真が上から聞いてきた。

私は自分の足に、ラメの仕上げをする。

「・・・そだよー。」

「何でまた？」

「・・・大学4年間東京に居ながら一度もご挨拶に伺っておらず、卒業前にその失礼をお詫びしたいと思ひまして、親戚なので今後も何かとお世話になる事もあるかと思ひ」

「と、母ちゃんに言ったの？」

「と、おじさんにも言うの。」

ふーん、と秀真が呟く。

「秀真、ソレ、乾かしてからじゃないと、崩れてすごく汚くなるよ？」

「俺も行くの？」

私はビツクリして顔を上げた。

「何で？」

「何でって・・・姉ちゃん一人で行くの？大変じゃない？母ちゃん達が行くとは思えないし。」

うちは、おじさんちとは仲が悪い。私達子供が関わった事はないけど。

「それに行けばお年玉貰えるかもしれないし、合格したら入学祝も来るかもしれない。」

「・・・秀真、受験勉強は？」

「今更。A判定だし。じたばたしても、ね。電車の中で暗記でもしてるよ。」

・・・気を使ってくれるのはとてもありがたいんだけど・・・
・・・でも、秀真を連れて行って、アノ件、どうやって話を切り出そう・・・。

私は一瞬迷ったけど、急に、それがすごくいい考えに思えてきた。

そうだよね！拓也と二人で行くより、秀真がいる方がずっと不自然にならないかも！

滅多に会わない親戚の家に行くだけでも不自然なのに、同級生の男なんか連れていったら、

あまりに不自然すぎて、ますます落ち着かないかもしれないわ。

聞くモノも聞けないじゃない。

よし、

「それでいこうー!」

「・・・どれでいこう?」

「?電車だよ?」

「・・・」

秀真はしばらく私を眺めた後、おやすみ、と言って部屋を出ていった。

私は部屋で、真っ赤なラメラメ足を見て、気合を入れた。
頑張るしかない。やってみよう。

反省と後悔と思い悩む事は、後からまとめてしてみよう。

弟

翌日、私達は約3時間かけて電車に乗り続け、私鉄の小さな駅で降りた。

弟の手には、いくつかの手土産がぶら下がっている。

「あれ？姉ちゃん、あれ……。」

改札口で一人の小柄な男を見つけ、秀真しゅうまが目を丸くした。

「なんで吉川さんがいんの？」

それはね、えっとね、何と言ったらよいのやら……

「……秀真しゅうま、お前……。」

拓也は目の前に立った秀真を見上げ、同じように目を丸くした。

「……でっかくなつたな……。」

拓也の身長は多分、170cmちょっと。秀真は多分、180cm弱。

「あざーっす。あけましておめでとっございます。」

「おめでと。4年ぶりか？もつと？何食ったら、そんなに大きくなれんだよ？」

「牛乳つかね？とりあえず、毎日飲んでました。」

「うえー。俺、牛乳は苦手……。」

拓也はパンツのポケットに両手をつっ込んで、肩をすくめる。

秀真は私を見た。

「姉ちゃん。」

真顔で言う。

「結婚の報告つっーのは、普通、家族から最初にするもんだぞ？」

「なっ・・・そんなんじゃないわよっ！！」

「違うんだ？」

秀真はあっさり引き下がった。

「姉の天然と妄想を取り扱えるのって、俺か吉川さんぐらいだと思っただけ。すみません。」

え？それは誰に何を謝っているの？

拓也は軽く苦笑しているだけ。え？それは何に対する苦笑なの？

秀真は手荷物を床に下ろすと、腕を組んで私を見下ろした。

「今日は、親戚への年始の挨拶なんじゃなかったの？」

「・・・まあ、名目はそうなんだけど・・・。」

「実態は？」

「・・・。」

「・・・俺、お年玉は貰えそう？」
知りません。

私は拓也を見たんだけど、こういう時の拓也ってちっとも助けにくれなくって、あさつての方向を向いちゃっている。可愛い顔してスツトボケている。

そして私は、嘘がつかない。

ていうか、彼みたいに咄嗟にテキトーな事が言えない。

（コレを言えば拓也に、『咄嗟にあってあなた、3時間も一緒に電車乗ってんだから、その間にどうにかしたら良かったでしょ』と言われるに決まってる。）

「おじさんにね、聞きたい事があって・・・ね、おじさんが知って

るかも分からないし、その、教えてくれるのかもわからないんだけど。まあ、ダメもとで聞いてみようかな、と。」
これって説明になっているのかしら？

「……それって、昨日の真つ赤な気合と関係あるの？」

「……うーん……」

無駄に鋭いな。

「……月に行くアレとも？」

げ？なんでそこでそれが出てくる？

え？私、そんなに単純？単細胞？見ればわかる、って感じ？

「……うーん……？」

「……ふーん。突っ走る事にしたんだ。やっぱ、珍しい。」

秀真は感心した様に私を見た。

そして腕を解くと言った。

「俺、協力するよ。何聞きだせばいいの？教えて。」

どうしよう？と思って拓也を見たら、彼は肩を少しすくめて「いいんじゃない？」と言った。

考えてみれば、これは私の問題だった。

そこで私は、15年前の前浜東の事件を調べている事を、秀真に伝えた。

秀真は、うん、うん、と聞いていたけど、私に理由を一切尋ねなかった。

良く出来た弟なのか、単に何も考えていないだけなのか。

「よし。じゃあ、こうしない？受験の小論文対策。少年犯罪につい

て意見を述べよ。リアリティを持たせたいから、話を聞きたい。」

秀真は事も無げに言った。受け入れるの、早つ。

「・・・へえー。秀真、どこ受けるの？」

そういう展開になるのなら、弟を連れてきた身としては聞いておかないと。

「第一志望は東都大工学部。」

「・・・。」

絶句。

「どっかで聞いたな、一浪して東都大工学部。」

隣で拓也が、冷めた声で言った。ああ何、この感じ。

「で、そうなる俺は？」

「吉川さんは僕と同級生って事で。今日は二人して話を聞きにきた、でどうですか？僕ら予備校も同じダチ、っつーことで。」

「お前と俺が同級生？ま、いいけど。俺もある意味、受験生だもんね。」

「童顔だしね。」

しまった、また余計な口を挟んでしまった。

やだ、そんな目で見ないでよ。時々勝手に口が喋るの、意思とは無関係なの。

「じゃ、行こっか。」

「・・・なんか、身内に嘘つくのってやっぱり、気が引けるなあ・・・」

「。。。」

私が俯いて呟くと、拓也と秀真が同時に言った。

「何言ってるんの、今更。」

「こんなのかわいいものだよ。」

かわいいもの？

私と拓也が秀真を見る。彼は珍しく、少し口を尖らせて言った。

「あいつらが何したか知ってるでしょう？ばあちゃんが死んだ時、金目の物、めぼしいものは殆んど取ってっちゃった連中だよ？大して世話なんてしてないどころか、陰ではあちゃんの悪口言ってたクセに。俺、子供ん時に聞いたんだから。それに比べれば、こんなのウソにも入らないよ。おじさんに痛い事、何にもしないんだからな。」

。。。成程。そうでしたか。そうだよ。ね。正当です。

。。。でもね、秀真。怖いよ？痛い事したいの？それはダメだよ？。。。そうか、この子って怒らせちゃいけないんだ。気を付けよう。

衝撃

都内におじさんは、中古のマンションを買って住んでいる。

部屋の中は、おばさんの少女趣味と、おじさんの骨董趣味が重なって、なんとも形容しがたい状態になっている。

10年ぶりぐらいで会うおじさんは、記憶通りの顔をしていたし、記憶以上に年を取っていた。

おじさんはそれはそれは仰々しく大歓迎をしてくれて、それがかえって、『ああ、うちってやっぱり、ココと仲が悪いんだな』と思わずにはいられない。

でも本家はむこうだし。だからやっぱり、私達が御正月に訪ねるのは、まあ、ある意味、あるべき姿ってヤツ？

おじさんは、秀真しゅうまの嘘を、なんの疑いも抵抗も無くすんなりと受け入れた。

というよりも、どっちが秀真でどっちが拓也かも、あまり気にしていない様子だった。

用意周到？（って程でもないけど）にして来たのに、肩すかしをくらった様な気分になる。

自分の所に来客が来て、自分の話を聞きに来た、という事が嬉しいようで、

だからと言って、目の前の私達が見えている様にも思えなかった。

まだ70歳そこそこなのに、これってなんだかなあ。

自分しか見えていない感じ？

こつこつお年寄りには、出来ればなりたくないかなあ。

「あの事件を書きたいのかい？いやー、あれは大事件だったよねえ。」

「通り挨拶をして、家族の近況を聞いて、おじさんの子供孫たちの自慢話を聞いて、」

「警官時代の自慢話を聞いて、やっとのタイミングで秀真まじまじがかるうじて質問をしたら、」

「おじさんは更なる話のネタを得た、とばかりに顔を輝かせた。」

「こちらとしては、これからが話の本番なので、やっと耳のふたを開く気分になる。」

「おじさんはソファに踏ん反りかえると、楽しそうに言った。」

「正当防衛が成立するかで、意見が別れたんだよねえ。過剰防衛で相当性があるかどうか。被害者の生徒が、最初から相手を刺すつもりでナイフを振りかざすとは考えづらいだろ？そうになると、正当防衛の範囲を超えるのでは、とね。」

「はあ、成程。やっぱり大人の話は違うわ。」

「でも日頃から被害者に苛められていたらしいから、ストレスが溜まっていて恐怖心もあった。冷静な判断が出来なかったであろうと被害者側の過失に乗せた形で成立したんだよね、あれ。生徒の目撃証言も、先にナイフを手に向かってきたのは被害者の方だ、と言っていたものな。まあ、怪しいもんだ。」

「次から次へとペラペラ喋るもんだから、私は話についていけない。え？何？何が怪しいって？」

「生徒同士、仲間をかばうと言う事もあるだろう？おまけに陰で煙草を吸う様な連中だ。」

おじさんがまるで、私達が旧知の中で気心がしれているかのように意味ありげにニヤツと笑い、私に向かってウィンクしてきた。成功してない。痙攣の様だし。カエルみたいだし。碧さんと純さんのウィンクが恋しくなった。

「ただねえ、あの日は雨がひどく降ったから。運の悪い事に、証拠を色々と流してしまっただよな。よって、物的証拠が不十分な中、正当防衛。こんな感じだよ。」

雨。

私は、あの時を思い出した。子犬のダンのぬくもりも、思い出した。そうよね。ひよっとしてだから、私があそこにいた事も、後から気付かれずに済んだのかもしれない。雨が洗い流してくれたせいで。

「・・・事件を目撃していた生徒、ってどんな子達でしたか？」

秀真がタイミング良く口をはさんだ。

上手いじゃない。センスあるわね。何のセンス？さあ。

「はて？2、3人いたかな？さあなあ・・・ロクな奴らじゃないんじゃないのか？あの中学校は荒れていたからな・・・あ、そうそう。」

おじさんが何かを思い出したように、膝をポン、と叩いた。得意そうに、再びニヤツと笑う。

「一人ね、偉いさんの所の息子がいたんだよ。」

「エライさん？」

「そう。事件の後、ご両親が色々見られる事を心配して、途中で転校したんだよね。」

「そうかあ。そういう事もあるわよね。いわば、事件に巻き込まれた様なものだよ。」

「思春期を過ごす環境としては、あんまり良く無さそうなものね。私は一人で納得した。」

それを聞いて、最初からずっと黙っていた拓也が口を開いた。

「それって、コウノケンイチ、ですか？」

「そう言えばもう一人の目撃者は、転校しちゃったから名前しかわからない、って拓也が言ってたわ。」

「また、納得。」

「そんな名前だったかな？忘れてしまったよ。お母さんの名前を名乗っているんだよね。」

「？」

「彼はね、こんな事を言うのもアレなんだけど、ほら、2号さんの子供なんだよ。」

「……2号さん？」

おじさんは相変わらず得意そうにニヤニヤと笑っている。

「……いやだなあ、こういうのって。」

私は思わず、眼を背けた。

人の出生をネタにして面白がるなんて、本当に、低俗だわ。身内の顔が、とても品の無いものに見えてくる。私、こういうの嫌い。

「そう。だからお母さんの名字なのだよ。よくある話だよね。でもそういうのって、途中で父方に養子にいたりして、家の中に入るんだよね。彼は確か、長男だったし。」

え？よくわかんない。それって、認知をされるって事？じゃなくて、お父さんの名字になるって事？
いずれにしても、どうでもよくない？そんな、人様の家庭の事情なんて。

おじさんが話を続ける中、私が目を反らした視線の先で、拓也は眉根に皺を寄せて話を聞いていた。

「……地元の偉いさんって……。」

そう言っつて、親指で唇の端をこすりだす。
何かを考えている仕草だ。

「……それって……藤田、ですか？」

ええ????

藤田???!!

私は驚愕して、拓也を凝視した。

そんな私の様子に驚いて、秀真も拓也を見た。

拓也は、多少前かがみでジツとしたまま、おじさんを見つめていた。

「・・・うーん、それは・・・ねえ。」

おじさんは、いかにも意味ありげ、といった風情で、わざとらしく苦笑して見せた。

あれだけペラペラ喋っというて、何を今更、思慮深いっぽい演技してるのよっ。

と普通なら心の中で突っ込む所だけど。

私は頭の中で、色々整理しようと必死だった。

藤田さん？

海で溺れていた私を助けてくれた、あの藤田さん？

自転車のパンクを通りすがりに助けてくれた、あの藤田さん？

奈緒のマナージャーを買って出た、なのに私には一言も過去を明かさなかつた、あの藤田さん？

私にやたらとイイ声で迫った、・・・ってこれは無視ね。

碧さんと人前でベロチューした・・・ってこれは多分、ますます関係ないので、無視、ね。

腹黒魔王の多少エロ入っている人が、実は事件の目撃者の一人で私の命の恩人で、碧さんとするんで同じ大学の先輩だったんだけど、碧さんも実はあの現場について、

ああああ、頭がこんがらがってきた！

私は顔をしかめて額を軽く覆い、俯いてしまった。

何が一体、どうなってるの???!

衝撃（後書き）

ここまで読んで下さいまして、ありがとうございます。

次回は、お正月休みを挟みまして、

一月三日から開始します。

あと少し、お付き合い下さいませ。クライマックスです。

怒涛に進めます、今度こそ（苦笑）

良いお年をお迎え下さい。

動揺

私の頭の中はすっかりフリーズしてしまった。

秀真しゅうまが上手い事切り上げてくれたのだと思う。どれくらい時間が立ったのかは分からない。

外に出たら、もう辺りは暗くなっていた。

「藤田さんが目撃者って事？」

マンションの敷地から出た瞬間、私は拓也に食ってかかった。

拓也も少し動揺はしているものの、私よりは落ち着いている。

「いや、ちょっと待てよ。だって年が合わないだろう？あの人っていくつ？」

「今年28って・・・あ、そうか。」

「目撃者は二人とも、同級生の筈だぞ？藤田さんは15年前、13歳？中一だろう？」

そうか。そうだよな。

と私が納得しかかった時、隣で秀真がボソツと言った。

「・・・でも、年齢を誤魔化しているって事はない？二つぐらい、平気じゃない？」

詳細を知らないのに、私達の会話を聞いていただけで、妙に的を得た事を言ってくる。

「・・・あり得る・・・。」

拓也が呟いた。唇を軽く噛みながら、また親指で擦っている。

私は思いつくままに言った。

「でも名前が全然違うよ？下の名前！ケンイチ？と祐介、じゃ。」

「……………」

三人で黙りこみながら歩いた。

今となつては年齢も不詳の藤田さん。もし彼が母親姓を名乗つてあの場にいた、なんて過去を持つのだとしたら、年齢や名前を偽るところくらい、何だかとても簡単な様な気がする。

……でも、日本の社会で、そんな事出来るのかな？

大学だつて、碧さんや純さんと一緒だつたハズ。

「偽名で生活、出来るのかな？」

「スパイかよ。」

「じゃあ、……芸名？」

「芸能人かよ。言い直したただけじゃん。それならせめて通称名、ぐらいにしとけよ。」

拓也の相変わらずの切れ味鋭い突っ込みに、私は凹みそうになりながらふと、何か引つかかるものを感じた。

「……ね、拓也、その人の名前って……。」

「ん？コウノケンイチ？」

「……どう言つ字、書くの？」

「知らない。誰に聞けばいいの？」

コウノケンイチ。コウノケンイチ。芸名かな？芸能人かよ。

台詞が、頭の中でこだました。

・・・ちよつと待つて？
・・・まさかまさかまさか・・・。

とんでもない考えが思い浮かんだ。それが一気に、私の頭の中を支配した。

私は立ち止った。鞆の中を引つかきまわす。

少し先でそれに気付いた拓也と秀真が振り返った。私はそんな二人に構う事なく、電話をかけた。

コールが鳴る。

程なく、音声案内が出た。電源が切られているか、電波の届かない所。

もう一度かける。

音声案内が出る。

頭に血が上ってきた。胸がドキドキする！！

「・・・どうしたの、姉ちゃん？」

「綾？」

「奈緒と連絡がつかない！！」

私が叫ぶと、二人は仰天したように私を見つめた。

私のテンパりぶりに驚いているようだった。秀真が近づいて、聞く。

「え？何？」

「奈緒の携帯に電話してるのに、電源が切られてる！！どうしよう！！！」

「何よ？それがどうしたんだよ？」

拓也はその場に立ち止まったまま、眉をひそめてこっちを見ている。私は秀真に覗きこまれながら、携帯に耳を当て続け、叫び続けた。

「だってだって変なの！！藤田さんは何度も私の側にいるし、奈緒のマネージャーやる意味分かんないし、目撃者かもしれないのに、奈緒はあの俳優とデートしている！！」

「何言ってるんだよ？わかんねーよ。落ち着いて話せよ。聞くから。」

拓也はやつとこっちに向き直り、私に近づいて来て、両肩を掴んできた。

私はそんな彼の丸っこい瞳を見つめながら、叫んだ。

「あの人の名前！！私の思い違い？考えすぎ？ねえあの人なんで、わざわざ調べてまで奈緒に近づいたの？」

「あの人って誰だよ！」

「河島健たける！！」

事情を知らない秀真はキョトンとしている。ただ拓也は、それを聞いた途端、眉間のしわが更に深くなった。

「・・・カワシマ・・・タケル・・・？」

「あの人、芸名なの？本名なの？」

「知らない。お前、知ってるか？」

「知らない。ちょっと待って。ググる。」

秀真がすぐに携帯を取りだした。操作する。

私は拓也の目を見て話し続けたけど、実際に見ているのは、頭の中

の記憶だった。

「あの人と初めて会ったのは、夏に同窓会で帰郷した時だった。その後、私は会っていない。

でもそれがきっかけで、奈緒はスカウトされたんだよ？しかも半ば強引に。

そしてその彼との仕事で、奈緒のお世話係を買って出たのがが藤田さんだし、

奈緒は、河島健に初詣、誘われたって言ってたのよ。」

「あった。・・・ビンゴ。本名、コノケンイチ河野健一。」

すっかり、日が暮れた。

私達は、誰も動かなかった。

私はなんだか、自分が沼の中に足を取られている様な気がした。何か、足に絡まっている。複雑すぎて、動かす事が出来ない。

だけど、どこかを見つければ、それは簡単にほどけていくんだ。どこか一つの絡まりをほどけば。それは、どこ？

「・・・同姓同名・・・？」

「・・・まあ、どこにでもいそうな名前では、あるよな・・・。」

秀真と拓也が呟いているのが聞こえてくるけど、私の頭には殆んど入ってこない。

「河野健一と藤田祐介はつながりがあるってことか？兄弟？」

「藤田祐介って？」

「・・・あの藤田代議士の息子だよ。」

「？藤田違いとか？」

「あの親父の話しっぷりがそんな感じだったかよ？いかにもありゃ、ビンゴだろ。」

二人の会話をよそに、私は携帯を再び開いた。

今まで一度も使っていなかった番号。使えなかった番号。使いたかった番号。でも、使いたくなくなった番号。

「姉ちゃん？誰に電話するの？」

「私、碧みどりさんに電話する！」

「え？」

「だって藤田さんの番号知らないし、奈緒と連絡がつかない！この人に聞くしかないでしょ！」

「ちよつと待てよ、綾！」

拓也が私の手首を勢いよく掴んだ。

綺麗な茶色い瞳が間近に迫っている。

珍しく、わずかな動揺と苛立ちが見てとれた。

「河野健一と藤田さんが繋がっているとして、それとつるんでいる塚本さんだってどんな奴かわかんねーだろ、今となっちゃ。」

「だから何よ？」

私は拓也の丸い瞳を見返した。

一瞬、その瞳がゆらっと揺れたのが見えた。腕を掴んでいる手に力が入る。拓也がギョッと眉根を寄せた。

「お前が見た殺人の現場、犯人の可能性がある人間が4人いて、内一人が死亡、残り二人がつるんでいるって事だろ？どっから見てもヤバいだろ、考えろよ。」
「そんなの関係無いっ。」

私は力任せに拓也の腕をふりほどいた。拓也の台詞を聞いた秀真は息を飲んでいた。

「奈緒が戻ればそれでいいのっ。無事ならいいのっ。あの人達が何をしたいかなんて関係ないっ。拓也だって、あの人は悪い人じゃないって言ってたじゃないっ！」

「そんな前の、気休めで言った台詞を持ち出すなよっ。状況がぜんっぜん違うだろうがっ！」

「違うないっ！」

私の叫びに、拓也は一瞬言葉を飲んだ。私はそこにたたみかける様に言った。

「奈緒しかいらなないっ！他はどうだっていい！碧さんなら助けられるっ。15年前の事を忘れるって言うなら忘れるっ。取引でも下心でも、何でもいいのっ。今解決できるのは彼しかいないでしょっ！！」

そして私は、通話ボタンを押した。

奈緒を見つけなきゃ！！危険かどうかなんて、全然わかんないけど、わかんないけど、

神様！！

怒鳴りこみ

あんなにもハードルの高かったこの電話番号は、コール3回であったと繋がった。

「はい。」

「碧さんっ!!」

今は、彼の声が聞けた嬉しさよりも、焦りと動揺のほうが先走っている。

碧さんの、少し戸惑った様子が窺えた

「・・・綾ちゃん? 一体、どうし」奈緒が河島健とどっかいつちやっただっ!!」

私が叫ぶと、電話の向こうで碧さんが息をのむのがわかった。

そしてそれが、私をますますパニックへと陥れた。どうしよう? やっぱり河島健は要注意人物なんだ!! 事件の目撃者、河野健一なんだ!!

拓也と目が合う。私の表情を読んで、拓也が悔しそうに顔を歪めた。

「奈緒が、奈緒と、連絡が取れないっ! 携帯の電源が切られているのっ! どうやって見つけなければいいのっ? 藤田さんの番号教えてっ!!」

「・・・君、今、どこだ?」

「拓也と一緒に下落合にいるっ。」

「わかった。彼から離れるな。すぐ連絡する。」

「私の奈緒だから!! 私が捜すから!! 必ず連絡して!!」

「・・・わかった。」

低い声で返事があつた後、電話は切れた。携帯が告げる時間は夕方6時前。だから何？上手くいきますように。手遅れになりませんように。

奈緒が言っていた彼のとの初詣は、いつだったんだろう？あの時もっと突っ込んで聞いとけばよかつた。

「・・・おい、秀真。河島健の検索みせる。」

「え？」

拓也の低い声が聞こえた。

「あいつの事務所見つけて、怒鳴りこんでやる。」

事務所の場所は程なくわかつた。秀真とはそこで別れた。受験本番まであと2週間も無い。

「大丈夫。なんかあつたら連絡するから。」

「なんもなくても連絡して下さい。」

拓也が秀真に頷く。私は、弟に変な心配事を与えてしまった事に罪悪感を覚える。

一体私は、どれほどの人達を巻き込むのだろうか？

途中で碧さんから電話があつた。藤田さんと連絡がついたと言っていた。程なく河島健と連絡がつくはずだ、と。

私達が河島の事務所に向かっていると知って、少し慌てたようだった。

仕事中に申し訳ないな、なんて思わない。

拓也は碧さんが河野健一とグルかもしれない、と言ったけど、私はもう、自分の勘で動く事にした。

少なくとも碧さんは、奈緒を助けてくれるだろう。

後の事はそれからよ。

六本木の立派なビルの立派なフロア。6時を過ぎても受付にはお姉さんがいた。

私は真つ直ぐに彼女に言った。

「河島健のマネージャーを出して下さい。」

「はい？」

「河島健のマネージャーを出してって言ってるの。」

大人だか子供だか分からない男女が二人、すごい剣幕でいきなり、人気俳優のマネージャーを出せ、と言っている。呆れるのも当たり前ね。

「恐れ入りますが、アポイントをお取りでいらっしやいますでしょうか？」

「んなもん、ないですよ？緊急なんです。早くしてよ。さもないと、警察呼ぶよ？」

拓也がすっごい可愛い笑顔で、すっごく無礼な事を言った。

お姉さんは呆気に取られて、少しバカにして、少し警戒して、少し拓也に色目を使う様な目つきを見せた。

「はい？・・・恐れ入りますが、ご用件を伺いま「恐れ入ってばかり

じゃなくてさ。」

拓也が受付のテーブルの上に、前かがみの様になって乗っかる。お姉さんに顔をグイッと近づける。

最高の素敵な笑顔。お姉さんがドキツとして、顔が赤くなるのがわかった。

「本気で呼ぶよ？警察。友達の身の安全がかかってんの。こっちは本気だからさ……さっさとしろよ！！」

拓也の怒鳴り声。相手を力で脅す様な声色。初めて聞いた。

お姉さんが怯えている。周りがシーンとなった。

受付の後ろから、何人かが様子を伺いに出てきた。

緊張がはしる。私は生唾を飲んだ。

「おいこらネズミ。」

突然私達の後ろで、聞いた事のある声が聞こえてきた。

「こんな所でメンチ切るんじゃない。」

振り返るとそこには、グレーのコートを着て、瞳が切れ長で髪がサラサラ短髪の、背の高い男性が立っていた。

「藤田さんっ。」

私が口を開いた時には、もう彼は踵を返してその場から出て行くこととしていた。

「あいつのマナージャーはもういいから。ここは用が済んだ。行くぞ。」

「ちよっと待てどつ言つ事だよっ!!」
「待って下さいっ! 奈緒はどこにいるんですかっ?!」

拓也と私が同時に、藤田さんに向かって叫ぶ。

それを藤田さんは、まるで当り前の事の様に対応した。

「あいつは一時間前までは自宅にいる事が分かっている。まずはそこだ。」

「どついう事ですか??」

藤田さんの後ろから碧さんがやってきたのが見えた。少し息が切れている様子が目につき、急いで来たんだな、と思う。
するとその前で藤田さんが、ショッキングな事を言った。

「携帯のGPSが一時間前に切られてるんだよ。最後の発信地が自宅だ。」

私は自分の耳を疑ってしまった。

・・・携帯のGPSって何?! それを付けられている様な人って事なの??

それが切られているって何?! 一時間前って、何??!!!!

「なっ・・・奈緒は無事なんですか??!!」

「多分ね。」

「多分って・・・。」

頭に血が上る。訳わかんない。

目の前の人は顔色一つ変えずに、何でもない事の様に話す。

何でもない事？どうでもいい事？

あなた達のせいだ！！

バツチーン！！

生まれて初めて、人にビンタした。

それも、力加減なしに。

「いい加減にして下さい！！本当の事を話してくれず、私達に中途半端に手を出した結果がコレでしょう？！！何が目的なの？！奈緒はどこなの？！！奈緒は何処なの？！！！！」

自分でも分かる。叫び続けている。止められない。

同じような台詞を、バカみたいに繰り返している。ヒステリーだ。なのに、止められない。

「・・・とにかく、移動しよう。」

碧さんが近づいて来て、私の肩に手をかけた。藤田さんは殴られた後も、涼しげだけど無表情な瞳で私を見つめている。

私は藤田さんを睨みつけたまま言った。

「嫌ですっ！！今ここで、キチンと話してくれるまで動きませんっ！！もうこれ以上、振り回されるのはゴメンですっ！！！！」

「奈緒ちゃんを捜すんだろ？」

「捜してますっ！でも動きませんっ！急がば回れ、ですっ！ー！ちゃんと説明して下さいっ！」

「……………」

「何がどうなっているのか教えて下さいっ！」

睨みあい。

私と藤田さんは、お互い視線を少しもずらさなかった。

私は、無表情な彼の瞳に、自分の怒りを最大限ぶつけていた。誰も口をきかない。

許さない。

奈緒に何かあったら、この人達を絶対に許さない！！

「ねえ、綾ちゃん、とにか……」

『メールが来たよ。メールが来たよ。メールが』

やっぱり、誰も口をきかない。やがて碧さんが呟いた。

「……………何、今の愉快的声？」

睨んだ体制のまま、私は言った。

「……………ミツキーさんから、メールの着信のお知らせです。」

「……………何だよっお前っ。」

突然、私の隣で、拓也が勢いよく天井を仰いだ。

「信じらんねーだろ。空気読めよっ。」
「なっ、私のせいじゃないよ、これはっ。・・・あ、奈緒からだ。
ごめん、何用？だつて。」
「うおっと、無事だつた。」

「おまつ明らかにお前のせいだろっ！フツーでも引くだろっ何だよ
その着メロはっ！しかも田中、無事じゃねーかよっ！」
「ちよっ今ここで着メロに文句付ける気！？あんたに関係ないでし
よっ！それに奈緒とは確かに連絡付かなかつたのよっ！」
「関係あんだろっおかしいだろっ愉快すぎるだろっこの場につ！！
大体お前がスケジュールでもキチンと確認していりゃ」
「落ち着け吉川。落ち着いて、ミッキーは忘れる、な？」

え？どうして碧さんは私から離れて、拓也の肩を抱いているわけ？
それって文字通り、肩を持つってヤツ？ねえどうして拓也の肩を持
ってるの、そして何故あの子をなだめているの？ねえどうして？

「お前ら、うるさい。」

この場に及んでもやっぱり無表情かつ冷静な藤田さんを、私はある
意味尊敬してしまった。KYの神様だ。

「行くぞ。あいつの自宅だ。知りたいんだろっ、本当の事を。早く
田中さんに電話をかけなさい。」
「先輩。」

碧さんが綺麗な瞳をあげて、何かを言いたげに藤田さんを見る。
今日は降ろしている長めの前髪が額を縁取るようにふわっと揺れる
のを、今初めて、気付いた。

藤田さんも、その切れ長の瞳を碧さんに向けながら言った。

「もう、潮時じゃないか、碧。決着をつける時だ。彼女は全てを知ってるよ。・・・そして、あいつもね。」

そして私達全員を見回すと、言った。

「俺達が、お互い距離を取り続けている事に、もう意味は無いんだ。」

発覚

とりあえず、気が抜けた。

事態は核心に向かっているとは思っただけけど、

奈緒がね、無事ならね、もういいの。しかもデート、昨日だったって言うし。

「イマイチだった。何を考えているのかよくわからない人で、得体が知れなくて気持ち悪かった。一度そう思うと、仕草とか笑顔とか、もうイチイチ嫌ね。やっぱりいい男は観賞用に留めておくべきよ。」

とが言ってるし。

確かに奈緒は人を見る目があるよね。それを再確認出来て良かったよ。うん。無事で良かったよ。

「で、何があったの？」

後で話すよ。じっくりね。今、私、脱力中なの。

藤田さんの車に沈み込む。

普通にシルバーの普通に乗用車なのに普通にBMWで普通じゃなく乗り心地がいいもんだから、もう余計に腹が立つっ。

「日下部さん、頭から湯気が出ているよ？」

「……この状況で、そんな空気読めない台詞が言えるのは貴方だけですっ。」

「おま……。」

拓也が呆れる。碧さんが引く。ええそれがどうかしましたか？

「彼は、僕の兄だ。ご存知の通り、腹違いのね。15年前、事件を目撃した人物の一人だ。」

藤田さんは運転をしながら淡々と言った。やっぱりね。私達の予想通りだわ。

私がビンタした後が赤く腫れている。自業自得よ、アカンベー、だ。といいますかね、魔王を殴ってしまった以上、こちらが怒り続けないと負けなんですよ、怖いんです。防波堤を張っているんです。攻撃は最大の防御、っていうヤツです。

私は後部座席でぶすくれて尋ねた。

「藤田さんと碧さん、河島健たけるとつるんでるんですか？」

碧さんが驚いた様にわずかにこちらを振り返ったけど、私と目が合うとフイツと反らされた。

・・・想像以上に、傷ついた。

「・・・何でそんな事を思う？」

藤田さんが前を向いたまま聞いてくる。

「質問に質問で返さないで下さい。」

怖いもの無しなの。でも今だけなの。我に返った時が怖いのに・・・。

藤田さんは何故か、クスツと笑った。

「碧は、少なくとも、兄とは仲間じゃないよ。」

・・・喜んでいいのかな？

「・・・あの人、なんで奈緒に近づいてるんですか？」

「さあね。女の好みまでは分からない。だけど僕も引つかかるものを感じたから、今回、彼女のマネージャーもどきを志望させてもらったんだ。」

「・・・なんで、引つかかるものを感じたんですか？」

「それは、兄が、日下部さんを既に知っているからだよ。」

は？

一瞬固まった。

河島健が、私の事を知っていた？何で？

「どういう事ですか？」

「さあ。実は僕にも、どういう事なのか未だによく分からない。だから今日は、そこをハッキリさせようと思う。」

「誤魔化すなよ。なんで綾の事を知っている、ってあんたが知っているんだよ？」

拓也が私の隣で噛みついた。

「兄が日下部さんを、いわゆるストーカーしていたからだよ。」

は？その？

ストーカー？知らないよ、私？

「だから親父が転校させたんだ。」

・・・え？いつの話？・・・15年前の話？

・・・ってあの事件の後？私が小学1年生の時の、あの当時？

「・・・それと事件と、何の関係があるんだ？」

「さあ。それは分からない。でも先日、君が事件の『闇』の部分を目撃していた、という事が分かった。」

彼は、『闇』という言葉を強調した。

私が碧さんに話した、アレだ。私の唯一の、持ち駒だったアレだ。

「だから多分、彼は事件がらみで、日下部さんを監視していたのは、と推察している次第だ。」

「・・・何故・・・まさか・・・。」

拓也の顔色が変わった。助手席の碧さんが、前を向いたまま、少し眉根を寄せた。

私は、足元に絡まっていたものが、ほどけていくのを感じていた。

河島健^{たけ}・・・違う、河野健一が、私の事を覚えていたんだ。

あの時、あの雨の中で、彼は私を見ていたんだ。ひよつとしたら眼があっていたのかもしれない。

私の視力が弱い事も知らずに。

それはつまり、私と目があったという事はつまり。

「奴の口を割らせるしかないんだよ。」

静まり返った車内に、藤田さんの声だけが響いた。

「なんだよ、ここ……。」

拓也が呟いた。私は口を開けて見た。

だつてここ、ホテルみたいなんだよ？ドアマンもいて、フロント係も二人もいて、ポーターがいて、フロントの床がキラキラしていて、ガラスの壁がピカピカして、お花が盛りに盛られていて、
ここ、何？

「サービスアパートメントだ。」

何、それ？何人が住むの？日本語で言うと、つまり、何？？

キラッキラで無駄に広いエントランスを抜け、全面ガラス張りのエレベーターに乗り、一面絨毯に敷き詰められたフロアで降り、つまりここつてホテルなんでしょ？

藤田さんとはある一室の前に立ち、勝手にカードキーを差し込んだ。

「なんで勝手に開けられるんですか？」

「ここは親父名義だから。つまりそれは、僕の管理下、という事。」
カチャ、と開く。

「……金持ちつてのは。しかも政治家つてのは。これだから口く
な息子が育たねーんだよ。」

拓也が低い声で、小さくボソツと言った。

藤田さんがすこおし、片眉を吊り上げた気がした。

そして拓也の後ろに回り込むと、少し屈んで、耳元で囁いた。

「それは失敬。」

途端に、拓也の鳥肌が立った。

というのがね。見てわかったのよね、離れていてもね。

あ、私、この悪魔兵器の事をこの子に話すの、忘れていたわ。

「……………」

すると拓也はしばらく固まり、次にしゃがみ込んでしまった。顔が腕の中に埋まつてる。憐れだ。

「男にもやるんだ……………」

碧さんが引き気味。

「効果は実験済み。」

藤田さんはすまして、部屋の中に入って行った。

……実験済み……？して、結果は？なんて聞けない……やっぱり悪魔だ……………」

拓也はいきなりすくつと立ち上がると、ズンズン歩いて私に近づき、私の腕を取ると引つ張る様に、逆方向に歩きだした。

「綾、帰るぞ。」

「え？どうして？」

「こんな危険なトコにいられるかつ。」

「……………腰にキタ？」

「……………ガツンときた。」

……微妙に私から視線を反らすの、リアルだからやめてくれないかな？

「おい、入らないのか？」

部屋の中から藤田さんの声があった。誰ん家だいつ。お茶しに来たみたい気軽に言わないでっ。

「……いないみたいだな。」

一部屋がやたらと広くて部屋の中の廊下も広いけど、間取りが割と単純なせいかな、一目で殆んど中が見渡せる。

落ち着いたこげ茶の家具で統一されていて、絵もかかっていれば華も飾られているけど、それがあまりにも綺麗過ぎて多分、これはこの部屋の一部であって、部屋の主の趣味ではないのだろう、と思った。

つまり、やっぱりホテルの部屋？

冷蔵庫も、電子レンジも、みんな統一されている。

碧さんが、勝手にリビングを色々あさと漁り始めた。拓也もそれに加わり始めた。

藤田さんがどっかに行った。寝室？

私もなんとなく、そちらへついて行く。こんな豪華な暮らしをするのねゲノージンって。

部屋に入ると、藤田さんも既に何かを漁っていた。おおきなキングベットがある。

藤田さんの、手が止まった。

何気なく、彼の手元を覗き込んだ。

「うわ……。」

これって……私の写真だ……。……こんなに沢山……。

しかも、……ごく最近のモノから、マジこれ？中学生じゃん。ゲ、これ高校生？うわ、私ぶっさいく。

シヨックだ。大シヨックだ。

ストーカー写真があった事よりも、あまりにも自分がおブスな事に大ショックだ。
もっとマシな写真を取ってほしかったわ。選んでよ。え？選べないって？うう。

じゃなくて。

この人、病気だ。

私の呟きが聞こえたのか、残りの二人もやってきた。

ベッドサイドテーブルの引き出しの中の写真を、4人で眺める格好となる。

「・・・俺、やっぱり探偵やるのはやめるわ。専門会計士になる。」

拓也が呟いた。あまりの事に何を言っているのやら、さすがの拓也も混乱しているらしい。最初の感想がそれかい？

しかもさ、専門会計士、って何？兼業じゃなくて専業、ってイミ？

「最近、会計士も就職難らしいぜ。」

碧さんも写真を眺めながらボソツと呟いた。え？碧さん、かえすとこ、そこですか？

「うん。頑張る。これはマズイ。」

拓也が人生の決意を固めていた。ここで？

まあ、いいか。この子には色々お世話になりっぱだったし、色々決意してくれるなら、かったるい拓也としては喜ばしい限りで私も嬉しいわ。

うん、そうだよね。

「……でも、天下の河島健たけるにストーカーされるなんて、私も偉く
なったかもしれない。」

「「「……」」」

男三人が私を凝視した。

え？なんで私の台詞じゃ、みんな固まるの？

「だってほら、今をときめく人気俳優だし？かつこいいし？ファン
の子達に追っかけられてるだろうし？そんな人が、忙しい合間を縫
って……逆に私を、追っかけて……」

え？どうして引き続き固まっているの？どうしてそんなに空気を
変えるの？私の時だけ？

「……こういう場合はヨッシー、同意すればいいのかな？それと
も否定？」

「俺に聞かないですよ。」

「現実を逃避しているな。」

ちよつとちよつとちよつと。時代遅れの芸人みたいになっちゃった
けど、

当事者は私ですよ？

何故みんなもつと手加減してくれないのよっ！

「まあでも、これは確かにかなりキツイもんな。」

でしょ、碧さん。ああ、やっぱり優しいですね。

「だからKYでもね？」

「え？」

あれ？真顔で聞き返す？

「人の部屋で何をやっているのかな？」

どうでもいい事をやっていたら、後ろから声が聞こえてきた。

ああ、このシチュエーション。満を持してのご登場ですね。
解っているけど、恐る恐る振り返る。

ボスキャラ、かも。

対峙 1

「人の家を勝手に漁るのが、お前達ののルールなのか？」
「お前の口からルールなんて言葉を聞けるとは思わなかったぜ。」

驚いた事に、すかさず対応したのは碧さんだった。

スラツとした長身で真っ直ぐに立ったまま、顔をわずかに傾け、横目で戸口にいる人間を睨んでいる。

でもまるで、喧嘩の続きであるかのような口調。今までの碧さんとは全然違う声色、雰囲気。

鋭い刃物を思わせるオーラが出ていて、私はギクツとした。

でも河島健たけるはそれには答えず、私を見た。

「あ。日下部綾香だ。」

フルネームで呼ばれる事に、これほど違和感を覚えるとは知らなかった。

自分が、まるで物の様に見られる対象、に感じてしまうのは、先ほどの写真達を見た後だからだろうか。

「すごいね。本物だ。」

ゾクッとした。

あの夏の日と同じように、無表情の目で笑っている。

この人、なんで私の名前を知っているの？なんて、もう言える状況じゃない。あんなに私の写真を持っているんだもの。

気持ち悪い。イケメンなのに。

「おい。」

「これ以上僕を殴ると、弟の後輩とはいえ、警察を呼ぶよ？」

河島健は寢室のドア枠にもたれかかり、組んでいた腕の片方を、自分の左ほほにあてた。

「これでも一応、顔で商売をしてるもんでね。」

そこにはよく見れば、顔がわずかに腫れあがり、殴られた様な跡がある。

私が藤田さんを殴った力とは、多分比べ物にならない。

碧さんが、その冷たい眼差しをキュツと細めた。

ハンサムなのに凄味が効いた表情で、またもやギクツとした。ちょっと、マジ、怖いかも。

部屋が、一瞬静まり返る。

「これは何だ、健一。」

藤田さんが相変わらずの真顔、というか無表情で私の写真の一枚を取り上げた。

なるほど、その無表情、確かに似ているかも。兄弟ね。

とか思っつて、藤田さんが摘みあげた写真を見たら、それはなんとつぎゃああああ、中学生の時の不細工絶好調の私が、どっかでラーメンを食べている所の写真じゃないっ。

「ちよっ、藤田さんっそれはやめてっいくら殴ったとはいえっ!!」
「よりにもよっつて何故それを摘むっ!!」

「何だつて、写真だよ、見ての通り。僕が一目惚れした子のね。」
河島健たけるが当り前のように言つて、

「……。」

「これーは何の沈黙ーっ!!」

俗に言う第二次成長期つて、急激に背も伸びるしおっきくなるけど顔も膨らむし、ニキビなんかも出るじゃない？チヨッピり太っちゃったりなんかするし。

そんな私が、ビン底眼鏡を曇らせながら小池さんの様に大口でラーメン食べているんだけどね、

私何で、ここまで他人に過去をばらされなきゃならないの？

どうしてこういう写真を見せるかな？というか、どうしてこういう写真をとつとくかなつ？

ああもうダメだ、立ち直れない。拓也と碧さんの、憐あわれみに満ちた視線が痛い。

せめて鼻血を出しながら食べてないだけマシだと思おう。マシなの？

「何言つてんだ、白々しい。」

あうっ。魔王の突っ込み。今までで一番傷ついた。

すごい、この人、目の前の敵を攻撃しながら他方向も攻撃出来る。

神業だわ、神様よ、だからもう勘弁して。

「お前が日下部綾香をずっと監視していたぐらい、こっちはわかつてんだ。この写真が証拠だろ。」

「だからいったろ、一目惚れだ、つて。僕は一途なんだ。好きな子の写真を持っていて、何が悪い？」

「お願いですから、もうこのネタは引つ張らないで下さい……。」
瀕死です、私。

「近づいて、口でも封じようとしてたのか？」
無視かい。

「口を封じる？ 僕が？ 何でそんな事。するわけがないだろう。」

河島健が口の端をわずかに上げて冷たく笑った。

すると藤田さんの脇から碧さんが、ゆつくりと低い声で、まるでドスを効かせる様に言った。

「……なら15年前、彼女が溺れている所を助けなかったのは何なんだ？」

え？ 溺れている所？

「……15年前……？ ……ああ、祐介から聞いたのか。」

河島健は、ゆつくりとドア枠から身を起こすと言った。

「溺れているとは気付かなかっただけだ。遊んでいると思っていた。」

何の話？

「……えつと、それって、……あの海での事かな？」

あれが15年前だっただなんて、当の私が忘れていたよ。

「……じゃあ、あれ、事件後の夏だった、って事？」

そしてあの場に藤田さんと、河島……河野健一がいたって事？ な

んで？偶然？わざと？

それで、藤田さんが助けてくれたって事？は？どんな流れ？

え？私が溺れていた事って、殺人事件と繋がってたの？まさかですよ？

「ふざけんな。」

碧さんが顎をわずかに上げ、相手を見下すような姿勢で一言、言い放った。

両手はコートのポケットの中。言い方は冷たいのに全身から出る殺気がものすごくて、正直背筋が凍った。

・・・この人が、中学の時グレていた、と言う噂は、なまじ嘘ではないのかもしれない・・・。

それを見て、河島健たけが、何でか楽しそうに碧さんに言った。

「君こそ彼女に近づいて、口封じ目的じゃなかったのかい？ミイラ取りがミイラになった？」

・・・ムツカ。

何、その口調。しかも意味、わかんないし。

碧さんに殴られた事を根に持っているのかしら？だとしたら、私も藤田さんに根に持たれる、と。兄弟だもんね。似てるわよ、きつとヤダなあ、さっきの写真でチャラにしてくれないかしら？

「こいつはね、日下部さん。僕が中野を殺した、という言いがかり

をつけに来たんだ。数日前にね。おかげで顔にあざが出来てしまったが、正月休みになっていてよかったよ。CM撮りも終わって、しばらくは舞台の稽古だからね。」

河島健は、いきなり親しげに、ほぼ初対面の私に向かって話しかけてきた。

芸能人スマイル、というものは、上手でさすがに綺麗。切れ長の目を細めて立つその長身は、イケメンの代名詞の様。だけど奈緒の言うとおり、どこか得体が知れなくて気持ち悪い。

それに、碧さんが何もなしでいきなり殴るとは思えない。きっと目の前のこの男の人が、言うてはいけない言葉とあつてはならない態度を取ったに違いない。

それにね、あなたのスケジュールなんて私は知りません。興味もございません。

「お前は根拠も無しにやってきてるが、自分こそあの場にいたんだろう？その時本当に死体だったのか？お前が死体にしたんじゃないのか？」

戸口に仁王立ちになる河野健一。

「え？そうじゃないと言う証拠がどこにある？」

ひたすら挑発を続ける相手は、さきほどから何故か碧さん。

よほど癪に障るのかしら？それにしても、このしつこさにはちょっとした違和感を覚え始めた。

「現場を見られて口封じをしたいのは、君なんだろう？その上用意周到に保険まで掛けたくなくて、僕の所に駆け込んできた？」

は？何を言ってるの？

「僕に罪を着せる為に、みんなの前でパフォーマンスをしているんじゃないの？カッコいいし、いい役者だよ。特に彼女は、信じちゃうよね。」

そこで彼は、不意に視線を私にと移し、優しい笑顔で聞いてきた。今の碧さんとは、全くの対照的な雰囲気。

「ねえ、日下部綾香さん。よく考えて御覧よ。生徒でもない部外者がまぎれていて、死体のそばにいて、アリバイが無い時点で、どちらが怪しいかなんて一目瞭然じゃない？」

柔らかな口調。ブラウン管で見る笑顔。

ただどすべてが不気味で、冷や汗とともに生唾を飲んでしまう。そして、先程から、彼の言っている事に戸惑ってしまっている自分を感じていた。

碧さんが中野を刺した、と暗にこの人は言っている。

「ほらね、ちょっと考えれば誰にでもわかる事だろう？僕には一緒に行動している友人がいた。彼には誰もいない。一人だった。僕は中野光治とは関わった事も無い。彼は隣に住んでいた。僕はあの中学の生徒で、日常生活をあそこで送っていた。彼は、生徒でもないのにわざわざ乗り込んできた。」

そう言っつて、私を見てクスツと笑う。

「ほら。おかしいだろう？確かに彼はとてもハンサムだけどさ。人間を、見た目で判断しちゃいけないよ？」

優しく、濁った、何も映していない瞳が、笑って、私を見ていた。

対峙 2

「・・・今イチ話がよく見えません。誰か説明してくれませんか？何がどうなっているんです？」

私は知らず知らずに眉をひそめて、誰ともなしに言った。

広いベッドルームは多分、それだけで20畳近くあるとは思うのだがけれど、壁沿いとはいえ真ん中に大きなキングサイズのベッドがあるものだから、大人5人がいると狭く感じる。

おまけに、私以外は皆男性。

人口密度が高くって、それだけでもう、ストレス溜まりそう。

個人的にはかなり耐えられない様な沈黙が続いた。沈黙って、長く感じるよね・・・。

しばらくして、碧さんが、真正面を向いたまま低い声で言った。

「・・・俺は、事件当時あの場にいた。」

私は彼をじっと見つめた。私の隣で拓也も、彼をじっと見つめた。碧さんは私達二人を瞳だけでチラッと見ると、すぐに視線を正面に戻した。険しい顔でじっとしている。

そして床を眺める様に一瞬俯うつむき、再び顔をあげ、私達を見ずに、でもハッキリと言った。

「ごめん。」

「.....」

ごめん、とは、私達を騙していた事に対する謝罪だろうか？

「憧れの兄貴分が、学校ではどうしようもない不良だ、という事は耳にしていた。そんな事は正直どうでもよかったが、彼が酷い苛めをしている、という事が信じられなかった。・・・あの日は、彼に会いに行った。」

鋭い眼差し。でもその瞳は誰の事も見ていない。多分、過去の自分を
見ている。

彼の顔がほんのわずかに俯うつむいた。
降ろしている前髪が、さらっと落ちてその瞳を隠し、横顔からの表情が見えなくなった。

「噂どおりかもしれないと思った。だが俺の姿を見たら、いつも通り笑ってくれるんじゃないか、と思った。だとすれば、その笑顔が本当の彼で、いつかそんな苛めもやめるんじゃないか、と思った。俺に、公正や正義、人に対する思いやりを教えてくれたのは、彼だったから。俺は彼に、人生の全てを依存していた。子供だから、理想の人間には理想通りでいてほしかったんだろう。」

ここからでは表情が伺えない。声色も変わらない。淡々と話す。
綺麗なシルエット。見てられない。

「私服じゃ摘みだされると思って、あいつの昔の学ランまで失敬した。部屋に出入り自由だったから、何がどこにあるかなんて全部知っていた。それで、ぶかぶかの学ランを着て、放課後、校内をうろついていた。」

私はその話の内容に驚きながらも、ぶかぶかの制服をきた小学生が、校内を歩く姿を想像した。

4月の半ば、新入生だと思われたのかもしれない。よっぽど小さな中学一年生。

切なく、なる。

母子家庭だった碧さん。

隣に住む、父子家庭だった中野光治。

二人には、両家族には、どんな繋がりがあったのだろうか。ひよつとしたら親同志は大した付き合いが無かったのかもしれない。あるいは男女の付き合いがあったのかもしれない。わからない。

けれど子供同士、きつとお互いに無くてはならない存在だったのだろうか、と思う。碧さんの口から語られる中野光治は、愛しくて、最大の信頼を寄せる兄貴分。心の拠り所。

もしかしたら中野も、そんな碧さん無くては日々を乗り切れなかったのかもしれない、と思った。

「そして俺が見たのは、二人の口論や罵り合い。……噂どおりの事実を突き付けられて、いたたまれなくなった俺は、その場を後にした。」

ふつと顔を上げる碧さん。その時見えた眼差しは、強いながらも何の感情も映していなかった。
ドキッとする。

綺麗な瞳に長い睫毛が影を落とす。それが底冷えする輝きを放っている。

いつもは甘いルックスが、まるで刃の^{やいば}ように鋭く尖った空気をまとっていた。

対する河島健^{たける}は、喉の奥でクツと笑った。

「なんだそれは。ではなんの問題も無いだろう。その後、葉山は中野を刺した。僕と葛原はそれを見た。そしておしまい。」

「……でも、中野は死んでいなかった。」

碧さんは、相手の目を見据えて断言をした。まるで、見たかの様に。

「トドメを刺したのはお前だ。河野健一。」

「だから何でそうなる？」

「葉山が中野を刺した後、お前と葛原は教師を呼びに別行動を取った。そして一人になったお前は、中野に近づきトドメを刺したんだよ。」

鋭い視線が、相手を捕らえて離さない。

逃げ出したくなるぐらいの迫力あるオーラで、一步一步、ゆっくり相手に近づいて行く。

「この子に一部始終を目撃されている。それに気付いたお前は、以来、彼女を監視し続けている。」

碧さんは顎で私を示した。私はその乱暴な仕草に少しビツクリした。私に対する碧さんの態度も、今までとは想像もつかないくらいいけない。それに先程から河島健の前では、私を殆んど見ようともしない。

拒絶されているようで、胸が痛んだ。

「たいそうなストーリーだな。深夜ドラマにもなりやしない。」

河島は口の端だけあげると肩をすくめて言った。

「彼女に見られたのは、現場にいた君じゃないのか？塚本君。」

皮肉っぽく碧さんを眺める。わざとらしく憐あわれみを込めて、相手を挑発している。

「全幅の信頼を寄せる兄貴さんが、目の前で、言葉にも出来ない様な陰湿で激しい、哀れな苛めを行った。裏切られた君は傷心と怒りのあまり、彼にトドメを刺してしまった。一人になった時にね。可哀そうに。」

芝居がかった台詞。けれども、碧さんは彼の挑発には乗らなかつた。さらに低い、低い声で、相手を激しく睨みつけながら、まるで今すぐ爆発する爆弾を抱えている様な危うさを含む口調で言った。

「刺したのは俺ではない。葉山でも、葛原でもない。お前だ。」

一触即発。

男性二人の押し問答と睨みあい。二人とも身長があるハンサム達ながら、どうしたって殺気がビシバシ飛び出ている。

き、緊張してきた。ドラマや映画でもこんなシーン、たいして好きでもないのに。

目の前で生身の人間がガチで繰り広げると、耐えられないよ、ドキドキして疲れる。

この後、どうなるの？

「困ったね、日下部さん。」

河島健が、碧さんを睨んだまま口を開いた。

て、え？今、私の名前を言った？

「君はどうするの？」

マジ？私にふった？私に聞くの？ちょっとまってよ、どうするのって、私が決める事？！

シーンとなった。

隣の拓也に囁く。

「・・・わ、私、発言を求められている？」

「明らかにね。」

おっと困ったでしょう？どうするの？ってどうしよう？

私、自分が見た人物が誰かも分かって無いのに。

おまけに碧さん、学ランまで着てた、なんて言ったら八方塞がりじゃないですか。私が見たあの人達、二人とも制服を着ていました。

・・・ただ、お互いの体格にそれほど差は無かったような・・・。

でも、当時6歳の私には、みんな大人のお兄さんに見えたり。雨降ってたし。目、悪いし。

ダメだ、コレを言うのは今はやめよう。泥沼だわ。

・・・そうだ、奈緒。

「・・・なんで、奈緒に近づいたんですか？」

「・・・え？かわいいからだよ？」

河島健が少しビックリした様に言って、その後くすり、と笑った。

「君が今聞きたいのは、そこかい？」

「私を好き、って言うておいて？」

「いいね、その台詞。女性の香りがする。」

あほか。寒っ。

「好きなアイドルがいても、他の子とデートぐらいはするだろう？」

・・・私をアイドル扱い？

冗談も休み休み言っして下さい、と言いますか、そんな冗談、休んでも言わないで下さい。あんな酷い写真を手元そんに持っていてアイドルなわけじゃないですか。趣味、おかしいんですか？

・・・なんて台詞、あんまりにも私が可哀そう過ぎて言えない

い……。

「……珍しいじゃないか。観ていても手は出さない、がモットーじゃなかったのか？」

今までのやり取りをずっと、腕を組んだまま黙って聞いていた藤田さんが口を開いた。

河島は軽く肩をすくめる。

「観賞って事かい？ そうだね、眺めるのは好きだね。」

「何故田中奈緒に手を出した？」

「かわいいから、って言ってるだろう。」

「いい加減にしる。」

いい加減にしる。そんな、威圧的、というか能動的な藤田さんの台詞も、初めて聞いた。

でも、言葉とは裏腹に相変わらず、すごく落ち着いている。

そして河島健も、相変わらずニコニコ、というかもはやニヤニヤしている。

私は段々、芸能事務所での騒動の時の様に、腹が立ってきた。あつたまくる。普段は滅多にこんな事にはならないのに。

そう思ったら、一気に怒りが湧いてきた。

自分でも新発見よ。私って一度火がつくと、再燃しやすいタイプなのね。まるで炭火女だわ。ムカついてきた。

本気で頭にきた。

「昨日、あの子と出かけたよ。君の事も沢山話していたよ。だからすごく楽しかった。」

「・・・奈緒にはもう、近付かないで。」

怒りのあまりとても低い声が出たのだけれど、それがわずかに震えている。

けれども河島健は、そんな私を意に介さずあっさりと言った。

「そうはいかないよ。ビジネスの話もあるんだし。あのCMだけで終わらせるのはもったいないだろ。」

・・・何の話？

「君に、友人の将来のチャンスを潰す、資格なんてあるのかい？」

・・・キレた。

チエツクメイト

私は頭に血が上って行くのを感じた。

「・・・そんな資格なんて無い。ていうか、資格なんて関係ない。・
・なんでもかんでも資格、資格って言って、そんなの就活用だけで
充分なの、もううんざりなのよっ。」

「・・・お前、何言っちゃってんの？」

「私はね、大事な親友を守りたいって言ってるのっ。資格とか義務
とか権利とか責任とか、そんなの関係ないのよっ。」

「・・・。」

「炭火をなめないでよ。中々消えなくてしつこいんだからね。おま
けに温度も遠赤外線も、火を断然上回るんだからっ。」

「・・・今度は、何？」

「私を敵にまわしたら怖いって脅してんのっ！それでももって全力で、
手段を選ばず奈緒を守るって話っ。あの子の人生邪魔したら焼いて
やるっ。」

隣の拓也の度重なる質問（突っ込み？）を無視して、私は完璧に燃
え上がったっ！

前方で碧さんがポカンとしてこっちを振り返っているけど、これだ
けは言わせて下さいっ。

私は仁王立ちになり、河島健にビシッと指さし攻撃っ！（これ、い
つか藤田さんにもやった気が。）

「河島さん？河野さん？どっちでもいいけど、奈緒にはもう近づかないでっ。もちろん、奈緒の人生の邪魔もしないで？・・・さもないと、貴方の過去はおるか、今私に対してやっている事も全て、警察とマスコミに話しますっ。」

「それ、脅し？」

「事実です。」

この変態俳優っ！！

「じゃあ、僕が奈緒ちゃんから離れたら、君は警察には行かないの？」

「私の件ではね。ストーリーやめてくれたら結構です。過去の件は、私が扱える範疇を超えます。」

「なんだ、行かないのか。」

河島は急につまらなさそうに言った。

「バカは相手にしない、と決めた私は、自分の言いたい事だけ一方的に通告した。」

「いいえ。自分が見た事だけ、伝えに行きます。」

「え？」

それは、誰かがトドメを刺していた、という事実。正当防衛なんかではない、という事実。それだけ。

河島が何故、私にストーリーカー行為をしていたのか？そんな事は今更どうでもいい。奈緒にさえ手を出さないでくれるなら。

（だってそもそも隠れて写真を撮り続ける事が、どれほどのストーリーカー行為に当たるのかわからない。別に手を出されていたわけでは

ないし、写真がどこかにばらまかれていたわけでもなさそうだからね。といいますか、あんな写真ばらまかれたら、私、憤死します。(

「15年前の事件で、捜査も終了。ハマサトシも死んでいて、今更手遅れだと言う事は承知しています。でも自分の見た事だけ、伝えに行きます。」

「……彼の正当防衛が消えて、正式な殺人犯、という事になるかもよ？トドメを刺したのが彼ではない、とどうして言い切れるんだい？」

「それは、私には関係の無い事ですから。」

「だから、死人の顔に更に泥を塗っても、平気な訳だね？」

私は言葉に詰まった。あまりの言葉に、一瞬ひるんでしまう。
「……泥なんて……。」

隣で拓也が、カツとなって言った。

「お前、いい加減にしろよ？さつきから黙って聞いてりゃ」

「吉川。待て。」

碧さんの鋭い声が飛んだ。

拓也がグツと言葉を飲み込むと、悔しそうに碧さんを見た。

碧さんは低い声で、相手を脅すように言った。

「葉山は15年前、調査された上で除外されているんだ。河野健一。お前はアリバイが無く、おまけに彼女を追い続けていた。一番黒いのは、お前だ。」

冷静な言葉。いつもは甘くてキラキラ王子の碧さんが、まるで冷たい作りものか何かに見える。ゾクっとした。

「何言ってるんだ。証拠も無しに。第一俺には動機すらない。お前と違って。」

さっきまで楽しそうだった河島の目から、色が消えた。また無表情の瞳だ。

対する碧さんの冷静な攻撃は変わらない。

「でもお前はあの場にいた。恨みがあるなら、いいチャンスだろ。」

「話した事もなければ関わりも無い奴に、一体どんな恨みを持つんだ？人の話を聞いているのか？」

「・・・本当に、関わりが無かったのか？」

碧さんの声が、一層低くなった。

それを河島は一笑した。

「皆無だな。それは周りの生徒達だって証言している。疑うならお前が自力で調べろ。」

「・・・なら・・・。」

碧さんが、スーツの内ポケットに手を入れた。
取り出したのは、小さなコインだった。彼の掌てのひらにあるそれは、白地に、虎だか豹だかのリアルな顔が色付きで描かれている。とても綺麗なコインだった。

10\$、という表示がある。え？これ、お金？

「どうしてコレが、あいつの死体のそばに落ちていたんだ？」

「・・・なんだ、それは？」

河島健たけるが眉間にしわを寄せた。
本気で知らないように見える。けどこの人、俳優だから。わかんないよ。

「見覚えが無いか？」

「さっぱりね。」

「これは、15年前に、お前が父親から貰ったものだよ。」

「・・・は？」

は？って言ったのは河島だけど、碧さんの後ろで、私と拓也も「は？」だった。

すると、腕を組んだまんまの藤田さんが言い放った。

「親父が海外視察の土産で、俺とお前にくれたものだ。アフリカの国の記念コインだよ。覚えていないのか？」

「・・・なんだって？」

ええ、何ですか、それは？

「何、記念コインって？」

隣にいる拓也に再び囁く。

「・・・通常は出回らない、なんかの記念日とかのコインだよ。い
いからお前、口開くなつ。」

耳元で怒られた。あんだ、この場じゃ一番脇役のクセして、どうしてそんなに態度でかいのよっ。

「普通、日本人で持つてるやつはあまりいないよな。しかもあんな
田舎の中学で。ハッキリ言って、お前しかないだろ。」

碧さんの台詞に、河島は目を細めて応戦した。

「・・・そんな物に見覚えがないぞ。大方お前からでっち上げたもの
のだろう。」

「じゃあ、調べてみるか？中野の血液反応でも出れば、万々歳だよ
な。」

「……………」

私は驚愕した。

か、河島が黙ってる……………！

身に覚えがあるの？中野の血がついていたの？河島の物なの？

これって、これって……………王手って事？！

あの、派手派手しいというかケバケバしい小さなコインが、王手？！

「……………今頃、出来るかそんな事。」

「今頃、出来んだよ、そんな事。」

「……………何故お前がそれをもっている？」

河島が、小さく、鋭く言った。

「言つたる？中野の死体のそば、隠れるように落ちてたんだ。それを俺は中野のものだと思ひこみ、今日まで後生大事に持っていたんだ。」

そう言った碧さんの瞳から一瞬殺気が消え、わずかに切なげに揺れた。

けれども河島はさして動揺する様子も無く、ただど低い声で言った。

そう、トーンが下がった。

「・・・それだけじゃ、俺が刺したという証拠にはならない。第一その話だと、コインを拾ったお前も死体に近づいていたじゃないか。」

何こいつっ！やっぱムカつくっ！

・・・だけど、その通りだわっ！頭いいじゃないっ。

「残念ながら。俺は当時ちゃんと警察の事情聴取を受けて、死体に近づいた事も証言している。それにな、当時の俺の体重は28キロちよつと。痩せのチビだったんだよ。」

碧さんの口角が、皮肉っぽく上がった。

彼はその皮肉を、相手に向けるのみならず自分にもぶつける様な、激しいけれど悲しく苦しそうな眼差しで言い放った。

「そんな奴に、短時間であんなに深くは刺せないとき。」

アリバイの無い4人。内二人は、死体に近づいた事も当時警察から調べを受け、対象から外された。

残りは二人。

その二人は、動機も状況証拠も無くて、当時は葉山の正当防衛で力タがついたのに。

私の目撃と。

碧さんの物証で。

「残るは葛原とお前。死体脇にはお前のコインが落ちていた。少女が現場を目撃していた。その少女をお前はずっと、追っていた。」

王手。チェックメイト。

「俺はね、15年前、怯えている葛原の隣で冷めた目で二人の喧嘩を観察しているお前を、見ちゃってるんだよ。」

誰も、何も言わず、微動だにしない。

碧さんの冷たい断言が響いた。

「やったのはお前だ。」

静まり返った。

皆が確信した。

私は思わず両手で口を覆ってしまった。あの時見た光景が、何度も
思い出される。河島の顔と重なる。
足が震えてくるのを、止めようと精一杯だった。

告白

沈黙が広がった。

河島健は戸口に立ちふさがったまま、何も言わない。

何を考えているのか、その表情からは読み取れないのだけれど、沈黙が、雄弁に語っている。

肯定、を。

「・・・何やってるの、拓也？」

拓也が携帯を取り出して操作している。

私が聞いたら、彼は日常会話の続きの様に言った。

「警察に電話してんの。」

「え？」

「当たり前でしょ？犯人分かったんだか、あ、もしもし？・・・はい、事件です。」

部屋に拓也の声だけ響き渡る。誰も口を開かない。

多分、みんな分かっている。今更警察に届けた所で、何もどうにもならない事ぐらい。

でもやっと、終わったんだ。

やがて碧さんが、静かに言った。

「・・・動機は何だ？」

河島はしばらく碧さんを見つめた。何も映していない目だった。その後、わずかに藤田さんを見て、そして静かに答えた。

「動機なんてないよ。」

「・・・え？」

思わず口に出してしまったのは私だった。動機がない？

「目の前で人が刺された。倒れている。死んだかどうか、後からこつそり確認に行った。死体を見てみたかったからね。だけど死んでいなかった。」

観念したのか開き直ったのか、どうせ今更罪には問われなくても思っているのか、彼はまるで台本を読み上げるかのようにスラスラと淀みなく言葉を続ける。

「なんでこいつ死んでいないんだろう、と。どこまで刺せば死ぬんだろう、と。それでナイフの柄を押ししてみたんだ。そしたら死んだんだよ。」

「・・・な・・・。。。」

あまりの事に言葉が出ない。開いた口が塞がらない。自分の目が見開かれているのが分かる。目の前の事が、信じられない。

心が急激に冷えていく。

私の脇で、碧さんが目を閉じた。眉根を寄せて少し天井を仰いだ。何かを我慢している様子だった。

そして、まるでぶつけようのない憤りを飲み込むかの様に一瞬俯うつむくと、河島を睨み、低い声で言った。

「なんだよ、それ……。」

憎しみのこもった、お腹の底から絞り出すような声だった。そんな彼を見るでもなく、河島は淡々と言葉を続ける。

「だから動機は、と聞かれれば……そうだな。それは目の前に瀕死の人間がいたからです、かな。」

碧さんが、ゆっくりと河島に近づいて行った。

ゆっくりと、ゆっくりと近づいて行くのに、背中から怒りが溢れ出ているのが分かる。

なのに藤田さんは、碧さんを止めない。無表情な瞳で、彼が河島に歩み寄るのを、まるで観察している。

私が思わず碧さんに駆け寄ってその腕を引っ張ると、碧さんが口

を開くのが同時だった。

「・・・動機はない、だって？ふざけんなよ。だったら誰でもよかったっていうのかよっ。」

「別にそうは言っていないだろ。あんな状況に陥っている奴じゃないと、俺もその気には」

碧さんが、私に引つ張られていない方の手を河島に伸ばして、その胸元を掴みあげた。

彼の怒りが、一気に爆発した。

「恨みがあったんじゃねえのかよっ。あいつに苛められたとか、殴られた、とか、癩しかに障さわった、とか、そんな理由もねえのかよっ。それじゃそこら辺にある通り魔と同じじゃねえかよっ！」

「通り魔とは違うだろ。人前で狂ったようにナイフを振りかざす人間とは違う。」

「通り魔より最悪じゃねえかっ！てめえは隠れてんだろがっ！理由も無く殺して、しかも人に罪を着せて？15年間、平気な面して人前に出るお前に、何が言えるんだよっ！ふざけんなっ！」

「碧さん、殴っちゃダメ！」

殴っちゃダメ。殴っちゃダメ。今殴ったら、碧さんは相手に大けがを負わせてしまいそうな気がする。

でも本当は心の中で考えている。好きなようにさせてあげたい。

碧さんがこんなに大声で、感情に任せて相手に怒りをぶつける姿を、

当り前だけど初めて見た。

私に止める権利なんてあるのかな。15年間の苦しみや悲しみを背負った碧さんには、やりたいようにさせてあげるべきなんじゃないのかな？

そんな思いもあつたのに、目の前の碧さんが誰かを殴る所なんて見たくなくて、結局それだけの理由で、自分中心の理由で、彼の腕を必死に掴んで引っ張っている。

再び、部屋は静まり返った。

私の引っ張りが効いたのか、碧さんはそれ以上の事はしなかった。

「本当に、理由は何もないのか？人を殺してみたかった、ただそれだけなのか？」

私の手を振り払わず、でも私の方を一瞥もせず、河島の胸元を掴んだまま低い声で聞く。

河島も、そんな状況なのに、顔色一つ変わらない。

この人は、多分本当に、病気だ。

「・・・そうだね。付け加えらしたら、誰かの運命を支配してみたかった。」

「・・・運命・・・？」

胸倉をつかんでいる碧さんの手が、わずかに揺れた。

信じられない、という表情。

整った顔が切なく歪み、眉間のしわが更に深くなった。

「そう。運命。」

「……本当にあいつと面識もなかったのか？」

「全然。」

「……っ」

碧さんが顔を背けた。私からは見えない。でもわかる。

この人は今、予期せぬ言葉とあまりの怒りに、自分の感情を持て余している。

肩が小刻みに震えている。私が押さえている方の腕は拳が強く握られ、その力で手が真っ白になっている。血が出てきてしまうのではないかと思った。

藤田さんが、そんな彼を冷静に観察し続けている。

「……あいつは、何の理由も無く殺されたのか？」

振り返って言う彼の瞳に、涙はなかった。でも、長い綺麗な睫毛が濡れていた。目が赤くなっていた。

スラッとした長身の体全体から、言い様の無い程の憎しみと悲しみがにじみ出していた。

河島は、そんな碧さんの表情を、藤田さんと同じ瞳で、まるで観察

するように見つめながら言った。

「僕には、ない。葉山には、あつたんだろ。第一あのまま放置されたとして、生きていたかどうかは不明だろ。」

「だからお前が刺しても関係無いってかつ！」

私が引つ張っている方の腕まで、大きく力が入って跳ね上がった。私はそれを、体全体で押しとどめた。

だって、今度殴ったら警察に言うって、あの人言ってた。それじゃマズイじゃない。

「てめえ、このやろう!!！」

私は涙がボロボロ出てきて、碧さんのコートの袖を濡らしてしまった。

大事な人を、理由も無く失ってしまう。碧さんはそれを、立て続けに2度も、経験してしまったんだ。

大好きなお兄さんと、交通事故で失ったお母さん。

お兄さんの死に理由がなかったと聞かされた今、15年前の子供の頃の苦しみを、もう一度正確に体験してしまっている。あの苦しみを、今この人は再び味わっている。自分の運命を、きつと呪っている。

河島健・・・河野健一には、こういった感情が欠けているんだ。
体を支配して心臓まで止めてしまいたいそんな悲しみ、他人の心情を慮おもんばか
る心の機能が欠けているんだ。

「・・・かわいそう・・・。」

私の涙でグシヨグシヨにしてしまった碧さんの袖を見つめながら、
俯いて私は小さく呟いた。

碧さんは河島を睨んで掴み上げた腕を震わせたままだし、藤田さん
は二人を観察し続けているし、拓也は後ろで私達をじっと見ている。

「・・・河島さん、可哀そう・・・。」

私が再びそう呟くと、3人が、いや、河島を含んだ4人が、私の方
を見た。

誰もが大なり小なり、驚いた目をしていた。

「・・・誰の心もわからず、理解も出来ない人生を生きてきたなん
て、可哀そう。・・・人を殺しても、誰かが罪を着せられても、そ
れで大勢の人達が泣いても、平然と生きているなんて・・・可哀そ
う。」

河島健たけるが、切れ長の瞳と眉を少しひそめて私を見ている。

碧さんが驚いた表情で私を見下ろしている。

私は、碧さんの手を放した。碧さんの反対の手は、掴んだ河島の胸倉から力をわずかに抜いていた。

「誰かの運命を支配したかった、なんて、そんな形でしか他人と関われないなんて、可哀そう。・・・本当は、私をストーカーしていた訳じゃない。」

私は彼の瞳を見つめた。

「私を、待っていたんですよね。」

彼の瞳が、揺れた気がした。

「終わらせたかったのに、自分では終わらせられないから、私を待っていたんですよ。・・・ごめんなさい。私、あの時小さすぎて、怖すぎて、何も言えなかったんです。」

私は少し俯いた。そして、思い切って顔を上げた。

河島健は真つ直ぐ私を見ていた。やっぱり、何も映していない目の様に思えた。

「15年間待たせてごめんなさい。今なら、ハッキリ言えます。あの時、中野さんにトドメを刺していたのはあなたでした。」

河島以外の3人が、少し息を飲むのがわかった。
私がこれを、断定するなんて思っていなかったのだろう。

「あの時、あなたは手に白っぽいものを持っていた。多分ハンカチでしょう。それで手を覆って、・・・全体重をかけて彼にナイフを沈めた。それからゆっくりと体を起こした。そして私に気付いた。・・・私を、ジッと見つめていた。」

思いだされる。

まるで、テレビドラマのワンシーンの様に。

「あなたは、人を殺した。・・・みんなを、不幸にした。」

河島健はゆっくりと微笑んだ。優しそう、と言つよりも、満足気、
という感じだった。

「・・・君は、子犬を抱いていた。」

まるで教師が、「君は、合格。」って言うようだな、と思った。

「ありがとう。」

そう言つて彼がわずかに私に近づいて、手を伸ばした。
本当に一瞬、油断した。一瞬。

次の瞬間、ぐいつと彼に腕を掴まれ、廊下に投げ出された。
体と頭を壁に打ち付け、全身に痛みが走った。

何が起こつたのか分からず、少ししてから顔をあげると、河島が廊
下に立つて、部屋に鍵をかけ終わった所だった。

部屋の中からは、みんなの大声とドアを叩きまくる音がした。

絶体絶命っ

「これで、邪魔はいない。」

彼はそう言いつと、こちらを振り返った。笑っている。

「痛かった？ごめんね。」

そりゃ痛かったわよ、当り前でしょ。って言い返したいのに言葉が出ない。

急に振るわれた暴力に恐怖感が募った。

どうしよう、二人つきりだ。

すぐ近くに皆はいるけど、閉じ込められている。そしてこの人は、何をするか分からない。

血の気が、引く。

「コインねえ。今の今まで気づきもしなかったなあ。そういえばそんなものを貰った気が、しないわけでもない。興味もなかったから、ポケットに入れたままだったんだろうなあ。」

まるで昨日の事を話しているかのような口調。私から視線がずれていく。

私はその間に、小刻みに、でも出来るだけ呼吸をした。落ちつかなくちゃ。

落ち着け、落ち着け。ここでパニックしたら、負けだ。

「それこそ、ハンカチを出した時にでも落としたのかな？指紋を柄えに付けないように気をつけるくせに、そんな事に気づかないとは。やっぱり子供だったんだな。」

河島はそう呟いてから、私に視線を戻した。

無機質な、目。私はグツと息をのんだ。

やられちゃダメ。スイッチをいれるの。ほらっ。

腹が据わった、という表現が正しいのかもしれない。戦闘態勢に入った、というか。

「……このドア、外からカギがかけられるんですか？」

私は倒れ込んだ姿勢のまま、下から河島健たけるを睨み上げて言った。

その様子と台詞とがちぐはぐだったのか、彼は一瞬、面喰った様な表情をした。

「？外からも、中からもね。でも鍵を持っているのは、この中では僕だけ。」

部屋の中からは、ドアを蹴破らんばかりの大きな音が響いている。拓也の「畜生っ！」って声まで丸聞こえだ。おかげで、お互いの会話が聞きとりづらい。ドア、壊す気なんだ。

中では相当心配しているであろう人達の事を思い浮かべながら、私は彼から視線を外さなかった。
どうやって、この場を乗り切るか。

「そーいう事が気になるの？」

そうやって彼は、私の脇に手をいれて立たせた。
私はむりやり引っ張り上げられる形になった。

「・・・外からカギをかけれる部屋なんて、珍しい・・・。」

そう言いながら、頭がズキン、とした。肩と背中に痛みが走った。

「この状況でそれを言える、君の方が珍しくないかい？」

「・・・私を、傷つけるんですか？」

「そう思う？」

語りはソフトだけれど、掴まれた腕が痛い。近すぎて、顔を見る勇氣がない。

「その喋り方、藤田さんと同じです。」

「え？本当かい？知らなかったよ。気付かない所で兄弟なんだな。」

探る様に見られているのが、わかる。

「どこに連れて行かれるんですか、私？」

玄関ドアまで来て、私はやっと腕を振り払う事が出来た。

寝室からは相変わらず、大きな音が聞こえてくる。この調子だと、もうすぐドアを蹴破ってくれるかもしれない。

或いはこの騒音に気づいて、他の部屋の人が誰か、様子を見に来てくれるかもしれない。

「話なら、ここで聞きます。」

「だってここだと、間もなく警察がきちやうだろ？だから、ね。」

そう言つて無機質な瞳で微笑む彼に、私は再びゾツとした。

落ち着け落ち着け。いざとなつたら外に飛び出して大声を上げるか、そうだ、相手の股間を蹴りあげるって手は？

「ちよつと散歩しよう。大丈夫。君に悪い事はしないから。今なら星が綺麗だよ。」

連れ出される。外に？じゃあ、大声で助けを呼べば言い訳ね。

でも人気ひとけの無い所に連れ込まれたら？

じゃ、やっぱ、股間？？

「そう言われて素直について行くほど、さすがにおバカじゃありません。」

「・・・君つて勇気があるのかな？随分ハッキリと物を言う子だね。」

そう言って、彼の手がなんと、私の首に延びた。

「勇気とバカって、紙一重だと思うけど。」

ニツコリ笑う。そのまま後ろにまわられて、肩を押される様にして私は歩きだした。マジで？

緊張して、ゴクつと生唾を飲んでしまう。

ダメだ。大声案が消えた。股間案しか残されていない。でもこの人今、私の後ろだ。どうすればいいの？動いただけで首、絞められそうよっ。

ああ神様、守護霊様。私、この場を助かったら、必ず護身術を習います。自分の身は自分で守れるように努力致します。

ですから今だけは、どうか私に、・・・奴の股間を蹴る上げるチャンスを下さいっ！！

・・・訂正。逃げられるならどんなチャンスでもいいです。

彼は後ろから私の肩を抱くようにして、エレベーターとは反対側に向かって歩き出した。

理由はすぐに分かった。外の非常階段に出たから。

下のメインエントランスに行くのを、避けたんだ。

外の寒さが妙に現実的で、おかしな事に少し落ち着いた。しばらく、従うフリをするしかない。

「君が海で溺れている所を発見したのは、本当に偶然だった。運命だと僕は思っけどね。」

・・・ななな、何を言っているの、この人は。気味が悪いっ。ただでさえ緊張で膝が震えているのに、私は階段を踏み外しそうになった。

「僕はその運命に任せて、きみの事を見守っていた。けどあいつは、横から手を出してきた。あいつ、見ていられなくなってきみを助けたんだよ。」

「・・・あいつ・・・？」

「祐介。」

私は、初めて聞く話に驚愕した。色んな意味で。

つまり、この人は溺れている当時6歳の私を、見殺しにしようとした？

それを、たまたま側にいた藤田さんが助けてくれたってこと？

ゾクつとする。

寒さのせいじゃない。

「大丈夫だよ。僕はきみを傷つけたり殺そうとしたり、なんて事、一度も無い。手を出した事もね。見ていただけだよ。うん。いつだって、見ているだけ。」

彼の話す口調は変わらない。足を動かす速度も変わらない。彼の部屋は5階だったから、すぐに地面に着いた。

そのまま、裏通りを歩かされる。人が、誰もいない。どうしよう。

「でもあいつはね、そんな僕に早くから気付いているようだった。そしてあの海の一件以来、それが顕著になった。ふふ、あいつだって、ずっときみの事を見ていたよ。」

楽しそうに、彼がクスツと笑った。

私はその台詞に引っかけた。あいつって、……やっぱり藤田さん？

「まあ、僕とあいつじゃ、目的が全然違うけどね。僕は、純粹にきみを見つめていた。あいつは……そうだな、まるで僕からきみを守る様に、きみを監視していた、だな。監視、なんて言葉、僕よりあいつの方がピツタリだ。」

私はまたビックリした。

だって藤田さんは、二度目（三度目？）に再開した時、そんな事は何も言っていないかった。

私を海で助けた事すら、中々口を割らなかったのに。ずっと前から、私の事を知っていたなんて。

「……なんで、藤田さんが私の事を……その、ずっと……守

つたりするんですか？」

「あ、なんか色っぽい事を想像している？だとしたらご愁傷様。僕が犯罪を犯さない様にだよ。」

もう手遅れなのに、って笑ってる。控えめに、クスクスと。

それがものすごく怖くて不気味なのに、どこか悲しく感じてしまった。

「まあね。祐介が君に惚れていたら、それも面白そうだけど。あのハンサム君に持ってかれて悔しがっているあいつ、つても見てみたい気もする。でもあいつは俺と似ていて、多分誰かに惚れるなんて事、ないんじゃない？」

そう言つて、面白いものを見ているかのように、間近で私を眺めた。もうやだ、気持ち悪い。

「藤田の家は、由緒正しき代議士様だからね。後継ぎとしては、不祥事は色々と困るんだろ。腹違いの兄つてだけでも十分煩わしいだろうに、おまけにそいつが幼女のストーカーだ、なんて世間に知れたら大変だろうからな。心労お察しいたします、だ。」

彼の言葉は皮肉に満ちているのに、その声色は・・・何だか少し、落ち着いたものでもあった。むしろ不快ではない響き。

眼だけじゃなくて、声も似ているんだ、この兄弟。この声を兵器として使つと、ああなるんだ、・・・じゃなくつてね。

なんだか、気のせいか穏やかな口調だな。それが引つかかる。

「・・・あなたは、藤田さんが嫌いなんですか？」

立ち止まって、彼を見上げた。

好きなんですか、と聞くと相手を刺激してしまうかと勘繰り、逆の言葉で聞いてみた。

彼は私が立ち止まるとは思っていなかったらしくて、少し驚いた。

「・・・嫌い？・・・さあ。考えた事も無かったな。」

考える素振りを見せる。

「むしろ同情、かな。僕がああの立場で生まれなくて嬉しいくらい。・

・あいつも別の意味で、運命に縛られている。」

そう言って空を見上げた。

「ほら、見てご覧よ。やっぱり星が綺麗だ。うちのレジデンスからは見えないけどね、あの建物の上に登ると綺麗だよ。」

彼の横顔を見て、私は思った。

今がチャンスだ！

咄嗟に彼を思いっきり突き飛ばし、走り出した。逃げる、逃げる、逃げるのよっ！

だけど悲しいくらい男女の身体能力には差があつて、私は10メートルも行かないうちに捕まつてしまった。大声も一瞬上げられたけど、何処からもなんの反応もなかった。

後ろから片手で体全体をきつく押さえつけられ、もう片方の手は、私の口を強く押さえている。耳元で、言われた。

「どこ行くの？僕、まだ話の途中だよ？」

うわっこれ、似たような眼の持ち主に、似たような声で、似たようなシチュエーションで、似たような台詞を言われたけど、あっちの方が100倍マシっ！！今なら声でイカされても許すっ！！

勢いよく向きを変えられ、強い力で喉元を握られた。

「ねえ、運命つてあると思う？」

その時の彼の笑顔。

それは明らかに今までと質が異なっていた。

狂気。そんな言葉がピッタリ。笑っているのに、何かが、狂っている。

誰かの運命を支配したかった、と言った彼の言葉を思い出した。

失敗した、
と思った。

やっぱり絶体絶命っ

私の喉元を掴んでいる彼の手が、少し楽しそうにリズミカルに、強弱を付けて揺れ始めた。

恐怖で体が凍りつく。

蛇に睨まれたカエルの様。声が出ない。

でも、でも、何か言わなきゃ。相手の言いなりになったら終わりの様な気がするから。

強く体を掴まれて動けないけど、心まで支配されてはダメだ！

「は？」

彼の不気味な笑顔から視線が反らせず、やっとの思いで出た言葉はこれだった。

その間抜けな響きに、思わず自分でもビックリしちゃう。は？って何よ、は？ってっ。

「俺は私生児で生まれた。これは運命か？もともとはあいつと母親が、気まぐれでセックスした結果だ。じゃあ俺は、気まぐれの産物だな。人間は皆、運命が気まぐれに絡み合っている。絶対的な運命ってあると思うかい？」

「.....」

啞然、とする。何言ってるの、この人？

問い掛けなのか、独り言なのか。急に彼の演説が始まった。

「中野の人生を終わらせた俺は、気まぐれの産物であるにも関わらず、中野にとっては絶対的な存在になった。どういう事だと思う？」

意味不明の言葉を喋り続ける。私が理解できる訳が無い。

それにね、こんな状態なら、例えどんなに愉快なお笑い小話を話されたって、オチすらわかんないわよっ。私にどうしろっていつのよっ。

「俺が捕まればあいつの運命が変わる。あいつが気まぐれに作った息子のせいだ。するとつまり、あいつは自分で自分の運命を作った訳で、結局俺は、無力な歯車の一部に過ぎないのかな？」

「・・・何言ってるんですか？」

やっと言葉が出た。酷く掠れた声だった。

人がいない。大声が出せない。体を掴まれている。

彼が何を言っているのか、本当にわからない。でも理解不能でも、とにかく今は会話を続けて時間を稼ぐしかない、と思った。

ここで彼は、私を掴んだまま再び歩きはじめた。

私は少しホツとした。視線が反れたし、いきなり首を絞められる、という危機もとりにあえず去った様な気がする。

そのまま、裏通りを行った。

今、何処を歩いているんだろう？よく見なきゃ。高級住宅街だつて事は分かるんだけど、人気ひとけが全然無い。ご近所の治安はどうなっているの？これじゃお金持ちも住まないわよ、狙われ放題じゃない。あ、そっか。お金持ちならご近所に頼らなくても、セムとか警とか入れてるから大丈夫なのね、納得つてそういう事じゃなくつてもうもうもう！！

するといきなり、彼が私を覗き込んだ。

「ところが。そこで君が登場した。」

うわっ。指さされたっ。怖いっ！私に話を振っているっ。

「君が俺を見ていた。あの小さな少女が俺の運命を握っている。強いては、親父の運命を握っているんだ。途端に愉快になったよ。ばかやろっ、ざまあみる、だ。」

親父？親父って言った？さっきまで藤田さんの話をしていたのに、今度はお父さんの話？
ばかやろっ、ざまあみる、っていつているのに、目が、顔が、ぜんぜん笑ってないのよ、怒ってもいないの、無表情なの。ああ、もういや、勘弁してっ！

「運命って言うのはね、やっぱり自分ではコントロールできない所にあるんだ。俺達の場合、それをコントロールしているのが、あの少女だ。面白い。あの親父が、あんな小娘に喉元を握られている。」

なのに、あの少女はそれを知らない。ますます面白い。」

いいえ、私は今、誰の喉元も握っていません。というか、私の喉元を握っているのはあんたですつ。

満足でしょ、コレでいいでしょ、だから放してよつ。

さつきから愉快だの面白いだの、その楽しさ、私にも分けてよつ！
！どうにかしてよつ！！

急に様子が変わった彼に、さつきから私の心臓はバクバクしちやつて本当に恐ろしいんだけど、

冷静な私が、頭の片隅でまたもや役にも立たない事を考えていた。

この人、お父さんの事を嫌いっばい？藤田さんの事は嫌いじゃないけど、お父さんの事は嫌い？

「その少女の運命は、誰が握っているんだろうね？途端に興味があったんだ。誰が彼女の人生をコントロールするか。そして彼女はいつ、握っている俺達の運命を振り回すのか。他人に対する、初めての興味だったよ。毎日ね、君の観察に没頭した。面白くて、充実した。」

・・・意味不明だけど、つまり平たく言ってやっぱリストーカー？
怖いー！

「君が溺れている場に居合わせたのだから、さつきも言ったけど、偶然だけど運命だね。君が溺れているのを見て思ったんだ。ああ、これも運命か。これで彼女は死んでしまって、握られていた俺達の運命も消えてしまうのか。彼女が俺にとって絶対的な存在だったのは気のせいだったのか、って。あの時はすごく、残念に感じたよ。」

「・・・意味不明だけど、やっぱりそれって、見殺しにしようとしてたんでしょ？！」
「更に怖いー！！」

「だから、きみが今、目の前にこうして立ってくれて、すごく嬉しい。」

わけわかんないっ。

もうダメ、怖すぎるー！！

私は自分が甘かった事を悟った。

私を待っていた、とか、事件を背負って辛かった、とかそんな生易しいものではない。

この人、やっぱりかなりおかしい！！

「あ・・・お父さんって・・・。」

「え？」

「・・・お父さんの事・・・好き・・・なの・・・？」

怖すぎて、話題転換を試みた。

刺激しない様に、ヘタに言い当てる相手を逆上させないように、さつきみたいに反対の事を言ってみて、なるべく時間を稼いで再びチャンスをつかかって、そして出来る事なら、相手を説得出来る材料を探せるように……。あっているのかしら、こんなやり方？

「好きだよ。」

あれ？

「色々気にかけてくれてるし。俺の家の事も、母親の事も面倒を見ようとした。あの年になっても、頑張ってるんじゃないか。」

間違ってるじゃん。やり方以前の問題じゃないの。読みが間違っているじゃない。ど、ど、どしよう。

ま、でもいいわよねっ。会話が続くなら。本来の目的、そこそこっ。うんっ。

出来るだけ引き延ばせっ。

「だから、地獄に落ちればいい。」

……何ですって？

「最後まで善人ぶってるような奴は、地獄に落ちりゃあいいんだ。」

河島から笑顔が消えた。眼が座って、声が低くなっている。話題転換、大失敗っ！

もーお、やだっ。早くこのおかしな人から離れたい。首から手を放してよっ！

「……奈緒に、手を、出したのは、何で？」

話題転換、再挑戦。だってお父さんネタを引きずる気になれないし、結局、時間稼ぎしか思い浮かばない。

再び声が掠れてきた。恐怖で声が出なくなるって、本当だ。

「うーん、なんでかな？この間久しぶりに君と再開して、ちょっと気が変わったのかもな。少し突っついてみようか、と。すっかり事件の事を忘れていた様な人生らしいから、少し腹ただしかったしね。」

私に近づく為に奈緒を利用した？何ですって？

確認した瞬間、炭火の怒りが再燃したんだけど、「腹ただしかった」、なんて言葉一つで、体に戦慄が走る。

炭火、消えちゃいけないけど種火並みにちっちゃくなっちゃいました。

「……見てるだけで、手は出さないって……。」

「君に直接手は出しちゃいなかった。今日、君が来るまでは。」

横目で見下ろされる。笑っていない。

「……怖い事、しないって……。」

震える声で、言ってみた。

すると彼は、表情反転、優しく微笑んだ。

「違うよ。『怖い事』じゃなくて、『悪い事』、だ。台詞はちゃんと、覚えなきゃ。」

ああ、種火の炭火。それに空気を送ってもう一回、炎をおつきしたいのに、

息が出来ないよ。空気が送れない。

この人に首を絞められる前に、勝手に窒息しそっだよ。

私は、自分の心がついに折れるのを感じていた。

もう、限界。もう、無理。

誰でもいいから、助けて。

拓也、どこにいるの？秀真、帰すんじゃない。

助けて、碧さん。お願い、助けて。

困った事があつたら連絡しろ、って最初に言ってくれたじゃない。危険な目にあわない様に、って。

あれも、嘘なの？
ねえ、お願いだから。

「待っていたよ。本当だ。君が来るのを夢見て待っていた。・・・
長くて、あつという間の15年間だった。」

彼が、私の喉元から手を放した。

私がギクツとすると、彼は私の肩を掴んで体をまわし、正面に向かい合う形をとった。
そして、彼が微笑んだ。

「でも、来るのが少し、遅過ぎたね。」

あれ？ここには人通りがある。車も走っている。幹線道路？

なんて気付いた瞬間。

突き飛ばされた。車道に。

私は転びながら、今度こそ恐怖が全身を貫いた。

車に轢かれるっ！

それしかなかった。

王子様

誰かが何かを言っている。何かが私の上に覆いかぶさってきた。

次の瞬間、ふわっと体が浮いて再びどこかに倒れ込んだ。

そしていつまでたつても何も起こらない。

私は顔を上げた。

碧さんだった。

え？碧さん？！

「大丈夫？」

彼が恐ろしく不安そうな表情で、私を覗きこんで見ている。まるで
縋りつく様な瞳。怯えた子供みたい。私はビツクリした。

でもやがて、その表情が徐々に安堵に変わり、ゆつくりと、最後には
甘い笑顔が私の頭上で、

咲いた。

すべてがスローモーションに見える。

沿道の街灯が後ろから彼を照らし、髪が光に縁取られていた。

事態がさっぱり飲みこめない。

息も出来ずに彼を見上げた。

どうやって、あの部屋を出たんだろ。なんでここが分かったんだろ。
笑顔が、眩しいな。光のせいかな。でもやっと、私の眼をまともに見てくれたな。

そこで初めて、助かった、と思った。
その瞬間、一気に力が抜けたのに体はガタガタ震えだしてきた。
声も出ない。体も動かせない。涙すら、出ない。
信じられない。信じられない。今、私、本気で殺されかかった？

彼が、切なそうに瞳を細めた。彼の右手が私の後頭部にまわった。
そして、ゆつくりと、無言で、私の頭を自分の肩に押し付ける。
固く、固く抱きしめられた。

彼の香りに包まれる。
今度こそ、本当に脱力した。
私、助かったんだ。

いつもは息が止まる様に痺れる彼の腕の中が、今は何よりも安心で
きる空間になっている。

碧さんは、私の頭に顔をうずめて動かなくなった。

・・・碧さん、本当に、助けに来てくれた・・・。

「・・・気が、狂うかと思った・・・。」

碧さんの、掠れる様な、低い小さな、囁き。

まるで独り言の様なそれは、なんだか聞いてはいけない彼の弱音の
様な気もして、私は黙っていた。

でも確かに、私の心を甘やかに、温かくしてくれた。
じわじわと胸に広がっていく。

目を開けると、碧さんのスーツやコートのおちこちが、擦り切れてよれていた。
顔をあげると、彼の腕がゆるんだ。見ると、袖口から血が流れ出た跡がある。

「……えと……。」
「もう大丈夫。」

怪我の事を聞きたかったのに、碧さんはもう一度、私に微笑んだ。
彼の綺麗な瞳が更に甘くなって、その長い睫毛が前髪に触れている。見つめられている。目が離せない。
ヤバい、カッコいい。王子様復活だ。

気付けば、車道には拓也と藤田さんが出ていて、片道2車線の道路の車を、両手をあげて止めていた。
「綾っ！」
拓也が振り返って叫ぶ。

「大丈夫かつ!!」

私はやっと、言葉が喉に戻ってきた。

「……こ……腰が抜けた……。」

ダメだ、立てない。下半身の感覚がない。力が入らない。
あ、私、トイレが遠い女で良かった。これ、近い人なら漏らしてい

るんじゃない？

あれ？鼻血は大丈夫かな？思わず鼻の下を触って確認する。だって碧さんの顔が間近で、拓也が駆け寄ってきて、

これはドラマのクライマックス、瞬間最高視聴率20%越えだもの、鼻血は避けたい、尿意は無い、じゃなくて、そうではなくて、えっ
とえっと、つまり何？

今頃頭がパニックってきた。

周りを見ると、歩道に人だかりができています。

ああ、なんだっけ、これ。そうだ、この間の夏、河島健たけるのロケを見た時の人だかりだ。あんな感じた。あの時は撮影があっただんだ、ってことは。

「……おま……何してんの？」

こちらに近づいてきた拓也が、恐る恐る私に聞いてきた。

私は碧さんの腕の中で、周囲や上空や、可能な限り見渡せるだけ、きよるきよると辺りを伺った。

「いや、どこかに、隠しカメラとか何か、ないかなあ、と思って。」「……はあ？」

「だってこんなベタな展開、まるで2時間サスペンスドラマのラストの様。」

これはもしかしてひよっとすると、ドッキリか何かで、どこかにカメラが隠してあるかも……。」

「……綾ちゃん？」「……冗談なの？馬鹿なの？」

碧さんと拓也が同時に問いかける。

「ただど私は、更に周りをグルグルキョロキョロと、必死に見まわしながら言った。」

「だって、相手はゲーノージンだよ？きつとどこかに、タネや仕掛けが必ずあるハズ……。」

「タネや仕掛けは何処にもねえよっ！！」

あ、拓也が顔を覆って座り込んだ。ちっちゃくなっちゃった。

「ええ？だって、じゃあ……」

えっ！？あれって本気？！そしてアレ、本物？！」

思わず大声を出して、沿道の人ばかりを指さしてしまった。

見物人が出ちやうほど、私って本気で殺されかけたの？見られちやうほど大変な事だったの？！

そんなにヤバい事態だったのっ？！

「……天然スイッチ、最強だ。ここで入るんだ。」

「存外、厄介だな。」

碧さんの引いた言葉と、ああ藤田さんまでヒドイです。

「よいしょっと。」

碧さんが私をお姫様だっこした。

「わわわわちよちよちよちよっつと、降ろして下さいっ重いですっ。」

「だって腰抜けたんでしょ。」

そういつて皆の前をスタスタと大股で歩く。

沿道の皆さま、老若男女問わず皆がこちらをガン見、ではなくて注目しているんだけど、それは多分、私がこの騒ぎの中心人物である事よりも、碧さんがあまりにもカッコよすぎるからだと思う。多分、じゃなくて絶対。

綺麗なカーブを描いた顎があり得ない程至近距離にあつて、私はもう一度、軽く目眩を起こしそうになった。

「ダメですつ。あの、余計に腰が抜けますつ。」
「何だ、それ。」

クスツと笑うその表情が、いつものあの甘さにちよっぴり艶っぽい危険な雰囲気までブレンドされていて、ああもうだめ完璧腰が抜けました、どうしてくれるんですか、これ。

無意識でも色気振りまくのやめて下さい。

だめだこれ、きつと抱かれているのが敗因だ。一刻も早く降ろしてもらわなきゃ、人目も引きすぎて色んな意味で身が持たないわ。

なもんで、思わず不機嫌な顔になってしまう。

碧さんが、私の頭上でふわっと微笑んだ。本当に愛おしそうな眼をしている。

「あ、いつも通りの君に戻った。」

そう言つて、いたずらっぽく笑った。

・・・もう無理・・・。

「この場合、早い者勝ちだな。」

藤田さんが、拓也に言った。

拓也が何故か、横目で悔しそうに、少し拗ねたように藤田さんを睨んでいる。

「碧のあの、階段連続飛びを抜かせなかった時点で、お前の負けだろ、諦める。」

・・・何の話ですか？

藤田さんは私にニツコリ笑った。

いつものあの、胡散臭い綺麗な笑顔も、こうなると懐かしくってホツとするものですね。

碧さんが、歩道わきの、レンガ造りの花壇の端に、私をそっと降ろした。

「・・・ごめん。」

「・・・え？」

私は彼を見上げた。まるで覗きこむ様な形になる。

彼は長い睫毛を伏せて地面を見つめていたけど、すぐに私に視線を戻し、少し唇を噛み締めてから言った。

「騙して、ごめん。巻き込んで、ごめん。思い出させて、ごめん。」
「……………」

「怖い思いをさせて、ごめん。」

最後のそれは、碧さんのせいではないな、と思う。

でも、事の発端はすべて、碧さんと出会ったことから始まったかと思うと、

私を騙していた事もともかく、奈緒まで危険な目にあっていたかも
しれない、と思うと、

言葉に、詰まる。

彼の言葉を、否定できない。

「今更、何も言えない。でも……可能なら。」

そこで彼は、いきなり私に頭を下げた。

「日下部さん。後で、俺に話をする、チャンスを下さい。」

「……………え……………」

ビックリしてしまう。長身の、大人の男の人に頭を下げられるなんて、
なんだか自分の手に負えない様な気がして、ドギマギしてしま
う。

どうしよう、あの、とりあえず顔を上げて下さい。

「やめろよ。」

口を開いたのは拓也だった。え？

「そんな風にこいつに頭、下げんなよ。こいつが何も言えなくなるの、わかってんだろ？あんたのせいで泣いたんだ。」

げっ。それ言うの？

あの時の拓也の台詞と慰めなぐさを思い出して、何より陰で泣いている女
つて図が耐えられなくて、顔が真っ赤になってしまった。恥ずかしいよっ。

「チャンスをくれ、だなんて、虫が良すぎやしない？」

拓也の眼が、座る。

「むしろ殴らせろや。」

相手に絡む様に、ドスを効かせた声だった。
こんな拓也も見た事ないから怖いんだけど、それ以上に居心地が悪い。この状況、どうにかなんないかしら？
た、拓也、殴るの？

碧さんが眉根を寄せて、唇をきつく結ぶ。

拓也が鋭い目つきで相手ににじり寄る。

私は思わず、声をかけた。

「わ、私、歌おうか？」

思いつきりためて、眉間にしわを寄せて、拓也が振り返った。

「……は？」

眼が言ってる。お前、またかよ、と。

でも、だって、打破したいんだもん。ぶち壊したいんだもん、このいかにもってシチュエーション。

「ほら、何だっけ？昔の歌。河合なんとかって人の。えっと……。

」

3人が、私を凝視する。え？誰も止めてくれないの？

ああ、やだなあ。でもしょうがないなあ。歌っちゃおうよ？

「け、喧嘩をやめてー……。二人を止めてー……。わ、わたし
ーのためーに……。」

ひえええ、この歌、死ぬほど恥ずかしいっ！よく歌えるわね、アイ
ドルって偉い！！

コレを鼻歌にしていたお母さんも、偉いっ。

「あらそーわないーで……。続けます？」

ああ、もう恥ずかしすぎる。顔が真っ赤だわ、誰の目も見れないっ。

「……。」「」

しーん、となってる。やめてえええ。

やがて、俯いた私の頭上で、拓也の疲れ切った声が聞こえてきた。

「俺、お前じゃなかったら、絶対どっかで殴ってる。」

お前って私の事？碧さんじゃなくて、私？だよな。

「ども。」

私は俯いたまま、答えた。

場が和んだ、と言う事で。身を呈した甲斐があったってもんです。

そして、拓也のため息。

「この件は、後。」

また歌わなきゃ。

私が顔を上げると、拓也と藤田さんが、碧さんを見ていた。碧さんは私を見て少し苦笑すると、フツと瞳が暗くなった。

「今は。」

彼の正面、私の頭上を見つめながら、碧さんは静かに言った。

「先輩。あなたの兄貴、俺の視界から消して？でないと俺、あいつ殺すよ。」

その台詞に、ギクツとなった。

声のトーンも喋り方も、普段の碧さんと変わらない。

その調子で淡々と言うものだから、碧さんの表情は、河島の部屋でとは違った殺気に満ちていた。

理想的感情？

「目の前で、大切な人間が二人もあいつに奪われたんだ。俺、今度会ったら、確実に正気じゃいられない。」

表情は冷たく、声は穏やかに。彼は落ち着いて言った。

大切な人間、という言葉に今度はドキン、とした。

「つーか、ぶちこめよ、塀の中に。あんな変態野郎、野放しにすんなよ。」

拓也が、不満爆発、と言った表情で藤田さんを睨み上げた。

魔王藤田さんに拓也がこんな言葉使いをするなんて、相当キテいるんだろうと思う。

藤田さんは、一呼吸置いてから、あの無表情な瞳で言った。

「悪かった。」

「あんたが謝る話じゃないだろ。」

すかさず碧さんがそれを遮る。

どういう意味だろ？藤田さんは謝る必要はない、悪くない、って事？それとも、今更藤田さんに謝られたって、どうしようもない、口も開くな、って事？

・・・この人は、いつから気付いていたんだろう？お兄さんの事。私を海で助けてから、それなりに私達を監視していた、みたいな事を河島が言っていたけど、

一体、藤田さんは何を、何処まで気づいていたんだろう？

お兄さんが、人を殺していた、と分かった今は？
この無表情の下には、どんな心が隠れているんだろう？

「あの人、どこ行っただんですか？」
私は、目の前に立つ男性3人を見回した。

「知らない。俺が来た時はもう……。みどりちゃん？」
拓也の碧さんと呼ぶ名前が、以前に戻っている。
碧さんはすこし眉根を寄せながら、視線を空中に漂わせていた。

「あいつ、俺と眼を合わせた。」

それから、私を見下ろした。

「その後、彼女を突き飛ばしたんだ。」

え？意味が分からない。
私は碧さんを見た後、拓也と藤田さんを交互に見た。拓也が口を開いた。

「お前が突き飛ばされた時……車、いなかっただけだね。」

「え？」
「ほら、見てみるよ。反対車線は下りだから結構車が走ってるけど、こっちは車線は……な。」

拓也が車道を指さす。

そこには、確かに拓也の言うとおり、手前車線の車通りは殆んど無かった。

・・・だから、何なの？

まじ、と拓也の眼を見る。この表情、何かを言いたそう。

碧さんを見る。藤田さんを見る。車道を見る。

碧さんが来たのを確認してから、車の通らない車道に私を突き飛ばした・・・？

え？つまり殺す気が無かったって事？

・・・うっそだあー。

「健一は・・・多分・・・。」

藤田さんが呟くように言った。

「戻ってこないだろうな。」

「・・・逃げたって事？」

私は彼を見上げて聞く。

彼もさっきの碧さんの様に、空中に視線を留めて、何かを思っている様だった。

「ああ。今頃・・・。」

「心当たり、あるのか？」

碧さんの問い掛けに、

「ん。」

と言って、彼は空を指差した。

「・・・飛行機・・・？」

夜空を見上げて、私が呟く。

海外逃亡？今から？？

視線を戻すと、何故だか拓也と碧さんが、息を飲んで驚愕したかのように藤田さんを見ていた。

海外逃亡が早技すぎで？

星空。空。・・・

え？まさか？

夜空と彼らを交互に見ちゃう。首が痛くなってきた。

藤田さんがお空を指さしていて、

それを拓也と碧さんが蒼白の顔で見ている、

それってまさか、あの・・・天国？

「あいつは昔から、すべてを投げ出している奴だった。俺から見ても自分の意思、と言うものがまったく感じられなかった。それが最近、特に顕著だったから。」

藤田さんは淡々と、まるで教科書の説明をしているかのような口調で話し始めた。

「君に見つけて貰った今、もう、生きている理由が無くなっているだろう、きっと。」

ほらやっぱり天国だっ！！

「……な……何、それ……。」

「先輩、それ、最初っから知っていて……。」

「……。」

私の絶句と碧さんの驚きを、藤田さんは無言で返す。

「なんで私があの人を見つけると、生きてる理由が無くなるんですかっ。」

「知らないよ。生きがいの様に見えていたから、そう思ったただけだ。」

私は、相変わらず無表情で、兄と同じように何も映していない様な彼の瞳をみて、段々腹が立ってきた。

この人、さっきから、ううん、最初っから、どうしてこんなに落ち着いているの？

自分のお兄さんが起こした騒動なのに、どうして落ち着いていられるの？

いくら以前から、河島に対して多少思う所があったとしても、この無機質な表情って何なの？

少しは焦りとか、痛みとか、あつたつていいんじゃない？
あの変態俳優もそうとうネジが飛んでいたけど、
この人だって、ある意味彼よりヤバいんじゃないの？

「・・・藤田さん。それでいいんですか？」

私はどうしても言わずにはいられなかった。

彼にはあまりにも、酷かもしれない言葉。でもこの能面男には、これぐらいハッキリ言わないと通じないって、私は学んだから。

「自分のお兄さんが人を殺して、自殺するかもしれないって、それでもいいんですか？」

藤田さんは、私を見下ろすと、やっぱり無表情に言った。

「俺とあいつは別の人間だ。兄弟でも人生は関係ない。今更15年前に人を刺した、と聞かされて、俺にどうしろって言っただ。」

「・・・このーやあーろおー・・・っ!!」

「そんな事、自分たちで考えなさいよっ!!」

あ、抜けてた腰が、立った。

「家族でしょっ!!兄弟でしょっ!!いくら関係無たっていっても、

相手が死にそうなたくらい慌てなさいよっ 助けなさいっ！」

「理想を他人に押し付けるな。」

「理想じゃないわよ、常識よっ！ そうしないと、世界は滅びるのよっ！！」

「・・・でた。」

拓也の呟き。うるさいわよっ。

当り前でしょ、家族が助け合わなくて、どうやって人類助け合うのよっ！

「世界まで、俺の肩に乗せるな。」

「あなたの肩に今乗っかっているのは、あの変態お兄さんよっ！！」

「お前、それ、助けたいの？ 追い詰めてんの？」

「家族否定したら、自分も否定することになっちゃうのよっ。自分の人生辛くなるのっ。おんなじ遺伝子でしょっ！」

「半分だけだ。」

「先輩も・・・。」

拓也と碧さんのなだめ（？）も効かずに、私はなんだか、河島健たけるの前ではちっちゃくなつた種火の炭火が、藤田さんの前でまた燃え上がってしまったみたい。

今日はこの人に向かつて怒鳴ってばかりだわ、と思いつつも、体が怒りと悲しみで熱くなるのを抑えられなかった。

「否定と克服は違うのよっ！ 犯罪犯しても、変態でも、克服しなさいよっ。相手の顔を見なさいっ！」

無機質で無表情な彼の顔に、切れ長で涼しげな瞳に、思いつきり感情をぶつける。

「あなたに兄貴の犯罪を償えなんて思っていないければ、負い目に感じるとも考えていないわよっ！」

「だけどね、最初っから全部解つてて、だから無駄な行動は取らなくって、だからいつも合理的でって、人間そんな風にお互い絡んじやいないのよっ!!」

「だから、だからそんな、いつも諦めてる死んだ眼になるんじゃないっ!!」

「ああ、やっぱり今回も、何を言いたいのかわからなくなってきた。興奮しすぎて、もはや支離滅裂だわっ。」

「そんなの頭良くもなんともないのよっただのバカよっ!! 頭ばっかで考えてないで、たまには心を使ってみなさいよっ! 自分の気持ちも分かんないのっ?」

「関係ない、だなんて。」

「憎んでる、の方がマシじゃない。」

「鉄火面が、少し剥がれた。」

「彼はわずかに眼を見開いて私を見つめ、しばらくして溜息をついた。」

「どうしたいんだ、君は。」

「私はね、私のせいで自殺されるなんて、まっぴらごめんよっ!! 何が何でも止めてやるっ。どこにいんのよ、あの人っ!!」

答えなさいよ、考えなさいっ、さあ、教えろっ！

私の剣幕に拓也と碧さんがたじろいだ。

そして碧さんが、少し困ったように言った。

「つつてもなあ。どこを探せばいいんだか。」

「あっちの方に行ったよ？」

「そりゃ俺も見ただけど、あっちのどこだよ？見当つかねえだろ。手分けするか？」

「危なくない？」

「だよな。」

碧さんと拓也で、額を突き合わせて考え込み始める。

「首つりっ？飛び下りっ？飛び込みっ？入水っ？毒薬っ？それとも、それとも・・・。」

「いいから黙れ。わかったから。落ち着け。」

拓也に頭を小突かれた。その勢いで再び座り込む。

歩道にいた見物人は、徐々にその波が引いていく。

興奮冷めやらぬ私は、頭の片隅でしっかり考えていた。

ああ、殴った次はバカ呼ばわりしてしまった。

もうダメ、報復が恐ろしすぎる。事が終わったら、すぐにでも逃げよう。

藤田さんが再び、軽く溜息をついた。

「そんなに遠くには行ってないだろう。この辺りはタクシーも走っていない。きつと、あいつが目を付けていた場所があるんだ。」

「目を付けていた場所？」

「この日の為だね。衝動的な性格も持ち合わせているが、計算高い奴だからな。」

自分の死に場所を考えていた人を計算高い、とは言葉が過ぎない？

と彼を睨みかかって、ふと、引つかかるものを感じた。

あれ？胸の中がなんかもやもやする。なんだっけ？

あっ！

「あそこっ！あの建物かもしんないっ！」

私が叫んで、みんなが驚いた。

碧さんが聞く。

「どっ？」

「来る途中、連れて来られる時に、あの人言ってたの。この建物から見る星が綺麗なんだ、って。」

「ほし〜？」

拓也が訝しげに片眉を上げた。

「どこまでも気味が悪い奴だな。」

「あいつらしいな。」

藤田さんが顎に手をやり、考え込むように言った。

碧さんが、彼を少し覗きこむようにして、短く言った。

「どつする？」

藤田さんが顔を上げた。

「ここで考えていてもしょうがない。行ってみるか、そこに。」

そして彼が、多分初めて、私を真っ直ぐに見た。

以前も彼と目があつた事はあつたけど、今の藤田さんは、私の瞳をしっかりと捕らえていた。

「日下部さん。案内してくれるかい？」

はい。あなたへの仕打ち、全部忘れてくれるなら。

これ、バーターにはダメですか？

理想的感情？（後書き）

あと少しです。読んで下さっている方、大感謝です！頑張ります。

番外編をUPしました。拓也君が高校一年生の時のお話「SMSイッチ」です。

作者のマイページから飛ぶか、下記アドレスをコピーして開けます。

<http://ncode.syosetu.com/n0493q/>

一話完結短編です。こちらにも是非。

このお話達が、皆様のお暇つぶしに役立っていますように・・・。

戸理 葵

断罪

今更ですが。

私、ひどい方向音痴です。

それにあの時は完全にパニックっていたし。

だから、変態さんのお星様ネタ、覚えていただだけでも褒めてほしいんだけど。

「どこなんだよっ。」

怒鳴らないでよっ！

拓也に突っ込みながらも自分が情けなくって、半泣きになるよー。

4人でわちゃわちゃ捜しているけど、私はさっぱりわからない。だって住宅地の家もマンションも塀も道路もみんな同じに見えるんだもの。夜中近くて、色すらわかりやしない。

星が見えるって言うてたのよ。だから星が見える所を捜してよ。それでいいじゃない。

「・・・ねえ、碧さん。」

「ん？」

「なんでごっ、怪我してるんですか？」

私は気になっていた、彼の袖口の血の跡を突つついた。

コートやスーツの全体的な擦り切れ方もわりと派手で、あれ？私を車道から救ってくれる時に、そんなに派手に転がったっけ、私達？

「あ、いやちよっど。」

何故か口ごもる碧さん。

「部屋のドアをぶち破ったんだ。」
藤田さんがあっさり暴露した。

「え？」

あの部屋の？あの頑丈そうなの？

碧さんが、バツの悪そうなの、嫌そうな顔をして藤田さんを横目で見た。

彼は至って涼しい顔。

・・・何があつたの？

「こいつが器物破損中に俺は受付に内線をかけ、結果、下から鍵を持った人間が上がってくるのこいつがドアをぶち破るのが、ほぼ同時だったというわけ。」

・・・ははあ。

それで、この表情。

「頭は沸かすものではなくて、使え。」
「うるせえな。」

藤田さんの冷やかな視線に、碧さんは赤い顔をして睨みつけた。
成程。

「・・・ねえ、あれじゃないの？」

拓也が上を見上げて呟いた。

私達3人も一斉に上を見る。

そして絶句した。

人が一人、フェンスにもたれかかっているように見える。

確かに、夜空を觀賞しているように見えるわよ？でもなんで、フェンスの外側で？

このビル、5、6階はあるわよね？

ここからは星がよく見える、と彼が言った理由が分かる気がした。周りが低層の建物ばかりで、しかも土地の形状が南離段だからだわ。住宅地だから、明かりも少ないし。

て、え？まさかここで飛び降りをする気？こんな高級住宅地のど真ん中で？

どんだけ見境ない人なのよ？

碧さんと拓也がダツシユした。

3メートルぐらいはある、外階段のステンレス製で頑丈なフェンス兼扉を、二人とも軽々と乗り越えていく。うわ、かっこいい。つて、私無理よおつ。

「どこまでも迷惑な男だな。」

私の隣で藤田さんが小さく呟いた。

私は藤田さんを見上げた。

「でも、あなたのお兄さん。」

「一緒に育つてもいない。」

「でも、あなたのお兄さん。」

藤田さんはチラ、と私を一瞥すると、ポケットからボールペンを取

りだし、芯を抜くとフェンス扉の鍵穴に差し込んでガチャガチャやり始めた。

無言だけど、少し不機嫌そうにも、見える。表情出てきたな、この人。

「君は許せるのか？あいつを。」

「許せませんね。」

間髪いれずに答えた。

藤田さんが顔を上げた。私を見つめる。

私は真つ直ぐに聞いた。

「あなたは許せるんですか？彼を。」

彼は私をじつと見て、それから再び鍵穴をいじった。で、扉が開いた。

「許せないね。」

彼は私を見ずに、正面を見つめたまま答えた。

藤田さん、やっぱりあなたは何者なのですか？鍵、開いちゃいましたよ？

私達は、階段を駆け上がった。
（そして私は置いて行かれた。無理ですって。）

殺人を犯した人間を、許せるわけがない。
理由がない、なんて聞かされたら、尚更。
仮にそれが、15年前でも。
例え彼が、未成年でも。

マンションの様な雑居ビルの様なその建物を駆け上がると、お約束通り、屋上には河島がいた。
す、すぐく疲れた……。ブーティーで階段を走るなんて辛すぎる。
膝が笑いそう。
息が切れて、顔が上げられない。

「祐介。」

河島の声が聞こえた。

「お前、連れてくるなよ。」

「彼女が見つけたんだ。下に一人で残しておくわけにいかないだろ。」

何？この日常会話みたいなのは？

顔を上げたら、高い金網フェンスの向こう側、ビルの縁に座ってい

る河島がうんざりした様な顔をして私を見ていた。

「何で来たの？」

「飛び降りたりしたら承知しねえ。」

碧さんが怒った声で、でも静かに言った。

「自分一人で楽になろうなんて思うなよ？もっと苦しんで償え。」
「別に苦しんじゃ、いないけど。」

河島が、垂らした足をわずかに揺らしながら、空を見上げて言う。
私は彼を睨んで言った。

「関係ない。」

河島以外の3人の目が、私に注がれるのを感じた。私は続けた。

「関係ないのよ、碧さん。あの人が苦しいかどうかなんて。だってあの人は死ねないもの。」

河島の足の動きが止まる。

私は彼に言い放った。

「あなたは、死ぬ権利すらないのよ。人の命を奪った時点で。」

少しの沈黙の後、河島が静かに言った。

「あいつと目があった。」

彼の視線は星空ではなく、足元の街並みに向けられていた。

「確かに目があったけど、息はもう詰まっていた。俺が現場に戻った時から、見ているうちにどんどん呼吸が詰まっていた。なのに俺の目を離さないんだよな。人間は、あんな状態で随分生きられるものなんだ。」

今までの、狂気じみたり芝居がかった口調ではなくて、まるで少年の様な、ポツポツとした喋り方。

「俺達は見つめあったし、俺があいつに近づくのも、ナイフに手をかけるのも、あいつはずっと見ていた。呼吸もせず。」

「・・・お前、まさか、中野を救ってやった、とか抜かすんじゃないだろうな？」

碧さんの目が見開かれた。怒りで拳が握られている。

「そんな事言っていない。言っただろう？なんでこいつは死なないんだろう、と黙ってやった、と。」

わずかに下を向いて喋るその姿は、30歳の男に見えない。あまりにも頼りなさ過ぎる。

「別に良心の呵責だって感じちゃいない。自分から自首するつもりもない。あいつはあのまま助からなかったと確信しているが、俺は医者じゃない。」

「じゃああなたは、なんで今そこにいるの？」

拓也が普通に問いかけた。

「面倒臭くなったからさ。」
河島が普通に答えた。

「お父さんが嫌いだからでしょ。」

私がそう言うと、碧さん達が私を見た。

「お父さんが嫌いで、だけど殴る勇気がないからでしょ。あて付けで死ぬんでしょ。子供以下。」

私はそう言うと、フェンスに近寄った。

「え？」

拓也が思わず声を出す。だって私、この金網フェンスによじ登っっちゃってるもの。

「綾っ。」

「綾ちゃん、バカっ。」

碧さんが私の腰を後ろから掴んで、無理やり引きずり降ろそうとする。

離して。やめろ。いいから離して。何やってるんだ、やめろ。

「じゃ、碧さん、来て。」

でないと、蹴飛ばしますよ？

碧さんの瞳が、一瞬ひるんだ。私の決意に戸惑って、迷っている様だった。私はその間に登り続けた。

わずかに遅れて、碧さんがついてきた。
拓也と藤田さんは、彼に目で制されたようだった。

「あなたの話を総合すると、こうね。中野を刺してから15年間、私に見つけて貰うのを待っていた。私の告発で、お父さんが失脚する事を楽しみにしていた。ところが15年があっさり経ち、終わった事件を掘り起こす事は不可能になった。だから今度は私達に全部ぶちまけた後、自殺して、お父さんにあて付けようって事でしょ？」

そう言いながら、座っている彼の方に近寄る。片手でフェンスを握りしめながら。

メツチャ怖いんだけど。

河島は、小柄な女が何も出来ないといふんでいるのか、騒ぐ事なく私を見ている。

「人を勝手に、あなたの人生の指標みにしないでくれる？大迷惑。いい歳して、自分の人生の責任を他人に押し付けられないでよ。それにあんな写真をとっとかないでよ。もっと厳選してよね。ほんつと大迷惑。」

写真を取られる事よりも不細工写真だった方がショック、って言う乙女心、わかってくれる？

「加えて言えば、どんなにあなたが死にたくても、あなたにはその権利はない。生きている人を殺した時点で、あなたは死ねないのよ。」

彼は、濁った眼で私を見上げた。

私のひいおじいちゃんは戦争で死んだ。一人息子の顔を一度も見ることが無く。毎月手紙を妻と息子に3年間、書き続けて。

おばあちゃんの弟は幼くして死んだ。満州から引き揚げる時に飢えと病気で、船の中で。おかあさん、と言つて。

友達のお母さんは彼女を産んだ後、病気で死んだ。産んだばかりの赤ん坊と5歳の娘と自分の夫に謝つて。娘は半年後、お母さんの帰りを諦めた。

中学校の先輩は16歳で病気で死んだ。闘病半年、高校に入学したばかりだった。ホルンが上手な先輩だった。

中学校の同級生は17歳で交通事故で死んだ。残された同い年の彼女のお腹には、彼の子供が宿っていた。婚約したばかりだった。

大学の後輩は19歳で病気で死んだ。バイト代を全額あのサークルに寄付して、と病床で言い残して。皆のおかげで僕は楽しかったから、と。みんなのアイドルだったのに。

碧さんのお母さんは、交通事故で死んだ。小学5年生の息子を残して。

中野光治は、刺されて死んだ。

八ヤマサトシは、病気で死んだ。

みんなみんな、すごく生きたかった。とてもとても、生きたかった。でもどんなに生きたくつても、生きられなかった人達がいる。

だから私は、死にたい人はどうぞご勝手に、と言いたい。
生きられなかった身内や友人達の顔を思い浮かべると、くやしくて
涙が出てくるから。

死にたい理由が、多分私には理解できないから。

だけど。そんな生きている人の命を奪った人間には。そんなに生き
たかった人を殺した人には。
死ぬ事すら許されないのよ。
そんな権利も選択肢も残されていないのよ。

「15年経って、あなたを裁いてくれる人はいない。おあいにく様。
死にたければ、誰かに殺してもらえば？」

私はついに、彼の近くまで来た。後ろでは碧さんが、フェンスを握
った私の腕を強く掴んで離さない。

私は、彼を見下ろして一言、言った。

「だから私が殺してあげる。」

え？と3人が驚いている。

私は低い声で河島に言った。

「立ちなさいよ。」

赦せない。

「綾ちゃんっ？」

碧さんの焦った声が飛んだ。

制裁

碧さんの声を無視して、私は更に彼に近寄ろうとした。けど、彼に腕を掴まれて進めない。くっそ。拓也が堪らず駈け出してきた。

「綾っやめろっ」

「立って？」

私は彼に冷たく言う。彼は無表情で私を見つめ、俯いた。そして再び顔を上げた。

初めて、わずかに、彼の瞳が揺れるのを見た。そしてゆっくりと立ち上がった。

「綾ちゃんもうやめろっ。おい吉川、先輩！」

碧さんの声を合図のように、二人がフェンスに飛び登ってくる。私は後ろから碧さんに羽交い締めになれなかった。片手でフェンスを力いっぱい握りしめながら体勢を整える。相手を睨み据えた。

許さない。

やってやるっ！！

「いいかげんに、してっ！ー！」

思いつきり、足を延ばして、蹴飛ばした。

河島の、股間を。

初めてのそれは、自分でもビックリするほどみごとにクリーンヒットした。

男4人が、固まった。

「うわっ。」

「きゃあっ！ー！」

声も無くうずくまった河島を、咄嗟に私と、フェンスの上から拓也が掴んだんだけど、

そのまま彼は前のめりになり、まさしくバランスを崩した。
なもんだから、彼を掴んだ私達もバランスを崩しそうになり、結果、私は碧さんに、拓也は藤田さんに、後ろから抱かれる様に引っ張られる形となった。

そして今、河島の体を支えているのは私と拓也の腕だけっ。

拓也はフェンスの上から自分の大腿部をひっかけ様にして、ほぼ逆さ吊りの状態となって両手で河島の腰とダウンジャケットを掴んでいるし、

私は彼の腕を脇の下から、片手で掴んでいる。

（もう片方の手は、怖くてフェンスから離せないっ。）
藤田さんは後ろから拓也の腰と背中を驚掴わしづかみにして支え、碧さんは私の腰を後ろから片手で抱き抱え、片手で同じくフェンスをがっちりがと掴んでいる。

で、当の河島は、股間を抑えたままうずくまって、かろうじて足がビルの縁に引っかかっている状態なのよおっ。

きゃあああ落ちないでっ私、殺人者になりたくないああいつっ
！！

なのにあの人、足を片方踏み外したのよっ。

その瞬間、私と拓也も思いつきりバランスを崩した。

「いやっ！」

「綾香っ！」

「うっ。。。」

碧さんの叫びと、拓也の呻き。

私は碧さんに抱き抱えられてなければ、確実に一緒にバランスを崩

して落ちていた。

だって、手を離す隙すらなかったんだもの。

あのねえ、あんたっ！いつまでも股間押さえてないで、その手一つは外して、自分でどっか掴みなさいよっ。

って思ったら、いきなり私の腕を、ガシッと掴んできたのっ。

「きゃあっ！」

ちよっと、どっかって言ったけど、なんで私の腕なのよっよけいにバランス崩すじゃないっ。

前のめりになってるから、他に掴むものが無かったんでしょ、わかってるけどっ。

私、あんたと一緒にほぼ宙づり状態なのよっ、足は着いていても重心は空中なのっ。お願い碧さん、私を離さないでっ、ついでにフェンスも離さないでっ！

「……信っ……じ……らん、ねっ……。」

拓也が息も絶え絶え呻いた。

河島が私の腕を掴んだ瞬間から一層、拓也が強く彼を引き寄せようとしているからだ。

顔が真っ赤で、渾身の力を込めているのが分かる。こめかみが浮き出てきてる。

私の後ろで、私と河島を支えている碧さんが叫んだ。

「吉川っ！手を離すなっ！」

「離さねーよっ！」

いつのまにか、拓也を支えながらフェンスを登った藤田さんが、拓也と同じ体勢になっている。

「いくぞっ！」

藤田さんは掛け声とともに、拓也から腕を離して河島の背中と胸を同時に掴み、思いつき引つ張り上げた。

拓也も一瞬バランスを崩しかけながら、咄嗟にフェンスを掴み、彼と一緒にグイッと引つ張る。

その反動で私は更にバランスを崩し、ついには足がふわっと浮いたつ。

「やだーっ！」

碧さんが私をグツと掴み寄せる。河島の重心が後ろにずれる。それと同時にビルの縁に座り込む様な体勢になった。

「わっ。」

拓也が引きずられて、フェンスにはば逆さまに捕まる。藤田さんが河島を掴みながらフェンスを乗り越え、座り込んだ彼の肩を素早くそこに押し付ける。

碧さんがフェンスをきつく握りしめながら片膝をつき、私を床に押し込む様に強く座らせた。

河島の腕が、私から離れる事はなかった。

そのまま4人で河島をフェンスの中に引つ張り上げ、私達は足元に倒れ込んだ。

大の男を一人、3メートルもの高さまで持ち上げて戻すのも大変だったけど、先ほどの騒動が激しく、確実に、私達の気力体力を消耗させていたから。

肩で息をして中腰で膝を押さえて俯いている藤田さんも、結構レアだと思っ。

碧さんは足を投げ出して座り込み空を仰いで息をしているし、拓は文字通り、床に倒れ込んでへばりきっている。

私はぺたつと座り込み、両手もついて俯き、あまりの緊張と疲労に顔も上げられなかった。

そう、あの土下座の体勢です。

「君、普通、これやる?!」

息も整わないうちに、碧さんが聞いてきた。というより、突っ込んできた。

私は頭をガバツと上げて、碧さんを見て叫んだ。

「だって頭来てたんだもんっ!」

「だからって、あそこでやる?!」

信じられない、あり得ない、って目で私を見ている。

私は頭に血が上った状態で続けた。

「だって拉致られて、ずっと怖くて、どうやって逃げようかずっと考えてて、その時からずっと……。」

考えていたのよ、一人で。どうやって逃げれば良かった。あの技しか思いつかなかったのよ。

それですごく怖くって、そんな思いをさせられたのが悔しくって、簡単に死にたいって言われて頭に来て、ワガママ勝手な人になんてしても一発お見舞いしてやりたくなくて、そうしたら、そうしたらね・

。。。

拉致られて以来、初めて涙がにじみ出た。
そうしたら、じわじわと止まらなくなった。
だってものすごく怖かった！

「・・・ああ、もう、わかったわかった。」

そう言うと碧さんは足を投げ出して座った体制のまま、私の頭をグイッと自分の胸に引き寄せた。

私は自分の顔を、碧さんの胸に押し付けられた。

その状態で、優しく頭をポンポン、とされながら撫でられる。

私はせきを切ったように、次から次へと涙が溢れてきた。

ああ、もうこうなると止められないんです。

「この子、すげえ。」

私の頭を抱いた状態で、碧さんは空を仰いで呟いた。

「俺、絶対怒らせらんねえ。」

すると床に寝転がった拓也が、視線だけチラリ、とこちらによこすと、少し拗ねたように言った。

「こいつ、普段はあんまり怒らないんだけど、たまに爆発すると手がつけらんなくなるの。4年にいっぺんくらい。」
「オリンピックかよ。」

ナイス突っ込み碧さん！

とか思いながら、心の中で考える。え？4年前、私、何でキレたっけ？

「健一。」

藤田さんが声をかけた。

「お前、これからどうするんだよ？」

河島は私達がフェンス内に引き上げた時から、呆けたように座っている。

藤田さんは体を起こして立ち、彼を見下ろした。

「ここじゃ死ねないぜ？今日は諦める。」

河島は藤田さんの方を見向きもしない。

「彼女の言う通りだ。誰かに殺されるまで、お前、生きるしかないだろ。彼女を追い続けたり、死に場所を考える力が残ってるなら、他にやる事があるんじゃないか？」

お兄さんの自殺を止める。多分、今までの藤田さんの頭の中には無かった事。

弟に自殺を止められる。多分、今まで河島が想定していなかった事。

「考えてみるよ。・・・俺も手伝うから。」

無駄な事かもしれない。河島の表情をみて、思う。
心が病んでいて生きる事を諦めた殺人者に寄り添うなんて、無駄かもしれない。彼は死ぬまで変わらないかも。

でも。自分のお兄さんと向き合おうとする事で、藤田さんは救われるといいな、と思った。

目を反らし続けるより、ずっといい。

仮にそれがただの自己満足で終わってしまうとしても、藤田さんの瞳に少しでも表情や色が出てくるなら、きっと彼の人生はマシなものになるのだと思う。

辛いものを背負ってしまうとしても。

身内を、否定もせず憎みもせず、ただ諦め続けるよりは、ずっといい。

二人を見つめたまま、私達三人は動かずにいた。

私の頭を抱く碧さんの手に、少し力が入った気がした。

A f t e r w a r d s

あれから一カ月ちよつとが経った。

私と奈緒はやつと時間をつくる事が出来て、表参道のカフェでお茶をしていた。

「言葉が出ない。」

奈緒はそう言つて、冷めきつたココアに手を伸ばそうともしなかった。

大騒動から3日程経つてやつと彼女には電話で連絡をしたのだけれど(三日間、私は死んでいた。食事トイレ以外でベッドから起き上がれなかった、あまりの疲労で。)事後処理とか大学とか就職活動とか色々あつて中々会えなかった。しかもこの話はやけに込み入っているものだから、会つて話をしない事にはどうにもならない。

結局、彼女に詳細を殆んど話せずに今日まで来た。

だから今、初めて明かされるショックな内容に、奈緒は衝撃を受けていた。

「あの人が、そうだったとは。根っからの役者じゃない。CM撮りしている時なんて全然普通だったよ？むしろ、撮影中はオーラをバシバシ出していたわよ。」

信じられない、と言う様に首を振る。

「なのに実は、殺人犯でストーカーで頭がおかしくて生きる意志の無い人だったとは。人間って本当に解らないものなのね。」

私は藤田さんの言葉を思い出した。

「健一は多分、生まれつき、他人とのコミュニケーション能力、というか相手の心情を推察するといった分野の能力が、一般人と比べて著しく欠けているのではないか、と思う。そしてそれは多分、『性格』という域を超えている様な気がする。今思えば、幼い頃はそれで随分苦労していたようだった。同じ年齢の子供達と上手く遊ぶ事が出来なかったり、トラブル続きだったり。」

瀕死の人間を物の様に表現したり。

周囲の悲しみを推し量らなかつたり。
気になる私を追い続けたり。

確かに、常識レベルの「加減」と言うものを知らない様な気はする。

「一度医者に連れて行くのも一つの道かもしれないが。」
今更、何もかもが手遅れだな、と彼が呟く。

「診断を貰う事で、誰かの心が、・・・一つでも落ち着くのであれば。」
それも手かもしれませんね、と私が呟く。

「兄の知能はむしろ良い方だから、余計に誰も、あいつの心の闇に気づかなかつたのだらう。」

藤田さんは静かに言ったのだけれど、それは多分、独り言の様な気

がした。

「で、実際、河島健たけるが中野光治を殺したの？」
奈緒が身を乗り出して聞いてきた。

「・・・それは、まあ。」

私は何となく、自分の冷めたココアの表面を見つめてしまう。

「彼が刺さなくても中野さんは亡くなってしまったかも分からないけど、今となつては、それを確かめる事も出来ないでしょ？分かる事は、河島が中野さんを刺して、それで中野さんが死んだ、って事。」

「ふーん。どうするの？それで。」

「うん。警察には、言ったんだけど、ね。」

16年近く経つて、しかも解決済みの少年犯罪。しかも管轄が全く違う。相手にもされなかった。

せめて地元の警察に連絡して、せめて遺族が河島を起訴する、でないと。

それも刑事事件としては時効成立だから、民事としてなら。

「でも私は、遺族でも何でも無いし、伝える事は出来ても、それ以上は・・・。」

初めから誰もが解っていた事だったけど。

「じゃあ綾香は、中野光治の遺族に言うの？」

「・・・出来れば。近いうちに。」

彼を殺したのは、別の生徒でした。

残された人達の心を乱す事は容易に想像できるけど、だからと言って、私の判断で情報を遮断する訳にはいかない。

何故今更、と責められる事を思うと辛い。あの時怖くて逃げかえって、今日まで黙っていた事は事実だから。

「祐介さんと塚本さんを連れていきなさいよ。」
奈緒が言った。

「もともとそれに気付いて綾香を巻き込んだのは彼らなんだから。あの人達と一緒に行動して、キチンと責任を果たしてもらおうのよ、最後まで。」

「・・・うん。」

「バカ正直に、一人で真正面から突っ込んで行かないのよ？彼らの後ろにいなさい？わかった？」

「・・・うん。」

あの人達ならきつと、君は来なくていい、って言いそうだな。

というよりもう私抜きで既に、中野さんのご遺族や葉山さんの所まで行っているかもな。

だってあの人達は、真実を知りたいと願う関係者の、辛い気持ちを理解している。

特に碧さんは。痛いほど。

「賠償、とかなって世間に明るみに出たら、藤田家はおしまいね。」

代議士なんて続けられないだろうし、祐介さん、これからどうするんだろう？」

奈緒が私の顔を見ながら聞いてきた。

私は少し驚いた。だって奈緒は言うなれば被害者とも言える第三者で、私の友人と言うだけで、今回の騒動に巻き込まれた子。

気付かなかったとは言え、危険で下心のある河島に目を付けられデートまでしたし、奈緒を守ってくれていた藤田さんも本当の事は何一つ彼女に明かさずに来た。

普通だったら彼らに対して傷ついたり怒ったりするものを、藤田さんの今後を気にかけるなんて、奈緒ってなんて良い人なんだろう。

思わず笑みがこぼれちゃう。好きだな、やっぱり。

「何？」

「ううん。」

訝しげな奈緒をやり過ごして、私は言った。

「それは無理よ。立件出来ない。証拠がないもの。引き受ける弁護士さんもないだろうし、河島や藤田家が姿勢を変えて一転、否定を始めたら、どうしようもないもの。水面下で処理するわよ、お互い。」

「え？だって塚本さんの持っていた証拠があるじゃない？コイン？だっけ。」

奈緒が驚いたように聞く。

私は、一週間前に碧さんと二人で会った時の事を、今度は思い出していた。

その日は土曜日で、私が彼と、他人を交えず、事務処理も関係なく会うのは久しぶりだった。

どうしても話をしたいから、と頼まれて夕方過ぎに出向いたお店は、赤坂の、ちょっとお洒落なダイニングバーだった。

「こんな所で、ごめん。」

普段着の碧さんを見るのは夏休み以来。サラサラで長めの前髪を降りしてカジユアルな格好をした彼は、私と同じ年くらいに若く見える。

割と雑多な雰囲気とする店内の少し奥に、小さめの個室がいくつか並んでいた。

込った話をするには落ち着ける場所で、ここよりマシな所が無かったんだ、と彼が言い訳をした。

本当に申し訳なさそうにして、それがなんだか可笑しくなった。

「俺達がお互いの事情を知ったのは、去年の3月。大学のサークルの先輩の結婚式、2次会の時だった。俺のコレ、これを見て、藤田さんが言ったんだ。兄貴のだって。」

コーナーソファアの角に二人で腰をかけての食事中。

彼がポケットから、例のコインを取り出してテーブルの上に置いた。派手派手しい豹の顔が描かれたそれを、私は改めてマジマジと眺め

た。

「それまで先輩は、自分の兄貴に薄々疑いを持っていたし、色々推理もしていたらしいんだ。兄貴が君に異常な執着を示しているのに気づいて、君の事を調べたらしい。」

「・・・調べるって？」

「君の家とか、あと、事件の翌日、風邪で休んだんだって？それとか。」

「えー!!どうやって?!」

「そりゃ、色々あるんじゃないか？」

何それー!怖すぎない?気味悪すぎるわよ。探偵を使ったとかって事?

それともドラマや映画みたいに、そういう専門人を常に置いているの?お金持って。

日本の個人情報保護法とは何なのよ?法律がお金には負けるなんてひどいつ。

「だけど結局、先輩は動けないでいたんだ。身内の犯罪を積極的に暴きたい奴がどこにいる。おまけに我が家の家業が家業だ、ってね。」

私が一人で怖がって、啞然として、不思議に思っ、憤っている間に、碧さんは話を続ける。

この人、私をスルーする事が上手くなつたわよね・・・。

「とにかく、お互いの話とコレが決め手で、俺達の中ではほぼ固まった。後は、・・・君が本当に何かを見たのか。そしてそれが、使える証言となるのか。」

彼は私と視線を絡めた後、フツとコインに目を向けた。

「事件はもう終わっている。おまけにその時点で、15年はほぼ過ぎたも同然だった。」

そう言つて、テーブルの上のそれを指でピンッと弾く。

「あれつて、確か4月でしたっけ？」

「そう。4月15日。」

「去年の4月下旬に、殺人の時効は撤廃されていますよね。確かゴールデンウィーク前。惜しかったな。」

「よく知ってるね、綾ちゃん。」

「就活中ですから。」

「でもどつちに転んでも、もう無理だよ。」

無理、とは、もう事態を変えられない、と言つ意味。

一瞬、二人の間に沈黙が生じた。

彼は苦笑して私を見た。

「俺ね、実は私生児なんだ。河野健一と同じ。」

「えっ……？」

私は思わず絶句してしまった。

彼は暖かみのある綺麗な瞳で私を見つめると、柔らかな笑顔で話し始めた。

「母親は、一度も父親の名を明かすことなく逝っちまった。だけど、

その母親の両親、俺の祖父母がね。母が死んだ後、俺を引き取ってくれたんだ。これまた、エライ良い人達なんだよ。ありや多分、母はかなりのはねっかえり娘だったに違いない。生きている時は、あまり実家に寄りつかなかったからな。」

語っている碧さんの表情に、切なさや悲壮感、と言うものが全然無い。むしろ、幸せな過去を幸せな気分で懐かしんでいるよう。

だから私の心に、同情と言うものが湧きおこらなかった。それくらい、目の前にいる彼は嬉しそうな表情だ。

そして、こんなに私の胸に入り込んだ碧さんの姿は今まで無かった。

彼はビールの入ったグラスを上から軽く掴んで、揺らしながら楽しそうに話しを続けた。

「狭いアパートで母と二人暮らしの時、働いている母親の代わりに色々と面倒を見てくれたのが、4歳年上の中野光治だったんだ。」

彼の大切な思い出を共有させてもらえる事が嬉しくって、私も思わず身を乗り出して話を聞いた。

A f t e r w a r d s (後書き)

最終章です。

それぞれの決着をつけます。

やっと少しラブラブもします。やっと恋愛小説・・・。

沢山の方々に読んで頂いて、ありがとうございます。

この小説が、少しでも皆様のお暇つぶしに役立ちますように・・・。

戸理 葵

H i s r e a s o n s

「当時背もかなり小さくて貧弱だった俺をさ、彼はよく世話してくれた。近所の子供達と遊ぶ時は必ず俺を連れて行っだし、俺が周りの奴らに少しでもハズされようものなら、すぐに口を出してきたよ。」

彼は楽しそうに、クスクスと笑いながら話し続ける。

「同時に、俺が一人で同じ年頃の仲間に加わろうとしている時とかあと喧嘩の時なんかは、ジツと見ていて手を出さないんだ。俺が何処までやれるか、俺がどうやって立ちまわるか、つぶさに観察してるんだよ。そして家に帰ってから色々とアドバイスをくれたり、励ましてくれた。もう殆んど、兄貴兼親父みたいなもんだった。」

すごい。思い浮かべてしまった。中野光治、碧さんを育てている。

そんな男の子っているのね。なんて面倒見がいいのだろう。

「彼のおかげで、俺はのびのびと過ごす事が出来た。自分の生い立ちとかを嘆く事なんかなかったよ。彼の家は離婚していて母親がいなかったけど、俺にとってあんなに理想の男はいなかったから。片親がむしろ誇りだった時もあつたぐらいだ。」

想像以上の二人の絆に、私は胸が詰まる思いがした。だってこの話の結末を、私は知っている。

「でも、中学の半ばから、徐々に彼の様子が変わってきた。家にいる時間が少なくなってきた。俺と一緒に夕飯を食べる回数が減ってきた。俺はそれを、中学生になると大人だから、色々忙しくなる

んだろう、と解釈していた。事実、彼がそう言っていたしね。家にいる時の彼は、多少見た目が変わっても、笑顔や仕草、俺に対する姿勢や態度は、全く変わっていないかったんだ。」

そうだったんだ。碧さんには、変わらなかったんだ。

きっと外では色々あって暗い部分に足を突っ込んでいただろうに、中野は碧さんの前では、兄貴であり続けたんだ。

私は心底驚いた。

「だけどね、そのうち、色々と噂を耳にするようになった。一番ビツクリしたのは、彼が学校で特定の生徒に対しひどい苛めをしているらしい、ということだった。前にも言ったけど、煙草や教師に対する反抗は、何とも思わなかった。けど、苛めに関してはかなりのシヨックだった。俺に、公正や正義、人に対する思いやりを教えてくださいましたのは、彼だったからさ。全然、信じられなかったよ。」

碧さんの表情は、柔らかな苦笑だった。

胸が痛む。だってそれって、小さい碧さんにはどれほどのシヨックだった事か。

例えば小学生の時に、優しくったお父さんが・・・ヤクザになっちゃうって事？ムリムリムリ！！

「それである日、学校に乗り込んだんだ。この目で確かめて、出来る事ならやめさせたかった・・・目を覚まさせたかったんだ。」

自分にはそれが出来るはず。幼い碧さんはそう思ったのだろう。

だって、自分は彼にとって特別な存在なのだから。特別で、一番の存在なのだから。

間が、あった。

「彼は・・・相手に、ブタ、とか死ぬ、とかクセえ、とか。その類を、色々。」

理想を裏切られた瞬間を語る彼の眼差しは、遠い目をしていた。

「結局俺は、中野が葉山を罵倒する言葉に耐えきれなくなって、その場を後にした。それから今日まで、後悔し続けているよ。あの時俺があいつを止めていれば、あんな事件は起こらなかったのに、って。」

絆って、血の繋がりととは別なんだなあ、と思った。

碧さんと中野光治の絆は、普通の兄弟以上のモノを感じる。温かくて、濃い。

藤田さんと河島の関係は、そんな碧さん達とは対照的。真逆。冷たくて、脆い。

そんな二人のお兄さん同士が、中学で出会って命を奪い、そんな二人の弟同士が、大学で出会って行動を共にする。

因果。だけど理不尽。

「君と初めて会った時、君は事件に対しての反応がイマイチだった。本当は何も見えていないのか、或いは覚えていないのか、正直焦ったよ。現場に連れて行って、何か様子が伺えればと思った。あの海で河野健一に会うのは想定外だったけど。」

ああ、あれね……。

碧さんは、少し自嘲気味に話している。

私は、出会った夏の日の事を聞いてみた。

「私が帰郷する事、知っていたんですか？」

「先輩がね。泊るホテルも。すごいだろ。」

わざとらしく得意げな顔。いたずらっぽい目をしている。

でもそんな風に誤魔化そうだったってダメですよ。だから個人情報保護は何処に行ったの、って話。

「怖い。気持ち悪い。」

「地元では藤田の力は強いぞ？それにあのレストランは、藤田が出資・経営しているんだ。」

あのレストラン？

そこで私は、一次会のイタリアンレストランで、藤田さんが昼食を取っていた姿を思い出した。

あの時はみんなで、なんであんなイケてる人が一人でイタリアンにいるんだ、って噂していたんだ。

（というか、拓也がやたらと引っかかっていたんだ。拓也リーダーって、すごい。）

「君の帰郷と河野の撮影が重なったのは、本当に偶然だよ。君が奈緒ちゃんと河野の撮影を見に行く、と言った時は、正直ヒヤツとした。」

ああ、行った行った。4人でファミレスに入っていた時だ。

奈緒が遅れてきて、河島健たけるの撮影見ようって私を連れ出して、その実、私を碧さんへ焚きつけようとしていたんだった。

「君が何かを見た、という事は、段々わかってきたのだけど、君以上の反応を見せたのが河野だった。君を見る目つきに危険を感じただけで、まさか奈緒ちゃんに手を出してくるとは思わなかったよ。」

碧さんは、目の前にあるパスタを大皿からヒョイツと直接口に入れた。

食べている彼を見ながら、私は一生懸命思いだそうとする。河島が、私を見る目つきが変だった？いつの話？

碧さんが、私と一緒に彼を見たのは・・・あ、あの海辺でね。はて？変だったかなあ？覚えてないなあ。

「あいつを問い詰めたんだけど確たる証拠も無い。もう、君の証言無しで乗り込もうかと思ったら、先輩がマネージャーの件を決めたんだ。」

ああ。あの、今思えば不自然な話。

業界と人脈を広げたいから？前から興味があったから？奈緒のお世話係をしたい？

「・・・奈緒を監視するため？」

「見守る、っていつてやってよ。」

碧さんは苦笑した。

「あとはもう、多分君も知ってるの通り。」

そう言って、彼は少し眼を細めた。

瞳の色が暗くなり、伏せ目がちになり、長い睫毛が影を落とす。

やがて一言、ポツリ、と言った。

「色々、ごめん。本当に、ごめんな。」

じっと一点を見つめている。言葉が途切れる。

そして軽く溜息をついてから、ちら、と私の方を見ると、すぐに視線を外して苦笑いをした。

「今回の件で思い知ったよ。俺、ここまで自分がヘタレだとは思わなかった。君の前じゃ、オタオタして右往左往だ。女々しくって、往生際が悪い。」

まいったな、と言う様に少し首をかしげている。

左ひじをテーブルについて、戸惑いを隠すかのように口元を掴んで覆った。

ふいにその視線が、私に向けられた。

「毎日ね、地味に後悔していたよ。藤田さんに嫌味を言われる程に。」

彼の、憂いを含んだ綺麗な瞳が、まっすぐにこっちを見ている。

指の合間から見える口元はわずかに口角が上がっているけど、その瞳からは熱のこもった真剣さが出ている。

私は少しドキッとして、目を反らしてしまった。

「私も、色々と警戒して・・・怖気づいていながら・・・突っ走って、掻き回してしまい、ごめんなさい。」

「でも君は、逃げなかった。」

碧さんが私に正面から向かってきている。目を合わせられなくて

も、口調でそれがわかる。
彼は優しく、力強く、ハッキリと言った。

「俺、君のそういう雄々しい所、マジで好きだ。」

「雄々しいって……。」

「女々しい男が、雄々しい女の子に言うかって？カッコ悪いかもな。」

……でも。

殺人現場にいた二人。当時はお互い気がつかなかった、とはいえ。殺人の証拠を隠ぺいしていた二人。当時はお互い子供だった、とはいえ。

私達二人のせいで多くの人が苦しんだ、といっても過言では、ない。私達二人が、もっと自分の行動に気を付けていれば、事件はあるべき姿で解決していた。

……そんな二人が、これから一緒にいられるのだろうか？

一緒にいればいつも必ず、事件の事を思い出してしまう。自分の犯した間違いを思い出してしまう。

周りの人たちの苦しみを、思い出してしまう。

過去から、逃げられなくなってしまふ。

「私、やっぱり……。」

段々に顔が俯き、テーブルを見つめたまま動けなくなってしまう。湧きあがる様々な思いは一気に私を支配していき、頭も心もぐちゃぐちゃにしていく。

胸に悲しみが広がる。熱くて痛いそれは、私の喉を潰していく。呼

吸が出来なくなる。

でも今日は、これを言いに来たんだもん。
ちゃんと、言わなきゃ。

「碧さんとは、一緒に、いられません……。」

やっと言葉に出して言えた台詞は、声が詰まっているし、情けないほど惨めな言い方だった。

Our reasons

シン、となった。

碧さんは口を開かない。

私は口を開けない。

私は顔も上げられないので、彼が今どんな表情をしているのかもわからない。

しばらくして、随分長い時間が経ったようにも感じたけど、一分も無いのかもしれないけど、碧さんがゆっくりと話しました。

「俺は今回、君を利用した。それは本当に謝りたい。君が河野にあの時、人生の責任を他人に押し付けるな、って言った時、俺は自分の胸をえぐられた様な気分だった。15年前の喧嘩を止めなかった俺は、ずっと自分を責めていた。だけどトドメを刺した奴が他にいるかも、と先輩に聞かされた時、正直、肩の荷が下りる気がしたんだ。俺が止めなかった喧嘩のせいで、コウ兄は死んだんじゃないって。俺のせいじゃないんだ、って。」

ゆっくりと、ゆっくりと、噛み締める様に話す。

私はそれを、俯いたまま黙って聞いている。

彼はキツパリと言った。

「そんな自分勝手な理由のせいで、君をこんな目に合わせてしまった。本当に、申し訳ない。」

うん。それはもう、わかったよ……。

でもね、碧さん。そんな事が理由じゃないの。

出会った時点であたが私を騙していた事だつて、そんな事を無視したくなるほどあなたの事が好きになつていたし、河島から私を助けてくれた時にはもう、それは吹っ飛んでいたのよ。

だけど私達二人は、過去の事件の罪を、少なからず背負っているの。それをあなたと一緒にいる限り、突き付けられるの。ずっと。

「でも例え、15年前に君の証言があつたとしても、だからと言って河野をあげられたかどうかはわからないよ?」

私は少し顔を上げた。上目遣いで碧さんの目を見る。

今の台詞は、私の心の重荷を少しでも軽くしようとして言ってくれた、彼の優しい気休めに聞こえた。

「……でも、碧さんの証拠もあれば……。」

「ああ、これ?」

そう言つてテーブルの上のコインを、再び指で弾く。

「これね。ハッター。」

「……ええ??!」

メチャクチャためて、私は大声を出してしまった。

ガバツと顔を上げる。何ですって?!

「確かに現場で拾つたものだけど、中野光治の体の真下にあつたわけじゃない。河野が言い逃れできるには十分な距離にあつたよ。俺、

普通に拾っただけ。」

「……な……。」

言っている事を理解するのに時間がかかる。

どういう事？中野光治の死体脇に落ちていたんじゃないの？

彼の血痕が付いていたんじゃないの？

「俺、あの人の死体なんて見てないし。」

「……な……。」

啞然とする。つまりそのコインは、死体とは関係の無い所に落ちていたと言う事？河島が、本来いてもおかしくなかった場所に？離れた場所に？

何て事。だってそれ、決め手でしょ??

私が15年前に見た犯人は誰か、を特定する証拠でしょう??

驚愕する私をよそに、碧さんはあっさりと話を進めた。

「確かにコレがきっかけで藤田さんから話を聞いた訳だから、ラッキーコインと言えば、そうだよ。俺、カマをかけたんだ。あの時彼らの喧嘩を冷めた目で奴が察していた事は事実だし、先輩が兄貴に疑いを持っていたのも事実だからね。」

カマをかけた、ですって??なにをそんなに、ウツウツ飄々と!

「……じゃ、藤田さんは……。」

「うん。俺の話信じているかどうかは知らないけど、本当の事は言っていないよ。だってね、敵を欺くにはまずは味方から、だろ。」

「……わあ。」

軽くいたずらっぽく、口の端を上げて見せる彼を見て、私は文字通り、開いた口が塞がらなかった。

なんとまあこの人、身内の藤田さんまで騙していたの？嘘でしょ？すっごい。こういうの、何て言うんだっけ？証拠偽造？偽証？法律抵触しちゃってる？

「時効も過ぎた少年犯罪なんて、今更公訴は出来ないだろう。あまりにも証拠が不十分な事件だ。俺のハツタリが見当違いや通じなくても、まあ、大した被害は出てこない。」

碧さんはさらつと言うと、気の抜けたビールに口を付けた。私はその様子をマジマジと見ちゃう。

何て事。何て抜け目の無い。何て計算高い。

ちよつと、一番の腹黒は結局誰？？目の前のキラキラくん？ひえ〜。

彼はグラスを空けると、からっぽになったそれを見つめ、少し声のトーンを落とした。

「ただ、君だけは確実に傷つけてしまう。俺のせいだ。それが・・・辛かったんだ。」

目的の為には手段を選ばず。それは、自分の目的が何かをハッキリと認識している人が、それを成し遂げたいと強く願った時に、取る行動。

私を騙して。巻き込んで。嘘をついて。ハツタリをかけて。

そこまでして、彼が手に入れたかった真実。

改めて彼の思いの強さと、意思の強さと行動力の大きさに驚いた。

「君は？俺を恨んでる？後悔している？」

そう尋ねる彼の瞳に、後悔の色は無い。

私は彼を見つめた。後悔？

「いいえ。」

あの時見た光景が思い出される。

泣きもせずに、だけど高なる動悸を胸に、走り帰った幼い私。毎晩、布団の中で声も出さずに、母に謝り続けた幼い私。

「人生で果たすべき責任を果たされた、という感じがします。辛いけど、スッキリです。」

辛い、という言葉を取って使った。だって辛いもん。

「そうか。君は本当に・・・まっすぐで、強い女の子だね。」

そう言うと彼はためらいがちに、私の頬に手を伸ばした。

「それ、やっぱりこれからは俺が守りたい。・・・いや、触れていたい。・・・ダメか？」

彼の親指が、優しく頬を撫でる。唇に触れる。瞳が、少し切なげに揺れた。

「碧さん・・・。」

「利用して、勝手に、どうしようもない奴だけど、償わせてくれないか。チャンスが欲しい。」

どうしよう。彼の眼差しは真っ直ぐ私に注がれている。私を捕らえて離さない。

私は、予定とは違う展開に実はかなり戸惑っていて、どうしていいのか分からなくなっていた。

えっと、それはつまり、私達は事件の事を・・・負い目に感じなくともいって事ですか？

本当に？そんな事、あるの？

「・・・私、碧さんの事、好きです。・・・でも・・・」
「でも？」

彼の顔がわずかに傾く。唇に彼の指を感じて痺れてしまう。少し優しそうな表情にグツときてしまった。

でもね、あのね、私達が事件を気にしなくてもいいとしても、なんというか、その・・・

「・・・私達・・・縁起が悪いっていうか・・・」
「はあ？」

私の口元を撫でていた彼の指の動きが止まった。

彼の顔は言葉通り、はあ？ってしている。

「だって、殺人事件だし、それがなきや出会わなかったし、・・・えっと・・・。」

「何それ。」
「死んだ人達の気が済まない、というか・・・生きてる人達のひんしゆくを買う、というか・・・。」

えつと、何を言いたいんだろう、私。わかるかな？誰が？わからないよね？自己完結。

つまりね、殺人をご縁にくつつくカップルってどうなの？って事なのよ。どうなの？って何が？わかるかな？わからないよね？うん、私も。

「じゃあ、君の気が済むなら。死んだ人達の気を済ませる為に？お墓参りに行こう。お払いでもおまじないでも、何でもしよう？女の子ってそういうのが好きなんだろう？コウ兄は絶対俺達の事を喜ぶと思うけど。」

碧さんは含み笑いを堪える様な様子を見せると、私の顔を覗き込んだ。

真剣な、強い、そして甘い瞳で見つめてくる。

「それでもダメ？」

その眼がダメ。やめてほしい。

おかげで何を考えているのか分からなくなってきた。酔ってないのに思考が回る。

「・・・えつと・・・。」

「生きてる人達のひんしゅくって、それはどうにもならないけれど、ひんしゅくって何？そんな奴、誰がいる？」

碧さんに言い含められる（？）と、何だかそれでもいい様な気がして来た。

反論の余地が無くなってきた、というか、反論の気力が無くなってきた、というか。溶けちゃって。

つまり、無駄な抵抗はやめなさい、ってことなのね。好きになっちゃった時点で。

会うのはやめようって言われても。一緒にはいられないって言うってみても。バタバタしてもまた戻ってきちゃって。

あんな事は全て、この恋心には無意味だったのね。

「・・・いいのかな。許されるのかな・・・？」

最後の、無駄な確認。何を返されたって、心は止められないくせに。

彼は私を真剣に、優しく見つめながら言い聞かすように、話した。

「良いも悪いも。許されるも何も。俺達は最初から、苦しんではいても悪くはないだろ。・・・君の突っ張った所も、突っ走った思考も大好きだけど、ね。今ばかりは、・・・そんなの・・・」

彼の瞳が一瞬にして、艶っぽくきらめく。

その眼差しに捕らわれた瞬間、グッと抱きしめられた。

「俺が、許さないし、離さない。」

低く、甘く、強引な響き。碧さんの手が、私の髪に優しく入り込む。いつもの香水の香りに包まれる。誘われる。ダメだ。もう私の体が。

あなたの心地よさを覚えてしまった。

「俺の事、好きなんだろ？」

「・・・。」

耳元で囁かれるその言葉に、私は悔しいから最後の無駄を試みる。無言です。

この人にどうしようもなく恋しちゃっているのに、いつも悔しいの。

多分、すごく好きすぎるから。いつも振り回されているから。こんな初めてだから。

こんな私、私じゃないもん。

それでも碧さんは、そんな私の抵抗を面白そうに見ながら、いつもひらりと飛び越えてくる。

「もう一回言ってごらん？好きだって。」

そういつて彼は腕を緩めて、私の顔を至近距離で見つめてきた。惹きこまれる様な瞳で、クスクス笑っている。魅入られて、惑わされる。

「碧さんって、自信過剰・・・。」

「当然。それに俺、結構ワガママ。」

私の抵抗なんて呑み込まれる。甘い、甘い、キスが降りてきた。

Can't stop helping

最初は柔らかく、ふわっと。確かめる様に。そして次はしつとりと味わう様に。その後はもう、欲望にただひたすら、任せるかの様に。

一回目の試す様なキスや、二回目の哀しいキスと違って、三回目のこのキスは、息も継げなくなるほど激しく、優しく、愛しく、とろける様なキスだった。

気付くと彼の唇は私の耳たぶを掠り、吐息とともに熱い舌で舐めあげられた。

「あっ……。」

思わず声が出てしまつて恥ずかしすぎるのに、彼の唇は私の首筋に下りていつて優しく吸いつき、軽く舌でなぞるものだからそれだけでもう、恥ずかしいどころではなくなつてしまった。

甘い電流が体を貫く。痺れるような感覚が、全身を粟立たせる。

「あ……んっ……。」

ヤバイヤバイヤバイ、収拾つかない、つけられないっ。

彼の手が私の胸にまで伸びてきて、ダメっ、ここで本格的に触られたら、

私、抵抗できない自信があるっ！！

胸の上にある彼の手をガツと掴む。なのに彼はキスをやめてくれないものだから、頭はますます痺れてきて息は詰まり、でも腕の力は抜けて流されそうになるんだけど、

ここ、飲み屋だし！個室とはいえ！！まさかと思うけどっ！！！！

口内に戻ってきた彼の甘い舌を、やっとの思いで引き離して、キス

でクラクラ、多分弱冠潤んでいる目で彼の事を睨みつけた。
でも、精一杯睨んでいるつもりでも、かなり参っている自覚はあるから、媚びてるような目つきだったらどうしよう？自信ないっ。

彼はそんな私を、やっぱり熱っぽい瞳で見つめてきた。モデルやアイドル顔負けの綺麗な瞳と長い睫毛で、そんな惑わす様な眼で見られたら、誰でも落ちますって、私が男でも、目が反らせないじゃないですか。

すると彼は私の肩に両手を置いた。そして急に顔を落とし、はあー・・・と長い溜息をついた。

しばらくして、一言。

「拒否権、無し。」

なっちよっなんですかっそれっ。

「だめっ。発動しますっ。」

「無理。無効。俺、これ以上我慢できない。もう二度と、絶対に手放したくない。」

私の肩を掴む手に、力が入る。

「無理だから。諦めて。ここにいて。」

「ここはダメっ。」

「よっ。」

彼は立ち上がった。二人のダウンとか鞆とかを掴み始める。

「出るよ。」

「え？お会計は？」

「そんなもん、とつくに済ませちまつてるよ。」

そついつて個室の出口に立った。私を振り返って、真顔。

「行くよ。」

「どこに？」

「……………」

私を見つめて、無言。色っぽい目。だからヤバいんですって。

彼は、立ち上がった私にゆっくり近づいてくる。そして、私を囲むように両手を壁についた。

からかう様な眼差しの奥に、惑わす光がある。皮肉っぽく一方の口角が上がった。

艶っぽくって危険な瞳が、私を捕らえて離さない。動けないでいると、ふいに彼が唇を私の耳元に寄せてきた。

低い声で、溶かす様に囁く。

「男と女がするところ。決まってるだろ？お決まりのセリフ……………今夜は帰さない。」

帰せない。そう呟くと、体ごと壁に押し付けられて、再び激しくて甘い口づけが降りてきた。

廊下の店員さんとか、多分お客さんまでに見られているのに、碧さんは一向にお構いなし。熱く、長く、私の全てを絡め取るよなキスをいつまでも続けてくる。

ああ、ダメだ……………。私、やっぱり、流されるの卒業できてない……………。

こんな恥ずかしいシチュエーション、耐えられないハズなのに、やめられない。

みんなが私達を見ている。碧さん目立ち過ぎ。その容姿風貌を自覚

して？そんなに酔ってないのに、どうしたの？

ああこの人って、実はこんなに強引で、愛情表現のオープンな人だったんだ……。しかもキス魔だし。これは苦勞するなあ。

「ねえ、ちょっと。いつまでトリップしてるのよ？」

奈緒の不思議そうな顔と声。

え？トリップ、していましたか？ちょっと思い出していただけです。はい、ちょっと。

「ああ、ごめん。ボーっとしてただけ。」

「そう？・・・それにしても証拠のコインは、塚本さんのねつ造であつたか。」

「ねつ造でなくて、ハツタリ。」

「おんなじでしょ？」

おんなじかな？そうかもね。そうかもね。・・・そうだよね。

「あの人も食えないのねえ。一筋縄じゃいかないタイプなのね。祐介さんとつるんでいるだけの事はあるわよね。」

「その藤田さんを騙していたし。」

「彼が騙されていたのかどうかはわかんないけど。その所すら、二人の間では無言の了承なんですよ？・・・油断ならない関係ねえ。」

「

「もやっとするでしょ？」

「もやっど？」

思わず二人で笑ってしまう。

「でもそれで河島の自供を引き出せたんだから、大した人よね。目的を、半ば強引に達成した訳だ。私達、振り回されたわよね。特に綾香が。」

笑いながらも、しみじみと言う奈緒。優しい目をして、私を見ている。

そうですね。

人生どん底の大変な時期に出会って、散々振り回されて、おかげで自分を見つめる事が出来て、前に歩きだす事が出来ました。

これが無ければ、今の私は何をしていたのだろう？

どうという人生を歩もうと、どんな選択をしていたのだろう？

「吉川くん、相当怒っていたんでしょ？結局塚本さんを殴らずじまい？やっぱりうやむや？」

奈緒がからかい半分、面白そうに聞いてきた。

私はココアのあったかいおかわりを、息を吹きかけて冷ましながら言った。

「それがね。いつの間にかちゃんと殴っていたの。」

「ええ？塚本さんを??？」

奈緒がビツクリして少し大きな声を出す。

この子の大声で前回、お店の中で散々目立って店員さんに怒られた私は（拓也は逃げた）慌てて口に人差し指を立て、奈緒を黙らせた。

「うん。結構なアザが出来てたもん。碧さんは全然怒っていなかったけど。」

「ええー！あのハンサムな顔にー？もつたいないっ！」
もつたいない？

「ううん、顔じゃなかったよ。さすがに顔はマズイと思ったんじゃない？」

その顔で会社に出勤なんて出来ないものね。

「あ。じゃどこ殴ってたの？」

「ここ。」

そう言って私は、みぞおちちょっと下辺りを指差した。

「こんなところに痣あざができるなんて、よっぽど力が強かったのかなあ。頭に来てたんだねえ。痛そうだった。」

「……どのくらいの大きさ？」

「このくらい。それほどでもないけど。」

両手の指で輪っかを作って見せる。

奈緒は、何故だか目が据わった。

「……ほーお。ふーん。そーおなんだー。」

「……何？」

「そおんな所に、ねえ。あざが。見たんだ？」

「うん。み……。」

あ。

げ。

・・・うきゃ！

「・・・うまくまとまったようで？」

奈緒が白い目をした。目が据わった。半眼になった。

「あ、えと、その・・・。」

「楽しくやれているようで？」

「えっと・・・まあ。」

かなり、楽しいです。

「そう言う事は、どうして真っ先に報告しない？」

腕を組んでいる。睨んでる。私、怒られてる？

「だってー・・・別に誰にも言っていないし・・・特に言いふらす事でも・・・。」

「そりゃあ吉川くんが荒れるハズだわ。」

奈緒は急に拓也を持ち出して来て、さも納得、と言わんばかりに頷いた。

「・・・でも拓也だって、私と別れた後、色々な女の子達と付き合い合っていたよ？」

まるで言い訳みたいな台詞。ホント言い訳にしか聞こえない。

「色々、でしょ？綾香とは違うじゃない。」

「・・・向こうが一枚上、と？」

「バツカ。」

その優しい言い方に、奈緒も私の気持ちに気付いていると、わかる。私がキチンと、拓也に後ろめたい事を。

「・・・私、そんなにひどいかな？」

「うん、ひどい。」

彼女は真顔で言った。

「ひどいわね。」

「言い直さなくっても。」

容赦ない言い方に少し傷つく。でも親友が言う事はいつも正しいから、耳が痛くても反論できない。

私は少し拗ねながら、彼女の顔を横目で見た。

「奈緒はさあ、拓也の事が好きなの？」

「・・・あのね。」

「いえ、あの、恋愛感情がない事は重々わかっております。先日、嫌という程教えて頂きました。」

あまりの睨みと迫力に、私は慌てて言葉を足した。

彼女はしょうがなく言いかけた台詞を飲み込み、さらに追加でジロツと私を睨みつける。

「学んだかね？」

「はい。・・・だけど、どうしてそんなに・・・拓也に構うのかなあ、というか、気にかけるのかなあ、と思って。」

すると奈緒は、パツチリとした意志の強い大きな黒目を少し細めて、柔らかいのか切ないのか懐かしむのか、何とも言えない表情をした。

「・・・前も言ったじゃない。似ているのよ、あの人。私と。」
「猫かぶっている所が？」
「口を慎む。・・・まあ、他にも。」

少し私に視線を投げた後、彼女は続けた。

奈緒が自分の気持ち語る事は、実はあまり無い。いつも人の話ばかり。だからこれは珍しい。

「そんな人がさ、一途に片思いとかしちやっていると、まるで自分がそうなってるみたいで、ほっておけないの。助けてい訳じゃないんだけど、口を出したくなるの。」

それって・・・。

奈緒も、一途な片思いをしていた・・・いるって事？

私はやっぱり、少しシヨックだった。だって知らない。自分の事に手一杯で、彼女の事を気付かなかった。親友失格だわ。

「奈緒・・・好きな人、いるの？」
「いるよ。」

彼女はなんとあっさり認め、息を飲んだ私にあっさりと言った。

「言ったじゃん、あんたを嫁に貰いたいって。」
「・・・。」

なんだ、レズオチか。そうきたか。人が真剣に心を痛めかかっていたのに（痛んでなかったけど）。

「じゃ、私、そろそろ。」
「うん、またね。」

寒い空気で席を立った。だってそろそろ約束の時間。お昼から4時間、今日も話が尽きる事はなかったね。

「ねえ、あの事、あの人達には話したの？」

私がコートとマフラーを着ていると、奈緒が聞いてきた。

彼女は自分がコートを着る手を止めてまで、こっちを見ている。

私は、すこし苦笑した。

「ううん、まだ。」

「そっか。」

そして彼女は、柔らかに優しく微笑んだ。

「上手くいくと、いいね。」

いつもはキツイ印象の日本人形が、可愛い顔で綺麗に微笑む。本当は照れ屋で意地っ張りの奈緒の、優しい素顔。

気付いている？奈緒。裏の裏は表。あなた、表の顔も時々、みんなに見せているんだよ？

自分で思ってるほど、猫つかぶりじゃないんだから。

「うん。ありがとう。」

私もにっこり微笑んだ。

日がかなり傾いて寒くなってくる中、私は立ち続けた。奈緒と別れた後、私はここにいる。

沢山の学生達が入り出しているけど、中には社会人風の人達や主婦？みたいな女性も見える。

みんな頑張っているんだなあ・・・と感心していると、向こうから拓也が走ってきた。

珍しい。

「ごめんっ綾。遅れたっ。待った？」

「・・・うん。」

驚いちゃった。その勢いと台詞に。なので返事がつい、『うん』。

「いつつも私が待たされてるのに。」

なんでよりもよって今日、その台詞とその態度？

私の様子に拓也も少し首をかしげた。可愛い人懐っこい顔が、不思議そうな表情を見せる。

「・・・俺の方が待ってるよ？いつも。」

「嘘。私より早く来た事、殆んどない。」

すると彼はマジツと私を見つめ、それからああ、というように口を開けた。

「待ち合わせ場所にはね。」

「はあ？どう言う事？」

彼は軽く肩をすくめる。

「大抵、どっか近場にいたよ？」

「それで待ち合わせに遅れたら、意味ないじゃん。」
「・・・もういい。お前とは会話にならない。」

拓也は何故だか膨れて、プイッとそっぽを向いた。なんだなんだ？

「で、何？話なんて。珍しいね。」

まだ口を少し尖がらせてこつちを横目で見る。

「うん。あのね、」

私は、今日彼を呼びだした目的を話した。

拓也はビックリした様に立ちすくみ、黙って私の話を聞いていた。呆れたり、バカにしたりするのかな、と思ってその反応を伺ったのだけれど、彼の言葉は意外なものだった。

「・・・そっかあ。」

しげしげと私を見つめ、彼は感嘆の声を出した。

「ついにやったか。やっぱすごいな、綾は。」

こんなに素直な言葉をかけてくれる拓也もやっぱり珍しいものだから、私はもう一回驚いてしまった。

ど、どうしたんだろう？勉強がそんなに辛いのかしら？

「拓也だっですごいじゃん。私、今からこの歳で受験勉強なんて出
来ないよ。」

「俺は別に。親の脛かじってるだけだし。なるべく無難に人生送り
たいだけで。」

拓也が苦笑しながら俯いて応える。

その時私は、キャンパスにいる一人の女の子を見つけた。

「あ、あの子。・・・ななちゃん。」

彼女が私達を少し驚いた目で見ている。ここは拓也の専門学校。そうかあの子、専門学校の子だったんだ。

隣で拓也がにつこり笑って、彼女に手を振った。彼女は急にムツとし顔になると、拓也を睨みつけてすぐにプイッと顔を反らし、怒りを表した歩き方で向こうに行ってしまった。

「・・・あーあ。怒らせちゃった。」

私がそう言うのに、拓也はニコニコしながら彼女の消えた方向を見ている。

私はその凶々しさに呆れてしまった。まったく、カツコ可愛い笑顔つ。

「大学でも違う女の子連れてたでしょ？」

「そだっけ？」

「そういう事やってると、いつか刺されるよ？」

「俺、今まであんまり女の子を怒らせた事ないよ？嫌われた事もないし。うまくいってただけだね。」

そう言っただけで勝手に肩をすくめる。

これだから、天然タラシは。

「でもあの子、現にメチャクチャ怒ってたじゃん。」

「そりゃあんな言い方すれば、ね。」

そう言っただけで彼はポケットから煙草を取り出した。

専門学校の門に持たれて堂々と吸う。あれ？東京都って、道路でタバコ吸っちゃいけないんじゃないかなかったっけ？

「結構本命だったんだけどなあ。」
そう言って煙草を空にふーっと吐き出した。

「バカで、邪気だらけで、媚びてて、胸おつきくて可愛くて。あっちも申し分なくって楽しかったのに。」
あつちとは多分、そういう事よね？

「・・・その割には、神社で彼女が男の人連れでも平気っぽくなかった？」

私が横目で軽く睨むと、彼は目も合わさずにさらっと言った。

「そういう所もひっくるめて、よかったの。」

本命相手にその感性。歪んでいるなあ。

「まあ、しょうがないよね。お前の世話するって決めたの、俺だし。カタもついて、振られた甲斐があったってもんですよ。」
そう言って意味ありげに笑ってる。

拓也が私の世話をしてくれたのも。可愛い彼女に振られちゃったのも。

元はと言えば一連の騒動のせい。正しく言えば、私と奈緒のせい。ハッキリ言えば、私のせい。

「あーあ、今回はなんか切なかった。」

私も彼の隣に行き、同じように門にもたれて空を見上げた。

「碧さんの中野光治に対する思いも切ないし、藤田さんの河島に対

する姿勢も切ないし、河島の人間に対する思いも切ないし。」「
本当になんだか、思い返すと色々キツかった。」

「・・・俺だつて充分、切ないんだけど。」

「わかる？だよねえ。」

「そうじゃなくつて。」

「・・・わかつてるけど。そんなこと。だからトボけているんじゃない。
い。」

私は上を向いたまま目蓋を閉じるけど、拓也を見る事は出来ない。

「俺、諦めないからね。」

拓也も相変わらず煙草をふかしたまま、多分私の方を見ずに言葉を
続けた。

「やっと手に入れたと思ったモノを無くす気持ち、わかる？わかん
ないだろうな。結局、手に入ってもいなかっただんだな、って気付い
た時の哀しさ、まだ知らないよね、きつと。」

「・・・私を責めてる。」

「責めてるよ。ついでに傷ついてくれたら、もっと嬉しい。」

グツと詰まる。

思わず拓也の方を振り向くと、彼は可愛い瞳の奥から、射る様な強
い視線を私に向けていた。
ドキつとなる。

「俺、しつこいからね。知ってると思っけど。」

有無を言わせない、強い言い方。

私は俯いてしまった。

「・・・大学を卒業して、新しい世界に行ったら、お互い色々変わるよ。」

「甘いわ。」

「拓也あ・・・。そういう性格、不幸になるよ？」

河島みたいに。

すると彼はフツと穏やかな表情を見せ、柔らかく笑った。

「そお？俺、結構幸せよ？」

「・・・その状態が？」

「・・・まあね。」

「・・・マゾ？」

「お前がそれ言うの？さすがに酷過ぎない？」

グツと顔が近付けられる。眉間にしわが寄って拗ねた口もと。至近距離で絡まれる私。近いって。

「じ、ごめんなさい。分をわきまえず言葉が過ぎました。撤回します。」

「あのね。一度言った言葉ってのは、取り消せないんだよ？回収できないの。俺の心に刺さっちゃったの。」

そんな大袈裟な。日頃あなた、人の心にバツシバツ矢を刺しちやつてるじゃない。私なんか、バツサバツサ切られてるよ？いいじゃん、一矢報いるぐらい。

「なんか癒される事、して？」

企んでいる瞳が甘えてくる。口元が、ニヤツとしている。ああ、いつもの拓也だ。

「な、な、何を……」
「キス一回で、許してあげる。」

そう言つて彼は、片手を私の上の門につき、唇ギリギリの所まで近づいてきた。

多分殆んど触れちゃつて、つていうか触れてるよね？そこで止まる？煙草片手に、しかも勉強を行う神聖な場所の表玄関で、しかも誰もが見ている人前で。
何をやってるのよ、この男は。

調子に乗つてからかう様な瞳でニヤニヤ笑っている拓也を、私はしつかりと見た。

ごめんね、碧さん。これだけは許して。浮気じゃないから。今だけハードルあげて？

「私、泣いたよ？」

落ち着いて、でも拓也を振り払わず、彼の唇をかすめながらそう言うのと、彼は一瞬身を引き、目を見開いた。

「え？」

「拓也の事で。ちゃんと泣いたよ？」

拓也は驚いたように私を見つめる。私も拓也を見つめる。
しばらくして、彼はそつと咳いた。

「……そっか。」

そう言つて体を離す。少し切なそうに微笑んで、私を見た。

泣いたよ、拓也。こんな台詞があなたを満足させられるかどうかは分からないけど、あなたは充分、私の歴史の一部だよ？あなた無し

では私の過去は語れないし、今の私は無いんだよ？

拓也は目を細めて、しばらく私を見つめていた。どこか、愛おしそうな眼差しを向けてくれている。

「ま、いいか。2年もあれば俺もペーパーの会計士だ。一人立ちも出来て、勝負を賭けるにも遅くない年齢だもんね。24？25か。」

そうやって彼は俯くと、携帯灰皿を出して、煙草を中で潰した。

25歳の拓也。・・・すごく、いい男になっていそう。

「綾もいい女になってんだらうな。」

拓也が私と同じ事を言う。

こついう所に、付き合いの長さを感じる。

「それまで泳がしといてやるよ。2年後、覚悟しな。」

・・・でも、私、責任持てないよ？

それは今言っても、彼には無意味。それも分かっている。

「みどりちゃんは何だった？」

「まだ話してない。」

「・・・俺が先？」

拓也が、心底ビックリした様にその丸っこい目を見開いた。

「うん。だって、それが筋だと思って。」

高校一年生以来7年間、離れた時期もあったけど一緒に時間を過ごしてきた拓也。

今回の件で私の支えになつてくれた彼は、私にとって、奈緒と同じくらい人生に欠かせない人になっている。

彼の望む様な形を、今は取れなくても。

「何の筋だか分かんねえけど。」
そう言っただけは、私を見つめた。本当に優しそうな瞳。素直で珍しい。
私の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「いつでも骨は拾ってやるよ。惨めな姿、見せに来いや。楽しみにしてっから。」

「見せませんっ。」

同い年のくせに。甘えたのくせに、何お兄さんぶってるのよ。

私は少し対抗心が出て、拓也を軽く睨んだ。

彼は楽しそうにクスツと笑った。

「あ、そうだ。はい、これ。」

私は鞆の中から、綺麗にラッピングされた箱を拓也に手渡した。

「・・・何？」

「チヨコ。もうすぐでしょ、バレンタイン。」

拓也はポカン、とする。そして不満そうな表情をした。

「・・・色気ない渡し方ですね。義理チヨコかよ。」

貰って文句をいいますか？

「義理じゃないよ。友チヨコ。」

「あん？」

眉根を寄せて私を見上げる。私は構わずに言った。

「拓也は義理なんかじゃないよ。一生、義理チヨコはあげれない。」

また、拓也のポカン、とした顔。

やがて私の言っている事が理解出来たらしく、少し戸惑うと、俯き、またまた拗ねてしまった。

「・・・甘い、俺嫌い。」

「知ってる。」

私は内心、ニヤニヤしてしまう。こんな風に拓也をやり込められる事って、あんまりないから。味わっておおきなきや。

「でもこれは貰った。来年は違うの頂戴。」

ちよっぴり甘えた言い方で、私を上目遣いで見てきた。きた、早速形勢逆転図られてる。この子の得意技だ。

「・・・郵送で良ければ。」

踏ん張ってそう答えると、彼はからかう様にニヤツと笑った。

「なんなら取りに行つてやるよ。」
嘘でしょ？

「ごめん、俺、次の講義始まるわ。」

拓也は急に腕時計を見てそう言った。サンキュ、と言ってチョコを軽く掲げてカツコよく微笑む。

私もにつこりと笑った。

「うん。じゃあね。また。」

拓也が走って、キャンパスに戻って行く。その後ろ姿を見送りながら思った。

みんな、頑張れ。

拓也、頑張れ。

The Futurer to be

多分夢を見ていた。何の夢かはあやふや。

なのにその夢が段々リアルになってきて、しかもかなり気持ちが悪くて、すごく感じてしまい、エッチっぽくって、ああ私、碧さんと付き合い始めて舞い上がっているんだなあ、と。

え？

リアルすぎない？てか、触られてる？

徐々に覚醒してきて、というか起こされた感じで、目を開くと柔らかそうな髪をした頭が胸の上にあった。

「あ……え？……碧さん？？」

え？何？どうなってるの？

「眠いの？」

そっぴいなながら彼は私の首筋に唇を寄せ、指はニットの胸ボタンを外している。

ここは私の部屋のベッドの上。

「え？え？」

私は寝ぼけた頭で混乱した。

「何やってるの？」

「味わってるの。」

唇が下がり、胸元にキスを落としながらこっちも見ずに言う。

「遅くなった俺も悪いけどさ、寝ている君も悪い。」

碧さんはコートと背広を脱いだ、シャツ姿。私の上に跨って首に顔

をうずめたまま、第三ボタンぐらいまで外された。

「わ、わ、ちょ・・・あつ・・・ん・・・。」

状況を把握しかけた時にキュツと首筋を吸われ、思わず声を上げた。ら今度は深い口づけをされた。

頭の整理をする隙を与えないかの様に、彼の熱い舌が私の口内を掻き回す。

訳の分からないまま夢中でそれに応えていると、今度は下着の上から胸を触られて、物凄く甘い電流が走り、それがかえって私の頭を覚醒させた。

「や・・・シャワーっ!!！」

「無理。止まらない。」

即答かいつ！しかも進めるかいつ！あつ胸にキスっ!!！

「止まりますっ。」

碧さんが顔を上げた。会社仕様で上げている前髪が一筋垂れて、少し乱れている。色っぽい。

その眼が熱っぽくて、なのにからかうように口元が上がっていて、もう、メチャクチャヤバイ。

「じゃ、一緒に入ろうっ？」

「限りなく却下!!！」

「ちっ。」

彼は少し拗ねたように言葉でハッキリ舌打ちすると（なんなのよ？）

、私から体を起こした。

そしてベッドから降りて、私を見下ろしてにこつと屈託の無い綺麗な笑顔を見せるんだけど、いきなり襲つといて、そんな爽やかな笑顔見せたってダメなんだからねっ。

仕事が終わったらうちに来る事になってはいたけど、

「鍵は締めとかないと。ビツクリするだろ。」
いえ、ビツクリしたのはこっちだから。私が起きなかつたら、どこまで進めるつもりだったのよっ！

「ま、ね。明日は休みだし？俺、実はホテル取ったんだ。今からそっち移ろうぜ。」

「え？今からですか？何で？」

またビツクリした。

「そのほうがいいかなって。」

・・・何ですか、その微妙な表情は。

「・・・私の部屋は居心地悪いですかあ？」

「そんなんじゃないよ。出来る事なら居座りたいくらいだよ。」

「じゃ、何で？」

「・・・ホテルも、いいかなあ、と・・・。」

「やっぱり私の部屋が変なんだー。」

「違っつて。」

碧さんはチラ、と私を見ると何故だか目を反らした。わずかに顔が赤い。

「・・・綾ちゃん、ベッド、ずっと同じ？」

「ずっと？はい？」

「上京してから、4年間？」

「え？・・・清潔ですよっ失礼なっ！！ちゃんと一週間に一度は、シーツ洗ってますっ！！！」

「いや、そうじゃないんだ。」

怒りだした私に彼は慌てて制する。じゃあ何なのよっカンジ悪いっ！

「まあいいじゃん、着替えてないんだろ？丁度いい、行こう。」

ニコツと笑って焦ったように私の胸ボタンを留めてくれるんだけど、部屋で待てって言ったり、やっぱりホテルって言ったり、

ホント自己申告通り、どんだけワガママ王子なの、この人はっ！

「ダメっ。気になるっ。行けませんっ。教えて下さいっ。」

「そんなに食いつかれるとは。お願い、忘れて。」

「無理。教えて。私の何がダメ？」

「いや、君じゃなくて……。」

本気で困った顔。いつもは男らしい綺麗な眉毛が下がり、ちょっぴりタレ目がますまタレた。

「その……ベッド……あいつを思い出すっつーか……。」

「は？……あ。」

沈黙。

理解しました。

「支度します。」

「サンキユ。」

二人して赤くなっただし。

「俺さ。実は……言わなきゃいけない事があるんだ。」

甘さの残るベッドの中で、私の頬に唇を滑らせて、手はシーツの中

の私の太腿を撫で上げながら彼が言った。

結局私達は、シテイホテルの部屋に着いたら食事も取らずに、その
・・・イタシテしまった。

だってこの人、強引すぎるんだもん。そして、上手すぎるんだもん
・・・。

抵抗出来る人がいたら、教えてほしい・・・。

頬に感じる彼の唇にポーっとなりながらまだ疼くような甘い痺れを
体にかけていたのだけれど、

彼の台詞が頭の中で消化されると、時間差で、思考回路が繋がった。

「え？これ以上??今度は何ですか?」

思わず目を見開いて彼を見上げてしまう。

「別の殺人事件を抱えていたとか?実は偽名で本職は別で学歴詐称
していたとか?それとも藤田さんともいつかいベロチューしちゃっ
たとか?」

「・・・君はどうしてそう、次から次へと・・・。」

「心の声を言葉にしたら、もっと出てきます。」

「わかった。ありがと。留めといて。」

ストーリーがいつも出来上がっちゃってるとはこういう事か、と碧
さんが呟いているけど、それ、全部聞こえてるから。

彼は私の隣に身を沈めると、天井を見つめて静かに言った。

「俺、今週、打診されたんだ。」

「・・・何を?」

「南アに行かないかって。」

「なんあ?」

オウム返し。聞き間違えたかな?

「なにわ?」

「なんあ。南アフリカ共和国。ほら、サッカーのワールドカップをやっていた所。」

「・・・へえー・・・。」

私は彼に体ごと向いた。均整のとれた上半身がまともに目に入り、ドキツとしてかなり焦ってしまう。

恥ずかしいので、自分は胸までシーツを上げて隠れた。

「何で？」

「仕事だよ。決まってるでしょ。レジヤード『打診』はされないでしようが。」

彼は苦笑しながらうつ伏せになり、腕を組んで顔を私に向ける。筋肉質な背中が見えた。

「あ、そうですか。いつですか？」

「うーん、4月だろうと思うんだが・・・。」

「随分先ですねえ。大掛かりなお仕事なんですね。」

碧さんは一瞬不思議そうな顔をした後、思い直したように言った。

「まあ。本格的な移動としては、初めてだな。」

「本格的な移動？・・・乗り物がですか？」

「え？」

「え？」

本格的な乗り物って飛行機？でもそもそも船で南アフリカは遠すぎない？でもなんか、碧さんの反応がそういう意味ではなさそうだから、これ以上口を開くのはやめた方がいいかもしれない・・・。

「・・・ま、いいや。それで、君に伝えるには会って話した方がいいと思っただ。」

「そうですか・・・。」

「まだ決定ではないんだが、まさかこの歳で声がかかるとも思っていなかったんだ。・・・さすがに、君に言い辛かったものだから。けど。」

「え？そんなに長いんですか？その出張？」

「出張？」

またまた無言の見つめ合い。今日でコレ、何日目？

「違うよ。移動。転勤。住むの、そこに。」

彼の言葉を聞いて、暗闇の中で彼の瞳を見つめ、そして私はやっと、意味を理解した。

「・・・ええー?!」

「繋がったんだ、今・・・。」

碧さんが啞然としたように言うんだけど、そんなの社会人とお付き合いた事ないからわかんないよー。ハッキリ言ってよー。

「どれくらい？」

「2年くらい。」

「2年・・・。」

ちよっとビククリした。

「綾ちゃん。」

碧さんはそんな私のビククリ顔をどう受け取ったのか、真面目な顔をして上半身を起こし、片手について私をジッと見つめた。

「悪いけど、君を手放すつもりはない。前も言っただろ？」

「・・・。」

「でもそれは俺自身の問題だから。君は、君のしたい様にやってく

れ。俺はどんな君でも結果でも、受け入れる。」

グツと彼の瞳が暗くなる。それは度々目にした、碧さんが何かを決心した時の顔だ。

「・・・それ、碧さんの本音ですか？」

「本音？」

彼はプツと嘔き出した。唇の片端が上がり、皮肉っぽい顔になる。

「それを俺に聞くの？かなり後悔するよ？」

「構いません。」

「言えねえな。ベッドの中でも言えねえな。」

「私、碧さんが好きです。」

そう言うと、碧さんの表情が少し変わった。わずかに目を見開き、ジツと私を見つめる。

寝ながら言う台詞でも無いと思い、私は体にシーツを巻きつけるようにしてベッドに起き上がった。

彼の瞳を、見つめ返す。

「あなたの、何があっても底抜けに明るく見せる所が好きです。目を反らさない所が好きです。困難な目的でも達成しきる強引さと思いの強さが好きです。誰にでも分け隔てなく優しい態度を取れる所が好きです。」

彼が少し驚いた様な表情を見せる。

「あなたの過去を思うと苦しくなります。私の知らない、なのに誰かが知っている碧さんの事を思うと切なくなります。・・・これが

ら離れ離れになつて、碧さんの視界に私がいらないと思つと悲しくなります。あなたに触れられなくて、泣きたくなります。」

私は彼の瞳から目を反らさずに、一言一言を丁寧に言った。

「言いましたよ、本音。」

彼は息を呑んだように私を見つめ続ける。
しばらくして、視線を落とし、低い声で呟いた。

「俺は……。」

眉根を寄せて、切なそうな表情をする。そして少し微笑むと、私を見た。

「君のまつすぐな瞳が好きだ。誤魔化しが効かない所も、ちょっとトンでいる所も、時々ポカンと開く口元も……俺を誘う目も、ね。」

ニヤツとからかう様な唇。恥ずかしくつて、ドキツとする。
すると彼は、途端に熱っぽい瞳を見せた。

「誰にも触らせたくない。正直、見せたくすらない。好きな事をやればいい、なんて嘘だ。俺の手に届く範囲で泳がせたい。視界から消えるな。俺だけ見ている。俺の事だけ考えろ。」

そう言つて私の顎に手を伸ばし、クイツと上を向かせた。彼の瞳に覗きこまれる。

「吉川の近くに置いておくつていうだけで、気が狂う程嫉妬するよ。腹ん中ドロドロだ。あいつが側にいれば君は安全だし俺も安心なん

だ、って頭に言い聞かせているんだが、さっぱり効果が無いんだ。こんな仕事、蹴りたくなる。」

その瞳は熱くて、暗くて、でも惹きこまれずにはいられない強い光を放っていた。

「君を壊してでも側に置きたい。もう君は、俺なしではいられないんだって思い込みたい。」

その切ないほど痛い表情と真剣な眼差しに、私は金縛りにかかったように動けなかった。

するとそんな私を彼は見つめたまま、自嘲気味に笑った。

「引いただろ？理想とは程遠かった？」

この人の情熱が真っ直ぐに伝わる。こんなに激しい人だったとは。

「うん。予想外。」

私がそう答えると、彼の瞳がゆらっと揺れた。

「でもこれで、私も安心した。」

この台詞に、碧さんは一瞬戸惑いを見せた。

私にはつこり微笑む。

「碧さんも安心して。私、拓也の側にはしばらくいないから？」

これが彼の一番のネックみたいだったから、そう言ってみる。

「……どつという意味？」

「私ね、海外に行くの。」

「……え？」

碧さんがポカンとした。まだ理解出来ていないみたいで、眉根を寄せている。

私はニコニコして続けた。

「この間通知が来てね、合格したんです。それで多分、5月ぐらいから行くんです。海外人道支援、ボランティアに。」

「・・・海外じんどうしえん??」

今度は、度肝を抜かれました、っていう表情。開いた口が塞がっておりますよ?

「そう。NGOがやっているものでね、貧困地域の、村づくりとか教育とか衛生とか、そう言った事全般をサポートする仕事。ほぼ一人でやるんですよ?もちろん現地には、サポート機関があるらしいんですけど。」

「・・・何それ・・・?」

「だから、私の、社会人第一歩のお仕事です。すごかったんですよ、倍率15倍くらいの難関。まさか受かるとは思わなかったたら、誰にも言えなかったんですね。本命、叶っちゃいました。」

ピースサイン。

うふふ。

「ミステリーハンター、してきます。現地の人達と一緒に。」
だって異文化の中で、手探りで前に進んで行くなんで、もうそれだけでミステリーハンター。

「・・・うわー・・・。」

表情豊かな碧さんの色んな顔を見てきたけど、こんなにひたすら驚いているのは初めて見たな、と思う。テンション上がるうっ。

「期間は？」

「2年っ！」

「場所は？」

「まだ未定っ。多分アフリカ大陸のどっかつ！あ、碧さんと一緒っ！」

可愛く小さく、胸元で手を振って見せる。

「おんなじアフリカ大陸ー。」

「・・・ダメだ、負けた・・・。」

碧さんがそう言って、枕の上に乗っ伏した。

私の上から、ウキウキとした声でたたみかける。追い打ちってステキっ。

「だって碧さんだって、私の本命が叶いますようにってお月さまにお願いしてくれたじゃありませんか。ミステリーハンターなっちゃいなよ、って言ってくれたじゃない？」

「言ったけど・・・言った。確かに、言った・・・。」

「私、こんなに前向きに突き進む気になったのも、碧さんに出会ったおかげだって思っています。感謝感激です。」

碧さんは、まだ枕から顔も上げずに呟いた。

「・・・すげー・・・。俺、ついて行けるかな・・・？」

「だって碧さん、前を向いている私が好きなんですよ？」

「・・・。」

「私、碧さんに一生ドロドロしてもらえるように、頑張りますっ！」

「・・・そっくるか。」

やっと顔をこちらに向けると、彼は綺麗な瞳をすこし艶めかせて、苦笑しながら言った。

「じゃあ俺は、君が一生離れられなくなるように、努力します。」

「私ね、本当は無難に、年金と保険が入れる仕事と人生を搜していたんです。理想とは別に。」

「……。」

しばし無言。

「わかった。そっち部分は俺が引き受けるから。君は一生、好きな事をし続けなさい。」

「やったっ。」

これってプチプロポーズ？

軽くベッドの上で飛び跳ねる私を、彼はふわっと引き寄せた。

引きしまった胸板に頬が触れて、その感触と香りに心臓が激しく反応する。

彼は低い声で、優しく囁いた。

「……好きな事をし続けるって結構大変だぜ？」

「碧さんの為なら。そんな私がいいんでしょ？」

「……マジ、負けた。」

楽しそうな笑い声。私の頭をクシャクシャと撫でまわすと、私はぐるんって回転させられて、視界反転、天井を見上げる形になってしまった。間に碧さん。

「じゃ、せいぜい俺は、ベッドの中で君を負かす事にします。泣かせるから。それぐらい覚悟して。」

挑戦的な瞳。色っぽくってドキツとする。

こんな危ない動物には食べられても本望なんだけど、私、そんな趣味は……。

「……痛い事……」

「まさか。」

クスツと笑うとますます色っぽい。もう、ゾクゾクする。

彼は私に甘ったるいキスを落としてきた。

そして唇をそつと離すと、至近距離で見つめて、私を溶かすように怪しく囁いた。

「気が狂う事。俺ばっかじゃ割にあわねえだろ?……壊しちゃうかも。たまにはいいいな?」

Here we go

その日は、奇しくも4月15日だった。
ぬける様な、青空。

私は慌てて電車を降り、空港内のエスカレーターを駆け上がった。
早く会いたい。

派遣先も決まって職業訓練も始まり、合宿なんかもあったので、卒業と重なった私はかなり忙しかった。

大学のサークルで仲のいい友達はすごく喜んでくれて、私の日程に合わせた近場の卒業旅行を計画してくれた。

お父さんとお母さんは心配しつつも諦めてくれた。娘が大学卒業とともにアフリカ、なんてねえ？しかもどこぞの村で。お母さんなんて、私と一緒に全部の予防接種をうけちゃったよ。私が病気で倒れたら、真っ先に迎えに行く為、だって。

まさか同じ予防注射を（必要も無いのに）打って準備をしている男性が、日本より近い国にいるとは思ってないわよね。

奈緒とはまた機会を改めて旅行を計画している。遊びにくるらしいけど、私は休みを年に一回しか取れないし、それは先約が入っているしどうするつもりだろう？

拓也は私が日本に帰ってくるまで会わない、と言い切った。俺も頑張るからお前も頑張れ、と。

自分は試験に落ちるわけがないからって、私が仕事を失敗したら笑いたいんだって。

でも会計士でも就職浪人がいるって聞いたし、そしたら私が笑ってやる。

息を切らして急いで駆け上り、出発ゲートに行っただけで広くて中々見つからない。

すこしでも早く会いたいつて焦っていたら、見慣れた姿をやっと見つけた。

でも二人。

・・・この人達、何やってるの??

「いててて・・・。」

「わからんぞ?」

「多分、睫毛が入ったんだよ。しょっちゅうなんだ。」

「おい、じつとしてるよ。」

180センチはある長身の、モデル体型の男が二人。ハッキリ言って、いちやついている。

碧さんが藤田さんに顔を突き出し、藤田さんが碧さんの顔を覗き込み、異常なほどに近づいて、さっきから碧さんの顔を両手で包み込んで、まあよく見れば目蓋をいじっているんだけど。

「いてー・・・目が開けられねー。」

「あ、これか?おい、我慢しろって。」

「・・・やめて下さい・・・。」

思わずドスの利いた声が出てしまった。

信じられない。恥ずかしくないの、この人達?

いや、この人達の羞恥心は、きつと私とはズレているんだ。碧さんのは身を持って知っているし、藤田さんだってあのホテルでのあれ

は、一般常識レベルを大きくブレていた。

「あ、綾ちゃん。」

「これか？取れたぞ。」

「そんなにいちやもちやするんだったら、どっか他所でやって下さいっ。」

ペースを崩さない二人に、私は堪らず声のボリュームを上げてしまった。

碧さんは爽やかに微笑み、藤田さんは無言でこちらを見ている。

碧さんが嬉しそうに近づいてきた。

「え？いちやもちやって何？怪しく見えた？」

「怪しく意外に見えませんか。」

「だって痛いんだよー。わかるだろ、コレ。じゃあ、綾ちゃんが取ってよ。ほら。」

「もう取れてるクセに何をやっている。」

碧さんが身をかがめてグイって私に顔を近づけるんだけど、さっきの流れだとあなた達は変態君だと思われるだろうから、私は仲間になりたくありません、ちょっと離れて？

今日は碧さんの出発日。

一カ月遅れて、私も出発する。

同じ方向に。

別々の土地に。

彼は身を屈めたまま、チュッと音を立てて私の唇にキスをした。二

コツと微笑む。

「いい子にしてた？」

「ちよつ藤田さんがいる……。」

「平気平気。」

そう言っつて抱きしめてきたんだけど、私はやっぱりどうしても恥ずかしくつて、パタパタしてしまった。

「あのつあのつちよつとつ。」

「……暴れるオモチャみてえ。」

「オモチャつて！」

「あ。」

碧さんの真顔。今度は何つ？

と思つたら、鼻先に覚えのある感覚が広がつた。

しまつた！！忘れた頃にやつてくる、アレだ！！

碧さんの前でやるのはもう3度目？どんだけ鼻血を吹いているのよつ私はつ！

と思つて恥ずかしさのあまり真つ赤になつて、慌てて顔を伏せてテイツシュを捜そうとしたら、

グイつと鼻を上につつまれた。

見ると碧さんの手が、ハンカチと一緒に私の鼻を摘んでる。

「久々だなー、コレ。」

そう言つて苦笑する割には行動早くないですか？ああ、もう私の鼻血に馴れたつてことですね……。

「成程。これが噂の。」

藤田さんが感心した様にマジマジと私を見つめた。

「噂つて、なんですか。」

鼻を摘まれながら情けないビジュアルで碧さんを睨むんだけど、も

ちろんそんなの効き目無くって碧さんは面白そうにニヤニヤしている。

「噂？ホントの事しか言わないよ、俺は。」

「アフリカでこれやったら、出血熱と勘違いされて隔離されるんじゃないか？」

「疲れをためちゃいけないよ？」

「鼻ブロックみたいなのを常備しとけ。」

「いいね。シーズン中だし買い溜めしといたら？」

「……………」

もうこの体制だと、何を言われても反論できない。

最後の最後で、なんて無様な……………。

「お前、搭乗手続き行って来いよ。お呼びがかかっているぞ。」
アナウンスに気づいて藤田さんが顔をあげた。

「しょうがないな。はい、綾ちゃん、ちゃんと摘つまんでいるんだよ？」
まるで5、6歳児に言い聞かす様な言い方。笑っているし。バカにしているし、面白がっている。

クスクス笑いながら立ち去る碧さんの後姿を、横目ならず下目で見送っていたら（顔をあげてるもので）、気付くと藤田さんと二人つきりだった。

鼻血女と、魔王で、無言。

藤田さんが私を見下ろした。

「摘つまんでやるつか？」

「結構ですつ。」

あなたにされたら、全ての血が止まりますつ。

私は自分の鼻を上向きで摘んだまま言った。

「あの人、今何をやってるんですか？」

「あの人？」

「お兄さん。」

変態の。

「・・・その格好でその話題、そぐわなすぎて、見事だね。」

「・・・なんて遠まわしな攻撃。それこそ見事です。」

「親父が面倒みているよ。中野の父親への賠償の件もひっくるめて

・・・あいつには何か夢中になれるものが必要なんだ。でもそれは今の仕事じゃ、ない。」

そう言つて私を見て、さも愉快そうに声を押し殺してクツクツと笑つた。

「・・・何よ？」

「君にやられた強烈な一発が、相当効いたらしい。君を追う事は多分もう無いんじゃないか？まあ、俺達が目を光らせているけどさ。」

「・・・あいつもこの姿を見れば、さらに衝撃を受けるだろうなあ。」
うるさいっ。

「・・・て言えればいいのに・・・」

恥ずかしくつて少し赤くなりながら、彼を睨んだ。

首も痛くなつてきたし、手を離してみる。

「止まった？」

「多分。」

あーあ、碧さんのハンカチ、また汚しちゃった。そう思つて眺めた。
これで彼のハンカチが手元に、2枚。

ふと視線を感じて顔をあげると、藤田さんと目があった。こっちを

見つめてる。

・・・な、なんか嫌な予感がする・・・。

藤田さんが口を開いた。

「ねえ、日下部さん。」

ギクッ。

「・・・はい。」

「君、僕の事を殴ったよね。」

・・・来た。報復開始だっ。

私は首をすくめて身構えた。

はい。兄貴の股間を蹴り、弟の面の皮をひっぱたきました。抹殺ですか？

「心で考える、みたいな事を、言ったよね？」

何を偉そうに？鼻血女の分際で？

「頭ばかりで考えている奴は、バカだ、とも。」

「・・・はい。」

言いました。

藤田さんはマジマジと、ジーっと、シゲシゲと、私を見た。

あ、あ、あ、空気が無くなっていくう。

寒いっ。寒くなってきたわっ。

「これはね、どう考えても、何か間違っているとは思っただが。」

全否定ですね、はい。そうして下さい。

私はバカでドジでノロマなのに、やたらと突っ走ったカメでしたか

ら。

でも抹殺はやめてえええつ。

その時、藤田さんがスツと屈んだ。
耳元に、唇を寄せる。

「試してみようぜ。」

ゾックウウウー！！

人生最高の鳥肌。耳から首筋から背中からゾワってなって、クラツときた瞬間に、彼に抱きしめられた。

て、え???

ほぼ碧さんと同じ身長なものだから、上からすっぱり覆われる感じになって、碧さんとは違った香水の香りまでして、

だからますますパニックになって、よけいにクラクラした。

ちよつと待って、この展開は何なんですかつ！！

と言いたいのにな、キてて言えないいい！！

「心で動いてみるんだろ？オススメしてくれたのは君。責任とれよ。」

「なっ・・・なっ・・・なっ・・・！！」

なんでそうなるっ！！

「綾香ちゃん。」

低いバリトンで名前を囁かれた。きゃあっやめて下さいったまんないっあれ？

「・・・おい、先輩。」

碧さんの、低い、低い、声が聞こえた。

藤田さんの腕がふつと緩んだ瞬間、私は碧さんにレスキューされたけど、もうダメえ。止まった鼻血がまた出るじゃない、何て事してくれんのよ。

「何やってんだよ。あり得ねえだろ、首絞めんぞ、コラ。」
ああ、碧さんがやさぐれてる。ヤンキー復活させている。

「お前、2年も放っておくんだろ？権利放棄だろ。」
そう言った藤田さんが、すごい楽しそう、いやだこわいやめてっ。

「放棄してねーよ。」
そう言って碧さんは私をグイッと後ろにまわした。

「先輩がどんなに女整理しても、この子は絶対、ダメ。」
「俺が言おうとしている事をよくわかったな。」
「わかるだろ。ついでに言うなら、嘘だろそれ。女切る気ないだろ。」

「うーん。色々付き合いがあるからなあ。家とのしがらみとか。」
「大丈夫だよ。先輩、そういうの得意そうだから。楽しんで？でも彼女に手を出すのだけは、絶対ダメ。したらタダじゃおかない。」
「面白そうなのに。」
「面白くても、ダメ。」

碧さんは藤田さんをグッと睨んだ。

「いくら先輩でも、ぶっ殺す。兄貴とまとめて抹殺する。」
「それも楽しそうだな。」

口元に手を当てて、肩をすくめてクツクツと笑ってるし。怖すぎるんだけど。

碧さんがクルツと私に振り向き、ガシッと肩を掴み、顔を覗き込むと言い聞かすように言った。

「綾ちゃん。この人、見た目Sだけど、中身はもっとSだから。この間みたいに楯突くとますます興味もたるぜ？充分気をつけなさい。」

「解りました。気を付けます。」

私は藤田さんに真顔で向き直った。

「私、Mじゃありません。」

「そうじゃなくって。」

再び碧さんに引っ張られる。

そして彼は藤田さんに、わざとらしく手を振った。

「どうぞ先輩は帰って下さい。見送りありがとう。元気でね。連絡します。さようなら。」

「彼女送ってつてやるぞ。」

「先帰れつつてんの!」

「別れのキスでもするか?」

「二度としねえ。」

藤田さんはまたまた面白そうに笑うと、軽く手を振りながらあっさり帰って行った。

「・・・あーよかった。とりあえず去った。」

「わざわざ見送りにきてくれるなんて。」

義理堅い人なのね。

「君に話をしに来たんだよ。」
碧さんが藤田さんの去った方を眺めながら言った。

「今回の件もあつて、先輩の親父は現役を退く。そうすると、次は先輩だ。次回の選挙で彼は表舞台に立つんだよ。そうになると、よけいに自由が利かなくなるだろ？」

私はビツクリした。でもそうか。いずれは彼が後を継ぐ事は解っていたし。

・・・『よけいに』自由が利かなくなるってなんだろう？

河島が、「あいつに同情する」「あいつも運命に縛られてる」と言っていた事を思い出した。

・・・なんとなく、孤独そうな藤田さんに同情をした。

でも。家業を継ぐ人なんて沢山いるし？
それにあの性格なら、

「藤田さん、ちゃんと黒い政治家をやれそう・・・。」

「だろ？先輩も自分で認めてた。ありゃ天職だ。」
そう言つて碧さんは私に視線を移すと、綺麗な瞳でクスツと笑つた。

途端に、予期せぬタイミングで、グツと切なくなった。平気だと思つていたのに。

自分でもビツクリする。喉が詰まった。

今までの忙しさにかまけていて、

私自身が大勢の人と別れる立場にあるせいか、

彼との別れにキチンと向き合っていなかった。見て見ぬふりをして
いた。

そのツケが、思わぬ大きさとなつて胸を襲った。

急に顔が歪んでしまった。涙がこぼれる。

碧さんはそれを見て、驚いたように目を見張った。
うわ、悔しい。

こんなハズじゃなかったのに。何でもない事なのに。

自分で選んだ道だし。たったの2年だし。電話だって出来るのに。
涙が止まらない。

みっともない。恥ずかしい。悔しい。

しばらくして、碧さんがそっと私の頬に触れてきた。彼もすごく切
ない表情をしている。

口をきつく結んで必死に涙を我慢する私を、苦しげにでも優しく見
つめ続けた。

何も言わない。

彼の指が私の涙で濡れる。

「ごめんなさつ・・・。」

私がハンカチを出そうと俯いた時、彼の手がすっと顎に下りた。

クイツと上を向かされ、気付いた時にはもう、キスをされていた。

甘く、甘く、甘い、キス。

涙に濡れながら考える。

これが、最後のキスだったらどうしよう？私は本当に耐えられるんだろうか？

やっぱり今日も、みんなの注目的。でも今日ばかりは構わない。だって次はいつ会えるのかも分からないもの。胸が痛いほど哀しいよ。

やがて碧さんが唇を離した。
綺麗な瞳で、深く深く私を見つめた。

「いくらでも泣いていいよ。俺が全部貰うから。でも、俺のいない所では泣かないで。慰められないだろ？」

そういつて両手で私の頬を包み、コッン、とおでことおでこをくっつけた。

「今から、これからの分もいっぱい泣いて？枯れるくらい。お願いだから。そして次まで溜めておくんだ。必ず、それも貰いに行く。だから待ってる。」

コクン、と無言で頷く。

「いつでも電話する。言つたる？俺、ワガママなんだ。君の迷惑なんて省みない。嫌だなんて言わせない。絶対に迎えに行く。逃げたりするな？」

来年の事なんてわからない。

2年後の事なんてわからない。

口約束なんてしたくない。

でもあなたの言葉は、私を包んで縛って、そして自由をくれる魔法なの。

この魔法は今の私に力をくれる。そして多分それは、ずっと解けない。

だから、いいの。

「綾香。」

彼が甘い笑顔で、とろける様な瞳で、優しく囁いた。

「前を向いて。いつでも前を。俺はいつでも側にいる。だから安心して、前を見続けるんだ。・・・愛しているよ。」

そして再び、体が浮いてしまう様な最高のキスが降りてきた。

過去で絡んだ私達が、今一緒に前を見る。

過去がなくては、今が無い。

でもどんな過去でも今でも、未来はあるんだもん。

愛してる。こんなに早くに聞けるなんて。

アフリカ行きも、悪くないよね。

Here we go (後書き)

皆さま。終わりました。いかがでしたでしょうか？
ご納得いただける結末だと嬉しいのですが……。

最後に番外編を1、2話、書きたいと考えておりますが、時期も内容も未定です。もしリクエストやアドバイスを下さる方がいらっしやいましたら、是非お声をかけて下さい。

今までお付き合いを頂き、本当にありがとうございました。
お気に入り登録、恋愛遊牧民様での登録を下さった方、本当にありがとうございました。

感想を下さった方、感謝の言葉もありません。

このお話が、皆さまに元気を差しあげられて、かつ暇潰しになれて
いた事を願っております。

では、次作もどうか、よろしくお願い致しますね。

戸理 葵

ピュア 上

シャワーを浴び終わると、彼女はもう化粧台の前で支度を整えていた。

ストライプ地の黒いスーツスカートと、襟ぐりの大きく開いた同じく黒のラメが入ったカットソー。

髪を一つに結び上げている最中だった。

「早いな。」

俺は彼女の後ろに立って、鏡に向かって声をかける。

鏡越しに俺の顔を見上げた彼女も、俺と同じように口角をあげて微笑み返した。

「ボーっと待っているのも、なんか間抜けでしょ？」

俺は彼女の座っている椅子の背もたれに手をつき、後ろから彼女の首筋に口づけをした。

「君はいつも、僕を置いてけぼりにするね。」

「嘘ばかり。誰かを追いかけた事もないくせに。」

「いつも追いかけているよ。君を。」

彼女はくすぐったそうに身をよじらせ、肩越しに俺を振り返ると、俺の頭にそっと腕をまわし、引き寄せ、唇を重ねた。

「誰かの帰りを待ち続けている事は、追いかける事とは違うのよ。」

そう言って、優しく微笑む。

「あの人、元気？」

「・・・ああ？元気なんじゃない？急に絵を描く事に没頭しているよ。」

「らしいわね。」

「今までは何にも興味を示さず、他人に言われたとおりにそつなく物事をこなしていたくせに、今は自分が興味を持った事以外には行動をおこそうとしない。おまけに、やたらと凝る。大変だよ。」

「・・・そう。」

彼女は何とも言えない、複雑な笑顔を見せた。

彼女の初恋の相手は、俺の兄だから。

「香ちゃんはどうか？仕事は相変わらず、忙しい？」

椅子から立たせてその腰を引き寄せると、彼女は笑いながら上半身を少し反らせて俺との距離を取った。

「忙しいから、今ここに居るんですよ？昨日の相場の荒れ方は、読んでいるつもりでもイライラしたわ。」

「思う様に動かないから？」

「私の読みが、先を行き過ぎていたから。」

そう言って、いたずらっぽく笑う。

「なんで私について来ないのよ、ってマーケットに噛みついてやりたかった。」

「香ちゃんらしいね。」

「最終的にはついて来たから良かったけど。」

「どこかのヘッジファンドのボスみたいだな。」

「バブル再び、ですからね。」

彼女は俺の鼻を軽く小突いた。

「それでも、根回し真つ最中の未来の議員さんよりはストレスないと思うわ。」

「そうかな？僕、そんなにストレス溜めている様に見える？」

「全然。」

するり、と俺の腕をすり抜ける。

「ストレス抱えている人と遊ぶほど、心は広くないもの。楽しめなくちゃ、意味が無いでしょ？」

「タフだね。」

「祐介君ほどではないわよ。仕事、面白い？」

俺は先程から張り付いた笑顔をそのまま向けた。

「面白いよ。人をいかに思い通りに動かすか。やっとな煩雑な事務処理の日々から解放される。」

「あーあ、日本の未来は真つ暗ね。こんなに黒い人が舵を取るようでは。」

「魑魅魍魎だからね。」

すると彼女は少し俺を見つめ、目を反らし、軽く首を傾けながらクローゼットへと歩き出した。

「どうしたの？」

「・・・あの子は、祐介君を救ってくれなかったの？」

「え？」

俺が聞き返すと、彼女はスーツのジャケットを羽織りながら俯いて言った。

「あの子。祐介君の、純粋な部分。」

「え？」

「自分の心と向き合うつて、中々勇気がある事よ？」

そう言つて、俺の顔を見上げる。

「純粋な部分を持つ事は、弱い事でもないしみつともない事でもない。自分を苦しめるかもしれないけど、人生に必要な事でしょ？特に、あなたみたいな職業には。」

「何の事？」

「ほら、そうやって笑う。わかっているくせに。」

すっかり支度の整った彼女は、未だバスローブの俺の頬を片手でそつと包むと、真顔で言った。

「彼女をずっと守り続けたあなたは、純粋だった。そこを今更、見えて見ぬふりは出来ないわ。あなたと健一は別物。あの時のあなたは、純粋だったのよ。」

「。。。。。」

「諦めて、認めなさい。・・・そしたら、今の仕事や環境がもつと苦しくなつて、人生楽しくなるから。」

ニヤツと笑う彼女の顎を掴み、俺は少し強引なキスを落とす。

「香ちゃんさ、旦那さん、元気？」

「可愛い反撃ね。」

そうやって彼女は、楽しそうにホテルの部屋を出ていった。

部屋に取り残された俺は、不本意ながらも、17年前を思い出していた。

自分の兄貴が殺人事件の目撃者となった。しかも、センサーシヨナルに世間を騒がしている。

それは中学一年の自分にも、結構な驚きだった。

親父も心配ならしく、ちよくちよくと向こうに顔を出すようになっていた。

ある日、母親のいない所で、珍しく親父が俺にこぼした。

「あいつは、あんな事を見ても、何も様子が変わらないんだよなあ。大したもんだというか、呆れると言うか。今の子供達と言うのは、そういうものなのか？随分と心が・・・落ち着いているんだな。」

最後の言葉は、本当に言いたい事を、別の表現に変えた様に聞こえた。

心が、・・・鈍感？鈍っている？冷たい？

実際に兄貴の様な経験がない俺は、そんな状況は想像もつかない。

それでも、自分を捨てた親父が自分を気遣ってやってきても、そうそう簡単に本音を見せたりはしないだろう、普通に考えたら分かりそうな事なのに、と、顔には出さないが呆れていた。

センサーシヨナルな事件は、未成年が起こしたことであり報道規制もあり、正当防衛の不起訴となった事もあり、段々人々の噂から消えて行った。

ところがその頃、再び親父が、少し当惑したように俺に話を持ちかけてきた。

あの日以来、様子の変わった事はない兄が、帰りだけは遅くなった、と言うのだ。

受験生で部活も無いのに、毎日6時から8時くらいに帰ってくる、と。

それを向こうの家族が心配しているらしい。本人に訊いても、図書館で勉強をしている、というのだが、

色々あった後だし、何か悩みを抱えているのかもしれない。と。

「お前、年も近いし、何か話を聞いてやってくれないか？」

親父も頼みづらそうに俺に聞いてきた。しかしそれは、命令。

中3の男が、年下の、しかも腹違いの男に悩み事なんか話すかよ。

8時くらいに帰ってくるなら、何の問題もねーじゃねーか。図書館行ってるってんなら、それでいいだろうよ。女とイチャイチャしてるだけかもしれないだろ？

一体俺達に、どんな会話をしろってんだ？

と思ったが、やはり口にも表情にも出さずに、笑って快諾する。

「どこの図書館？」

「前浜南図書館あたりじゃないか？あれの家と学校との間にあるしな。」

明日の放課後の予定が丸々潰れた。電車に乗って反対方向に行かねばならない。

面倒臭い事この上ないが、さっさと終わらせてしまおう。

翌日指定された図書館に行った。ところがあいつは、いつまでたっても現れない。

結局6時過ぎまで粘って、諦める事にした。

今日は来なかった。皆の予想道理、毎晩どこかでふらついているのかも現れない。

騒ぎが大きくなりそうな気がして、少しイラついた。

自分の下半身の不祥事を棚に上げて、身内に少しでもおかしな事、道に外れた事があると大騒ぎをする親父と、そして自分の家に、イライラとしてくる。

イライラした所でどうしようもない事が分かっているのに止められない、自分にもイラつく。

これはどこかでタイミング良く兄をつかまえて、事情を話して、事が大きくならないうちにどうにかした方がいいと伝える方がマシかもしれない、と思った。

あの兄は、何かを押し切ってまで自分の我を通す男ではない。そもそも、我と言うモノがないのだ。

だから、俺と同じように、きつと多少の面倒くささを感じて、家に

早く帰る様になるだろう。

兄の家の方向に向かって図書館から歩いている時、偶然にも兄を見た。一人だった。

道端の塀に軽く持たれる形で、佇たたずんでいる。何かを見つめているようだった。

その無表情な顔からは何も感じ取れない。一体何を見ているんだ？自然と視線を辿ったその先には、一人の女の子が子犬を散歩をしていた。

もう一度兄に眼を戻す。あいつは微動だにせず、視線を動かさない。俺は驚いてしまった。こいつにはこういう性癖があったのか？

これは一大事だ。多分、殺人事件の目撃者、等おおごとと言う事より大事だろう、親にとつては。

なんとしても、隠そうとするに違いない。

やがて女の子は歩きだした。家へ帰るのだろう。日が長くなってきたとはいえ、もう7時近い。

彼女の家は、兄の中学の眼と鼻の先だった。

兄は、彼女が家の中に消えるまで、その視線を外さなかった。

兄が歩きだしてしばらくした時、俺は後ろから声を掛けた。

「おい。」

兄は振り返って、驚いた表情を見せた。

「祐介。」

俺が近づくと、兄は不思議そうに聞いた。

「何やってるんだ？こんな所で。」

「……親父に、頼まれたんだ。健一の様子を見て欲しい、って。」

「……何で？」

「……最近、帰りが遅いから。河野家の皆が心配しているらしい。」

「

すると兄は、無表情に言った。

「図書館にいるんだよ。受験生だからな。」

俺は兄を見て、やはり無表情に言った。

「図書館に、いたんだな？今日も。」

「……ああ。いたぜ。」

「どこの？一応、親父に報告しておかないと。」

「適当に、気分によって、渡り歩いている。」

「俺が今日いたのは、前浜南。」

「……」

兄は相変わらず無表情な目でこちらを見る。

俺は素っ気なく言った。

「俺、面倒な事、嫌い。変な事しないなら、それでいい。」

すると兄は、俺の言わんとする事をくみ取ったのか、少し笑った。

「何もしないよ。」

「そう。それで、どこの図書館？」

「崎山図書館。」

「わかった。そう言っとく。」

そして俺達は「じゃ。」と言ってその場を後にした。

何もしない、というなら、何もしないのだろう。

第一、こう言った事は事が起こらない限り、対処の仕様が無い。性癖と言うモノは矯正も出来ず一生治らないらしいじゃないか。

そんな望み薄なもの、事が起こる前に親父に話して、大騒ぎされる方がうんざり来る。

分厚いメガネをかけた少女は月並みな容姿で、メガネを外せばそれなりに可愛い顔をしているだろうけど、あれが兄の好みとは正直驚いた。

それとも、あれぐらいの年の女の子であれば誰でもよくて、毎日誰かを物色しているのか？

その晩親父には、兄が崎山図書館にいたと言った事、悩んでいる様子は無かった事を話した。
どれも嘘じゃない。

しかし3日後、何故だが気になって頭から離れなかった俺はもう一度電車に乗る羽目になった。

兄の性癖の確認をしたくなつたのだ。ひよっとしたらあれはあの日だけの、俺の解釈違いかもしれない。

そして、それは間違いだった事を思い知る。しかもあいつは、3日前と同じ女の子を見つめていたのだ。

やめると止めるべきなのか。多分、無理だろう。

何もしないと云ったあいつに、賭けるしかないんだろう。

ところが。あいつは本当に、「何も」しなかった。

ピュア 上（後書き）

番外編です。

本編終了から2年後です。

祐介の視点である為、本編と違ってテンションが低いですね。捻くれて、暗いです。

明日の21時に、続編を更新します。

どうか皆さまのお暇つぶしに役立ちますように……。

戸理

ピュア 下

夏の終わり、親父は俺達息子を連れて海へ行った。

数人の、古くからの部下達も伴っている。

この歳の男が家族で、しかも男だけで海に行っただって面白くない事は、その場にいた全員が分かっていた事だろう。

しかし親父が他に手段を思いつかなかった事、そして彼が我が家と彼の世界の絶対権力者である事が、この白々しい家族行楽を決行させるに至った。

きつとそれぞれの母親が、家でイライラとやきもきしているに違いない。

親父は場を盛り上げたかったのか、水着姿となりひと泳ぎを始めた。部下達は浜辺で腰を降ろしている。非常に、目立つ。

普段着を着ていても、そこだけ切り取った絵の様に、目立つ。

そして俺達は、時々海につかる。会話にもならない会話をする。

その時、数多くいる家族連れの中で、偶然にも一つの家族が通りを通る姿が、目に入った。

その見覚えのあるメガネ姿と髪型に、俺は一目で気付いた。あの少女だ。

息を飲んで兄を見ると、あいつも驚いている様だった。目を見開いて彼女を見つめている。

その家族は通り過ぎて行った。多分、別の浜辺に行くつもりなのだろう。

親父はすぐに海から上がり、近くの海の家もどきを陣取り始めた。

庶民的をアピールするかのごとく、みすばらしい畳の上でいかにも楽しそうに、ビールやら焼きそばやらを頼んで、俺達や部下達に振る舞う。

俺は、兄があの子をつけて行くのかとも思ったが、流石にこのシチュエーションではあいつもそれをしなかった。

一通り腹もこなれ、酒の入った大人達を置いて、俺達は誘い合わせた訳でもなく再び浜辺へと移動した。

自然の木立の下で腰を降ろして、景色を何とはなしに眺めている。昼時で、たまたま人気が退いているのか、浜辺には誰もいなかった。

しばらく、その水音は聞こえていたが、特に意識する事も無く、振り返る事もしなかった。

ところが、その水音に混じって「・・・んっ」とか「あ・・・」とか言う声が切れ切れに聞こえてきて、それがあまり良くない響きを伴っていた為、俺は初めて我に返って、そちらに視線を移した。

そこには、一人の女の子が、浮き輪の中で泳いでいた。

一生懸命、手足を動かしている。

しばらくして、あの子だと、分かった。メガネをかけていないが、顔つき、全体の体つきが、それだ。

彼女を、兄が、無表情で見つめている。

よく見ていると、おかしな事に気付いた。

あの子は泳いでいるのではない。溺れかかっているんじゃないのか。必死な形相。時折聞こえる、恐怖を帯びた声。

それは、少し離れた所にいる俺にも伝わってきた。

彼女の親が見当たらない。

ひょっとして隣の浜辺から流されてきたのか？だとすると、子供にしては随分沖を周ってきた事になるじゃないか。
それより、あいつは、何を突っ立って見ているんだ？俺より近くに
いるのに。

戸惑う俺とは正反対に、あいつは落ち着いてそれを見ている。眺めている。

俺は気付いたら海に飛び込んでいた。

女の子は浮き輪のバランスが崩れて、顔が上げられないようだった。海の中は俺の足もギリギリ届くくらいの深さで、上と下とで流れが全く違っていた。彼女も足を取られたに違いない。

必死に俺にしがみついてくる彼女をなんとか引き離しながら、顔が再び海につかない様にしつつ浅瀬に移動した。

溺れかかっている少女というものは、体が小さくても異常な力で俺を離そうとせず、お互いが海の中でバランスを取るのに大変な苦勞をした。

浅瀬について急いで浮き輪から彼女を抱き上げた時、彼女は大きく咳き込みながら、俺にきつく抱きついた。

激しく繰り返す呼吸は、恐怖と、嗚咽が入り混じっていた。

その様子を、あいつは、変わらずの無表情で見つめていた。

あいつと目があった時、俺の中にあの時の台詞がこだました。

「何もしないよ。」

直感した。

これは、性癖とは違う。「観察」だ。
対象物に手を加えず、ひたすら眺めつづける。何故だ？

事件の後より帰宅の遅くなった兄。現場近くに住む少女。それを観察するあいつ。

俺は腕の中の少女を見た。俺の腕に顔をうずめて、自分の恐怖を鎮めようと懸命な少女。

この子は、ひょっとして、あの殺人事件と何か関係があるのではないか？

・・・いや、兄が、あの事件と関係があるのではないか？

子供の、直感。

そこから、俺は初めて事件の詳細を調べた。

彼女の事も調べた。

親父の下の人間を使って、事件後の彼女の動きも調べた。

事件の翌日、欠席。

俺の中で、一つの仮定が形となって、ハッキリと浮かび上がった。

あんな事件もあつたし、兄の家庭事情もそうだし、

人目もあるから、東京の中学転校でも兄に勧めたら？

中高一貫なら、尚更いいじゃない？兄の頭と親父の力があれば、この時期でも事は進むよ。

そう提案したのは俺だった。

親父が賛成して、あいつに伝える。親父も何かを感じていた。

あいつはあっさりと応諾した。俺と一緒に、何かに抵抗する事に煩わしさを感じただけかもしれない。

あの少女に対する執着はその程度か、と安堵に似たものを感じた。

必死に俺の腕にしがみつき俺の腕の中で丸まる、あの時の強い手の平とその温もり。

気付くとそれが、いつまでも胸に残っていた。

東京に行った兄には、もう彼女を追いかける手段が無い。これで安心だ。

誰が安心？俺が？彼女が？

彼女を守るのは誰の為？

12歳の胸の中に、彼女の温もりが消えなかったのは、確かな事。

それから俺は、「様子を確かめる」と称して、自分に言い聞かせて、何度か彼女の姿を確かめに行く。

俺の手によって命を救われた彼女は、生き生きと成長していく。

俺は、時々自分の姿と兄のあの姿を重ねてしまう。

電信柱に体を預け、少女を観察していたあの姿。

そして俺は、時々自分の正気を疑いたくなる。

どこかで、兄と同じように何かの道を踏み外しかかっていないか、と不安になる。

高校3年の夏、家族に内緒のバイト帰りにバイクを転がしていた俺は、例の彼女を見つけた。
通り過ぎたのにわざわざUターンまでしてしまった。
炎天下の中、パンクした自転車を押しながら辛そうに歩く彼女。相変わらずの眼鏡姿だが、あの頃の幼さは僅かに残っている程度。
一瞬その姿を見つめた後、俺はゆっくりと声をかけた。
彼女の家を知っている俺は、ここからの道のりがどれほど遠いかも知っている。

一人でタクシーに乗せる訳にも行かず、バイクを自転車屋に預けてまで送り届けた結果、面が割れてしまい家に連絡が入り、内緒のバイトもあっさりバレ、俺は退屈な夏休みを過ごす羽目になった。

「山田さん、これ、雄紀社にメールして下さい。その後の確認の電話もお願ひします。」

書類を事務所の女性に渡す。

「はい。それから2時に斎藤インターより金山組合の件で、お電話がありました。」

「そう。それは先生のアポが取れた後ですから、もう2日待つように伝えて下さい。」

「はい。・・・外出ですか？」

清潔感の漂う彼女が俺の顔を見上げてきた。

「はい。森本先生の勉強会に行つてきます。そのまま会食に流れるでしょうから、今日は直帰させていただきます。」

「・・・藤田さん、昨日と同じスーツですね。」

急に声をひそめて囁いてきた。意味ありげな、探る様な、好奇心に満ちた、目。

俺はクスツと笑う。

身近な女性には手を出さない。彼女のこの瞳に、嫉妬の色が混じるようになったらお終いだ。

たまに食事に誘い、理知的で大人の会話を楽しむ。

そこに、自尊心をくすぐられる様なタイプの、女。

「気に入った服^{もの}を何着も揃えるのが、好きなんだ。」

「まるで銀座か六本木の女の子みたい。」

「え？」

「複数の男の人から、同じものを買がせるの。そうしたら、バレないから。」

そう言っつて、さも自分が物わかりのよい女性のように、微笑む。

「一つだけ手元に残して、後は売っちゃうらしいですよ？合理的ですな。」

こういふ話を自ら振る女は要注意。嫉妬深い。

俺は肩をすくめて、馴れた笑顔を振る舞うだけにした。

「酷いな。僕が女性恐怖症になってもいいの？山田さん、苛めっ子かい？」

地下鉄に乗る前に気の利いた土産物でも手に入れようと思ひ、街を

歩いていた。

そこで俺は、目を疑う。

彼女は、ガラスの向こうのテレビをボーッと眺めていた。

もはやそこに、少女の幼さは残っていない。眼鏡もない。

それでも、瞳の色は多分、昔から変わっていないのだろう。

そうか。もう2年か。

ああ、よく合うよね、俺達って。二人で待ち合わせをした事なんてないのに。

忘れるな、とでも言う様に。俺の前に現れるよね。

目の前の彼女はテレビから目を反らさない。口が少し開いている。髪がだいぶ伸びていた。ひざ丈の細かな柄のワンピースに鮮やかな色のベルトを合わせ、同じ色の鮮やかなサマーセーターを羽織っていた。

「・・・何やってるの?」

「きゃあっ!」

彼女の耳元で伝家の宝刀をお見舞いしたら、彼女は期待以上に飛び上がった。

そして今まで見ていたガラスに背中をピッタリと貼り付け、俺を信じられない目で見上げる。

「・・・は？・・・え？・・・は？は？・・・何で?!」
「運命なんじゃない？」
「はああああ?!」

俺が囁いた方の耳を押さえ、それはいいけどね、人を指さすのは行儀が悪くないかい？いくら外国帰りでも、世界共通のマナーだよ？

「どうして?!」

「うん。だから言っただろ？運命だって。それより久しぶりに会った友人には、まずかけるべき一声があるんじゃないかな？」

「ゆっ・・・う・・・じん・・・。」

引きつった顔。しばらく俺を見つめている。いつまで固まっているつもりだろう？

やがて彼女は体勢を整え、少し顔を揺らしながら首をひねり始めた。成程。今、頭の中で様々な声が飛び交っているらしい。

「いきなり耳元で囁くのも、かなりのルール違反だと思いますが。」
「そう?」

「空手を習っている人が、いきなり喧嘩を吹っ掛ける様なものですよ?」

そう言っただけ俺を上目遣いで睨む。

そして俺は、彼女の空気が読めない。

「・・・つまりそれは？」
「・・・えっと、それは・・・普通の人と違って、武器になる技をつかっちゃいけない、って事です。」

成程。中々分かりづらい。

「それは失敬。お久しぶり、日下部さん。」
「・・・はい。お久しぶりです。」

観念したのか、彼女はペコッと頭を下げた。

「こんな所で何をしているの？」

「・・・就職活動中です。」

「・・・君、いつ見ても就職活動をしているね？」

すると彼女は居心地悪そうに身をすくめた。

「帰国して、一から再スタートですから。もちろん経験が生かせる所を捜しているんですけど、中々上手くいなくて。あの、最初からわかっていた事なんですけど・・・。」

「そうか。どういう仕事を捜しているの？」

「今の本命は、フェアトレードを取り扱っている所で・・・。」

そう言つて、俺の顔を見上げてきた。

「何ですか？」

「え？何が？」

「何か・・・笑ってる・・・。」

「そこ、後ずさる所かい？」

思わず本当に笑ってしまった。

「相変わらず頑張っているなあ、と思つて。どうだい？」

そう言つて、屈んで顔をグッと彼女に近づける。

「良ければ、いくつか紹介するよ？就職先。」

すると彼女はつぶらな瞳を見開いて、俺を凝視してきた。息を飲んでいるのがわかる。

しかししばらくして、唇を真一文字に結んだ。

「まだ大丈夫です。」

「まだ？」

「やる事全部やりきれてないから。玉砕しないと人には頼れません。……でも。」

決意した様な口調と眼差しで俺を見つめる。

「誰にも頼らず頑張れる、と言う程世間知らずでもありません。その時は、どうか宜しくお願い致します。」

そう言つて、再び頭を下げてきた。最初とは違い、綺麗な角度での丁寧なお辞儀。

俺はその様子に、少なからず面喰ってしまった。

2年前の、ただひたすら突っ走っていた頃の彼女とは何かが違う。

「……いいよ。もちろん。君には色々と迷惑をかけたからね。好きだけ僕を使ってよ。」

顔をあげた彼女は、以前より大人びた顔に複雑な表情を滲ませていた。

2年間の経験は、彼女に色々な事を教え込んだらしい。

俺はわずかに彼女を見つめた。

「ついでに、さ。」

そう言ってさり気なく、彼女の耳元に唇を寄せる。

「俺の味見もしてみたら？」

「なっ……」

俺を突き飛ばそうとしたらしい。上手くいかなくて、自分が再び後ろのガラスに激突した。

調子を取り戻したようだ。

「何をっ……！」

「そういえば碧は？あいつの帰国はまだだろ？本格的に権利放棄された？」

「本格的にっって何ですかっ！」

「碧は手ごわいけど、吉川を沈める自信はあるぞ。あいつは権力に弱そうだからな。」

「なっ……ちよっ……やめて下さいっ！」

離陸するのか、というくらい両手をパタパタ振っている。

俺は肩を震わせて笑わずにはいられなかった。

多分、これは恋ではないと思う。

彼女を手に入れたいと思うけど、自分の手の中で泣かせたい、とは思わない。

気が狂う程抱き続けたい、とは思えない。

胸を切なく焦がして自分の下に組み伏せたい、とも思えない。

そう言えば言われたな。俺の純粹な部分だ、って。成程、そう思えば合点がいく。純粹な子供はセックスなんて求めねえものな。純粹だから欲望も湧かないかわりに、手の中に閉じ込めたいとかも思うのか。純粹な俺が、俺の横っ面をひっぱいたいて、バカだと叫んだのか。心を使え、と。

面白え。

香ちゃん、あんた伊達に俺の幼馴染やってないよな。鋭すぎて、今更ながらゾクゾク来てるよ。

大事にしるよ、旦那を。

「碧さんは、多分この夏には辞令が出るだろう、って言ってました。」
「横移動じゃないといいな。」
「横移動？」
「海外勤務をはしごするって事だよ。」
「・・・はあ。」

現実味があるのかないのか、ポカンとする彼女。俺はその頭を少々乱暴に撫でた。

「はい?!」

「ま、運命固めたくなったら、いつでもおいで。君の世話や面倒なら大歓迎だよ。」

「はい?」

「但し、股間や顔は殴らないでくれよ?」

「はいつ???!」

「じゃ、俺は行くから。」

「・・・はい?」

俺は彼女に軽く手を振るとその場を後にした。

多分、それを呆気に取りられて見送っているであろう、彼女。俺の「純粹」な、過去。

手の中で守りたい純粹さは、時と共に変わる。変わらないとすれば、それは作りものに過ぎないのだろう。

その変化にも目を反らさないでいられたら、俺は何かを手に入れるのだろうか?

突然、碧の顔が思い浮かんだ。

そうか。彼女を手に入れたら、もれなくあいつがついてくるのか。

それはますます、お得だな。

笑いをかみ殺す俺に、道行く人々が振り返る。久々に楽しくなった。思いがけないプレゼントに喜ぶ子供みたいな気分だ。

ピュア 下（後書き）

歪んだ祐介くんのお話、終了です。ちこ様、ご希望に添えずに申し訳ありません。

彼は思う様に、綾香に絡んでくれませんでした。

代わりに（？）方々で色気を振りまいているようです。これでお許し下さい（笑）

でもある意味、綾香はロツクオンされたようですね。不幸の始まりでしょうか？

あと一話、アドバイス頂きました碧と綾香の休暇シーンを明日載せて、完結にしたいと思います。

このお話が、皆さまのお暇つぶしに役立ちますように。

戸理

君を洗脳

海外赴任の内示が出たのと同時に彼女に別れを告げた同期がいた。社内恋愛だった為部署の女の子全員から総スカンをくらい、男の風上にも置けない鬼畜扱いを受けている。

自分の我儘で彼女を手放せない俺と、どっちが「鬼畜」になるんだろう？

「眠れないの？」

「えっ？」

窓際に座る彼女に声をかけると、彼女は驚いたように振り返った。

「起きてたの？」

「違うよ。起きたの。」

「あ、ごめん。起こしちゃった。」

少し慌てる彼女に、俺はベッドから起きて近づく。

彼女は俺の顔を見上げると、視線を窓越しの夜景に戻した。

その横顔は、今日一日見せていた彼女の少しぎこちない笑顔を彷彿とさせて、俺を再び落ち着かない気持ちにさせた。

「着いた初日に連れまわしたからな。よく眠れるかと思ったんだけど、逆効果だった？」

「え？そうだったんですか？」

「ごめんね。」

俺は笑って、一瞬躊躇ためらったのち、彼女の頭を軽く撫でた。彼女は少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに再び俺を見上げる。するとそれだけで、俺の心は安堵に満たされる。甘やかな躍動を始める。不安や恐れが、嘘の様に消えていく。

一年ぶりに会う彼女は想像以上に美しかった。

眼差し、仕草、まとう雰囲気、今までの意志の強さだけではなく、独特の深みが加わっている。

それは俺の知らない彼女の時間を連想させ、堪らない気持ちを駆り立てる。

早くから一人だった俺は、男のくせに、思春期の頃から結婚願望が強かった。

そして俺にとっての結婚とは、一生離れる事の無い家族を手に入れる事。

人生を最後まで共にするパートナーを得る事。

そのパートナーとは、常に俺を支え、見守り、手を握り締めてくれる存在。

途中でそれを想像させる女性に出会ったけど、俺達はあまりにも似すぎていた。

二人が同じ方向を見つめすぎて、隣を見る事が少なくなっていた。

そして俺は、この子に会う。
会って初めて、新しい感情を知る。

守りたい、と。

しかしそれを、意識してあえて、彼女には伝えない様に心がけてい
る。

そんな事を口にすれば、自立心の強い彼女は怒るだろうから。

「こんな贅沢、馴れなくって。今朝までいた所と全然違うから。」

少し頬を染めながら話す彼女。嬉しそうな様子にホッとす。

彼女が言う程、贅沢なホテルではない。しかし二流でもない。どち
らでも異議を唱えられるから、正直、腕の見せ所だ。

「そう？君の好みは難しいからな。」

「えっ。そんなつもりじゃ・・・」

「冗談だよ。」

彼女のほどけた雰囲気になった俺は、その柔らかな頬にそっと手
を伸ばした。

「そーゆーところをいかにクリア出来るか、ってのも楽しいんだから。」

「ゲームですか、私は。」

「ゲームより興奮するし、ハマってるよ。」

「・・・」

更に赤くなった。

つぶらな瞳が、挙動不審の動きをする。堪らない。誘ってるだろ、それ。

いや、これに誘われている俺が既に、末期症状。

「碧さん……。」

「ん？」

「私……。」

「……何？」

「……。」

彼女は俺に頬を預けたまま視線を絡めていたが、急に押し黙り、そして益々赤くなり、顔を反らした。

俺はドキツとする。

未だに彼女の本心を聞けていない身としては、それだけで再び、胸に不安が広がる。

「スカイプって便利ですね。」

「え？ああ？」

つい、おかしな返事をしてしまった。唐突な話題転換。彼女の必殺技。

「昔の人は、ネットもスカイプも無しで海外に住んでいたんでしょ？信じられない。」

「昔って言う程、昔でもないけどね。」

「私、そんな生活、耐えられないと思う。」

そう言うと彼女は、真剣な面持ちで俺を見上げた。少し、唇を噛み締めている。

真っ直ぐに、俺を見つめている。

意思の強い、光。

「私、思っていたより自分が弱くて、凹みました。」

この子は弱音を吐く時ですら、こんなに真面目に告白するのか。感心してしまった。

「どうしたの？」

「もつと色々な事、耐えられるんだと思っていたのに。ミステリーハンターの道は、中々険しいです。」

「……やめたくなっただ？」

「……いいえ。」

僅かに視線を漂わせた後、再び俺を見上げる。

真っ直ぐで綺麗な瞳の奥に、今まで見た事の無い、挑戦的な色が出ている。

驚きと共に、グツときた。

「仕事は、楽しいです。しんどくっても続けたいです。やり遂げれる自信もあります。」

「……いいね、その顔。最高。」

思わず、椅子に座った彼女の上半身を軽く抱き寄せる。

「じゃ、何？」

「……寂しいんです。」

一瞬、言葉が出てこなかった。

あまりにもストレートな物言いとその台詞に。

そして、それを隠さずに俺に打ち明けてくれた嬉しさに。ジツと彼女を見つめる。彼女は柔らかく笑って、再び窓の外に視線を移した。

「……………」

「思ったよりあまりにも寂しくて、衝撃を受けています。」

「……………そっか。」

今日一日俺が抱えていた不安が、嘘の様に消えていった。

彼女が抱えていた寂しさにもっと早く、気付いてやるべきだったのに。

それよりも自分の心が軽くなって行く事に安堵を覚えるなんて、俺は何処まで情けない男なんだ。

寂しいと打ち明けてくれるって事は。

君は俺を必要としてくれてるんでしょ？

「日本に居た時は、当り前に色々な人達に支えられていたんだなあ、って。」

「綾ちゃん俺と違って、同じ海外居住でも、日本人社会に触れていないからなあ。」

「……………んー、そう言う事とはちょっと違って……………」

しきりと首をひねり始める彼女。これも可愛い癖の一つ。

「日本では…………私を、好きだ、って言ってくれる人は…………その、沢山？いたのだけど…………今は…………それがゼロからの出発っていうか…………だから…………。」

彼女を後ろからそつと抱きしめた。

「俺は？君を支えられてない？」

俺を必要としてくれる。

それだけで俺は生きていける。

誰かに支えてもらえれば、力強く生きていけると思っていた。
でもそれは、大きな間違い。

「まだまだ俺の力不足だな。寂しい思いをさせてごめん。もっともつと、君を……。」

前にまわって、彼女の顔を覗き込み、顎をそつと掴んで上に向けさせた。

少し茶化して、元気づけてやるから。

「甘やかして、縛り付けて、息もつけなくさせて、考えさせれなくしてやるから。安心しろよ。」

「あの……さすがにそこまでは……。」
「遠慮するなつて。」

真つ赤になつてうるたえる彼女。いつのまにやら楽しくなっている俺。

ヤベ。ミイラ取りが、つてこの事だ。

「碧さん、今日……。」

唇を近づけようと顔を傾けた時、彼女が遠慮がちに口を開いた。
天然だろつと計算だろつと、こつというタイミングの彼女にかまつて

いたら事が運ばないのは学習済みなので、構わず先を続ける。

「何？」

ほぼ唇を重ねながら囁いたが、彼女もさるもの、やっぱり引き下がらなかった。

「どうして……その……。」

「ん？」

その口、もう塞ぐよ？

「……手も、繋がなかった……の……か、なあ……」
「え？……あ」

動きが止まってしまった。手を繋ぐ？

「……ああ。」

やられた。また負けた。ビックリした。

思わず顔を離して彼女をマジマジと見下ろす。彼女はかなりうるたえていた。

「それ、気にしてたの？」

「……。」

「ひよっとして、眠れなかった原因って、それ？」

「……。」

気付かなかった。うそだろ？マジかよ？

「・・・ヤベえ。すげー嬉しいんだけど。」
「あの・・・。」

俺が一人で、悶々と、久しぶりに会った彼女の顔色をうかがっていた時に、

まさか相手も同じ思いを抱えていたとは。

そっか。俺達、実際の付き合いは、まだまだ日が浅いもんな。そりゃ色々考えるハズだぜ。

「ここはさ。一応イスラム国家だろ？外で、つか公衆の面前で、男
女が手を繋いじやいけないんだよ。」

「えっ？そうなんですか？？」

「そう。うっかりキスでもしようもんなら、警察に捕まってもおか
しくない。」

「えええー??？」

彼女は大きな声を上げ、口をポカン、と開いた。
その唇に、誘われる。君は知らない。

「こんなに都会なのにー。」

「ま、ね。他のイスラム国家よりは随分ユルイと思うけど。」

彼女を柔らかく抱く。ゆるゆると、立たせる。
瞳を甘く見つめる。

「俺、そーゆーの、割と人目を憚らない方だったから自制してたの。
結構大変だったんだぜ、こっちも。」

「・・・それで、空港でもハグだけ・・・。」

「ああ、アレが一番大変だった。まさか空港で逮捕される訳にもい
かないから、続きを我慢するのがかなりキツかった。一度すると、
止まらないだろ？」

「・・・・・・・・。」

真っ赤になつて口を閉じる彼女が堪らなく可愛くつて、その耳元に
唇を寄せ、低く囁いた。

「ひよつとして、夜もご不満だった？」

「いえっあのっ」

「君がかなり疲れているだろう、って俺の中では一日お預け決心を
してたんだけど。」

彼女の瞳に視線を戻すと、妖しく揺れている。
誘っているよね、それって。

「止まんねえよ？覚悟しろよ？」

深く、深く口づける。今までの全てを絡めとる様に、彼女の中を搔
き乱す。

誰かを守りたいと思ったのは、初めてなんだ。

君のその瞳を守りたいと思っているんだ。

そんな事を言ったら、君はきつと怒るのだろうけど。「私は自分の
足で歩きたい」とか「対等でいたい」とか言っただろうね。目に浮
かぶよ。

でもね。君の瞳は、俺の宝物なんだ。俺の人生に欠かせないモノなんだ。

宝物を守りたい、と思うのは当然だろう？

だから。俺は君を手放せない。

守る事で、俺の心は守られているから。

君が、必要なんだ。

俺を、求めろよ。

「綾香は隙だらけだから。その隙、絶対他の男に見せるなよ？」

「隙なんて・・・そんな、の・・・」

「そのギャップに男はハマるんだよ。いいかい？君のその寂しさを埋められるのは、この俺だけ。」

首筋から胸元に落とすキスに、彼女の息が荒くなる。

俺は彼女を掻き抱きながら、優しく囁く。

「覚えておけよ。・・・俺だけだから。」

君が俺から離れられなくなるように。俺の側に居続ける様に。俺なしでは居られなくなる様に。

それとは気付かれない様に。優しく守って。柔らかく縛って。

君を、洗脳しよう。

君を洗脳（後書き）

番外編です。碧と綾香の休暇です。時間軸は、本編終了の一年後、です。先の番外編で祐介と顔を合わせる、一年前ですね。

kurumugi様、こんな妙なモノでいいでしょうか？

本当はもっと爽やかな休暇を書く予定だったのにビックリしました。
（笑）

付き合つて数カ月で遠恋に突入した二人ですから、きっと年に一度の逢瀬は大変な不安を抱えているんだろうな、と思つたらこうなりました。

場所は、ドバイです。アフリカの田舎には疲れきっているだろう、という碧の綾香に対する思いやりです。商社の独身男はお金も持っていますしね（笑）

これにて、本当に完結です。

今まで読んで下さつて、本当にありがとうございます。
作者も大変楽しい時を過ごさせて頂きました。

次作も、宜しくお願い致します。

戸理 葵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964o/>

リコレクションズ

2011年1月28日00時37分発行